印西市新井堀Ⅱ遺跡・前戸遺跡

―印西市道00－026号線道路改良に伴う埋蔵文化財調査報告書―

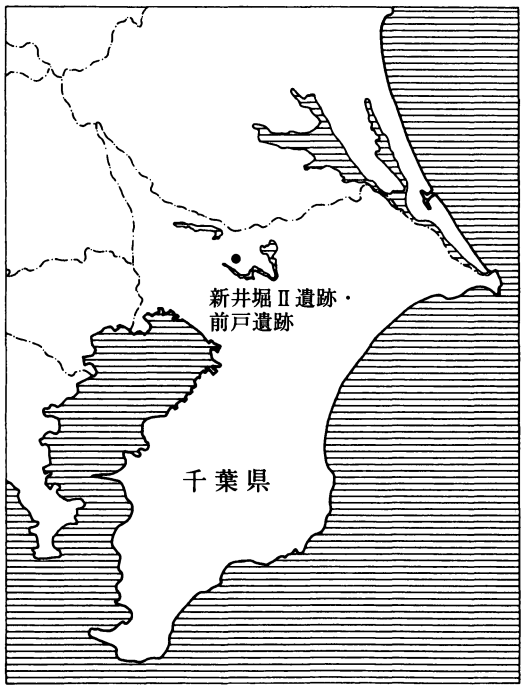
平成16年3月

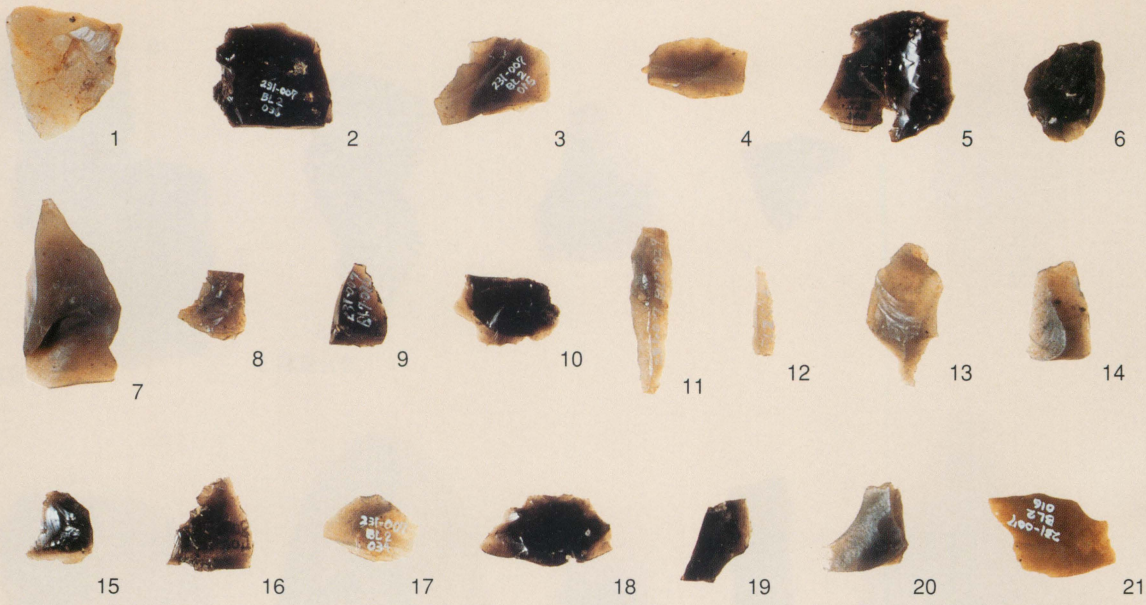
千　葉　県　企　業　庁

財団法人　千葉県文化財センター

印西市新井堀Ⅱ遺跡・前戸遺跡

—印西市道00－026号線道路改良に伴う埋蔵文化財調査報告書—

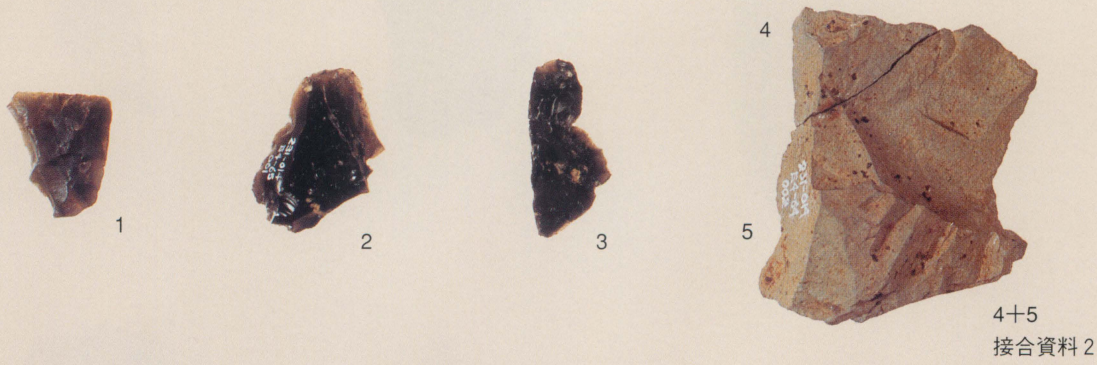




新井堀Ⅱ遺跡　第Ⅰ文化層　第1ブロック

新井堀Ⅱ遺跡　第Ⅱ文化層　第2ブロック

新井堀Ⅱ遺跡　第Ⅱ文化層　第 3 ブロック



新井堀Ⅱ遺跡　第Ⅲ文化層　第 4 ブロック

新井堀Ⅱ遺跡　第Ⅳ文化層　第 5 ブロック

序　文

財団法人千葉県文化財センターは，埋蔵文化財の調査研究，文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され，以来，数多くの遺跡の発掘調査を実施し，その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび，千葉県文化財センター調査報告書第481集として，印西市の印西市道00－026号線道路改良に伴って実施した印西市新井堀Ⅱ遺跡・前戸遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では，旧石器時代から奈良・平安時代の遺構・遺物が発見され，この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり，この報告書が学術資料として，また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに，調査に際し御指導，御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関，また，発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成16年３月25日

財団法人千葉県文化財センター
理事長　　清　水　新　次

凡　例

1　本書は，千葉県企業庁による印西市道00－026号線改良に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2　本書に収録した遺跡は，千葉県印西市草深字新井堀231－３ほかに所在する新井堀Ⅱ遺跡と印西市松崎字前戸885－３ほかに所在する前戸遺跡である。

3　発掘調査から報告書作成に至る業務は，千葉県企業庁の委託を受け，財団法人千葉県文化財センターが実施した。

4　発掘調査及び整理作業の担当者，実施期間は本文中に記載した。

5　本書の執筆は，第１章を上席研究員　植草均が，第２章　第１節，第２章　第３節１を上席研究員　新田浩三が，第２章　第２節，第３章を研究員　吉野健一が，それ以外の部分および編集作業を主席研究員　内田龍哉が担当した。また，第３章の執筆については，主席研究員　栗田則久，上席研究員　小林信一の協力を得た。

6　発掘調査から報告書刊行に至るまで，下記の諸機関，諸氏から多くの御指導，御協力を頂いた。

千葉県教育庁教育振興部文化財課，千葉県企業庁，印西市教育委員会

7　本書で使用した地図は下記のとおりである。

第１図　国土地理院発行　1/25,000地形図「小林」

第２図　印西市都市整備課発行　1/2,500印西市地形図「23」

第４図　印西市都市整備課発行　1/2,500印西市地形図「26」

8　本書で使用した図面の方位は全て座標北である。

9　本書で呼称した遺構の名称・番号は編集の都合上，調査時の名称・番号と一部異なる。

10　本書中で用いたスクリーントーン及び記号の意味については，図中において例示した。

また旧石器時代の石器属性表の凡例については，第２章　第１節の末にて詳細を示した。

11　前戸遺跡については，発掘調査時の遺跡番号を変更して報告書に掲載している。遺構番号の変更状況については、以下の通りである。

なお，ここに現れない遺構については，調査時の遺構番号のまま掲載している。

前戸遺跡　遺構番号新旧対照表

住　居　跡	
旧	新
SI－001	SI－001
SI－004	SI－002
SI－011	SI－003
SI－012	SI－004
SI－013	SI－005
SI－015	SI－006
SI－018	SI－007
SI－020	SI－008
SI－026	SI－009
SI－027	SI－010
SI－028	SI－011
SI－036	SI－012
SI－041	SI－013
SI－051	SI－014
SI－052	SI－015

土　坑	
旧	新
SK－002	SK－001
SK－003	SK－002
SK－016	SK－003
SK－024	SK－004
SK－025	SK－005
SK－030	SK－006
SK－039	SK－008
SK－040	SK－009
SK－053	SK－010

掘立柱建物跡	
旧	新
SB－034	SB－001
SB－054	SB－002
SB－055	SB－003
SB－056	SB－004
SB－057	SB－005

溝　跡	
旧	新
SD－005	SD－001
SD－006	SD－002
SD－007	SD－003
SD－008	SD－004
SD－009	SD－005
SD－014	SD－003
SD－017	SD－006
SD－019	SD－007
SD－021	SD－008
SD－022	SD－009
SD－023	SD－010
SD－029	SD－011
SD－031	SD－012
SD－032	SD－010
SD－033	SD－013
SD－037	SD－014
SD－038	SD－015

本文目次

第1章　はじめに …… 1
第1節　調査の概要 …… 1
1　調査に至る経過 …… 1
2　調査の経過 …… 1
3　調査の方法 …… 3
第2節　遺跡の位置と環境 …… 7
第2章　新井堀Ⅱ遺跡 …… 9
第1節　旧石器時代 …… 9
1　概要 …… 9
（1）基本層序 …… 9
2　文化層の概要 …… 11
3　文化層各節 …… 15
（1）第Ⅰ文化層 …… 15
（2）第Ⅱ文化層 …… 20
（3）第Ⅲ文化層 …… 30
（4）第Ⅳ文化層 …… 32
第2節　縄文時代以降 …… 38
1　遺構 …… 38
（1）炉穴 …… 39
（2）炉跡 …… 40
（3）陥穴 …… 40
（4）土坑 …… 40
（5）溝跡・道路跡 …… 42
（6）遺物包含層 …… 42
2　遺物 …… 43
（1）縄文土器 …… 43
1）縄文土器の種類 …… 43
2）縄文土器の集計方法 …… 44
第1群　撚糸文系土器 …… 44
第2群　沈線文系土器 …… 49
第3群　条痕文系土器 …… 55
第4群　縄文時代前期中葉の土器 …… 60
第5群　縄文時代前期後葉に属する土器 …… 60
第6群　縄文時代前期末葉から中期初頭の土器 …… 62

第７群　縄文時代中期前葉の土器 …… 65
第８群　縄文時代中期後葉以降の土器 …… 65
（２）石器・礫 …… 68
１）図示した石器 …… 68
２）石器の分布と組成 …… 74
３）礫群 …… 76
第３節　まとめ …… 79
１　旧石器時代 …… 79
（１）第１文化層の石器群 …… 79
（２）第２文化層の石器群 …… 79
（３）第３文化層の石器群 …… 80
（４）第４文化層の石器群 …… 80
２　縄文時代 …… 80
（１）縄文土器 …… 80
（２）石器・礫群 …… 81
１）石器 …… 81
２）礫群 …… 81
第３章　前戸遺跡 …… 83
第１節　遺構と遺物 …… 83
１　遺構と遺構出土の遺物 …… 83
（１）竪穴住居跡 …… 83
（２）土坑 …… 104
（３）掘立柱建物跡 …… 106
（４）溝跡 …… 109
２　グリッド出土の遺物 …… 112
第２節　まとめ …… 113
１　はじめに …… 113
２　竪穴住居跡の主軸と面積 …… 113
（１）竪穴住居跡の主軸 …… 113
（２）竪穴住居跡の面積 …… 114
３　おわりに …… 114
報告書抄録 …… 巻末

挿図目次

第１図　新井堀Ⅱ遺跡・前戸遺跡の位置と周辺の遺跡分布 …… 2
第２図　新井堀Ⅱ遺跡と周辺の地形 …… 4
第３図　新井堀Ⅱ遺跡の年度ごとの調査区とトレンチ配置 …… 5
第４図　前戸遺跡と周辺の地形 …… 6
第５図　前戸遺跡の年度ごとの調査区 …… 7
第６図　基本層序 …… 9
第７図　旧石器時代　確認グリッド …… 12
第８図　旧石器時代本調査範囲とブロックの位置 …… 13
第９図　第Ⅰ文化層　第１ブロック器種別分布図 …… 16
第10図　第Ⅰ文化層　第１ブロック母岩別分布図 …… 17
第11図　第Ⅰ文化層　第１ブロック出土石器 …… 19
第12図　第Ⅱ文化層　第２ブロック器種別（上），母岩別（下）分布図 …… 22
第13図　第Ⅱ文化層　第２ブロック出土土器 …… 24
第14図　第Ⅱ文化層　第３ブロック器種別分布図 …… 27
第15図　第Ⅱ文化層　第３ブロック母岩別分布図 …… 28
第16図　第Ⅱ文化層　第３ブロック出土石器 …… 29
第17図　第Ⅲ文化層　第４ブロック器種別（上），母岩別（下）分布図 …… 31
第18図　第Ⅲ文化層　第４ブロック出土石器 …… 32
第19図　第Ⅳ文化層　第５ブロック器種別（左），母岩別（右）分布図 …… 33
第20図　第Ⅳ文化層　第５ブロック出土石器 …… 34
第21図　遺構分布とグリッド配置 …… 38
第22図　炉穴，炉跡，陥穴 …… 39
第23図　溝跡，道路跡，土坑 …… 41
第24図　縄文時代早期の土器（１） …… 45
第25図　縄文時代早期の土器（２） …… 46
第26図　縄文時代早期の土器（３） …… 48
第27図　撚糸文系土器と沈線文系前・中葉土器の分布 …… 49
第28図　縄文時代早期の土器（４） …… 51
第29図　縄文時代早期の土器（５） …… 53
第30図　縄文時代早期の土器（６） …… 54
第31図　沈線文系後葉土器と条痕文系土器の分布 …… 56
第32図　縄文時代早期の土器（７） …… 57
第33図　縄文時代早期の土器（８） …… 58
第34図　縄文時代早期の土器（９） …… 59
第35図　縄文時代前期中葉の土器と分布 …… 61
第36図　縄文時代前期後葉の土器 …… 63
第37図　縄文時代前期後葉・末葉の土器 …… 64
第38図　縄文時代前期後葉・末葉の土器の分布 …… 65
第39図　縄文時代中期・後期の土器 …… 66
第40図　縄文時代中期土器の分布 …… 67
第41図　縄文時代石器（１） …… 69
第42図　縄文時代石器（２） …… 70
第43図　縄文時代石器（３） …… 72
第44図　縄文時代石器の分布 …… 73
第45図　縄文時代剥片石器の組成 …… 76
第46図　石材別にみた縄文時代の礫の分布 …… 77
第47図　縄文時代礫群における破損礫・焼け礫の分布 …… 78
第48図　前戸遺跡の遺構分布（西側）とグリッド配置 …… 84
第49図　前戸遺跡の遺構分布（東側） …… 85
第50図　SI-001遺構図・出土遺物 …… 86
第51図　SI-002遺構図・出土遺物 …… 87
第52図　SI-003遺構図・出土遺物 …… 88
第53図　SI-004とSI-005の遺構図

・出土遺物 …… 90
第54図　SI-006遺構図・出土遺物 …… 91
第55図　SI-007とSI-008遺構図・出土遺物 …… 93
第56図　SI-009，SI-010，SI-011遺構図・出土遺物 …… 94
第57図　SI-012，SI-013，SI-014遺構図・出土遺物 …… 96
第58図　SI-015遺構図・出土遺物 …… 98
第59図　SI-201遺構図・出土遺物 …… 99
第60図　土坑 …… 105
第61図　SB-001，SB-002，SB-003 …… 107
第62図　SB-004，SB-005 …… 108
第63図　溝跡出土の遺物 …… 111
第64図　グリッド出土遺物 …… 112
第65図　時期別にみた竪穴住居跡の分布 …… 113
第66図　時期別にみた竪穴住居跡のサイズ …… 114

表目次

第1表　新井堀Ⅱ遺跡文化層対応表 …… 11
第2表　文化層別石材器種組成表 …… 14
第3表　第Ⅰ文化層　第1ブロック母岩器種組成表 …… 15
第4表　第Ⅱ文化層　石材器種組成表 …… 21
第5表　第Ⅱ文化層　第2ブロック母岩器種組成表 …… 23
第6表　第Ⅱ文化層　第3ブロック母岩器種組成表 …… 26
第7表　第Ⅱ文化層　第4ブロック母岩器種組成表 …… 30
第8表　第Ⅱ文化層　第5ブロック母岩器種組成表 …… 34
第9表　旧石器時代　石器属性表（1） …… 35
第10表　旧石器時代　石器属性表（2） …… 36
第11表　新井堀Ⅱ遺跡　縄文時代石器組成表 …… 74
第12表　新井堀Ⅱ遺跡　縄文時代石器属性表 …… 75
第13表　新井堀Ⅱ遺跡　縄文時代礫群組成表 …… 78
第14表　前戸遺跡土器観察表 …… 100
第15表　前戸遺跡土坑属性表 …… 104
第16表　前戸遺跡溝跡属性表 …… 110

写真図版

巻頭図版1　新井堀Ⅱ遺跡　第Ⅰ文化層　第1ブロック，第Ⅱ文化層　第2ブロック
巻頭図版2　新井堀Ⅱ遺跡　第Ⅱ文化層　第3ブロック，第Ⅲ文化層　第4ブロック，第Ⅳ文化層　第5ブロック
図版1　新井堀Ⅱ遺跡　第Ⅰ文化層　第1ブロック（南から），
第Ⅰ文化層　第1ブロック（南東から），
第Ⅱ文化層　第2ブロック（南東から）
図版2　新井堀Ⅱ遺跡　第Ⅲ文化層　第3ブロック（西から），
第Ⅲ文化層　第4ブロック（南から）
第Ⅳ文化層　第5ブロック（南から）
図版3　新井堀Ⅱ遺跡　発掘調査前風景，道路際での発掘調査，遺物包含層調査風景
図版4　新井堀Ⅱ遺跡　SK-001，SK-001土層断面，SK-003（手前）とSK-004（奥）
図版5　新井堀Ⅱ遺跡　SK-002全景，SK-002土層断面，SK-005全景

図版６　新井堀Ⅱ遺跡　SD-001，SD-009，SD-010
図版７　新井堀Ⅱ遺跡　縄文時代早期の土器１
図版８　新井堀Ⅱ遺跡　縄文時代早期の土器２
図版９　新井堀Ⅱ遺跡　縄文時代早期の土器３
図版10　新井堀Ⅱ遺跡　縄文時代早期の土器４
図版11　新井堀Ⅱ遺跡　縄文時代早期の土器５
図版12　新井堀Ⅱ遺跡　縄文時代早期の土器６
図版13　新井堀Ⅱ遺跡　縄文時代早期の土器７
図版14　新井堀Ⅱ遺跡　縄文時代早期の土器８
図版15　新井堀Ⅱ遺跡　縄文時代前期の土器１
図版16　新井堀Ⅱ遺跡　縄文時代前期の土器２
図版17　新井堀Ⅱ遺跡　縄文時代前期末から中期の土器
図版18　新井堀Ⅱ遺跡　縄文時代の石器（石鏃，楔形石器，Ｒ剥片，スクレイパー）
縄文時代の石器（剥片，石核，礫石斧，磨製石斧）
図版19　新井堀Ⅱ遺跡　縄文時代の石器（敲石・磨石，凹石，石皿）
縄文時代の石器（黒曜石，珪質頁岩，チャート製剥片）
図版20　前戸遺跡　空撮　平成９年，10年（１）（２）
図版21　前戸遺跡　空撮　平成10年（３），12年，SI-001全景
図版22　前戸遺跡　SI-002全景，SI-003全景，SI-004全景
図版23　前戸遺跡　SI-005全景，SI-006全景，SI-007全景
図版24　前戸遺跡　SI-009全景（左）とSI-012（右），SI-011全景，SI-013全景
図版25　前戸遺跡　SI-014全景，SI-015全景，SI-015遺物出土状況（１）
図版26　前戸遺跡　SI-015遺物出土状況（２），SI-201全景，SB-001
図版27　前戸遺跡　SB-002，SB-003，SB-005
図版28　前戸遺跡　SK-001全景，SK-002全景，SK-004全景
図版29　前戸遺跡　SK-010全景，SK-202全景，SD-001
図版30　前戸遺跡　SD-003，SI-007とSD-006・007，SI-008とSD-007・008
図版31　前戸遺跡　SD-010，SD-012，SD-010・013
図版32　前戸遺跡　前戸遺跡遺物出土遺物（１）
図版33　前戸遺跡　前戸遺跡遺物出土遺物（２）

第１章　はじめに

第１節　調査の概要

１　調査に至る経緯

印西市西部では，２市１町２村にまたがる計画面積1,933haに及ぶ千葉ニュータウンの整備事業が着々と進み東京のベッドタウンとしての大きな役割を担いながら，魅力的な複合多機能都市へと発展してきている。また均衡のとれた地域構造の実現と快適な職住環境を図るため，ニュータウン構想の当初から，ニュータウンの南側に松崎工業団地の整備計画があった。そして工業団地周辺のアクセス道路の路線選定に当たって，印西市が構想していた市域を南北に縦断する路線を幹線道路とすることになった。整備区間は県道ニュータウン南環状線から南下して松崎工業団地を経由し，県道千葉竜ヶ崎線に至るもので，総延長距離は４kmになる。事業の施工に当たっては，道路利用の観点から，市道10号線と交差する地点より北側を印西町工区分とし，南側を企業庁工区分として，事業を推捗することとなった。

幹線道路の道路改築工事の事業化に当たって，印西町（当時）から平成６年２月に「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会文書が千葉県教育委員会へ提出された。千葉県教育委員会では現地踏査の結果を踏まえて，同年３月に事業地内の一部に遺跡が所在する旨の回答をした。この回答を受けて，その取扱いについてを関係者で協議を重ねた結果，事業の性格上やむを得ず記録保存の処置を講ずることとなり，財団法人千葉県文化財センターが発掘調査を実施することとなった。

２　調査の経過

発掘調査は，事業進捗の関係で幾度かに分割して行われた。それぞれの遺跡の発掘調査，整理作業は，以下のような期間，体制で行われた。

（１）発掘作業

①新井堀Ⅱ遺跡

平成８年度　平成９年３月３日～同年３月26日

内容　（上層）確認調査　610㎡のうち610㎡・（上層）本調査　35㎡

（下層）確認調査　610㎡のうち 36㎡・（下層）本調査　84㎡

北部調査事務所所長　谷　旬　副所長　宮　重行　調査担当者　研究員　白鳥　章

平成11年度　平成11年８月１日～同年11月30日

内容　（上層）確認調査　2,000㎡のうち202㎡・（上層）本調査　680㎡

（下層）確認調査　2,000㎡のうち124㎡・（下層）本調査　176㎡

北部調査事務所所長　折原　繁　副所長　加藤　修司　調査担当者　主席研究員　高橋　博文

平成13年度　平成14年１月16日～同年１月31日

内容　（上層）確認調査　552㎡のうち552㎡・（上層）本調査　０㎡

（下層）確認調査　552㎡のうち 22㎡・（下層）本調査　０㎡

第１図　新井堀Ⅱ遺跡・前戸遺跡の位置と周辺の遺跡分布

１．新井堀Ⅱ遺跡，２．前戸遺跡，３．新井堀Ⅰ遺跡，４．船尾貝塚，５．神野貝塚，６．船尾白幡遺跡，７．松崎Ⅰ遺跡，８．松崎Ⅱ遺跡，９．松崎Ⅲ遺跡，10．松崎Ⅳ遺跡，11．松崎Ⅴ遺跡，12．松崎Ⅵ遺跡，13．松崎Ⅶ遺跡，14．東海道遺跡

北部調査事務所所長　石田　廣美　副所長　石倉　亮治　調査担当者　上席研究員　川端　保夫

②前戸遺跡

平成９年度　平成９年10月１日～平成10年２月27日

内容　（上層）確認調査　2,085㎡のうち209㎡・（上層）本調査　2.085㎡

（下層）確認調査　2,085㎡のうち 84㎡・（下層）本調査　　0 ㎡

北部調査事務所所長　折原　繁　副所長　田村　隆　調査担当者　研究員　猪俣　昭喜　技師　田井　知二

平成10年度　平成10年７月１日～同年８月31日

内容　（上層）確認調査　1,160㎡のうち116㎡・（上層）本調査　595㎡

（下層）確認調査　1,160㎡のうち 23㎡・（下層）本調査　　0 ㎡

北部調査事務所所長　折原　繁　副所長　加藤　修司　調査担当者　研究員　猪俣　昭喜

平成12年度　平成12年10月１日～同年10月31日

内容　（上層）本調査　350㎡

（下層）確認調査　350㎡のうち12㎡・（下層）本調査　0 ㎡

北部調査事務所所長　石田　廣美　副所長　石倉　亮治　調査担当者　主席研究員　高橋　博文

平成15年度　平成15年８月１日～同年８月26日

内容　（上層）本調査　422㎡

（下層）確認調査　422㎡のうち17㎡・（下層）本調査　0 ㎡

北部調査事務所所長　古内　茂　副所長　岡田　誠造　調査担当者　上席研究員　石倉　亮治

（２）整理作業

整理作業については，新井堀Ⅱ遺跡，前戸遺跡の両者について以下のような体制・期間で行われた。

平成13年度

内容　水洗・注記から復元

北部調査事務所所長　石田　廣美　副所長　石倉　亮治

調査担当者　上席研究員　川端　保夫　玉井　ゆかり　木下　圭司

平成14年度

内容　実測から原稿執筆の一部

整理課長　石田　廣美　調査担当者　上席研究員　新田　浩三

平成15年度

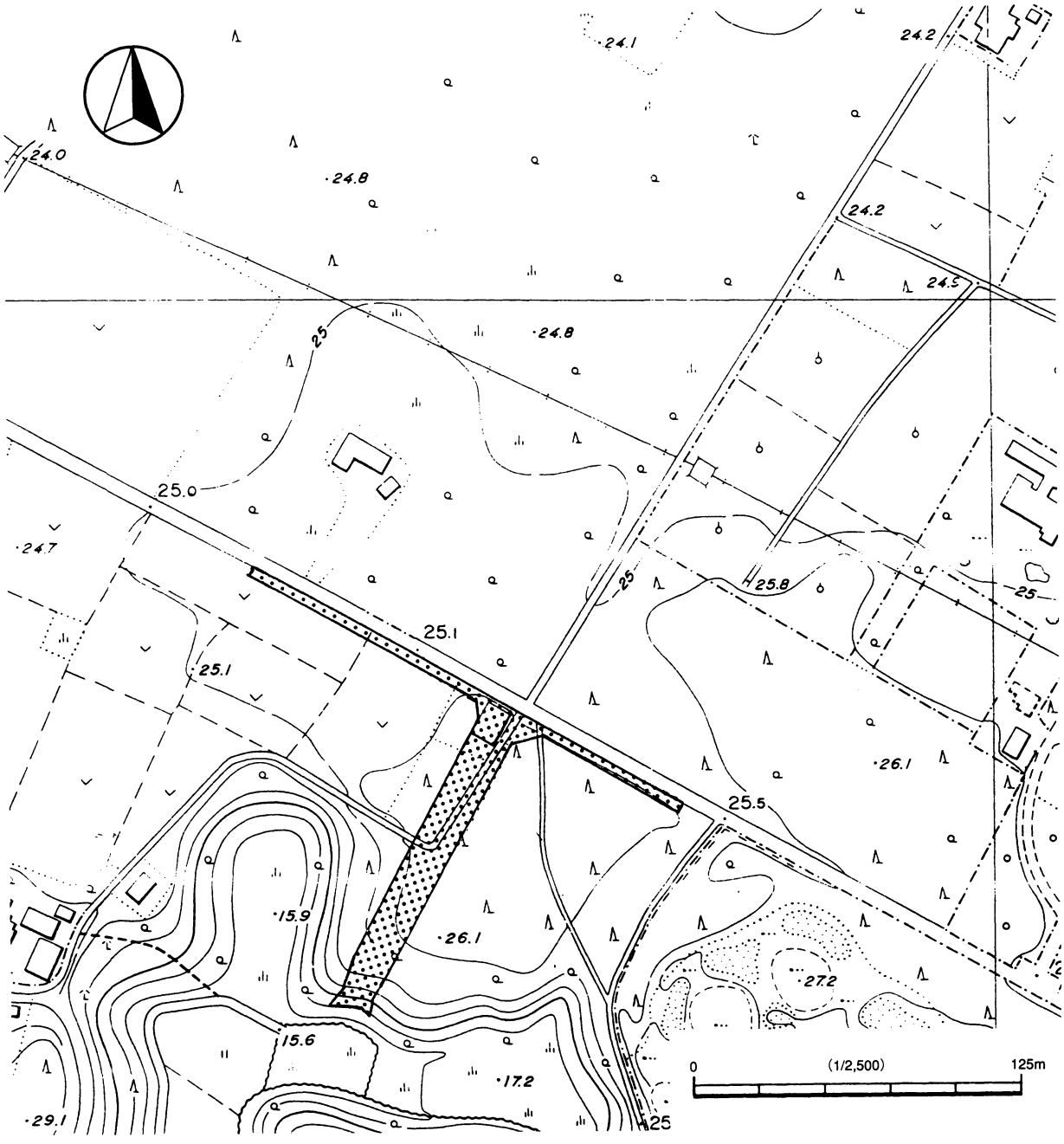
内容　原稿執筆・報告書刊行

整理課長　深澤　克友　調査担当者　主席研究員　内田　龍哉

３　調査の方法

（１）新井堀Ⅱ遺跡

発掘調査は，立川ローム層上面よりも上層の遺構・遺物包含層（上層）と，立川ローム層内の遺物包含

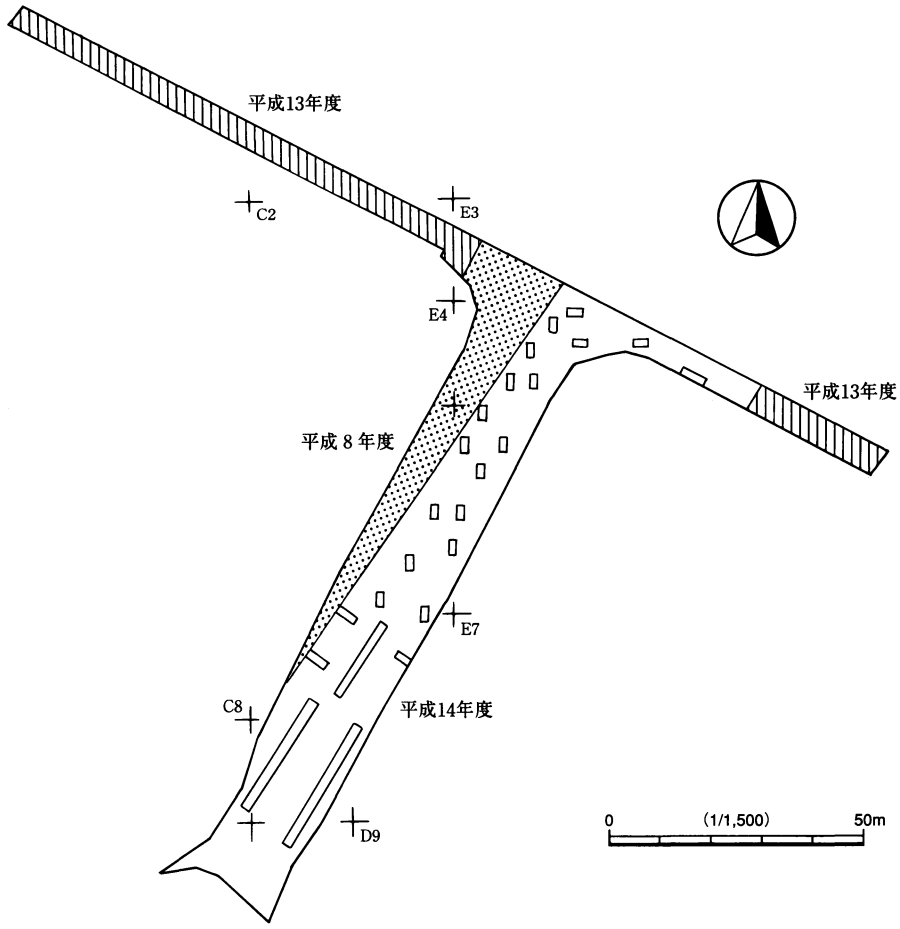


第２図　新井堀Ⅱ遺跡と周辺の地形

層（下層）について行った。

上層の調査は，平成９年度，平成13年度については，全面の表土をバックホーで除去して遺構の確認を行った。平成11年度の調査では，調査区面積の10％を目安にトレンチを設定し，確認調査を行い，その結果，遺構・遺物包含層が確認された合計715㎡について本調査を行った。

下層については，調査区面積の４％を目安として確認グリッドを設定して，武蔵野ローム層上面まで，遺物包含層の有無を確認し，確認グリッド内から遺物が出土した場合は，さらにその周辺を拡張し，遺物分布の広がりを捕捉した。下層の調査においては，遺物が検出された平成９年度にのみ本調査を実施した。



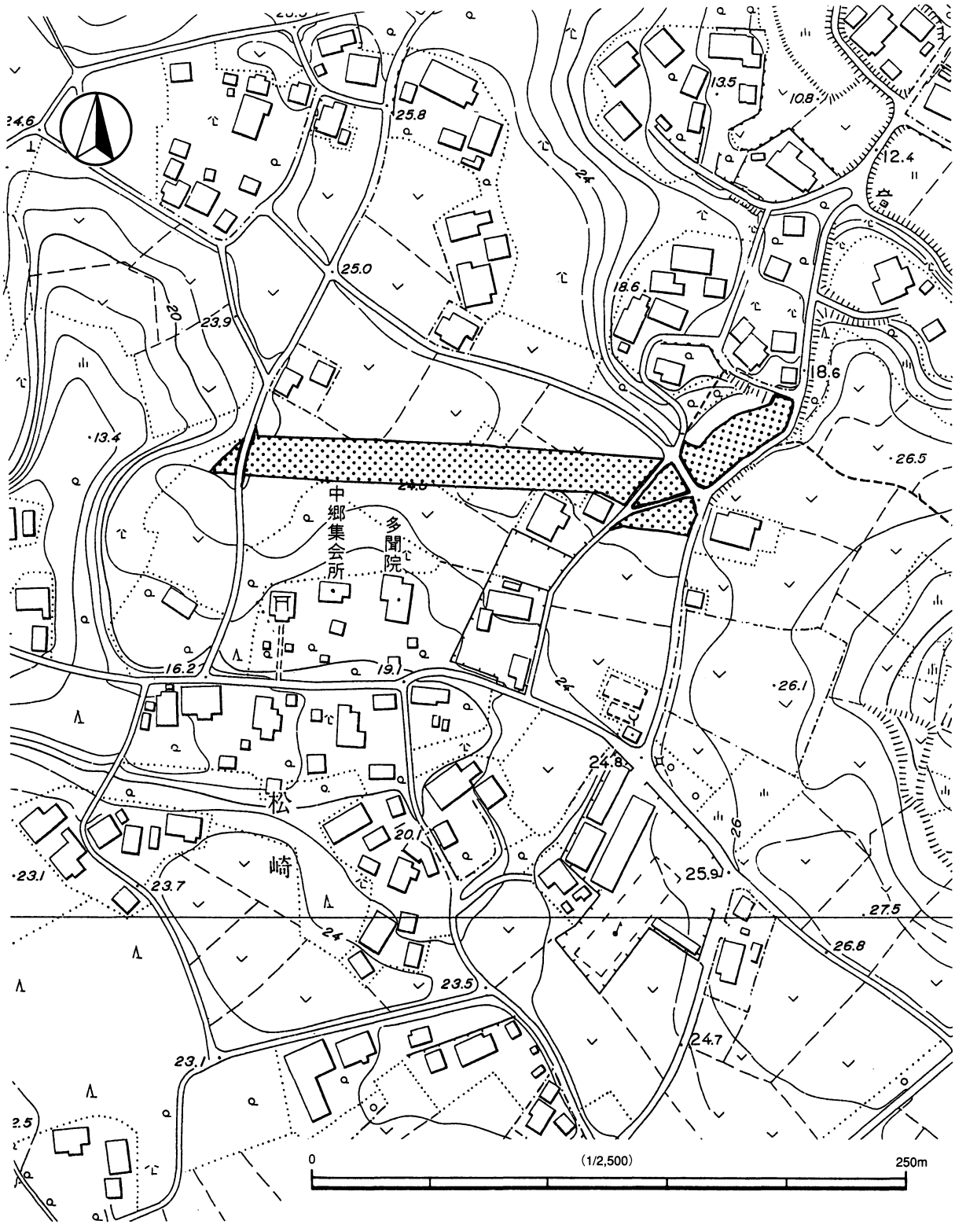
第３図　新井堀Ⅱ遺跡の年度ごとの調査区とトレンチ配置

（２）前戸遺跡

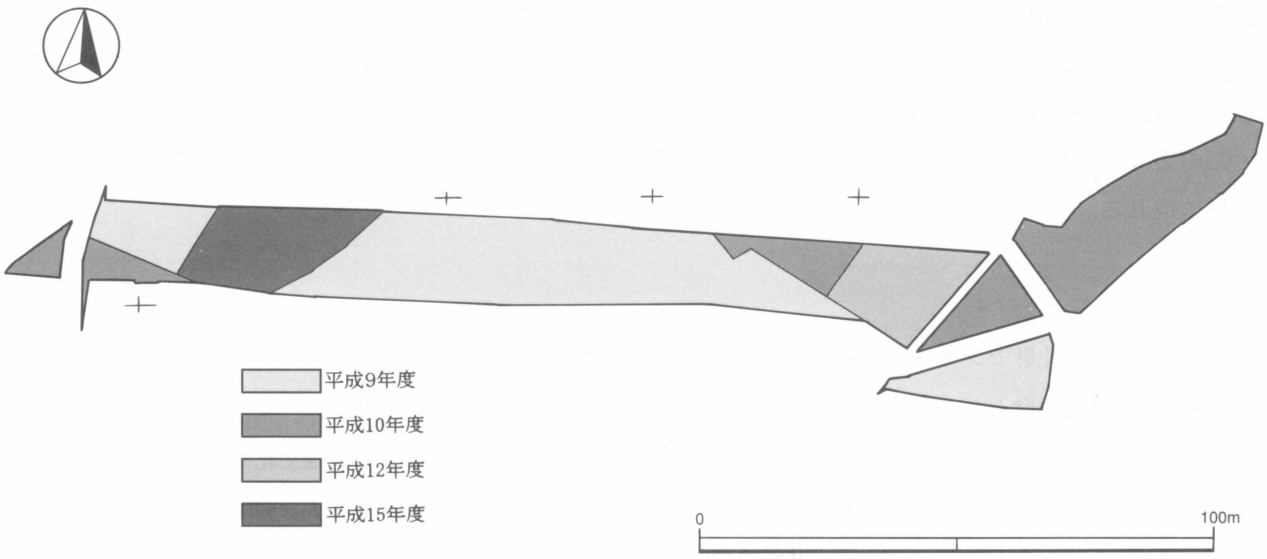
発掘調査は，新井堀Ⅱ遺跡と同様に，立川ローム層上面を境界とし，上層と下層について行った。

上層は，平成９年度と平成10年度の２度に分けて確認調査を行った。調査面積の10％に遺構確認のためのトレンチを設け，遺構・遺物の分布を確認し，その結果，確認調査を行った全域の3,452㎡について本調査を行うこととした。

下層については，調査対象範囲の２％から４％を目安としてグリッドを設定し，武蔵野ローム層の上面まで遺物包含層の有無を確認した。その結果，遺物は全く出土しなかったため，本調査は行わなかった。



第４図　前戸遺跡と周辺の地形



第５図　前戸遺跡の年度ごとの調査区

第２節　遺跡の立地と環境

新井堀Ⅰ遺跡，前戸遺跡は，印旛沼に流れ込む新川の北岸の，標高約20m～25mの台地上に位置している。

新井堀Ⅱ遺跡は，新川北岸から入り込む谷の最奥部に位置しており，新川までは2.5kmである。また北東側には，やはり印旛沼に流れ込む師戸川が流れており，その南岸には新井堀Ⅰ遺跡が位置している。一方，前戸遺跡は，新井堀Ⅱ遺跡の位置する谷口部の東岸に位置している。新川から印旛沼の北岸はいくつも谷が入り込み，台地は半島状に刻まれ，数多くの遺跡が分布している。

旧石器時代の遺跡は，調査例が限られているため，地域としての傾向をつかむことは難しい。前戸遺跡の周辺では，松崎Ⅰ遺跡から松崎Ⅲ遺跡の３遺跡から旧石器時代の遺物集中地点が検出されており，今後も発見される可能性が高い。

縄文時代の遺跡の中では，早期と後・晩期に属するものが目立つ。両遺跡が位置する谷の西岸には早期後葉の船戸貝塚が位置する。印旛沼周辺には上座貝塚や駒形遺跡などの早期後葉の貝塚が多く分布しており，船尾貝塚はその中でも古印旛湾の湾奥部に位置するものの一つである。いずれもハイガイ，マガキを多く含み，炉穴などの遺構内に貝層が形成されている。また，近接する松崎２遺跡においても早期後葉の炉穴群が検出されており，この時期の遺跡が密に分布する地域であるといえる。

後・晩期の遺跡としては，新川の対岸に位置する佐野貝塚，神野貝塚が知られている。ヤマトシジミを主体とする点列環状貝塚であり,印旛沼沿岸で採貝を行った遺跡としては最も湾奥のものであるといえる。これらの時期の他にも，縄文前期後葉から末葉にかけての遺物包含層が船尾白幡遺跡などに見られ，新井堀Ⅱ遺跡と類似した状況をみることができる。

この地域には，弥生時代，古墳時代の遺跡も分布するが，本書で取り上げる遺跡とは関連が薄いため，ここでは述べない。続く奈良・平安時代に属する遺跡は，前戸遺跡が位置する台地やその周辺にも数多く分布している。同じ台地上には松崎Ⅲ遺跡，松崎Ⅵ遺跡が位置しており，特に松崎Ⅲ遺跡からは掘立柱建物跡が確認されている。また前戸遺跡の西側２kmには，灰釉陶器や緑釉陶器をともない，掘立柱建物が検

出されている鳴神山遺跡が位置しており，古代における重要な地域であると考えられる。

この周辺には，結縁寺城跡のような城跡や，新井堀Ⅰ野馬土手に代表されるような野馬土手など，中・近世の遺跡も多く分布するのも地域的な特徴といえる。

このように，新井堀Ⅱ遺跡，前戸遺跡を取り囲む地域は，各時代にわたり遺跡が密に分布していることが見て取れる。

［文献］

財団法人千葉県文化財センター（1997）『千葉県遺跡地図（印旛地区）』

財団法人千葉県文化財センター（1975）『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅴ』

財団法人千葉県文化財センター（1998）『千葉北部地区新市街地造成整備事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』

財団法人千葉県文化財センター（1999）『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書ⅩⅣ―印西市鳴神山遺跡Ⅲ・白井谷奥遺跡―』

財団法人千葉県文化財センター（2002）『印西市新井堀Ⅰ遺跡・新井堀Ⅰ野馬土手―印西市道00－026号線道路改良に伴う埋蔵文化財調査報告書―』

常松成人（1997）「千葉県八千代市神野貝塚研究の基礎」『貝塚研究』2

第２章　新井堀Ⅱ遺跡

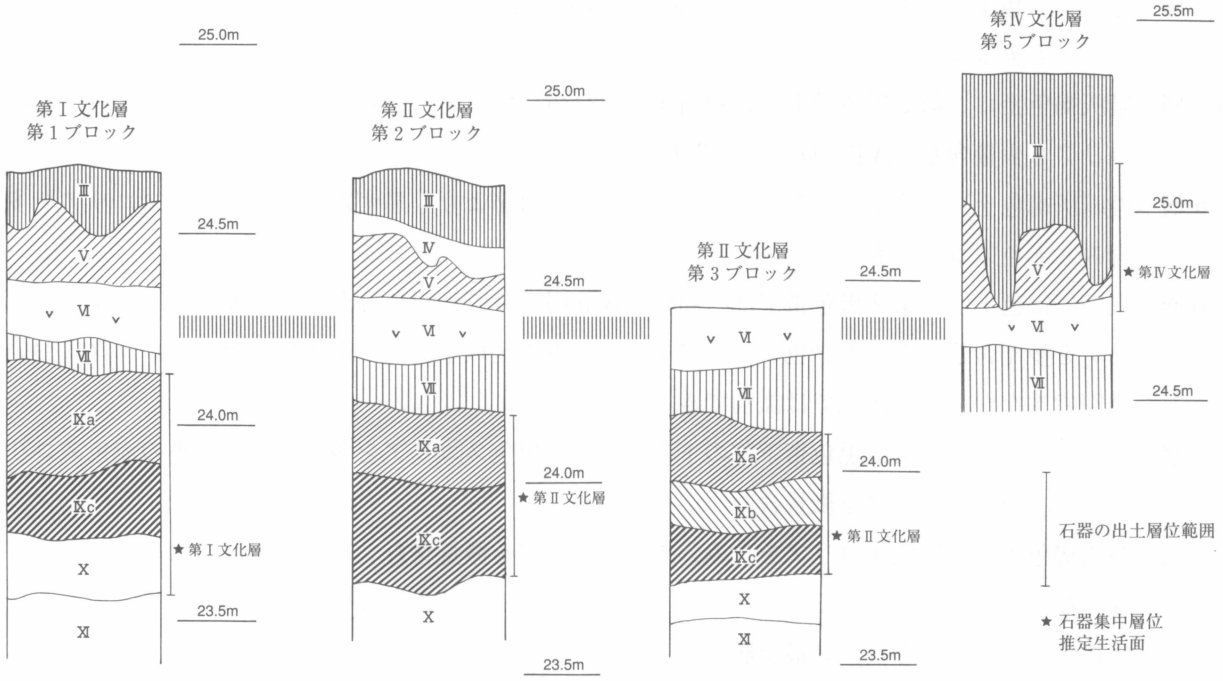
第１節　旧石器時代

１　概要

（１）基本層序（第６図）

基本層序は第６図のとおりである。調査範囲は，幅20m，長さ約120mであり，南西に舌状に張り出す台地を北東から南西にかけて細長く調査された。そのため，全ての調査区において，土層の堆積状況が均等ではない。ここでは，各調査区域を北部（第１ブロック）と中央部（第２・３ブロック）と南部（第５ブロック）の三つの代表的な層序を図示した。また，併せて，各ブロックにおける石器の出土層位範囲と石器集中層位（推定生活面）を図示した。

これらの区域の共通した特徴は，第１黒色帯に相当するⅤ層を明確にとらえることが可能である点があ



第６図　基本層序

げられる。

相違点は，中央部の南東側の第３ブロックにおいては，Ⅸｂ層をとらえることが可能であったが，他のブロックにおいては，Ⅸｂ層をとらえることができなかった。また，立川ローム最上層のいわゆる「ソフトローム層」に相当するⅢ層が，調査区域によってソフト化の下部に及ぶ範囲が異なっている。ソフト化が下部まで及ぶ範囲は，中央部の西側の第２ブロックはⅣ層，北部の第１ブロックはⅤ層，南部の第５ブロックはⅥ層まで及んでいる。

Ⅲ　層（明褐色土）　本層が立川ローム最上層に相当する。いわゆる「ソフトローム層」である。色調は均質ではない。下部に向かってソフト化がみられるが，本遺跡では，各区域において，ソフト化が下部まで及ぶ範囲が異なる。ほとんどがⅤ層まで及んでおり，Ⅵ層に及んでいる地点もみられる。

Ⅳ　層（明褐色土）　硬質のローム層で，いわゆる「ハードローム層」である。特徴的な赤色スコリアを含み，全体に赤みを帯びて明色。Ⅳ層を明確にとらえることができた区域は，調査区中央部西側の第２ブロックにおいてみられた。そのほかの区域では，Ⅴ層までソフト化が進んでおり，Ⅳ層を取り込んでいる。このため，Ⅲ層の下部はやや赤みを帯びており，本来的にはⅢ層下部にⅣ層が堆積していたものと思われる。

Ⅴ　層（暗灰褐色土）　第１黒色帯に相当する。全体に黒ずんでいる。比較的，第１黒色帯を識別することが容易である。

Ⅵ　層（暗灰黄白色土）　AT（姶良丹沢火山灰）が集中的に包含される。黒色スコリアを含み，赤色スコリアも少量含む。

Ⅶ　層（暗灰褐色土）　第２黒色帯上部に相当する。全体に黒ずんでいる。黒色スコリアを含み，赤色スコリアも少量含む。ATブロックが若干混在する。

Ⅸ**a**層（濃暗灰褐色土）　第２黒色帯下部の上半である。Ⅶ層よりも黒ずんでいる。黒色スコリアを多く含み，赤色スコリアも含む。

Ⅸ**b**層（濃暗灰褐色土）　第２黒色帯下部の間層。Ⅸａ層より若干褐色分が強く，赤みがある。黒色スコリアを多く含む。大粒の赤色スコリアを含む。調査区域中央部の南東側の第３ブロックにおいて識別できたが，他の区域では識別できなかった。

Ⅸ**c**層（淡黒褐色土）　第２黒色帯下部の下半である。黒色スコリアを多く含む。大小の赤色スコリアを含む。白色スコリアを微量含む。

Ⅹ　層（暗灰褐色土）　黒色スコリアを含み，赤色スコリアを微量含む。下部にかけてスコリアの量が少なくなる。Ⅹ層を細分することができなかった。立川ローム最下層である。

ＸＩ層（灰褐色土）　武蔵野ローム最上層である。粘性を帯びた灰褐色ロームである。

2　文化層の概要（巻頭図版１・２，第７・８図，第１・２表）

旧石器時代の文化層は，第Ⅰ文化層～第Ⅳ文化層の４文化層に分離できた。第Ⅱ文化層は，第２ブロックと第３ブロックの２箇所のブロックで構成されている。そのほかの文化層は，１箇所のブロックで構成される。文化層別の出土分布とブロックの位置は，第３図のとおりである。各文化層とも出土層位に上下の幅をもつが，各文化層の出土層位と出土集中層位から生活面を推定すると以下のとおりとなる。

（１）**第Ⅰ文化層**：調査区北部に分布しており，台地の平坦面に分布する。第１ブロックが相当する。出土層位は，Ⅹ層下部～Ⅸａ層上部にかけて出土している。Ⅹ層上部に集中しており，Ⅹ層上部に生活面をもつ文化層と推定できる。

（２）**第Ⅱ文化層**：調査区中央部北側に分布しており，台地の平坦面に分布する。第２ブロックと第３ブロックの２箇所のブロックが相当する。出土層位は，第２ブロックと第３ブロックでは，出土層位の幅が多少異なる。Ⅸｃ層下部～Ⅸａ層上部にかけて出土している。Ⅸｃ層上部に集中しており，Ⅸｃ層上部に生活面をもつ文化層と推定できる。

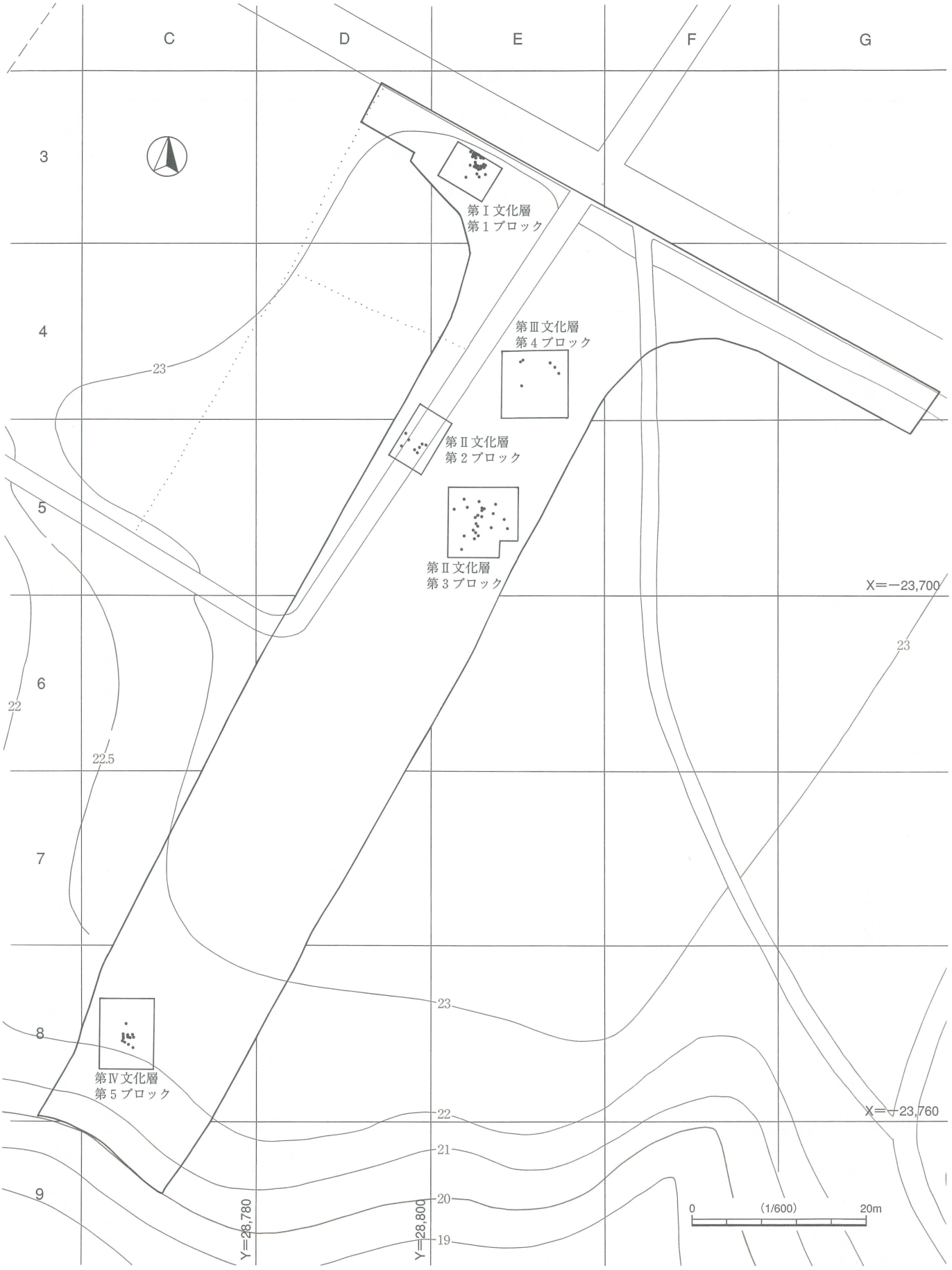
（３）**第Ⅲ文化層**：調査区北東部に分布しており，台地の平坦面に分布する。第４ブロックが相当する。出土層位は，Ⅸａ層上部～Ⅶ層下部にかけて出土している。Ⅶ層に集中することから，Ⅶ層に生活面を持つと推定される。

（４）**第Ⅳ文化層**：調査区南西部に分布しており，南西に緩やかに傾斜する斜面に分布する。第５ブロックが相当する。出土層位は，Ⅵ層上部～Ⅲ層下部にかけて出土している。Ⅴ層に集中しており，Ⅴ層に生活面をもつ文化層と推定できる。

第１表　新井堀Ⅱ遺跡文化層対応表

文化層	ブロック	出土層位	推定生活面	出土点数	器種組成の特徴	石材組成の特徴
Ⅰ	1	Ⅹ層下部～Ⅸａ層上部	Ⅹ層上部	37	台形様石器４点，楔形石器６点，楔形石器調整剥片３点で製品の占める割合が高い。両極剥離によって作成された石器が多く含まれる。非常に小型の石器で占められる。	チャート18点（48.65%），黒曜石15点（40.54%）を主体とする。その他に，ガラス質黒色安山岩３点，玉髄（メノウを含む）１点である。
Ⅱ	2	Ⅸｃ層下部～Ⅸａ層上部	Ⅸｃ層上部	8	ナイフ形石器１点，局部磨製石斧再生剥片１点。	チャート５点（62.5%）を主体とし，ガラス質黒色安山岩・流紋岩・頁岩が１点ずつ出土。
	3	Ⅹ層上部～Ⅶ層下部	Ⅸｃ層上部	23	ナイフ形石器３点，二次加工のある剥片２点，微細剥離痕のある剥片３点，折断剥片４点。ナイフ形石器の占める割合が高い。	多種の石材で構成されている。頁岩８点，チャート６点が比較的多く，流紋岩・黒曜石・トロトロ石（安山岩）・珪質頁岩・玉髄（メノウ含）・安山岩で構成される。
Ⅲ	4	Ⅸａ層上部～Ⅶ層下部	Ⅶ層	7	楔形石器５点（71.43%）が高い比率を占める。	頁岩３点，黒曜石２点，チャート２点で構成される。
Ⅳ	5	Ⅵ層上部～Ⅲ層下部	Ⅴ層	13	製品が出土していない。折断剥片11点（84.62%）の占める割合が高い。	すべてガラス質黒色安山岩で構成される。

第７図　旧石器時代　確認グリッド



第８図　旧石器時代本調査範囲とブロックの位置

第2表　文化層別石材器種組成表

文化層	ブロック	母岩名	ナイフ形石器	台形様石器	楔形石器	楔形石器調整剥片	局部磨製石斧再生剥片	二次加工のある剥片	微細剥離痕のある剥片	折断剥片	剥片	砕片	総計	組成比（%）
Ⅰ	1	黒曜石		1 0.72	4 1.57				5 0.88		1 0.14	4 0.18	15 3.49	17.05 1.78
		ガラス質黒色安山岩								1 0.13	1 0.48	1 0.09	3 0.7	3.41 0.36
		チャート		3 1.83	2 2.06	3 0.91		1 0.3	1 0.16	3 1	1 0.58	4 0.59	18 7.43	20.45 3.80
		玉髄（メノウ含む）								1 0.17			1 0.17	1.14 0.09
	1 点数合計 1 重量合計			4 2.55	6 3.63	3 0.91		1 0.3	6 1.04	5 1.3	3 1.2	9 0.86	37 11.79	42.05 6.03
Ⅰ点数合計 Ⅰ重量合計				4 2.55	6 3.63	3 0.91		1 0.3	6 1.04	5 1.3	3 1.2	9 0.86	37 11.79	42.05 6.03
Ⅱ	2	ガラス質黒色安山岩									1 1.38		1 1.38	1.14 0.71
		流紋岩									1 2.47		1 2.47	1.14 1.26
		頁岩					1 3.82						1 3.82	1.14 1.95
		チャート	1 16.57						2 5.97		2 12.11		5 34.65	5.68 17.72
	2 点数合計 2 重量合計		1 16.57				1 3.82		2 5.97		4 15.96		8 42.32	9.09 21.64
	3	黒曜石	1 0.64										1 0.64	1.14 0.33
		トロトロ石（安山岩）									1.00 3.46		1 3.46	1.14 1.77
		流紋岩	1 2.29								1 5.86	1 0.11	3 8.26	3.41 4.22
		頁岩								2 2.74	6 9.9		8 12.64	9.09 6.46
		珪質頁岩							1 9.58		1 1.19		2 10.77	2.27 5.51
		チャート	1 1.88					2 7.8		2 8.21	1 0.43		6 18.32	6.82 9.37
		玉髄（メノウ含む）							1 7.55				1 7.55	1.14 3.86
		安山岩							1 0.96				1 0.96	1.14 0.49
	3 点数合計 3 重量合計		3 4.81					2 7.8	3 18.09	4 10.95	10 20.84	1 0.11	23 62.6	26.14 32.01
Ⅱ点数合計 Ⅱ重量合計			4 21.38				1 3.82	2 7.8	5 24.06	4 10.95	14 36.8	1 0.11	31 104.92	35.23 53.65
Ⅲ	4	黒曜石			2 2.78								2 2.78	2.27 1.42
		頁岩			2 11.19					1 1.68			3 12.87	3.41 6.58
		チャート			1 1.14							1 0.07	2 1.21	2.27 0.62
	4 点数合計 4 重量合計				5 15.11					1 1.68		1 0.07	7 16.86	7.95 8.62
Ⅲ点数合計 Ⅲ重量合計					5 15.11					1 1.68		1 0.07	7 16.86	7.95 8.62
Ⅳ	5	ガラス質黒色安山岩								11 48.74	2 13.25		13 61.99	14.77 31.70
	5 点数合計 5 重量合計									11 48.74	2 13.25		13 61.99	14.77 31.70
Ⅳ点数合計 Ⅳ重量合計										11 48.74	2 13.25		13 61.99	14.77 31.70
全体の点数合計 全体の重量合計			4 21.38	4 2.55	11 18.74	3 0.91	1 3.82	3 8.1	11 25.1	21 62.67	19 51.25	11 1.04	88 195.56	100.00 100.00
点数組成比（%） 重量組成比（%）			4.55 10.93	4.55 1.30	12.50 9.58	3.41 0.47	1.14 1.95	3.41 4.14	12.50 12.83	23.86 32.05	21.59 26.21	12.50 0.53	100.00 100.00	

［上段：点数，下段：重量（g）］

3　文化層各節

（1）第Ⅰ文化層（第9～11図，第2・3・9表）

Ⅹ層上部に生活面をもつ文化層と推定される。第1ブロックが相当する。調査区北部に分布しており，台地の平坦面に分布する。

①第1ブロック（第9～11図，第2・3・9表）

出土状況　平面分布は，約3m×3mの円形の範囲から密集して分布している。北東部に遺物が集中する傾向があり，南側に散漫に集中している。出土層位は，Ⅹ層下部～Ⅸa層上部にかけて出土している。Ⅹ層上部に集中しており，Ⅹ層上部に生活面があると推定できる。

器種別分布（第9図）の特徴は，北部に石器集中地点がみられ，台形様石器・楔形石器・楔形石器調整剥片・二次加工のある剥片・微細剥離痕のある剥片・折断剥片等が集中地点に偏りなく出土している。集中地点の南側に，楔形石器2点と台形様石器1点が出土している。

母岩別分布（第10図）の特徴は，黒曜石001が14点（37.84%），チャート001が8点（21.62%）出土しており，2母岩で半数以上を占める。この母岩は，集中地点全体に出土している。ガラス質黒色安山岩001が3点，玉髄（メノウ含む）が1点出土しているが，集中地点の中央部から出土している。接合資料はみられなかった。

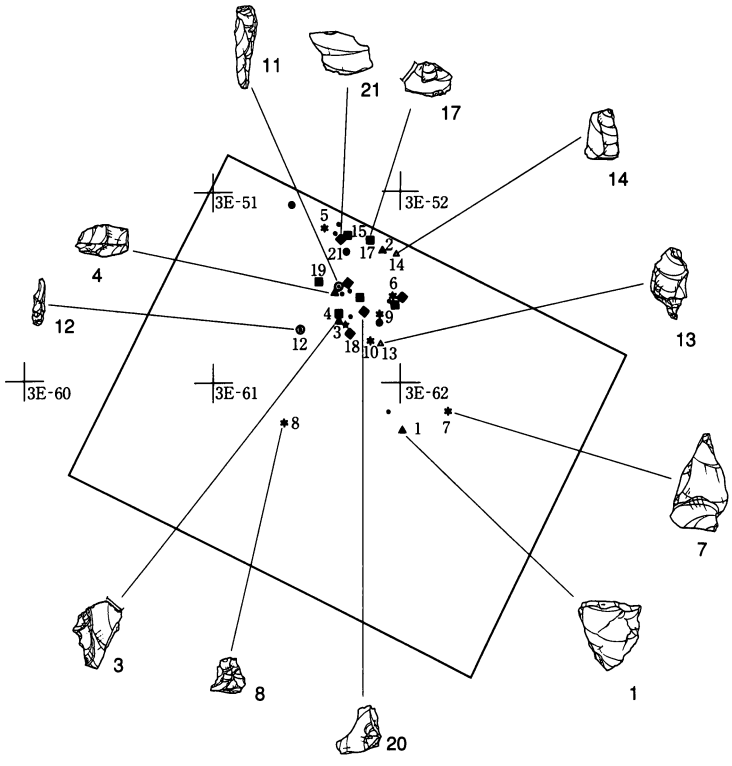
出土遺物　総計37点出土した。母岩器種組成は，第3表のとおりである。

器種組成の特徴は，主要な器種が，台形様石器4点，楔形石器6点，楔形石器調整剥片3点，二次加工

第3表　第Ⅰ文化層　第1ブロック母岩器種組成表

文化層	ブロック	母岩名	母岩番号	台形様石器	楔形石器	楔形石器調整剥片	二次加工のある剥片	微細剥離痕のある剥片	折断剥片	剥片	砕片	総計	組成比（%）
Ⅰ	1	黒曜石	001	1 0.72	3 1.13			5 0.88		1 0.14	4 0.18	14 3.05	37.84 25.87
			002		1 0.44							1 0.44	2.70 3.73
		黒曜石 点数合計 黒曜石 重量合計		1 0.72	4 1.57			5 0.88		1 0.14	4 0.18	15 3.49	40.54 29.60
		ガラス質黒色安山岩	001						1 0.13	1 0.48	1 0.09	3 0.7	8.11 5.94
		ガラス質黒色安山岩 点数合計 ガラス質黒色安山岩 重量合計							1 0.13	1 0.48	1 0.09	3 0.7	8.11 5.94
		チャート	001	2 0.98	2 2.06		1 0.3		2 0.93	1 0.58		8 4.85	21.62 41.14
			002	1 0.85		1 0.08			1 0.07		2 0.15	5 1.15	13.51 9.75
			003			2 0.83		1 0.16			2 0.44	5 1.43	13.51 12.13
		チャート 点数合計 チャート 重量合計		3 1.83	2 2.06	3 0.91	1 0.3	1 0.16	3 1	1 0.58	4 0.59	18 7.43	48.65 63.02
		玉髄（メノウ含む）	001						1 0.17			1 0.17	2.70 1.44
		玉髄（メノウ含む） 点数合計 玉髄（メノウ含む） 重量合計							1 0.17			1 0.17	2.70 1.44
Ⅰ点数合計 Ⅰ重量合計				4 2.55	6 3.63	3 0.91	1 0.3	6 1.04	5 1.3	3 1.2	9 0.86	37 11.79	100.00 100.00
点数組成比（%） 重量組成比（%）				10.81 21.63	16.22 30.79	8.11 7.72	2.70 2.54	16.22 8.82	13.51 11.03	8.11 10.18	24.32 7.29	100.00 100.00	

［上段：点数，下段：重量（g）］



▲ 台形様石器

✱ 楔形石器

◉ 楔形石器調整剥片

▲ 二次加工のある剥片

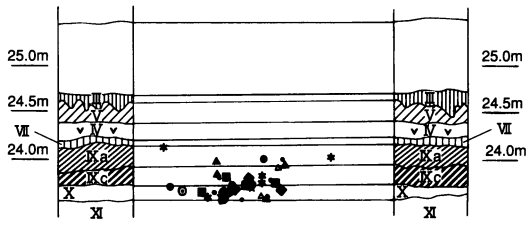
■ 微細剥離痕のある剥片

◆ 折断剥片

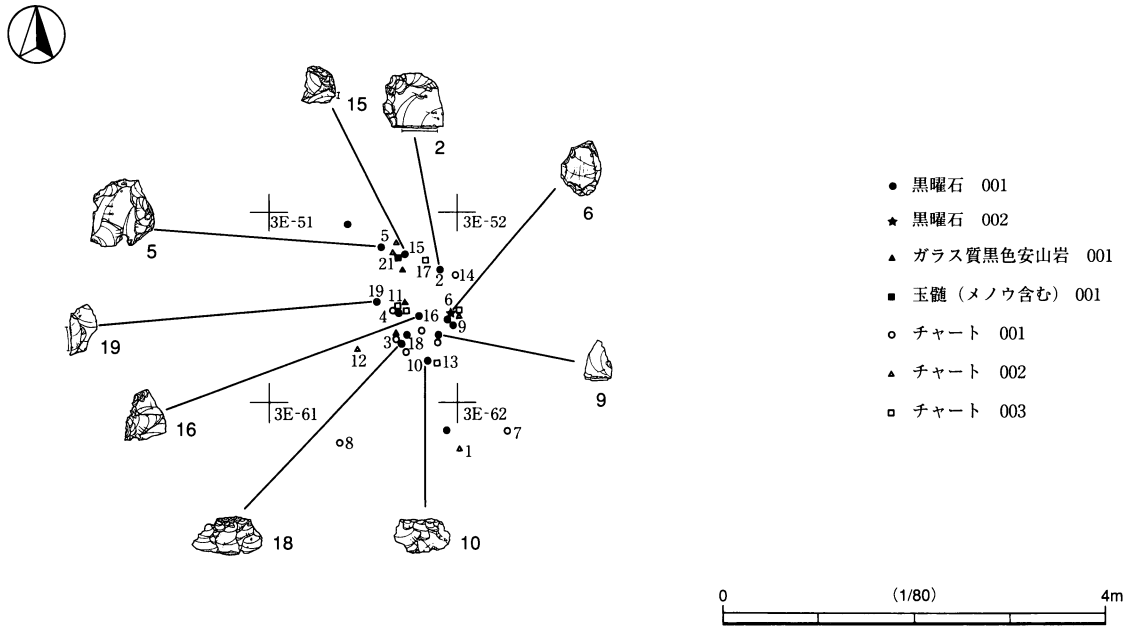
● 剥片

• 砕片

0 (1/80) 4m



第9図　第Ⅰ文化層　第1ブロック器種別分布図



第10図　第Ⅰ文化層　第1ブロック母岩別分布図

のある剥片1点，微細剥離痕のある剥片6点，折断剥片5点であり，出土点数に対して，二次加工・微細剥離痕・折断等の調整加工が施された石器の比率が高いことがいえる。石器のサイズは，最大長が2cm以下のもので占められ，非常に小型の石器群である。石核は出土していない。

母岩組成の特徴は，石材において，黒曜石が2母岩で構成され15点（40.54%），チャートが3母岩で構成され18点（48.65%）で，黒曜石とチャートを合わせると33点（89.19%）で大半を占める。これらのうち，黒曜石001とチャート001・002は，台形様石器や楔形石器で構成されており，一つの母岩から，台形様石器や楔形石器などを生産したことがうかがえる。特に，両極剥離を示す楔形石器や楔形石器調整剥片の占める割合が高いことから，本ブロックの石器製作に関して，両極剥離が多用されたことが推察される。器種組成において，石核が出土していないことから，楔形石器と識別したものが，残核として機能した可能性が高い。

1～4は台形様石器である。それぞれの台形様石器の全体形状の形態は多様であるが，貝殻状の小型の剥片を素材として用いて，素材の末端部と頭部に細かい調整加工や折断剥離が行われている点で共通する製作技術がみられる。

1は打面幅が広い末端部が尖った三角形状の小型の剥片を素材としている。素材の打面部にあたる右側縁には，背面から急角度の細かい調整加工が施されている。素材の末端部にあたる左側縁は，腹面側から折断されている。

2は線状の打面から剥離された横長剥片を素材としている。打点部にあたる腹面右側縁上部に背腹両面に微細剥離がみられることから，両極剥離によって剥離されたものである可能性がある。素材の打面部にあたる左側縁には，腹面から細かい調整加工が施されている。素材の末端部にあたる右側縁は，腹面から折断されている。下端部には，微細剥離痕が連続的にみられる。

3は，2と素材の形状が類似している。線状の打面から剥離された横長剥片を素材としており，打点部にあたる腹面右中央部に背腹両面からの微細剥離がみられることから，両極剥離によって剥離されたもの

である可能性がある。背面右側の剥離面は，ポジティブ面を有する。素材の打面部にあたる背面左側縁は，器体の奥まで入る調整加工が施されている。素材の末端部にあたる右側縁は，背面から折断されている。背面上部には微細剥離痕がみられる。

4はやや厚みのある細長の剥片を素材としている。素材の打面部にあたる右側縁は，背面から折断に近い調整加工が施されている。素材の末端部にあたる左側縁は，背面から折断に近い調整加工が施されている。背面上部には，微細剥離痕がみられる。

5～10は楔形石器である。いずれも，小型の剥片を素材としており，両極剥離によって，両極剥離を行ったいずれかの面が線状を呈する。

5は，2・3の素材の形状と類似している。打点部にあたる上部の背腹両面に微細剥離痕がみられることから，素材の剥片は，両極剥離によって剥離されたものと考えられる。非常に薄い幅広の剥片を素材として，上下両端と左右両端を対にして，両極剥離が行われている。特に，下端部右側の剥離面は，急角度の細かい剥離面で構成されている。上下両端からの両極剥離後に，腹面から調整加工を行った可能性もある。

6は縦長の剥片を素材としている。素材の打点部と末端部が，調整加工によって除去されていることから，素材の剥離の方法については明確にはいえないが，両極剥離によって剥離されたものである可能性が高い。縦長剥片を素材として，上下両端と左右両端からとそれぞれ対として，両極剥離が行われている。特に，左側縁の剥離は急角度の加工が連続的に施されている。

7は縦長剥片を素材としている。背面の下端部からの剥離面は，腹面との切合い関係が同時であり，素材剥離においても両極剥離が行われたと思われる。縦長剥片を素材として，上下両端から両極剥離が行われており，左側縁と右側縁は下端部まで及ぶ樋状剥離のような剥離面が形成されている。先端には，細かい調整加工がみられ，先端部を意図的に尖らせた加工である可能性もあり，錐器である可能性もある。

8は小型の縦長剥片を素材として，上下両端から両極剥離が施されている。

9は小型の横長剥片を素材として，下端部を折断した後に，上下両端から両極剥離を行っており，下端部に細かい調整加工痕がみられる。さらに，左側縁を折断後に，左右両側から両極剥離が行われている。これらの調整加工によって，先端部が尖った形状の石器が製作されている。

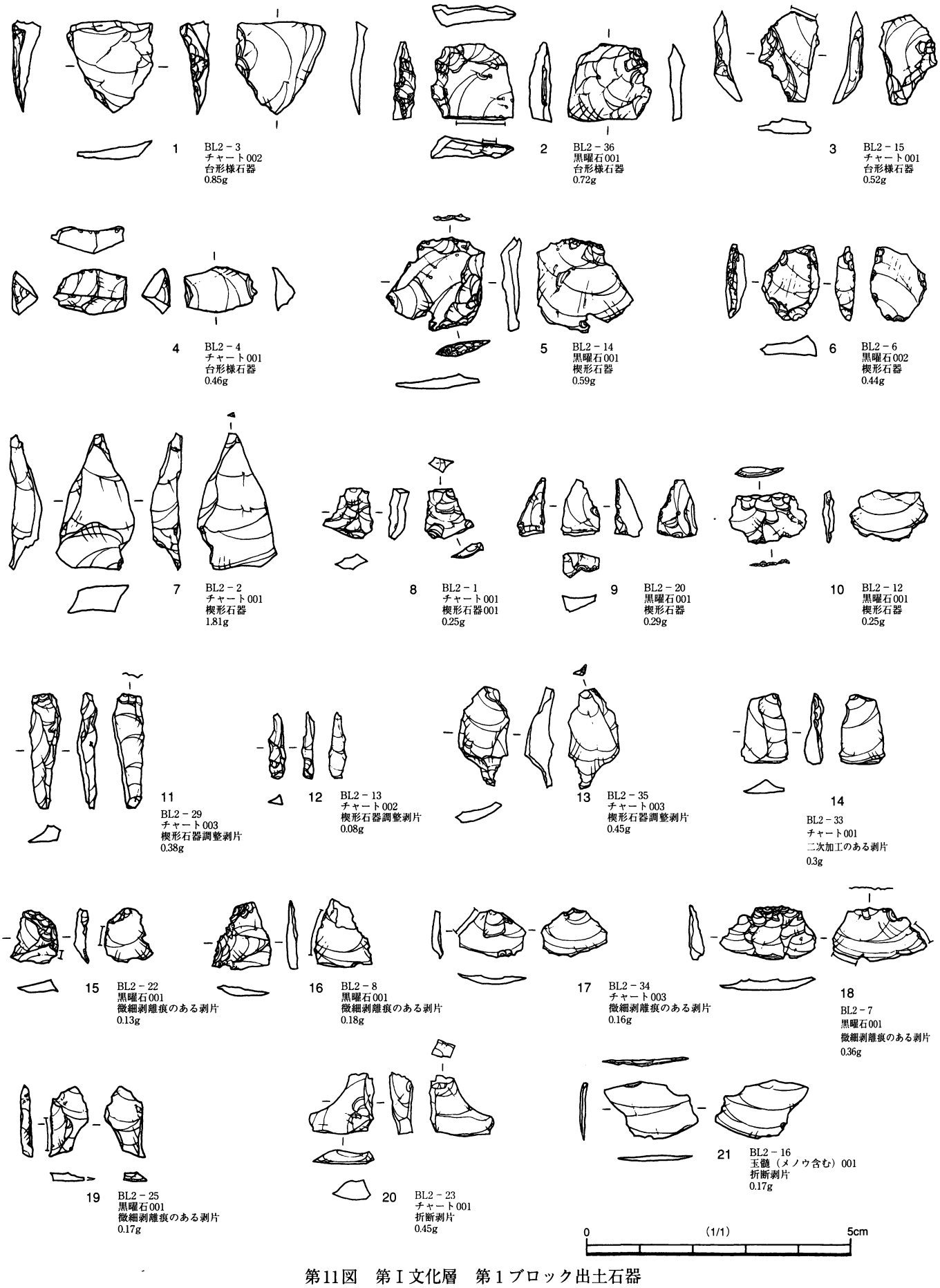
10は薄い横長の剥片を素材として，打面部を折断後に，上下両端から両極剥離が行われている。

11～13は楔形石器調整剥片である。上端部と下端部からの加撃痕がみられる剥片を楔形石器調整剥片として分類した。これ以外にも，楔形石器調整剥片であると思われるものがあるが，明確な下端部からの加撃痕がみられないことから，この3点を楔形石器から剥離された楔形石器調整剥片として分類した。

11は，11を剥離する以前に，背面構成からみると上端部から細長の剥片が両極剥離によって，細長の剥片が剥離されていることがうかがえる。打面は線状を呈し，下端部からの反発撃によって細長の剥片が剥離されている。12は背面の下端部に反発撃がみられ，小型の細長剥片が剥離されている。13は線状の打面から剥離され，背面下端部に反発撃がみられる。

14は二次加工のある剥片である。小型の縦長剥片を素材として，右側縁上部に背面から調整加工が施されている。

15～19は微細剥離痕のある剥片である。いずれも，線状の打面から剥離されており，薄い剥片が剥離されている。打面部には，背腹両面に微細剥離痕がみられるものがあり，両極剥離によって剥離されたもの



第11図　第Ⅰ文化層　第1ブロック出土石器

である可能性が高い。

15は背面右側面下部と裏面左側縁上部に微細剥離痕がみられる。16は腹面左側縁に微細剥離痕がみられる。17は背面左側縁上部と下端部に微細剥離痕がみられる。18は腹面右側縁下部に微細剥離痕がみられる。19は左側縁下部に微細剥離痕がみられる。

20・21は折断剥片である。20は右側縁と下端部が折断されている。21は上端部が折断されている。

（2）第Ⅱ文化層（第12～16図，第2・4・5・6・9・10表）

Ⅸc層上部に生活面をもつ文化層と推定できる。調査区中央部北側に分布しており，台地の平坦面に分布する。第2ブロックと第3ブロックの2箇所のブロックが相当する。出土層位は，第2ブロックと第3ブロックでは，出土層位の幅が多少異なるものの，Ⅸc層下部～Ⅸa層上部にかけて出土しており，Ⅸc層上部に集中する。

①第2ブロック（第12・13図，第2・4・5・9・10表）

出土状況　平面分布は，約3m×2mの楕円形の範囲から散漫に分布している。出土状況を詳細にみると，東部と西部の2箇所の集中地点がみられる。出土層位は，Ⅸc層中部～Ⅸa層下部にかけて出土しており，Ⅸc層上部に集中する。Ⅸc層上部に生活面があると推定される。

器種別分布（第7図）の特徴は，東部の集中地点においては，南側では微細剥離痕のある剥片が2点近接して出土しており，北側では剥片がまとまって出土している。西側の集中地点においては，点数が3点と少ないものの，北側にナイフ形石器が出土しており，中央に局部磨製石斧再生剥片が出土している。

母岩別分布（第12図）の特徴は，東部の集中地点において，チャート002のみが2点で構成されており，接合している（接合資料1）。このほかの母岩は，単独出土であり，製品あるいは剥片のかたちで搬入されたものと思われる。

出土遺物　総計8点出土した。母岩器種組成は，第5表のとおりである。

器種組成の特徴は，ナイフ形石器1点，局部磨製石斧再生剥片1点，微細剥離痕のある剥片2点，剥片4点で構成される。出土点数が少ないながら，ナイフ形石器1点，局部磨製石斧再生剥片1点出土しており，これらの石器が本文化層を特徴付ける石器となっている。

母岩組成の特徴は，チャート002のみ2点で構成されている。その他の母岩は，単独出土である。これらは，製品・剥片のかたちで搬入された石器であると考えられる。石材においては，チャートの5点（62.5%）で，高い比率を示す。

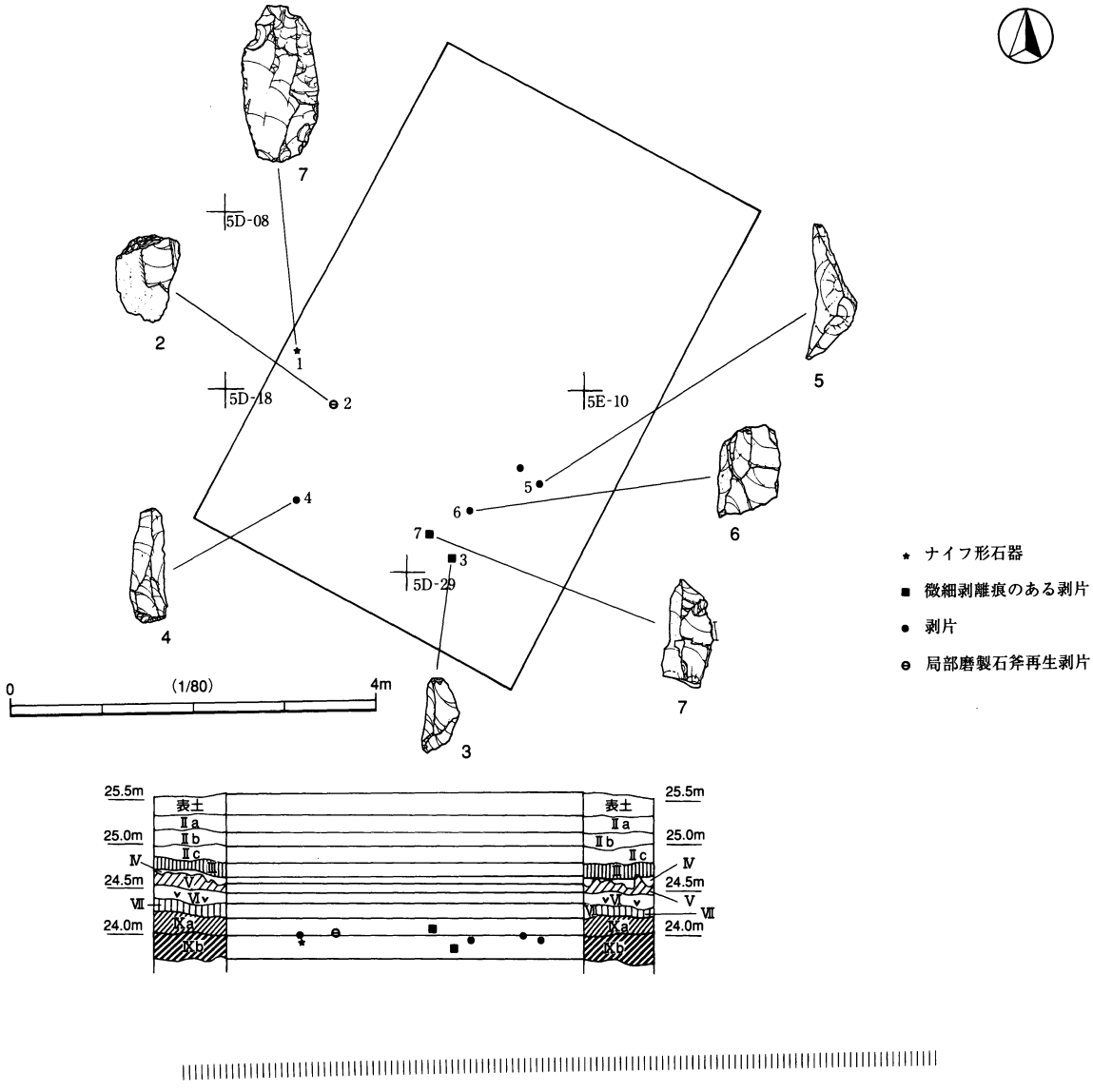
1はナイフ形石器である。幅の狭い平坦打面から剥離された縦長剥片を素材としている。打面部を基部に設置して，主要剥離面方向とナイフ形石器の主軸方向が一致する。右側縁下部と頭部と打面部の各部位に，連続的ではないが，粗い平坦な調整加工が施されている。基部加工のナイフ形石器として捉えることができる。右側縁上部は，上端部からの加撃により，面的に剥離が行われている。先端部は破損している。左側縁は微細剥離痕が連続的にみられる。素材の縁辺は左側面に残されている。母岩はチャート001が用いられており，単独出土である。石質は緑色を基調として，部分的に黒色鉱物が1cm程度の幅で帯状に入りこんでいる。下総台地では，あまり見られない石材で，相模野台地・武蔵野台地においてⅩ層・Ⅸ層から頻繁に出土するチャートの石質に類似する。

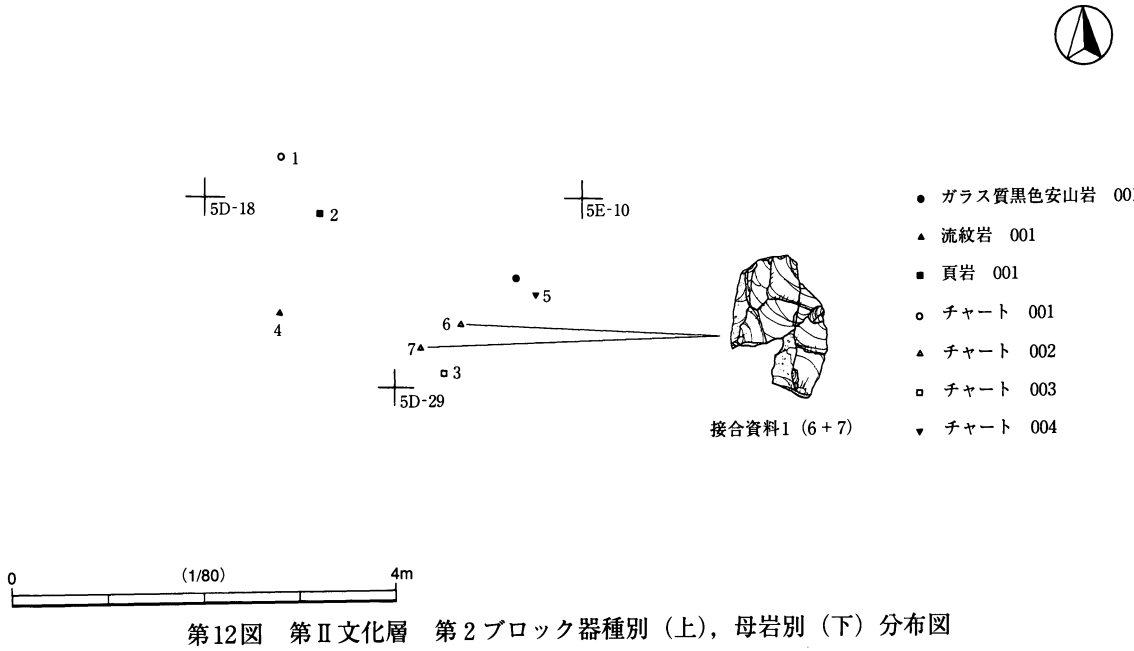
2は局部磨製石斧再生剥片である。研磨痕は，背面左側の自然面と背面右側の剥離面にみられ，特に，

第４表　第Ⅱ文化層　石材器種組成表

文化層	ブロック	母岩名	母岩番号	ナイフ形石器	局部磨製石斧再生剥片	二次加工のある剥片	微細剥離痕のある剥片	折断剥片	剥片	砕片	総計	組成比（%）
Ⅱ	2	ガラス質黒色安山岩	001						1 1.38		1 1.38	3.23 1.32
		ガラス質黒色安山岩 点数合計 ガラス質黒色安山岩 重量合計							1 1.38		1 1.38	3.23 1.32
		流紋岩	001						1 2.47		1 2.47	3.23 2.35
		流紋岩 点数合計 流紋岩 重量合計							1 2.47		1 2.47	3.23 2.35
		頁岩	001		1 3.82						1 3.82	3.23 3.64
		頁岩 点数合計 頁岩 重量合計			1 3.82						1 3.82	3.23 3.64
		チャート	001	1 16.57							1 16.57	3.23 15.79
			002				1 4.68		1 8.83		2 13.51	6.45 12.88
			003				1 1.29				1 1.29	3.23 1.23
			004						1 3.28		1 3.28	3.23 3.13
		チャート 点数合計 チャート 重量合計		1 16.57			2 5.97		2 12.11		5 34.65	16.13 33.03
	2 点数合計 2 重量合計			1 16.57	1 3.82		2 5.97		4 15.96		8 42.32	25.81 40.34
	3	黒曜石	001	1 0.64							1 0.64	3.23 0.61
		黒曜石 点数合計 黒曜石 重量合計		1 0.64							1 0.64	3.23 0.61
		トロトロ石（安山岩）	001						1 3.46		1 3.46	3.23 3.30
		トロトロ石（安山岩） 点数合計 トロトロ石（安山岩） 重量合計							1 3.46		1 3.46	3.23 3.30
		流紋岩	001	1 2.29							1 2.29	3.23 2.18
			002						1 5.86		1 5.86	3.23 5.59
			003							1 0.11	1 0.11	3.23 0.10
		流紋岩 点数合計 流紋岩 重量合計		1 2.29					1 5.86	1 0.11	3 8.26	9.68 7.87
		頁岩	001						2 5.23		2 5.23	6.45 4.98
			002					1 1.17	1 1.87		2 3.04	6.45 2.90
			003						2 2.21		2 2.21	6.45 2.11
			004					1 1.57			1 1.57	3.23 1.50
			005						1 0.59		1 0.59	3.23 0.56
		頁岩 点数合計 頁岩 重量合計						2 2.74	6 9.9		8 12.64	25.81 12.05
		珪質頁岩	001						1 1.19		1 1.19	3.23 1.13
			002				1 9.58				1 9.58	3.23 9.13
		珪質頁岩 点数合計 珪質頁岩 重量合計					1 9.58		1 1.19		2 10.77	6.45 10.26
		チャート	001			1 6.47		1 5.8			2 12.27	6.45 11.69
			002					1 2.41	1 0.43		2 2.84	6.45 2.71
			003	1 1.88							1 1.88	3.23 1.79
			004			1 1.33					1 1.33	3.23 1.27
		チャート 点数合計 チャート 重量合計		1 1.88		2 7.8		2 8.21	1 0.43		6 18.32	19.35 17.46
		玉髄（メノウ含む）	001				1 7.55				1 7.55	3.23 7.20
		玉髄（メノウ含む） 点数合計 玉髄（メノウ含む） 重量合計					1 7.55				1 7.55	3.23 7.20
		安山岩	001				1 0.96				1 0.96	3.23 0.91
		安山岩 点数合計 安山岩 重量合計					1 0.96				1 0.96	3.23 0.91
	3 点数合計 3 重量合計			3 4.81		2 7.8	3 18.09	4 10.95	10 20.84	1 0.11	23 62.6	74.19 59.66
Ⅱ点数合計 Ⅱ重量合計				4 21.38	1 3.82	2 7.8	5 24.06	4 10.95	14 36.8	1 0.11	31 104.92	100.00 100.00
点数組成比（%）				12.90	3.23	6.45	16.13	12.90	45.16	3.23	100.00	
重量組成比（%）				20.38	3.64	7.43	22.93	10.44	35.07	0.10	100.00	

［上段：点数，下段：重量（g）］





第12図　第Ⅱ文化層　第2ブロック器種別（上），母岩別（下）分布図

第5表　第Ⅱ文化層　第2ブロック母岩器種組成表

文化層	ブロック	母岩名	母岩番号	ナイフ形石器	局部磨製石斧再生剥片	微細剥離痕のある剥片	剥片	総計	組成比（%）
Ⅱ	2	ガラス質黒色安山岩	001				1 1.38	1 1.38	12.50 3.26
		ガラス質黒色安山岩 点数合計 ガラス質黒色安山岩 重量合計					1 1.38	1 1.38	12.50 3.26
		流紋岩	001				1 2.47	1 2.47	12.50 5.84
		流紋岩 点数合計 流紋岩 重量合計					1 2.47	1 2.47	12.50 5.84
		頁岩	001		1 3.82			1 3.82	12.50 9.03
		頁岩 点数合計 頁岩 重量合計			1 3.82			1 3.82	12.50 9.03
		チャート	001	1 16.57				1 16.57	12.50 39.15
			002			1 4.68	1 8.83	2 13.51	25.00 31.92
			003			1 1.29		1 1.29	12.50 3.05
			004				1 3.28	1 3.28	12.50 7.75
		チャート 点数合計 チャート 重量合計		1 16.57		2 5.97	2 12.11	5 34.65	62.50 81.88
	2 点数合計 2 重量合計			1 16.57	1 3.82	2 5.97	4 15.96	8 42.32	100.00 100.00
点数組成比（%）				12.50	12.50	25.00	50.00	100.00	
重量組成比（%）				39.15	9.03	14.11	37.71	100.00	

［上段：点数，下段：重量（g）］

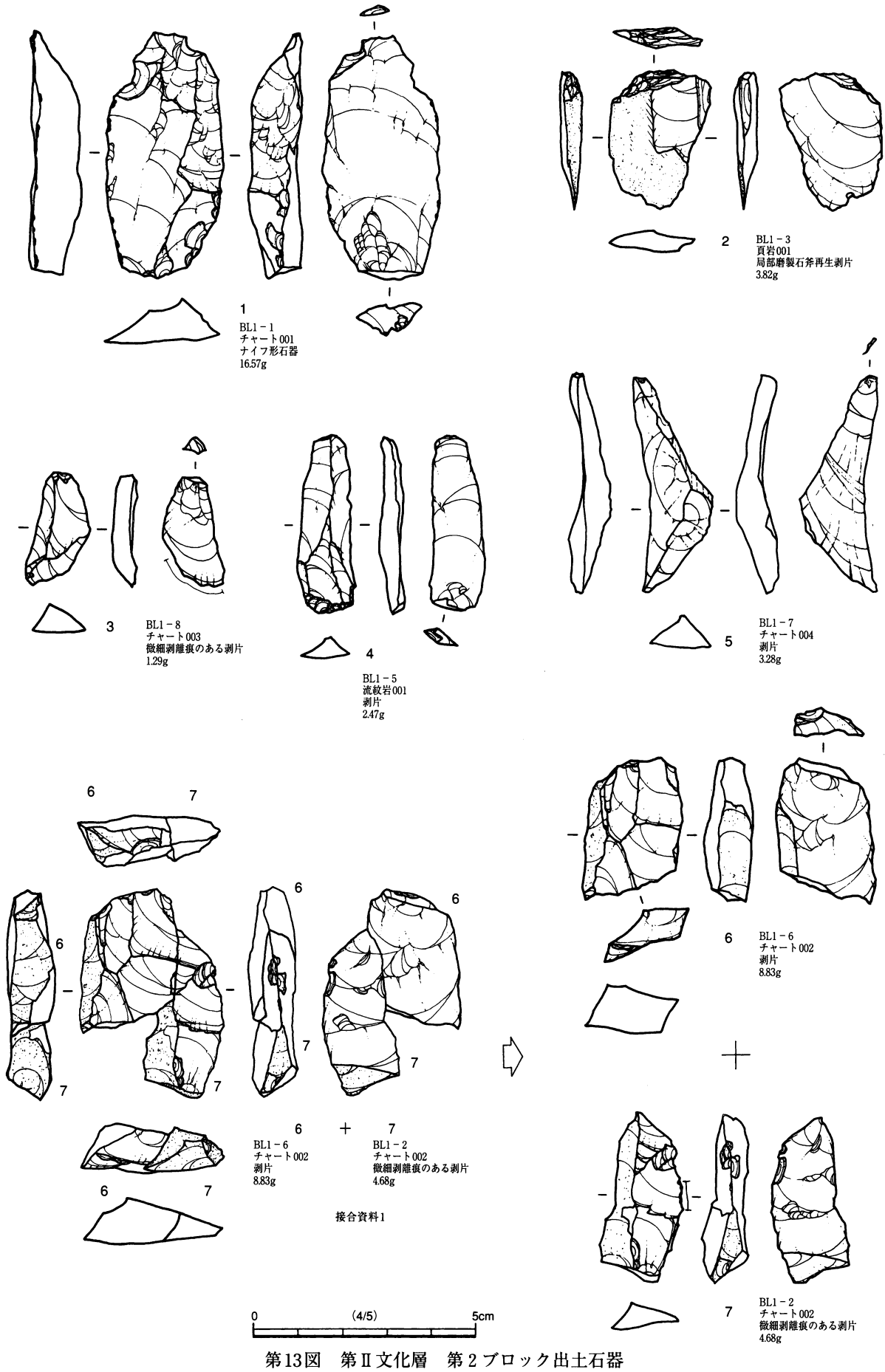
自然面と剥離面の稜線上の研磨痕は顕著である。上端部には，背面に階段状の調整加工がみられ，腹面にも細かい調整加工が施されている。この母岩は，単独出土であることから，本ブロックにおいて，局部磨製石斧を再生した可能性は低く，局部磨製石斧を再生した剥片を素材として再利用し，上端部を加工した石器である可能性がある。

3は微細剥離痕のある剥片である。頭部調整がわずかに施され，幅の狭い打面から剥離された縦長剥片を素材としている。腹面末端部に微細剥離痕がみられる。

4・5は剥片である。4は打面調整と頭部調整が行われた縦長剥片である。末端部はヒンジフラクチャーの形状を呈する。打面調整・頭部調整と思われる剥離面と腹面との切合い関係は，腹面のほうが新しい剥離面であるととらえたので剥片として識別したが，切合い面がわずかであることから腹面の剥離面のほうが古い可能性もあり，1と同様な形態を呈する基部加工のナイフ形石器として識別することができるかもしれない。

5は線状の打面から剥離された細長の縦長剥片である。背面は多方向からの剥離面で構成されている。

6＋7は接合資料1である。6＋7の状態で，頭部調整がわずかに施された幅広の剥片である。下端部からの剥離によって，6と7に分割されている。6は剥片である。6と7とが分割した下端部からの剥離時に，器体の中央部から折れたものと思われる。打面部側が残存している。7は微細剥離痕のある剥片である。右側縁に微細剥離痕がみられる。下端部は腹面側から折れている。



第13図　第Ⅱ文化層　第2ブロック出土石器

②第３ブロック（第14～16図，第２・４・６・10表）

出土状況　第２ブロックの南西に近接して出土している。平面分布は，約７ｍ×７ｍの円形の範囲から散漫に分布している。出土状況を詳細にみると，中央部がやや集中するが，周辺部は散漫に分布する。出土層位は，Ⅹ層上部～Ⅶ層下部にかけて上下幅をもって出土しており，集中する層位が明確ではないが，Ⅸｃ層上部に集中する傾向がある。Ⅸｃ層上部に生活面があると推定される。

器種別分布（第14図）の特徴は，ナイフ形石器が３点出土しているが，集中地点の周辺部から出土する傾向がみられる。二次加工のある剥片は２点出土しており，ナイフ形石器同様に，集中地点の周辺部から出土している。調整加工が施された石器は，集中地点の周辺部から出土する傾向がある。折断剥片は４点出土しており，集中地点の中央部付近からまとまって出土している。

母岩別分布（第15図）の特徴は，接合資料３・４が集中地点の中央付近で出土している。頁岩002が接合資料３として接合しており，チャート001が接合資料４として接合している。これらの接合資料は，いずれも，２点のみで構成されている。頁岩001，チャート002が２点で構成されているが，それ以外の母岩は，単独出土である。ナイフ形石器や二次加工のある剥片の割合が比較的高いことから，製品のかたちで搬入されたものと思われる。

出土遺物　総計23点出土した。母岩器種組成は，第６表のとおりである。

器種組成の特徴は，主要な器種が，ナイフ形石器３点，二次加工のある剥片２点，微細剥離痕のある剥片３点，折断剥片４点で構成される。出土点数が少ないながら，ナイフ形石器，二次加工のある剥片の占める割合が高い。

母岩組成の特徴は，頁岩001・002，チャート001・002が２点で構成されているが，それ以外の母岩は，単独出土である。これらは，製品・剥片のかたちで搬入された石器であると考えられる。石材においては，比較的多種の石材が，少数ずつで構成されている。

１～３はナイフ形石器である。素材の用い方や調整加工はそれぞれ異なる。

１は頭部調整が施され，幅の狭い打面から剥離された縦長剥片を素材としている。打面部を基部に設置して，主要剥離面方向とナイフ形石器の主軸方向が一致する。左側縁下部と右側縁下部に急角度の細かい調整加工が施されている。左側縁下部の調整加工が，特に入念に行われている。素材の形状は異なるが，素材の用い方や調整加工の部位から，第２ブロック出土の１のナイフ形石器と共通した特徴を持つ。

２は基部が残存しており，全体形状が不明な資料である。透明度のない黒色の黒曜石を用いており，比較的良質な石材である。肉眼ではあるが，高原山産の黒曜石であるかと推定される。素材は全体形状が不明であるので明確なことはいえないが，縦長剥片，あるいは，石刃を素材としているものと思われる。右側縁は急角度で入念なブランティング加工が施されている。右側縁は，比較的粗い調整加工が鋸歯状に施されている。右側縁裏面には，刃部としての線条痕が認められる。折面は背面側から剥離されている。

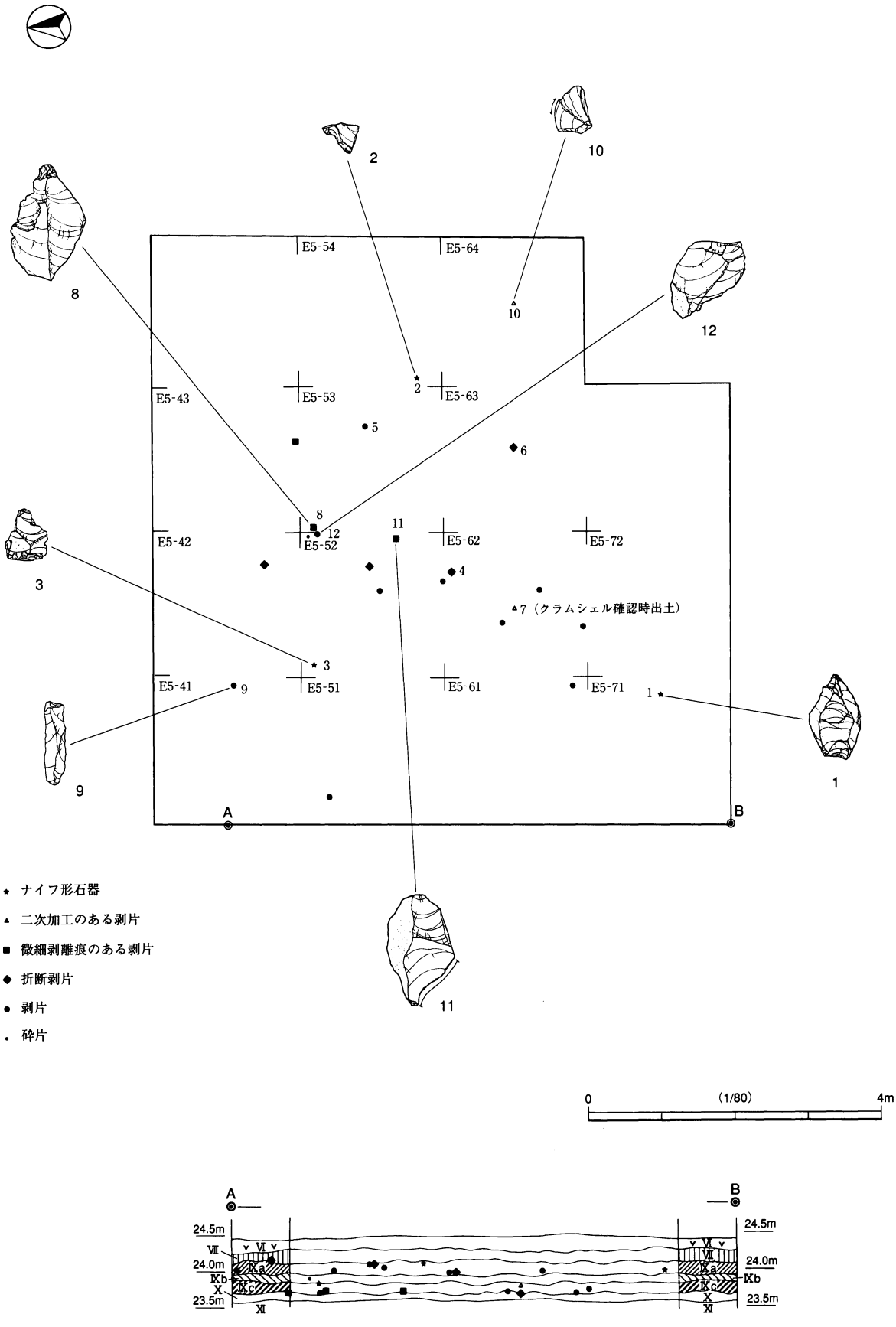
３は頭部調整が行われており，幅の狭い打面から剥離された幅広横長剥片を素材としている。右側縁に背面から急角度の調整加工が施されている。左側縁上部は背面から部分加工されている。ナイフ形石器として識別したが，素材の形状が石刃ではなく，調整加工もブランティング加工が施されていないことから，二次加工のある剥片として識別したほうが良いかもしれない。

４＋５は接合資料３である。４＋５の状態で，縦長剥片を素材として，上端部を腹面から折断し，下端部を腹面から折断している。その後，左側面中央部を背面側から折断した際に，４と５の剥片に分割され

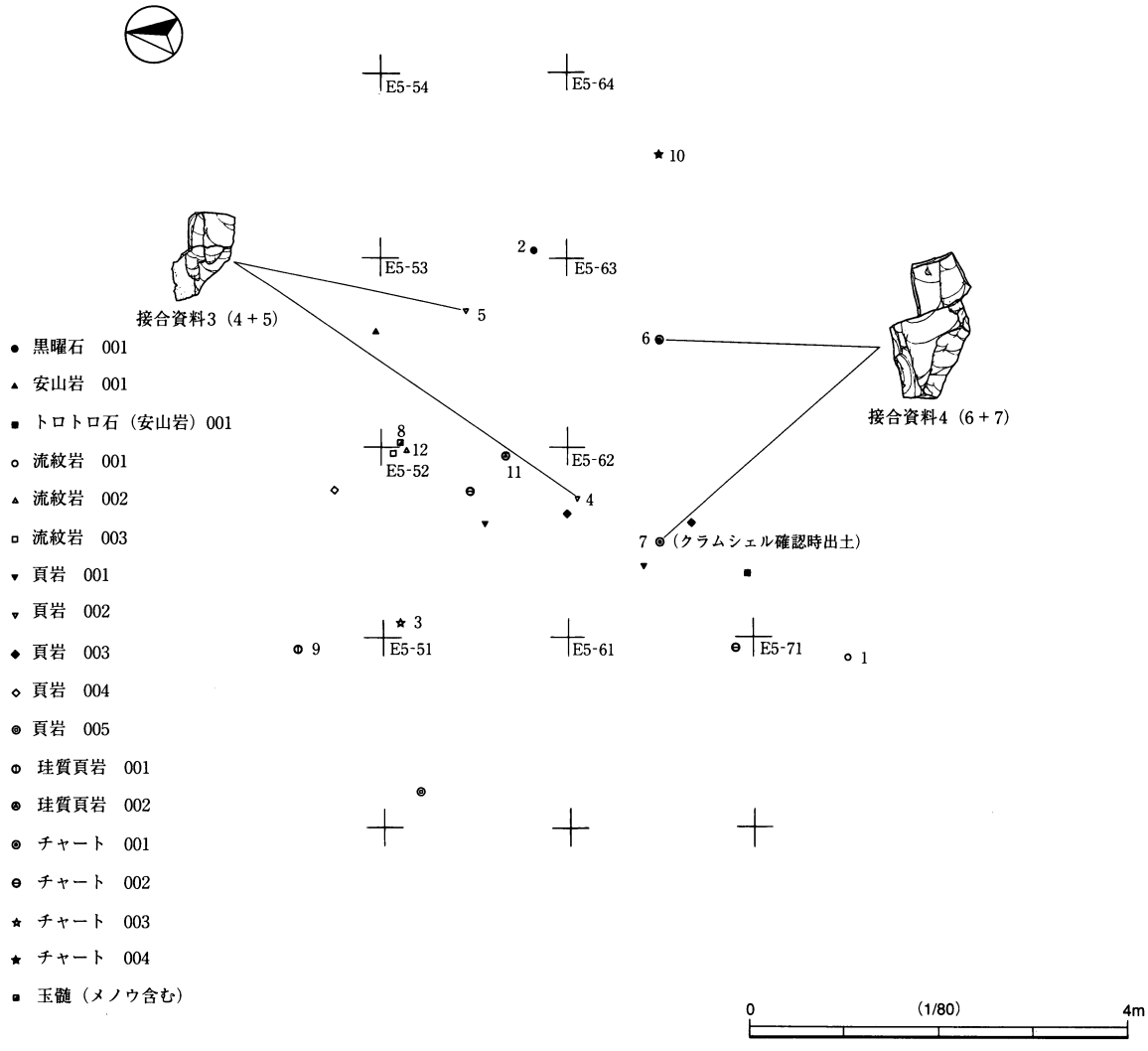
第6表　第Ⅱ文化層　第3ブロック母岩器種組成表

文化層	ブロック	母岩名	母岩番号	ナイフ形石器	二次加工のある剥片	微細剥離痕のある剥片	折断剥片	剥片	砕片	総計	組成比（%）
Ⅱ	3	黒曜石	001	1 0.64						1 0.64	4.35 1.02
		黒曜石 点数合計 黒曜石 重量合計		1 0.64						1 0.64	4.35 1.02
		トロトロ石（安山岩）	001					1 3.46		1 3.46	4.35 5.53
		トロトロ石（安山岩） 点数合計 トロトロ石（安山岩） 重量合計						1 3.46		1 3.46	4.35 5.53
		流紋岩	001	1 2.29						1 2.29	4.35 3.66
			002					1 5.86		1 5.86	4.35 9.36
			003						1 0.11	1 0.11	4.35 0.18
		流紋岩 点数合計 流紋岩 重量合計		1 2.29				1 5.86	1 0.11	3 8.26	13.04 13.19
		頁岩	001					2 5.23		2 5.23	8.70 8.35
			002				1 1.17	1 1.87		2 3.04	8.70 4.86
			003					2 2.21		2 2.21	8.70 3.53
			004				1 1.57			1 1.57	4.35 2.51
			005					1 0.59		1 0.59	4.35 0.94
		頁岩 点数合計 頁岩 重量合計					2 2.74	6 9.9		8 12.64	34.78 20.19
		珪質頁岩	001					1 1.19		1 1.19	4.35 1.90
			002			1 9.58				1 9.58	4.35 15.30
		珪質頁岩 点数合計 珪質頁岩 重量合計				1 9.58		1 1.19		2 10.77	8.70 17.20
		チャート	001		1 6.47		1 5.8			2 12.27	8.70 19.60
			002				1 2.41	1 0.43		2 2.84	8.70 4.54
			003	1 1.88						1 1.88	4.35 3.00
			004		1 1.33					1 1.33	4.35 2.12
		チャート 点数合計 チャート 重量合計		1 1.88	2 7.8		2 8.21	1 0.43		6 18.32	26.09 29.27
		玉髄（メノウ含む）	001			1 7.55				1 7.55	4.35 12.06
		玉髄（メノウ含む） 点数合計 玉髄（メノウ含む） 重量合計				1 7.55				1 7.55	4.35 12.06
		安山岩	001			1 0.96				1 0.96	4.35 1.53
		安山岩 点数合計 安山岩 重量合計				1 0.96				1 0.96	4.35 1.53
	3 点数合計 3 重量合計			3 4.81	2 7.8	3 18.09	4 10.95	10 20.84	1 0.11	23 62.6	100.00 100.00
点数組成比（%） 重量組成比（%）				13.04 7.68	8.70 12.46	13.04 28.90	17.39 17.49	43.48 33.29	4.35 0.18	100.00 100.00	

［上段：点数，下段：重量（g）］



第14図　第Ⅱ文化層　第3ブロック器種別分布図



第15図　第Ⅱ文化層　第3ブロック母岩別分布図

ている。

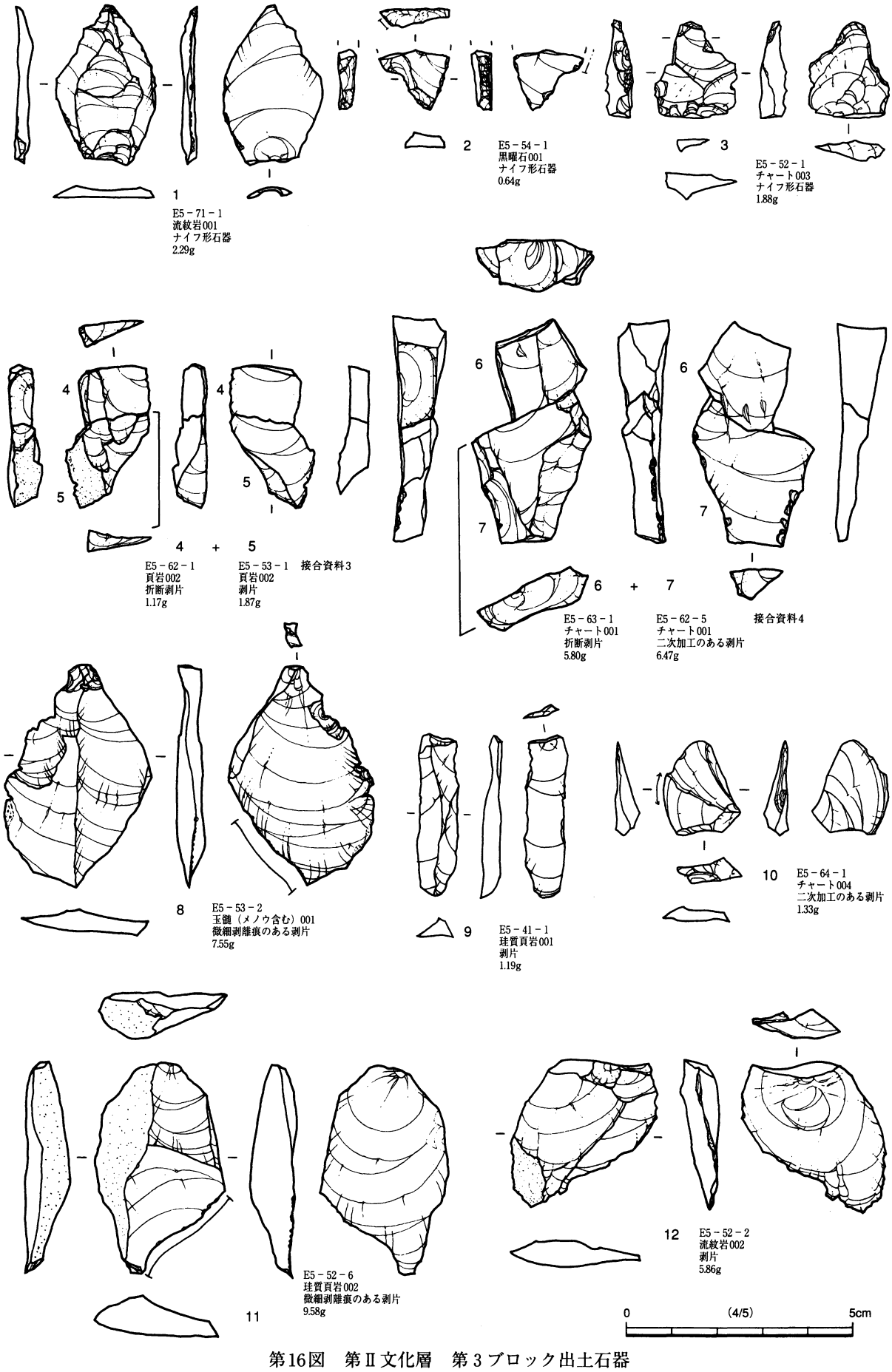
6＋7は接合資料4である。接合資料3と同じ縦長剥片を素材とし，同様の部位を折断している。6＋7の状態で，縦長剥片を素材として，上端部を腹面から折断し，下端部を腹面左側縁から折断している。その後，左側縁中央部を腹面側から折断した際に，6と7の剥片に分割されている。7は二次加工のある剥片である。腹面左側縁下部と腹面右側縁下部に細かい調整加工がみられる。

8は狭い打面から剥離された縦長剥片を素材としている。打面部側が狭く，中間部に最大厚を有する。腹面左側縁下部に微細剥離痕がみられる。

9・12は剥片である。9は頭部調整が行われており，線状の打面から剥離された細長の縦長剥片である。背面は主要剥離面と同一方向の剥離面で構成されている。石刃として捉えてよいものかもしれない。12はわずかに頭部調整が行われ，平坦打面から剥離された幅広の剥片である。

10は二次加工のある剥片である。幅広の剥片を素材として，打面部にあたる右側縁を折断し，腹面下部に調整加工が施されている。背面左側縁中部に微細剥離痕がみられる。

11は微細剥離痕のある剥片である。幅の狭い打面から剥離された縦長剥片を素材としている。右側縁下部に微細剥離痕が連続的にみられる。



第16図　第Ⅱ文化層　第3ブロック出土石器

（3）第Ⅲ文化層（第17・18図，第2・7・10表）

Ⅶ層に生活面を持つ文化層と推定される。調査区北東部に分布しており，台地の平坦面に分布する。第4ブロックが相当する。

①第4ブロック（第17・18図，第2・7・10表）

出土状況　平面分布は，約5m×5mの円形の範囲から散漫に分布している。出土状況を詳細にみると，東部と西部の2箇所に集中地点がみられる。出土層位は，Ⅸa層上部～Ⅶ層下部にかけて出土している。Ⅶ層に集中することから，Ⅶ層に生活面を持つと推定される。

器種別分布（第17図）の特徴は，東部と西部の2箇所の集中地点においても，楔形石器がまとまって出土している。

母岩別分布（第18図）の特徴は，頁岩001のみが2点で構成され，接合資料2として接合しているが，そのほかの母岩は単独出土である。本ブロックに，搬入されたものと思われる。

出土遺物　総計7点出土した。母岩器種組成は，第7表のとおりである。

器種組成の特徴は，楔形石器が5点（71.43%）で非常に高い割合を示す。

母岩組成の特徴は，頁岩001以外は単独母岩である。石材は，黒曜石・頁岩・チャートで構成されている。

1～5は楔形石器である。上述のとおり，本ブロックから7点石器が出土しているが，そのうち楔形石器が5点（71.43%）出土しており，きわめて高い割合を占める。第Ⅲ文化層を特徴づける石器となっている。

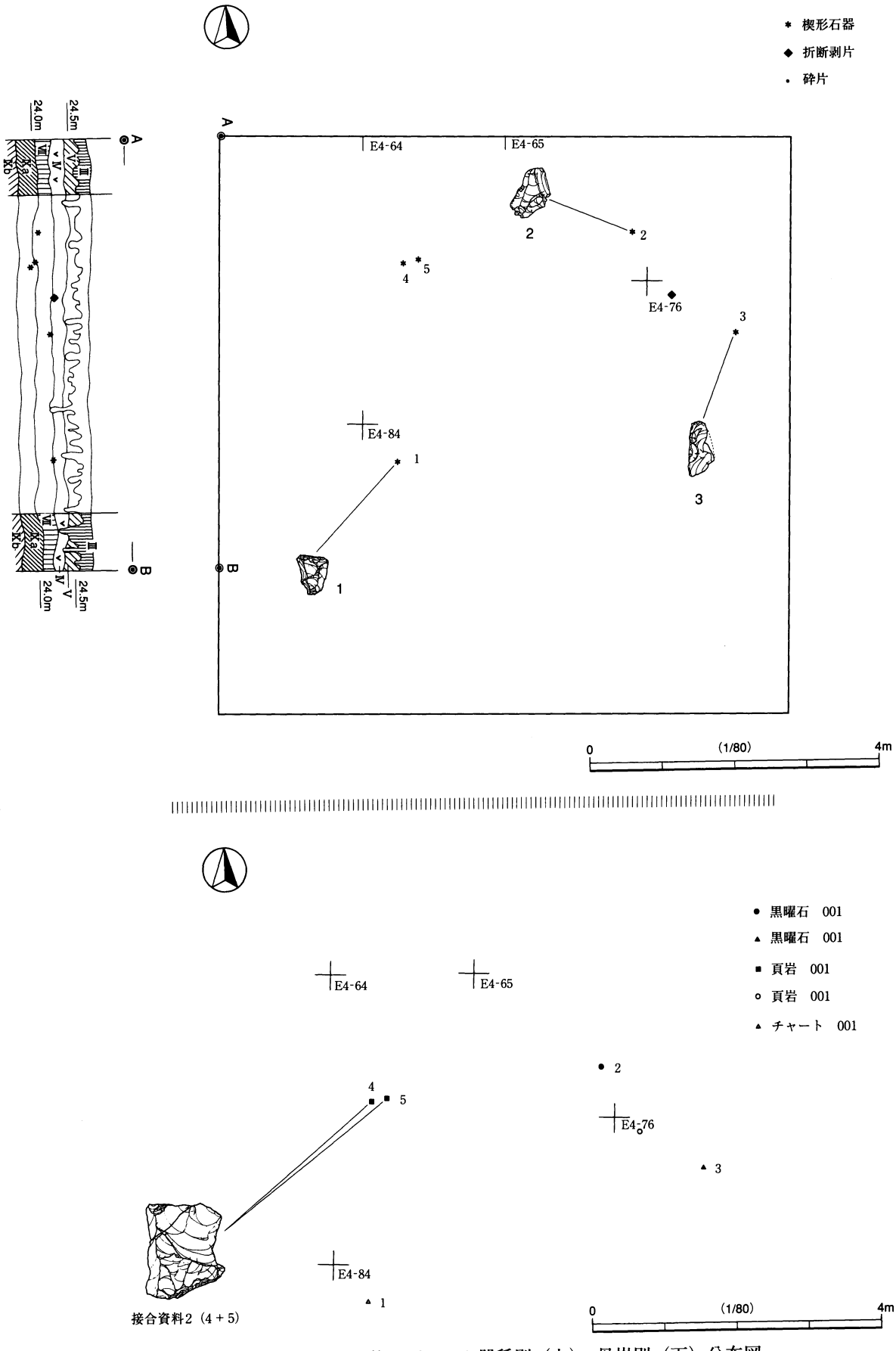
1は腹面左側にわずかに主要剥離面が残っており，横長剥片を素材としたものと思われる。素材を横位に用いて，上下両端から両極剥離を行っており，上端部の打面は線状を呈する。

2・3は不透明の黒色の黒曜石を用いており，比較的良質な石材である。肉眼観察ではあるが，高原山

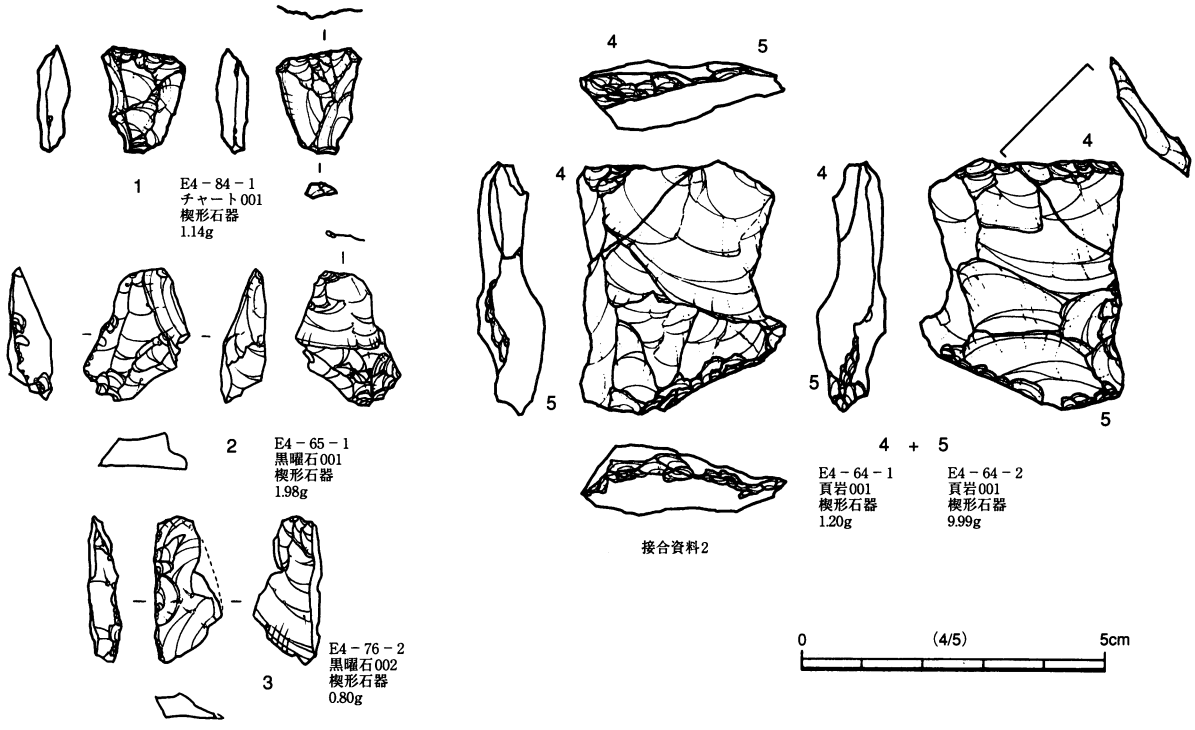
第7表　第Ⅲ文化層　第4ブロック母岩器種組成表

文化層	ブロック	母岩名	母岩番号	楔形石器	折断剥片	砕片	総計	組成比（%）
Ⅲ	4	黒曜石	001	1 1.98			1 1.98	14.29 11.74
			002	1 0.8			1 0.8	14.29 4.74
		黒曜石 点数合計 黒曜石 重量合計		2 2.78			2 2.78	28.57 16.49
		頁岩	001	2 11.19			2 11.19	28.57 66.37
			002		1 1.68		1 1.68	14.29 9.96
		頁岩 点数合計 頁岩 重量合計		2 11.19	1 1.68		3 12.87	42.86 76.33
		チャート	001	1 1.14			1 1.14	14.29 6.76
			002			1 0.07	1 0.07	14.29 0.42
		チャート 点数合計 チャート 重量合計		1 1.14		1 0.07	2 1.21	28.57 7.18
Ⅲ点数合計				5	1	1	7	100.00
Ⅲ重量合計				15.11	1.68	0.07	16.86	100.00
点数組成比（%）				71.43	14.29	14.29	100.00	
重量組成比（%）				89.62	9.96	0.42	100.00	

［上段：点数，下段：重量（g）］



第17図　第Ⅲ文化層　第4ブロック器種別（上），母岩別（下）分布図



第18図　第Ⅲ文化層　第4ブロック出土石器

産の黒曜石であると推定される。2は素材が不明であるが，厚みのある剥片を素材としたものと推定される。上下両端から両極剥離を行っており，打面は線状を呈する。左側縁には微細剥離痕がみられる。3は薄い縦長剥片を素材として，上下両端から両極剥離を行っており，腹面上部と背面左下部に細かい剥離面が形成されている。

4＋5は接合資料2である。主要剥離面が残存していないが，厚みのある幅広の剥片を素材としていると推定される。上下両端からかなり頻繁に両極剥離を行ったことがうかがわれ，器体の全面に両極剥離によって形成された剥離面が形成されている。最終的に上端部中央からの加撃により，4と5に分割されている。上下両端は，線状の打面を形成しており，背腹両面の細かい剥離面が形成されている。

（4）第Ⅳ文化層（第19・20図，第2・8・10表）

Ⅴ層に生活面をもつ文化層と推定できる。調査区南西部に分布しており，南西に緩やかに傾斜する斜面に分布する。第5ブロックが相当する。

①第5ブロック（第19・20図，第2・8・10表）

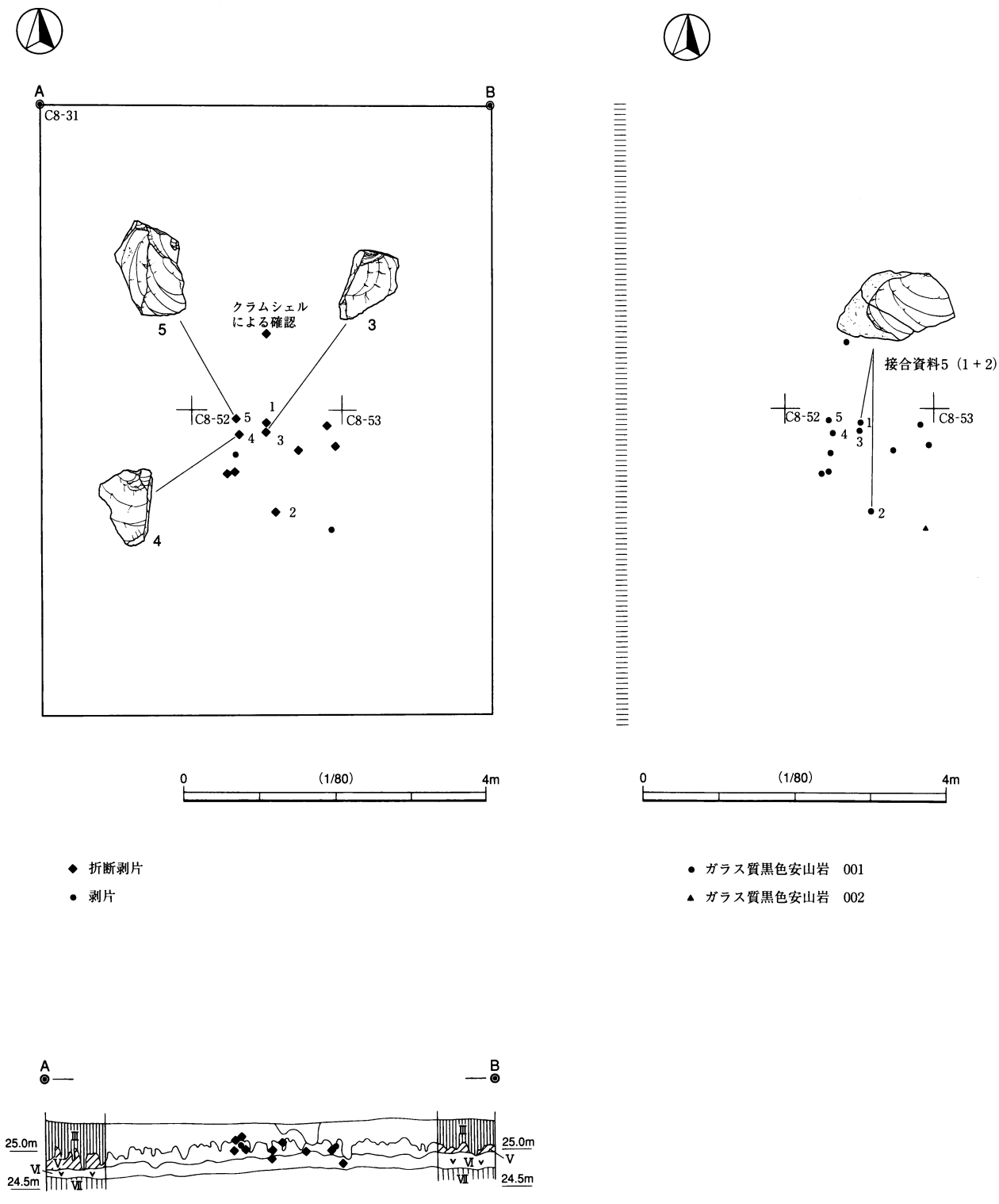
出土状況　平面分布は，約3m×2mの楕円形の小範囲からやや密集して分布している。出土層位は，Ⅵ層上部～Ⅲ層下部にかけて出土している。Ⅴ層に集中しており，Ⅴ層に生活面をもつと推定できる。

器種別分布（第19図）の特徴は，折断剥片が集中地点の中心部に集中する傾向がみられる。

母岩別分布（第20図）の特徴は，ガラス質黒色安山岩001が大半を占め，中央部に集中しているが，ガラス質黒色安山岩002は1点のみの出土であるが，集中地点からやや離れた南東部から単独で出土している。

出土遺物　総計13点出土した。母岩器種組成は，第8表のとおりである。

器種組成の特徴は，折断剥片11点，剥片2点のみの出土であり，折断剥片の占める割合（84.62％）が極めて高い。



第19図　第Ⅳ文化層　第５ブロック器種別（左），母岩別（右）分布図

第８表　第Ⅳ文化層　第５ブロック母岩器種組成表

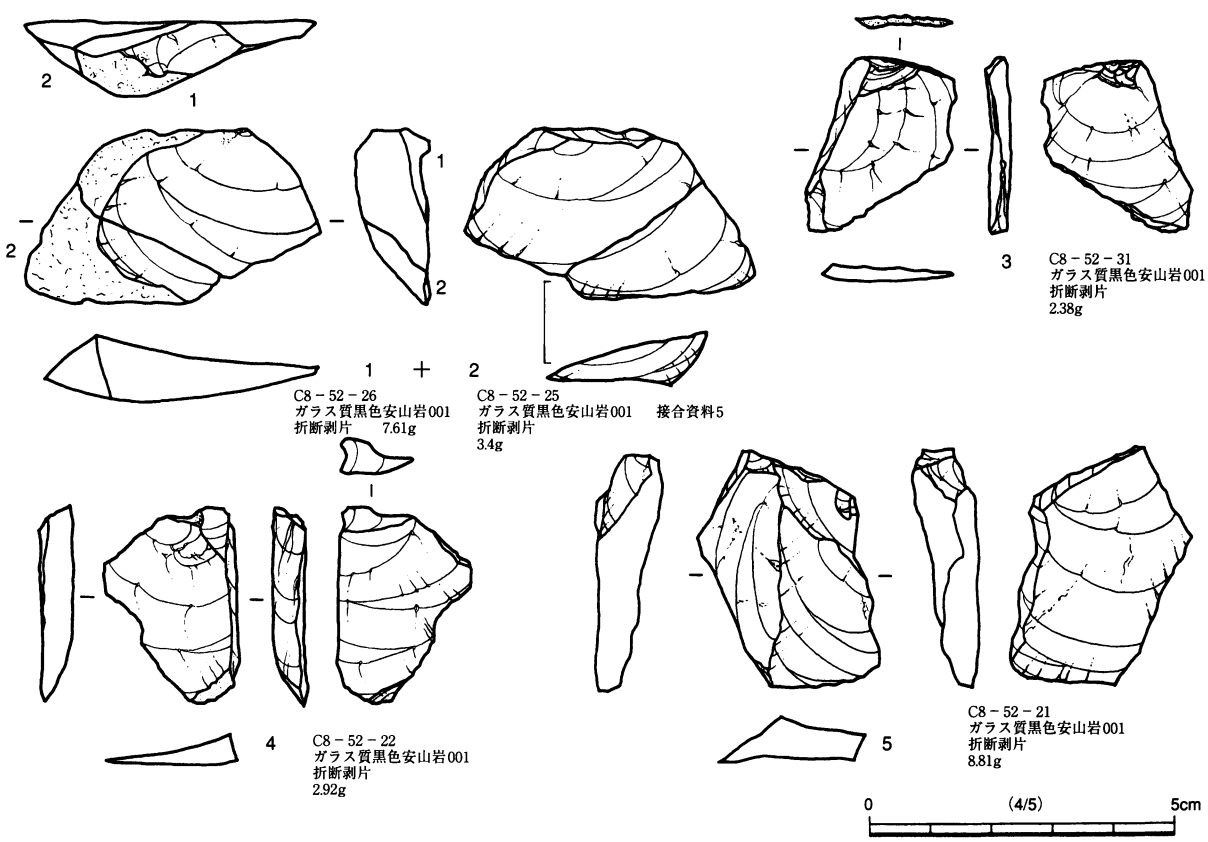
文化層	ブロック	母岩名	母岩番号	折断剥片	剥片	総計	組成比（%）
Ⅳ	5	ガラス質黒色安山岩	001	11 48.74	1 4.59	12 53.33	92.31 86.03
			002		1 8.66	1 8.66	7.69 13.97
		ガラス質黒色安山岩 点数合計名 ガラス質黒色安山岩 重量合計		11 48.74	2 13.25	13 61.99	100.00 100.00
	5点数合計 5重量合計			11 48.74	2 13.25	13 61.99	100.00 100.00
点数組成比（%） 重量組成比（%）				84.62 78.63	15.38 21.37	100.00 100.00	

［上段：点数，下段：重量（g）］

母岩組成の特徴は，ガラス質黒色安山岩001が大半を占め（92.31%），わずかにガラス質黒色安山岩002は１点のみ出土している。石材は，すべてガラス質黒色安山岩で構成されている。

１＋２は接合資料５である。１＋２の状態で，平坦な打面から剥離された横長剥片である。背面左側に自然面が残っている。末端は腹面から折断されており，１と２の折断剥片が作成されている。

３～５は折断剥片である。３は頭部調整が施され，幅の狭い打面から剥離された縦長剥片を素材として，末端部は腹面から折断されている。４はわずかに頭部調整が行われ，平坦な打面から剥離された縦長剥片である。右側縁は上端部から下端部にまで及ぶ折断が行われている。５は縦長剥片を素材として，打面部が折断されている。



第20図　第Ⅳ文化層　第５ブロック出土石器

第9表　旧石器時代　石器属性表（1）

文化層	ブロック	挿図番号	グリッド	遺物番号	器種名	母岩名	母岩番号	接合	層位	最大長（mm）	最大幅（mm）	最大厚（mm）	重量（g）	打面形状	打角・剥離角	打面調整	頭部調整	背面H	背面T	背面R	背面L	背面D	背面V	背面C	背面J	背面ポジ面	末端形状	調整角	刃部角	使用痕・被熱痕	遺存部位	欠損	標高（m）	備考
Ⅰ	1	1-01	BL2	3	台形様石器	チャート	2		Ⅸ	15.99	18.77	3.36	0.85			○		○			○						H	44～48	25～32	N			23.913	
Ⅰ	1	1-02	BL2	36	台形様石器	黒曜石	1		Ⅹ	15.88	18.66	2.97	0.72					○										60～63	34	N			23.585	
Ⅰ	1	1-03	BL2	15	台形様石器	チャート	1		Ⅸb	17.18	10.92	2.85	0.52					○		○		○				○	H	76	30	N			23.805	
Ⅰ	1	1-04	BL2	4	台形様石器	チャート	1		Ⅸ	8.44	13.93	4.29	0.46					○	○									90～105	51～53	N			23.960	
Ⅰ	1	1-05	BL2	14	楔形石器	黒曜石	1		Ⅹ	17.82	17.47	2.92	0.59						○	○	○						H	115～118	26	N			23.600	
Ⅰ	1	1-06	BL2	6	楔形石器	黒曜石	2		Ⅸ	14.42	10.59	3.45	0.44						○							○		83～101	83	N			23.705	
Ⅰ	1	1-07	BL2	2	楔形石器	チャート	1		Ⅸa	25.24	14.35	5.62	1.81	1	112			○		○							H	110～112		N			24.008	
Ⅰ	1	1-08	BL2	1	楔形石器	チャート	1		Ⅶ～Ⅸ	9.38	8.87	3.44	0.25	1	97		○	○		○													24.115	
Ⅰ	1	1-09	BL2	20	楔形石器	黒曜石	1		Ⅸa	11.08	7.89	4.19	0.29								○	○					F	28	28	N			23.843	
Ⅰ	1	1-10	BL2	12	楔形石器	黒曜石	1		Ⅹ	15.21	10.58	2.06	0.25				○	○			○						H	72～75	30	N			23.681	
Ⅰ	1	1-11	BL2	29	楔形石器調整剥片	チャート	3		Ⅹ	21.83	5.82	3.51	0.38	L			○	○									F	86					23.616	
Ⅰ	1	1-12	BL2	13	楔形石器調整剥片	チャート	2		Ⅹ	12.32	2.18	1.84	0.08	L	86			○		○							O			N			23.668	
Ⅰ	1	1-13	BL2	35	楔形石器調整剥片	チャート	3		Ⅹ	18.85	10.43	3.07	0.45	L			○	○	○								H	57		N			23.625	
Ⅰ	1	1-14	BL2	33	二次加工のある剥片	チャート	1		Ⅹ	14.14	9.38	3.63	0.3	2	104			○								○	H	96	34～36	N			23.902	
Ⅰ	1	1-15	BL2	22	微細剥離痕のある剥片	黒曜石	1		Ⅹ	9.83	9.22	2.38	0.13				○	○		○							H	38	26	N			23.627	ガジリ有
Ⅰ	1	1-16	BL2	8	微細剥離痕のある剥片	黒曜石	1		Ⅸ	14.17	10.81	1.78	0.18					○		○	○							41	38	N	H	+	23.735	
Ⅰ	1	1-17	BL2	34	微細剥離痕のある剥片	チャート	3		Ⅹ	12.74	8.73	2.38	0.16					○									H	24	35	N			23.688	
Ⅰ	1	1-18	BL2	7	微細剥離痕のある剥片	黒曜石	1		Ⅸ	17.69	9.83	2.45	0.36					○									H	44～42	28	N			23.832	
Ⅰ	1	1-19	BL2	25	微細剥離痕のある剥片	黒曜石	1		Ⅹ	13.97	7.7	2.79	0.17					○										63～80	53	N			23.660	
Ⅰ	1	1-20	BL2	23	折断剥片	チャート	1		Ⅹ	10.51	14.48	3.92	0.45					○								○	H				HM		23.714	
Ⅰ	1	1-21	BL2	16	折断剥片	玉髄（メノウ含む）	1		Ⅹ	18.7	10.86	1.09	0.17					○				○					F	80～86	18	N			23.655	
Ⅰ	1		BL2	5	剥片	チャート	1		Ⅸ	21.14	13.26	6.28	0.58	1	96		○	○	○	○							H						23.894	
Ⅰ	1		BL2	9	微細剥離痕のある剥片	黒曜石	1		Ⅸ	4.79	6.35	1.86	0.04	L			○	○			○						F			N			23.752	
Ⅰ	1		BL2	10	剥片	ガラス質黒色安山岩	1		Ⅸ	11.8	4.63	2.6	0.48	3	89		○	○		○	○						H						23.762	ガジリ有
Ⅰ	1		BL2	11	剥片	黒曜石	1		Ⅹ	10.3	13.76	1.84	0.14	L				○									F						23.695	ガジリ有
Ⅰ	1		BL2	17	砕片	チャート	2		Ⅹ	5.73	8.72	1.08	0.03					○		○		○					H						23.666	
Ⅰ	1		BL2	18	砕片	ガラス質黒色安山岩	1		Ⅸb	8.01	0.23	1.61	0.09	1	118			○		○			○			○	F						23.762	
Ⅰ	1		BL2	19	砕片	黒曜石	1		Ⅸb	3.79	9.57	0.98	0.01					○				○					H						23.776	
Ⅰ	1		BL2	21	砕片	チャート	2		Ⅹ	10.76	8.35	2.13	0.12	L			○	○		○			○				H						23.640	
Ⅰ	1		BL2	24	折断剥片	チャート	1		Ⅹ	13.56	9.92	5.34	0.48					○	○								F				L		23.664	
Ⅰ	1		BL2	26	砕片	黒曜石	1		Ⅹ	11.37	6.72	1.23	0.07	L			○	○								○	H				R		23.656	
Ⅰ	1		BL2	27	折断剥片	チャート	2		Ⅹ	6.75	7.25	1.54	0.07							○	○					○	H				B		23.670	
Ⅰ	1		BL2	28	折断剥片	ガラス質黒色安山岩	1		Ⅹ	11.44	6.51	2.03	0.13	L			○	○	○								F				L		23.678	
Ⅰ	1		BL2	30	砕片	チャート	3		Ⅹ	0.38	12.98	4.07	0.32	2	106		○	○									F				L		23.668	
Ⅰ	1		BL2	32	砕片	黒曜石	1		Ⅹ	8.09	5.05	1.36	0.04	P			○	○									H				R		23.651	
Ⅰ	1		BL2	31	砕片	黒曜石	1		Ⅹ	8.25	8.61	1.23	0.06	L			○	○			○						F						23.650	
Ⅰ	1		BL2	37	砕片	チャート	3		Ⅹ	10.78	7.26	2.7	0.12	L			○	○									F						23.549	
Ⅱ	2	2-01	BL1	1	ナイフ形石器	チャート	1		Ⅸ	55.82	26.41	10.96	16.57	1	122			○	○								F	53～56	40	N		+	23.941	
Ⅱ	2	2-02	BL1	3	局部磨製石斧再生剥片	頁岩	1		Ⅸ	31.39	21.45	4.89	3.82				○	○						○			S						24.015	ガジリ有
Ⅱ	2	2-03	BL1	8	微細剥離痕のある剥片	チャート	3		Ⅸ	25.51	12.57	5.32	1.29	1	117			○									F			N			23.880	
Ⅱ	2	2-04	BL1	5	剥片	流紋岩	1		Ⅸ	39.35	12.62	5.7	2.47	1	86		○	○					○				H	38	42～45			+	23.980	
Ⅱ	2	2-05	BL1	7	剥片	チャート	4		Ⅸ	48.94	17.12	7.01	3.28	P				○	○		○				○		F						23.916	ガジリ有
Ⅱ	2	2-06	BL1	6	剥片	チャート	2	1	Ⅸ	29.35	20.59	10.11	8.83	1		○		○					○		○						H		23.937	
Ⅱ	2	2-07	BL1	2	微細剥離痕のある剥片	チャート	2	1	Ⅸ	36.86	16.52	9.01	4.68	L				○	○					○	○								24.061	

第10表　旧石器時代　石器属性表（2）

文化層	ブロック	挿図番号	グリッド	遺物番号	器種名	母岩名	母岩番号	接合	層位	最大長（mm）	最大幅（mm）	最大厚（mm）	重量（g）	打面形状	打角・剥離角	打面調整	頭部調整	背面H	背面T	背面R	背面L	背面D	背面V	背面C	背面J	背面ポジ面	末端形状	調整角	刃部角	使用痕・被熱痕	遺存部位	欠損	標高（m）	備考
Ⅱ	2		BL1	4	剥片	ガラス質黒色安山岩	1		Ⅸ	19.4	20.35	4.36	1.38					○													B		23.990	ガジリ有
Ⅱ	3	3-01	E5-71	1	ナイフ形石器	流紋岩	1		Ⅸ	36.22	22.29	0.61	2.29	1	113		○		○							○	F			N			24.003	
Ⅱ	3	3-02	E5-54	1	ナイフ形石器	黒曜石	1		Ⅸ	14.25	15.08	3.93	0.64					○										76～80				+	24.099	基部
Ⅱ	3	3-03	E5-52	1	ナイフ形石器	チャート	3		Ⅸ	21.97	17.89	5.94	1.88					○										66 ～70	28～30			+	23.835	基部
Ⅱ	3	3-04	E5-62	1	折断剥片	頁岩	2	3	Ⅸ	12.07	15.44	5.43	1.17					○															24.009	
Ⅱ	3	3-05	E5-53	1	剥片	頁岩	2	3	Ⅸ	20.24	16.41	7.23	1.87					○			○			○			F						24.110	
Ⅱ	3	3-06	E5-63	1	折断剥片	チャート	1	4	Ⅸ	19.61	20.82	11.09	5.8					○													VMH		23.640	
Ⅱ	3	3-07	E5-62	5	二次加工のある剥片	チャート	1	4		33.05	27.05	9.39	6.47					○					○							N	VM			
Ⅱ	3	3-08	E5-53	2	微細剥離痕のある剥片	玉髄（メノウ含む）	1		Ⅸ	48.73	32.8	6.75	7.55	1	87			○						○		○	S			N			23.702	
Ⅱ	3	3-09	E5-41	1	剥片	珪質頁岩	1		Ⅸ	35.21	9.18	4.06	1.19	1	88			○									H						24.045	ガジリ有 石刃
Ⅱ	3	3-10	E5-64	1	二次加工のある剥片	チャート	4		Ⅸ	20.4	18.66	4.73	1.33					○			○					○	H			N			23.780	
Ⅱ	3	3-11	E5-52	6	微細剥離痕のある剥片	珪質頁岩	2		Ⅸ	31.14	47.35	8.73	9.58	C	83			○									F			N			23.748	
Ⅱ	3	3-12	E5-52	2	剥片	流紋岩	2		Ⅸ	34.82	27.56	7.52	5.86	1	122		○	○			○			○			F			N			23.895	
Ⅱ	3		E5-42	1	折断剥片	頁岩	4		Ⅸ	15.75	15.61	6.58	1.57	1	120			○		○											H		24.140	
Ⅱ	3		E5-43	1	微細剥離痕のある剥片	安山岩	1		Ⅸ	16.24	17.29	2.93	0.96					○									F						23.700	
Ⅱ	3		E5-51	1	剥片	頁岩	5		Ⅸ	21.61	8.41	4.49	0.59					○															24.020	
Ⅱ	3		E5-52	3	砕片	流紋岩	3		Ⅸ	5.32	8.04	2.5	0.11																				23.774	
Ⅱ	3		E5-52	4	折断剥片	チャート	2		Ⅸ	19.93	20.83	7.96	2.41						○								F						24.095	
Ⅱ	3		E5-52	5	剥片	頁岩	1		Ⅸ	49.19	14.39	8.14	4.8	1			○	○						○			S						24.065	ガジリ有
Ⅱ	3		E5-52	7	剥片	頁岩	3		Ⅸ	11.07	13.94	10.54	1.82							○	○												23.980	
Ⅱ	3		E5-61	1	剥片	チャート	2		Ⅸ	9.33	22.79	3.65	0.43	L						○							F						23.680	
Ⅱ	3		E5-62	2	剥片	頁岩	1		Ⅸ	9.37	10.1	5.4	0.43					○									F						23.735	
Ⅱ	3		E5-62	3	剥片	頁岩	3		Ⅸ	10.94	7.46	5.51	0.39					○															24.006	
Ⅱ	3		E5-62	4	剥片	トロトロ石（安山岩）	1		Ⅸ	44.84	14.12	5.86	3.46					○						○			F						23.736	
Ⅲ	4	4-01	E4-84	1	楔形石器	チャート	1		Ⅵ～Ⅸ	16.54	3.96	4.96	1.14					○	○				○					42～46					24.232	
Ⅲ	4	4-02	E4-65	1	楔形石器	黒曜石	1		Ⅵ～Ⅸ	23.03	16.33	7.25	1.98					○	○	○													24.075	
Ⅲ	4	4-03	E4-76	2	楔形石器	黒曜石	2		Ⅵ～Ⅸ	23.39	11.33	4.33	0.8							○							S						24.198	ガジリ有
Ⅲ	4	4-04	E4-64	1	楔形石器	頁岩	1	2	Ⅵ～Ⅸ	16.6	18.3	6.01	1.2					○										68				+	23.935	
Ⅲ	4	4-05	E4-64	2	楔形石器	頁岩	1	2	Ⅵ～Ⅸ	44.32	33.84	11.13	9.99					○	○													+	23.991	ガジリ有
Ⅲ	4		E4-75	1	砕片	チャート	2		Ⅵ～Ⅸ	8.81	4.92	1.7	0.07					○																
Ⅲ	4		E4-76	1	折断剥片	頁岩	2		Ⅵ～Ⅸ	16.08	18.77	7.93	1.68					○	○		○						F						24.280	ガジリ有
Ⅳ	5	5-01	C8-52	26	折断剥片	ガラス質黒色安山岩	1	5	Ⅲ	24.66	41.18	8.34	7.61	2	119			○						○							H		24.955	
Ⅳ	5	5-02	C8-52	25	折断剥片	ガラス質黒色安山岩	1	5	Ⅲ	19.02	28.65	8.36	3.49					○						○			F				B		25.087	
Ⅳ	5	5-03	C8-52	31	折断剥片	ガラス質黒色安山岩	1		Ⅲ	23.17	33.24	3.67	2.38	C	93		○				○										H		24.880	
Ⅳ	5	5-04	C8-52	22	折断剥片	ガラス質黒色安山岩	1		Ⅲ	32.43	22.21	5.71	2.92	1	128			○						○			F				R		25.020	
Ⅳ	5	5-05	C8-52	21	折断剥片	ガラス質黒色安山岩	1		Ⅲ	26.86	41.61	8.84	8.81	3	125			○			○												25.165	
Ⅳ	5		C8-42	1	折断剥片	ガラス質黒色安山岩	1		Ⅲ	33.95	26.94	12.19	9.59					○				○		○			F							
Ⅳ	5		C8-52	23	剥片	ガラス質黒色安山岩	1		Ⅲ	24.43	29.54	7.72	4.59	C	65	○											F						25.065	
Ⅳ	5		C8-52	24	折断剥片	ガラス質黒色安山岩	1		Ⅲ	13.46	26.83	0.27	1.45					○									S				B		25.106	
Ⅳ	5		C8-52	27	折断剥片	ガラス質黒色安山岩	1		Ⅲ	19.75	34.24	5.34	2.11					○									F				B		24.922	
Ⅳ	5		C8-52	28	折断剥片	ガラス質黒色安山岩	1		Ⅲ	22.15	8.02	2.86	0.42					○									S				R		25.000	
Ⅳ	5		C8-52	29	折断剥片	ガラス質黒色安山岩	1		Ⅲ	17.02	2.76	8.87	5.08					○	○												HMH		24.802	
Ⅳ	5		C8-52	30	剥片	ガラス質黒色安山岩	2		Ⅲ	37.68	21.09	15.54	8.66					○	○								F				VMR		25.032	
Ⅳ	5		C8-52	32	折断剥片	ガラス質黒色安山岩	1		Ⅲ	26.31	32.72	6.48	4.88	1	108			○									F						24.922	ガジリ有

石器属性表について

1．**挿図番号**　実測図を掲載したブロック名－挿図番号を示す。

2．**層　位**　調査時の層位名を記した。

3．**最大長・最大幅・最大厚**　計測方法は下左図に示した。

4．**打面形状**　数字：打面上に残る剥離面数。

P＝点状打面，L＝綿状打面，C＝自然面打面，J＝節理面（節理面は剥離面数に含めない）

5．**打角・剥離角**　打角：剥片の打面とポジティヴバルブがつくる角度（下左図の加撃方向のとおり）

剥離角：石核の打面とネガティヴバルブがつくる角度。ただし，目的的剥片を剥離したと剥離面を計測する。

6．**打面調整・頭部調整**　観察されるものについて「○」で示した。

7．**背面構成**　主要剥離面の剥離方向を基準とし，背面を構成する剥離面の加撃方向について，以下のとおり分類し，背面構成の分類を有する資料については「○」で示した。H＝頭部側，T＝尾部側，R＝背面を正面にして右側，L＝左側，D＝背面側，V＝腹面側からの加撃方向を示す。C＝自然面，J＝節理面。ただし，変形度の高いもの（楔形石器等）は記さなかった。砕片はわかる範囲で記した。（下右図のとおり）

8．**ポジ面**　背面にポジティブ面を有する資料については「○」で示した。

9．**末端形状**　F＝直線状（Feather end），H＝蝶番状（Hinge fracture），S＝階段状（Step fracture），O＝逆反りまたは石核底面に達する（Outrepasse）を示す。

10．**調整角**　掻器・削器の刃部，ナイフ形石器の刃潰し，彫刻刀面の形成などにおける調整剥離角。両面調整石器の場合は剥離角を示さない。

11．**刃部角**　ナイフ形石器などの刃部において，腹面と背面との角度を計測。

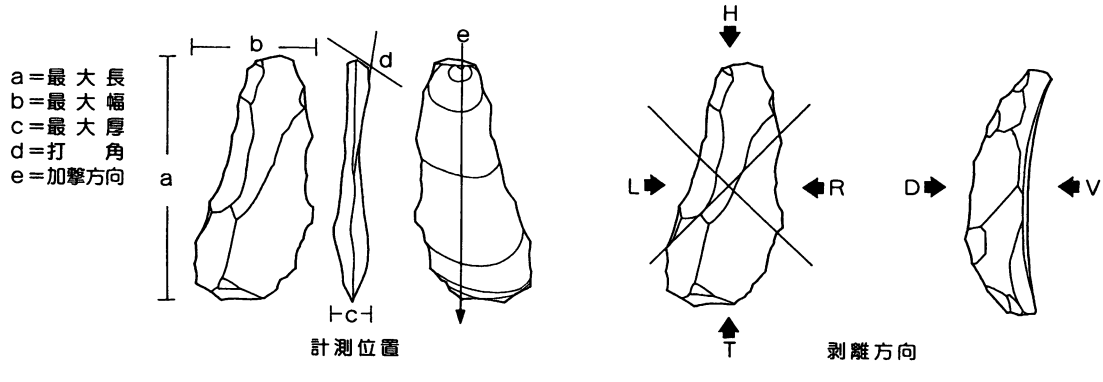
12．**使用痕**　N＝刃こぼれ（Nicked edge），C＝いわゆるコーングロス。植物との接触面に生じるポリッシュ（Corn gross），S＝敲打（String marks），G＝すりつぶし（Grinding marks），P＝磨り（Polishing marks），H＝被熱痕（Heated marks）

13．**遺存部位**　記号は折れによって依存している部位を表す。

H＝頭部（Head），VM＝上下方向の中間部（Vertical Middle），B＝尾部（Bottom），R＝背面からみて右側（Right），HM＝左右方向の中間部（Horizontal Middle），L＝背面からみて左側（Left）

14．**欠　損**　ナイフ形石器などの製品のうち，欠損を有するものは「＋」で示した。

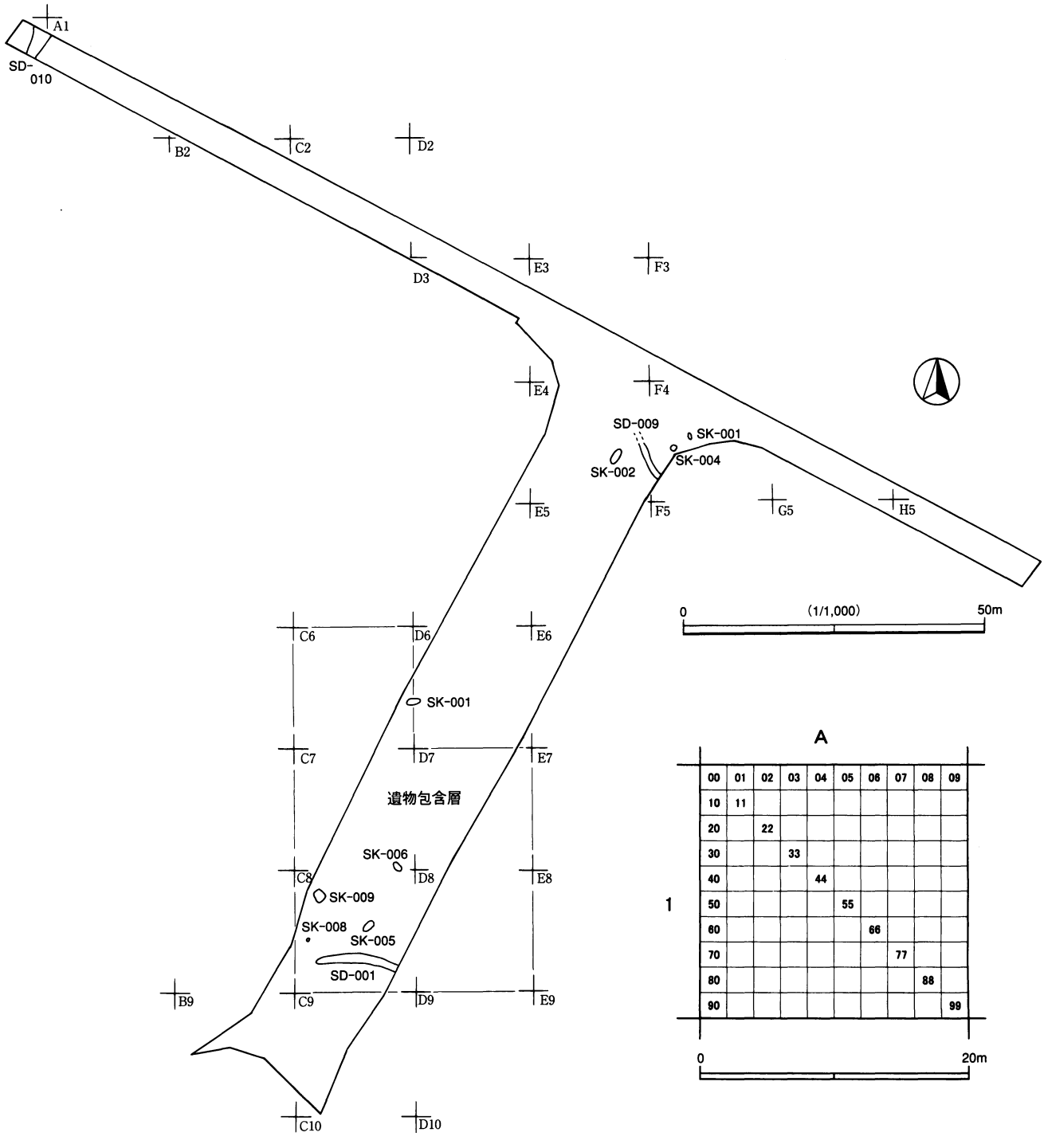
15．**備　考**　その他の表現できない属性を記載する。



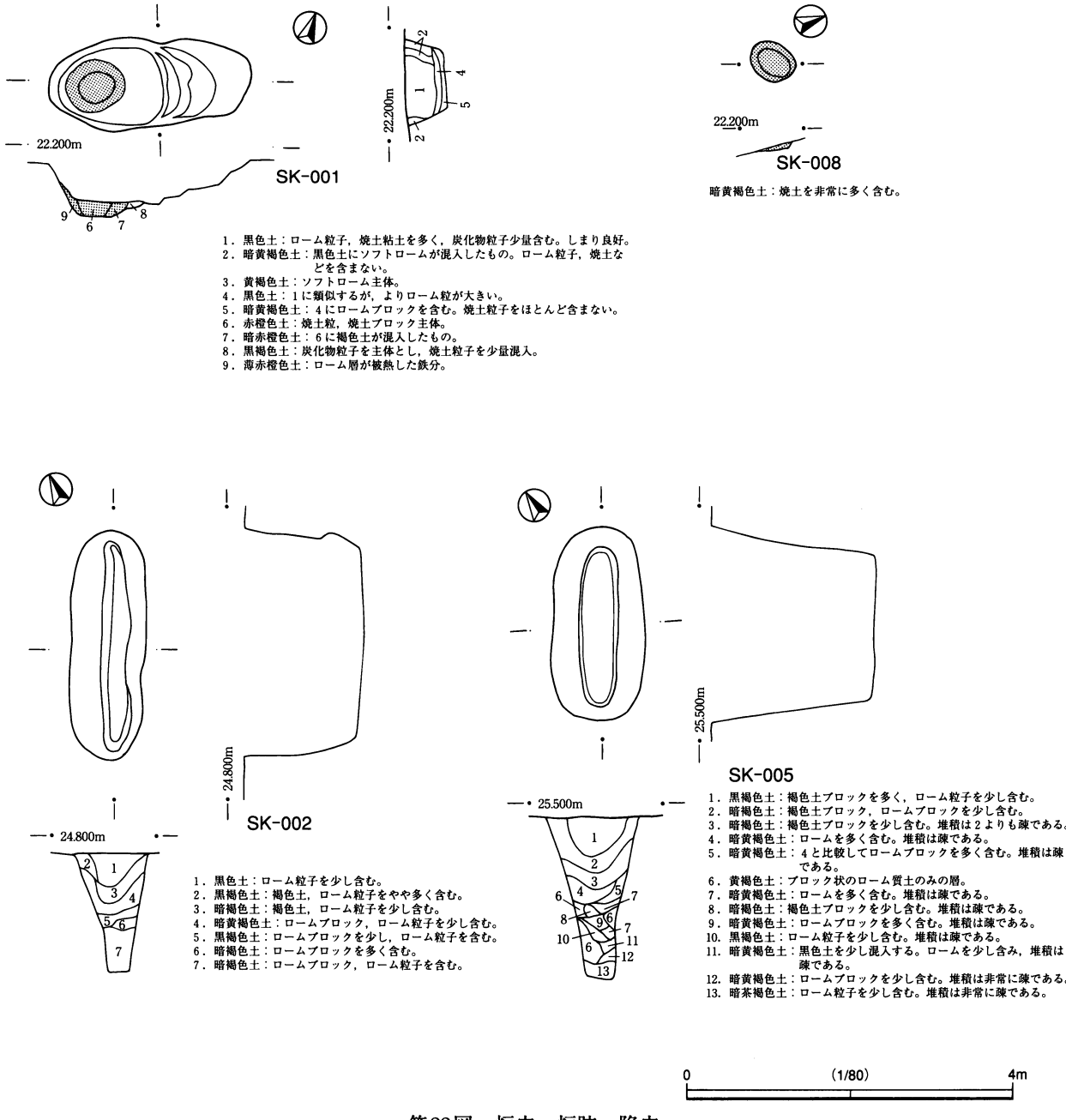
第2節　縄文時代以降

1　遺構

新井堀Ⅱ遺跡からは，炉穴1基，炉跡1基，陥穴2基，溝跡・道路跡3条，土坑4基が検出された。以下に各々について述べる。



第21図　遺構分布とグリッド配置



第22図　炉穴，炉跡，陥穴

（1）炉穴

SK-001（第22図1，図版4）

ほぼ東西を主軸とし，西側に炉床がある。長径は2.5m，短径1.15m，深さは炉床部で0.52mである。炉床部は良く焼けており，特に西側は壁面まで焼成による硬化がみられる。東側はテラス状のものが段を成している。

遺物は，縄文時代早期の沈線文系から条痕文系に属する土器が検出されている。条痕文系，茅山上層式期に比定される炉穴であると想定される。

（2）炉跡

SK-008（第22図）

長径0.58mの炉跡の炉床部のみが確認されている。深さ約5㎝の落ち込みに焼土が検出され，焼土を取り除くと，炉床面は焼成により著しく硬化している。他の施設は確認されていないが，周辺から多量の土器片が出土していることから，住居跡の炉跡のみが検出されたものであると推測される。

（3）陥穴

SK-002（第22図，図版5）

規模は，幅約0.92m，長さ約2.78m，深さ約1.42mである。底にゆくにつれて幅が狭くなり，底面では0.28mほどである。新期テフラ下から検出されている。土層断面図の6層（ロームブロックを多く含む層）が面的に検出されている。

SK-005（第22図，図版5）

規模は，幅約1.1m，長さ約2.35m，深さ約1.98mである。底面は幅が狭くなり，0.35mである。新規テフラ下から検出されている。土層断面図の6層（ロームブロックを多く含む層）が面的に検出されている。

縄文時代早期から前期にかけての土器が検出されているが，土層断面図中11層から撚糸文系土器が検出されていることから，この時期の遺構であると想定される。

（4）土坑

SK-003（第23図，図版4）

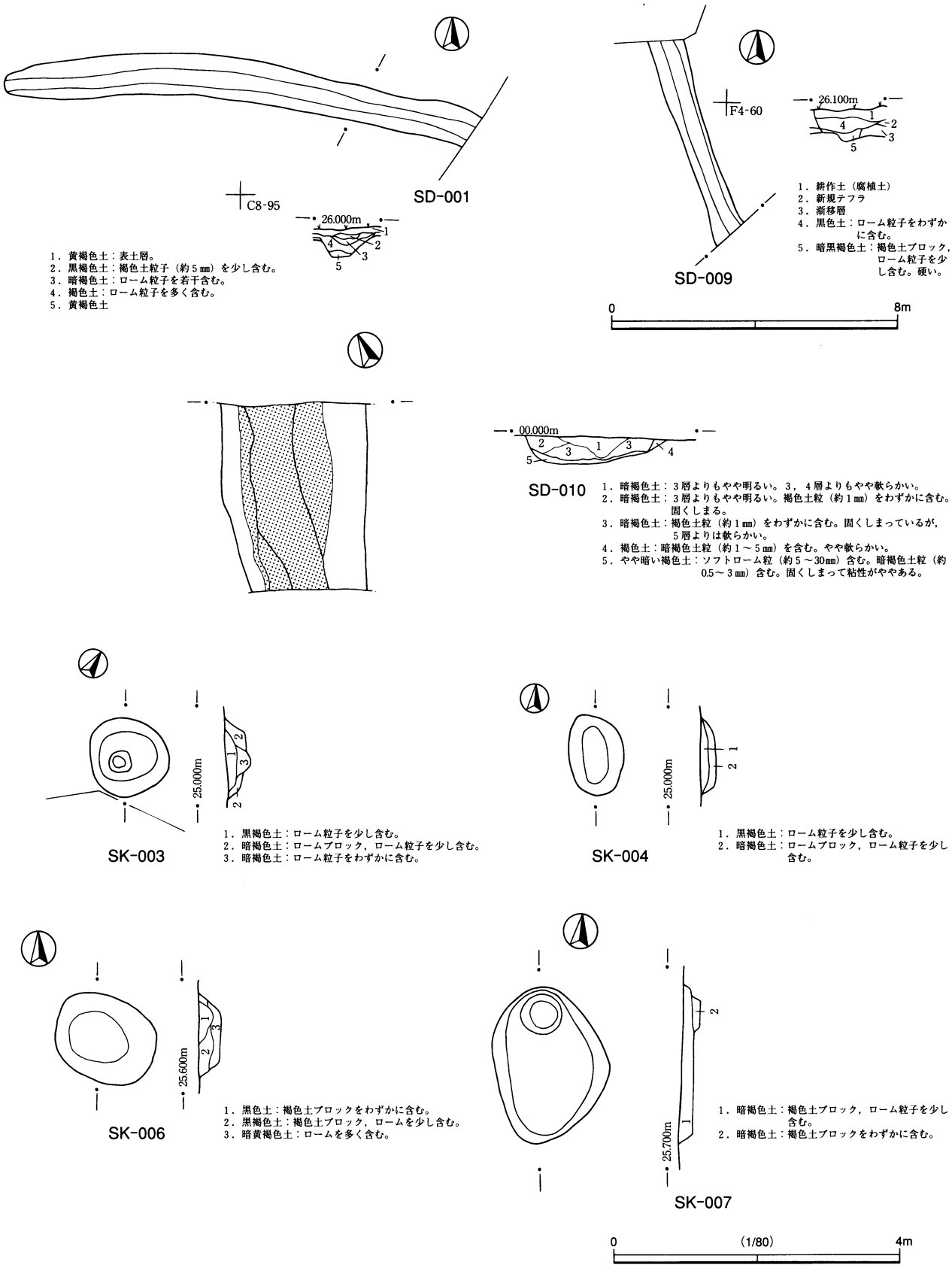
径約1.1m，深さ約0.3mの不整楕円形の土坑である。底面には凹凸が見られる。新期テフラ層下から検出された。底面には深さ約10㎝のピット状の窪みがみられる。土層断面から，この土坑を切って掘り込まれたものとみられる。遺物の出土はみられず，時期や性格は不明である。

SK-004（第23図，図版4）

長径約1.15m，短径約0.8m，深さ約0.24mの不整楕円の皿状の土坑で，底面には凹凸がみられる。新期テフラ下から検出されている。遺物の出土は見られず，時期や性格は不明である。

SK-006（第23図）

長径約1.45m，短径約1.16m，深さ約0.3mの楕円形の土坑である。新期テフラ層下から検出されており，掘り込みや底面は明瞭に確認された。遺物は上層から，田戸上層式に比定される土器片が確認されている。性格などは不明である。



第23図　溝跡，道路跡，土坑

SK-007（第23図）

長径2.2m，短径1.6m，深さ約0.2mの不整形の土坑である。新期テフラ層下から検出されている。北側端に径約0.58m，深さ約0.14mの落ち込みが見られる。覆土からは撚糸文系土器，条痕文系土器が検出されている。

（5）溝跡・道路跡

SD-001（第23図，図版6）

幅約1.2m，長さ約13.4m，深さ約0.5mで，西側に傾斜する地形に位置しており，およそ東西方向にのびている。西側は斜面下位に位置し，調査区内で止まっているが，東側は調査区外まで続いている。

遺物は，縄文時代早期から前期の遺物が出土しているが，新期テフラ上面で検出されていることから，当該時期の遺構ではない。時期決定できる遺物の出土はないが，中世から近世にかけてのものであると推測される。

SD-009（第23図，図版6）

幅約0.84m，長さ約5.8m，深さ約0.6mである。およそ南北にのびる溝である。覆土はローム粒子を含む黒色土で，底面に堆積している土が硬化しており，底面も同様に硬化していた。南北端は調査区外に続いている。

底面の硬化の様子から道路として使用されていたと考えられ，時期決定できる遺物の出土はないが，中世から近世のものであると考えられる。

SD-010（第23図，図版6）

幅約1.9m，検出された長さ約2.6m，深さ0.3mである。底面は硬化しており，道路跡であると考えられる。時期決定できる遺物は検出されていない。

（6）遺物包含層

縄文時代の遺物包含層が，調査区の南側に分布しており，C6，C7，D7，C8，D8グリッドにおいて本調査を行った。遺物包含層に含まれる遺物は，縄文土器，石器，礫であった。縄文土器の時期は縄文時代早期前葉から後期までに及び，特に早期，前期における資料が出土した。

これら遺物包含層を形成する遺物の詳細や分布については，それぞれの遺物の項で述べることにする。

2　遺物

遺構出土の遺物は，遺構の時期を決定できるようなまとまった資料が出土していないことから，図示しなかった。遺構出土遺物の内容については，遺構の記載の中で触れた。

本項では，遺物包含層出土の資料について述べることにする。

（1）縄文土器

1）縄文土器の種類

縄文土器は，早期前葉から後期前葉にかけてのものが出土しているが，具体的には以下の形式に属する土器がみとめられた。

第1群土器　縄文時代早期前葉の撚糸文系土器に属するもの
　①井草Ⅱ式に属するもの
　②夏島式に属するもの
　③稲荷台式に属するもの
　④花輪台式に属するもの
第2群土器　縄文時代早期中葉の沈線文系土器に属するもの
　①三戸式に属するもの
　②田戸下層式に属するもの
　③田戸上層式に属するもの
第3群土器　縄文時代早期後葉の条痕文系土器に属するもの
　①茅山上層式に属するもの
第4群土器　縄文時代前期中葉の土器に属するもの
　①黒浜式に属するもの
第5群土器　縄文時代前期後葉の土器に属するもの
　①諸磯式に属するもの
　②浮島式に属するもの
第6群土器　縄文時代前期末葉から中期初頭に属するもの
　①前期末葉に属するもの
　②中期初頭に属するもの
第7群土器　縄文時代中期前葉の阿玉台式に属するもの
第8群土器　中期後葉以降に属するもの
　①加曽利E式に属するもの
　②堀之内式に属するもの

図示した遺物は，新井堀Ⅱ遺跡から出土したものの中でも，代表的な一部のみである。これらの図示遺物が，そのグループ全体の中で占める割合は，そのグループの中での文様が明瞭な土器の占める割合によ

って異なる。

2）縄文土器の集計方法

発掘調査に際し，縄文土器は，小グリッドごとに取り上げた。これらの縄文土器を時期ごとに分類し，小グリッドごとに重量を計測し，集計を行った。そして調査区内での土器の疎密を各時期の土器のそれぞれの量にあわせて，3から5の度数に分け，その分布状況を図示した（第27図・第31図・第35図・第38図・第40図）。

集計の基準としては，文様や器面調整により比較的明瞭に分類ができる資料のみによって行った。稲荷台式や田戸上層式に属すると考えられる無文土器の中で，分類が困難なものについては，集計から除外した。

第1群　撚糸文系土器（第24～27図，図版7～9）

第24図～第30図は撚糸文系土器に属する。当遺跡出土資料は，井草2式，夏島式，稲荷台式，花輪台式に属するものがある。稲荷台式に属するものが最も多く，他の資料は少ない。また，撚糸文系土器に属すると考えられる無文土器も多く見られたが，代表的な口縁部破片のみ図示した。

①井草2式に属する土器（第24図，図版7）

1，2は井草2式に比定されると考えられる資料である。口唇部が肥厚し，口唇部外面に胴部とは異なった文様が施されている。ともに縄文が施されている。色調は1が褐色から暗褐色で，2が暗褐色である。焼成は良好である。

②夏島式から稲荷台式に比定される土器（第24・25図，図版7・8）

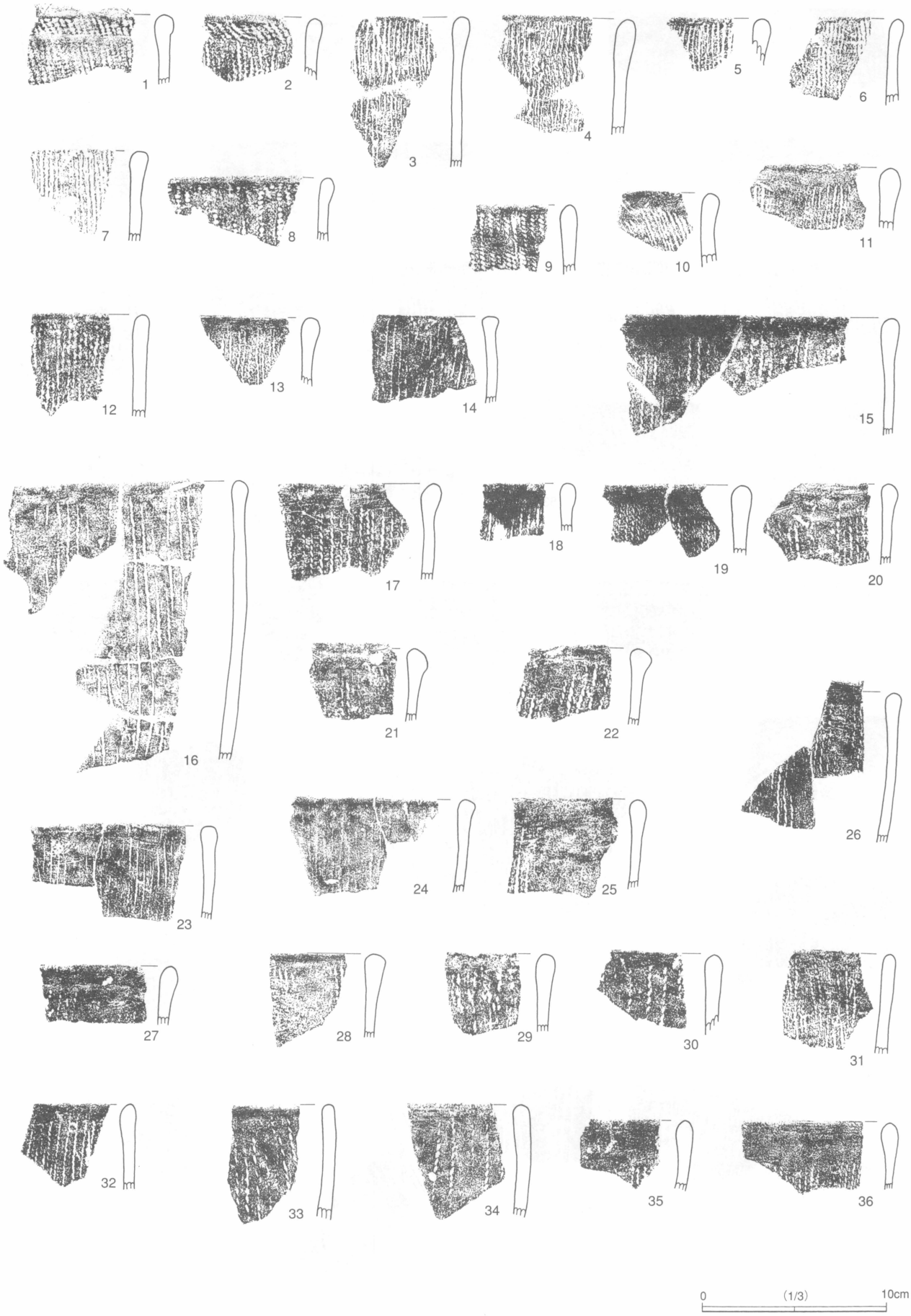
3～67は，夏島式から稲荷台式に比定される資料である。3～45は撚糸文が施される例である。3～7は口唇部がやや肥厚し，口唇部外面上端から密な撚糸文が縦方向に施されている例である。夏島式に比定される資料であろう。色調は，3～5が暗褐色，6が灰褐色，7が赤味を帯びた褐色で，3～5には胎土に白色粒子が含まれる。焼成はいずれも良好である。

8，9は，粗い撚糸文が口唇部上端から縦方向に施されている。10は密な撚糸文が斜めに施されている例である。いずれも色調は明灰褐色で，焼成は良好である。

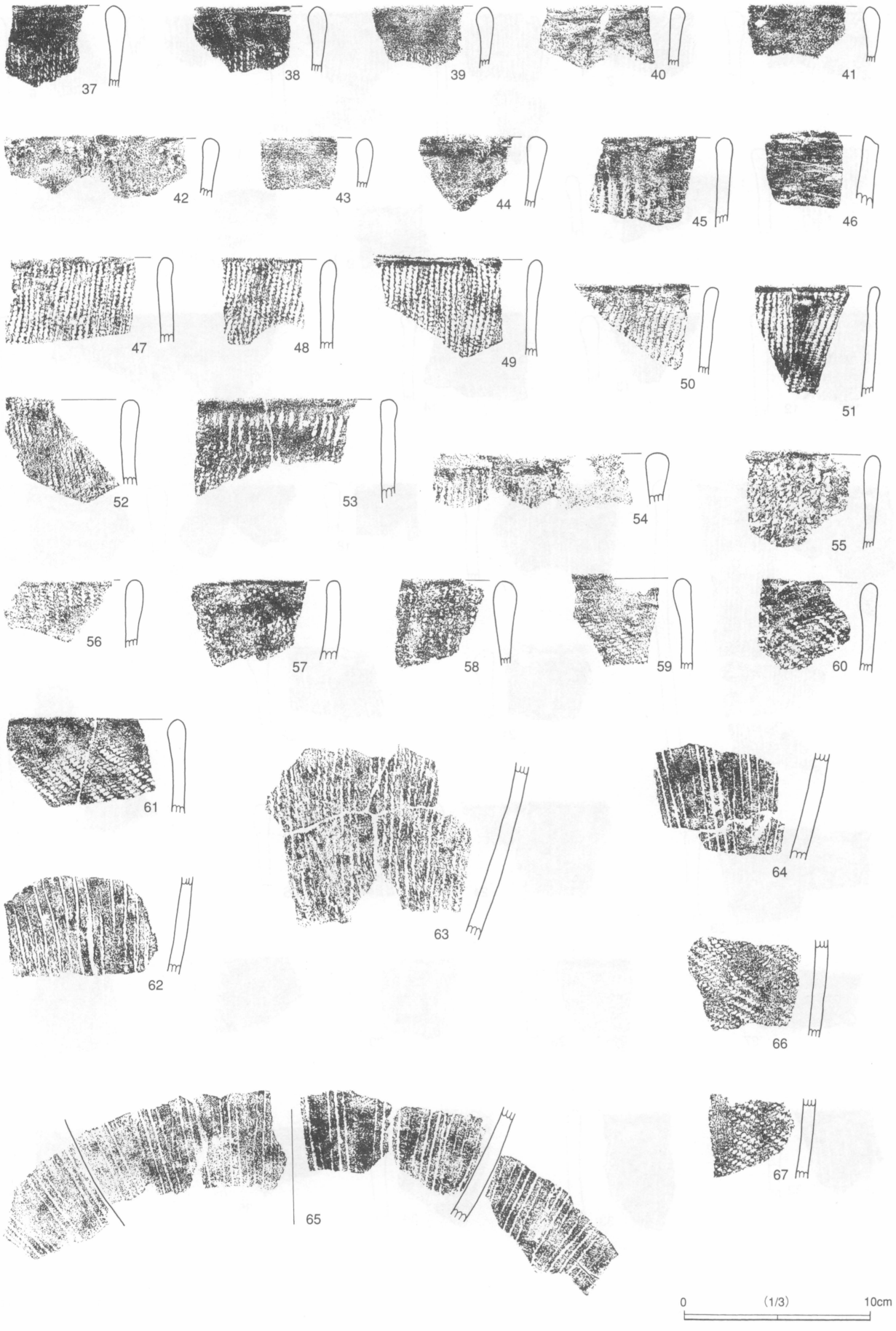
11～39は口唇部には施文せず，頸部から胴部にまばらな撚糸文が施される例である。口唇部が肥厚する例が多く，16～22のような外側に強く肥厚する例，37～39のような内側に肥厚する例，31，33のようにほとんど肥厚しないものが見られる。35～39は外面が丁寧に磨かれ，肉眼では撚糸文が明瞭に確認できない例である。

色調は，11～14，22は暗灰褐色で，15～19，23～30，32，34～39は，灰褐色を基調として口唇部などに黒斑が見られる。20，21，31，33は赤味を帯びた褐色である。胎土には砂を含むものもあるが，緻密で，焼成は良好である。

40～44は，ほとんど文様が確認できない例だが，35～39と同様のグループであると推測される。40，41，



第24図　縄文時代早期の土器（1）



第25図　縄文時代早期の土器（2）

43，44は灰褐色を基調とし，黒斑が見られる。胎土は緻密である。42は，やや明るい褐色で，胎土に白色の粒子や砂を含む。焼成はいずれも良好である。

45は，不明瞭ながら縦方向の撚糸文の痕跡が認められる。撚糸文が施されたのちに横方向にナデ消されている。色調は灰褐色で，焼成は良好である。

46は，外削ぎ状の口縁部断面を持つ土器で，横方向のナデ調整が施されている。胎土や色調が40～44に類似していることから，ここに取り上げた。

47～53，55～61は，外面に縄文が施されている例である。47～52は，口唇部から縦方向の縄文が施されている例である。色調は49を除いて灰褐色からやや赤味を帯びた褐色で，49が黒褐色である。焼成はいずれも良好である。

53は，口唇部が肥厚し，頸部から胴部にかけて縄文が施され，その後で横方向にナデ消されている例である。色調は灰褐色である。55，56，58は，不明瞭な縦方向の縄文が施される例である。57，59～61は斜行する縄文が見られる。色調は灰褐色で，57，59，61には黒斑が見られる。胎土は55，60には白色粒子，雲母を含む。

62～67は胴部破片である。62～65はまばらな縦方向の撚糸文が施されている。色調は赤味を帯びた褐色である。66，67は斜行縄文が施されている。色調はやや暗い灰褐色である。

③花輪台式土器に比定されるもの（第26図，図版９）

68～81は花輪台式土器に比定される資料である。68～75は口縁部で，68～70，72は同一個体であると見られる。頸部に横方向の撚糸文が押捺され，胴部には縦方向の撚糸文が施されている。胎土には砂が含まれ，色調は明灰褐色で黒斑が見られる。71，73，74も同様の文様が施されている。胎土，色調とも類似している。

75は胴部に羽状縄文が施される例である。色調は灰褐色で，表面の風化が進んでいる。

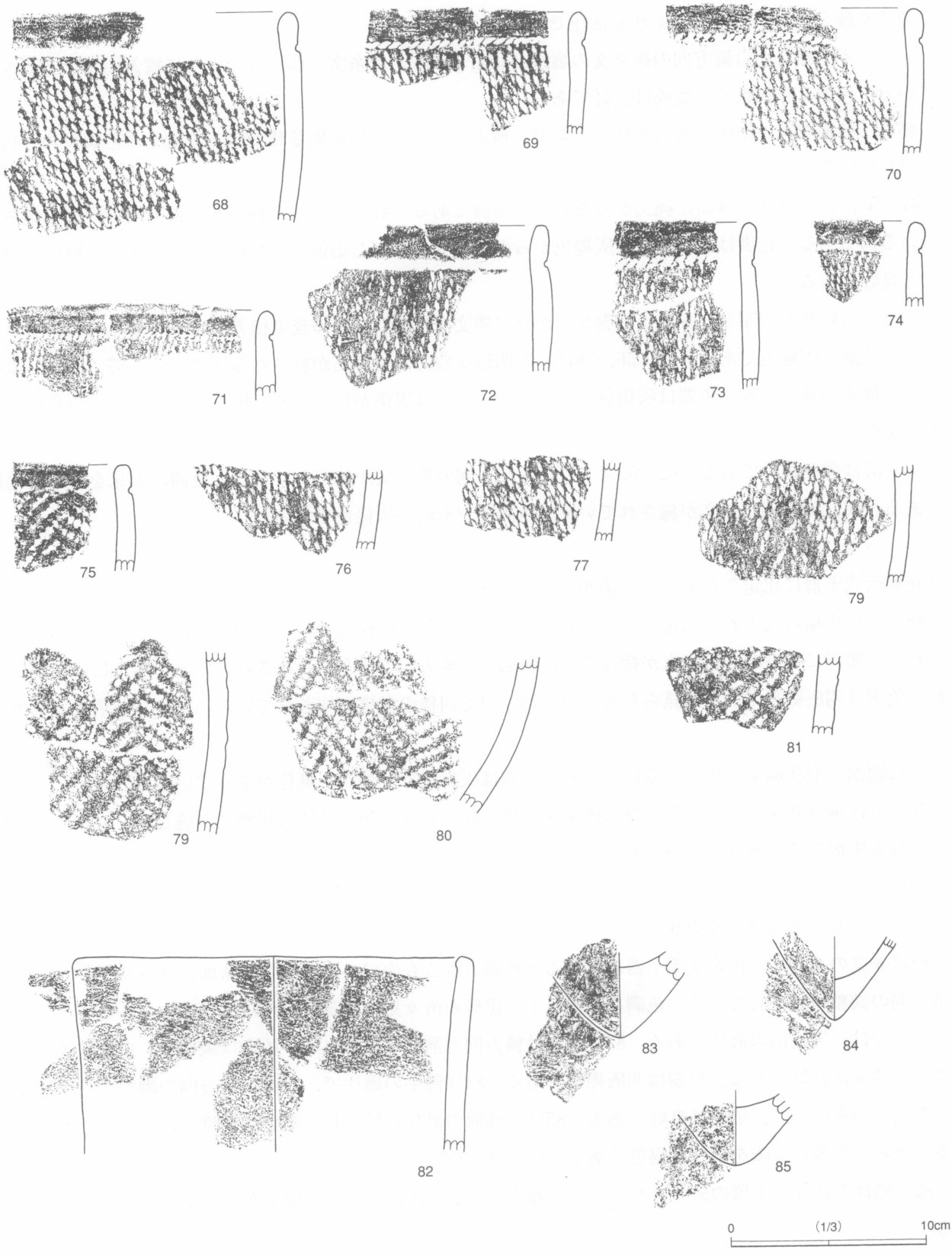
76～81は胴部破片である。76～78は撚糸文が施されており，79～81は羽状縄文が施されている。色調はいずれも灰褐色で，所々に黒斑がある。

④無文の土器（第26図，図版９）

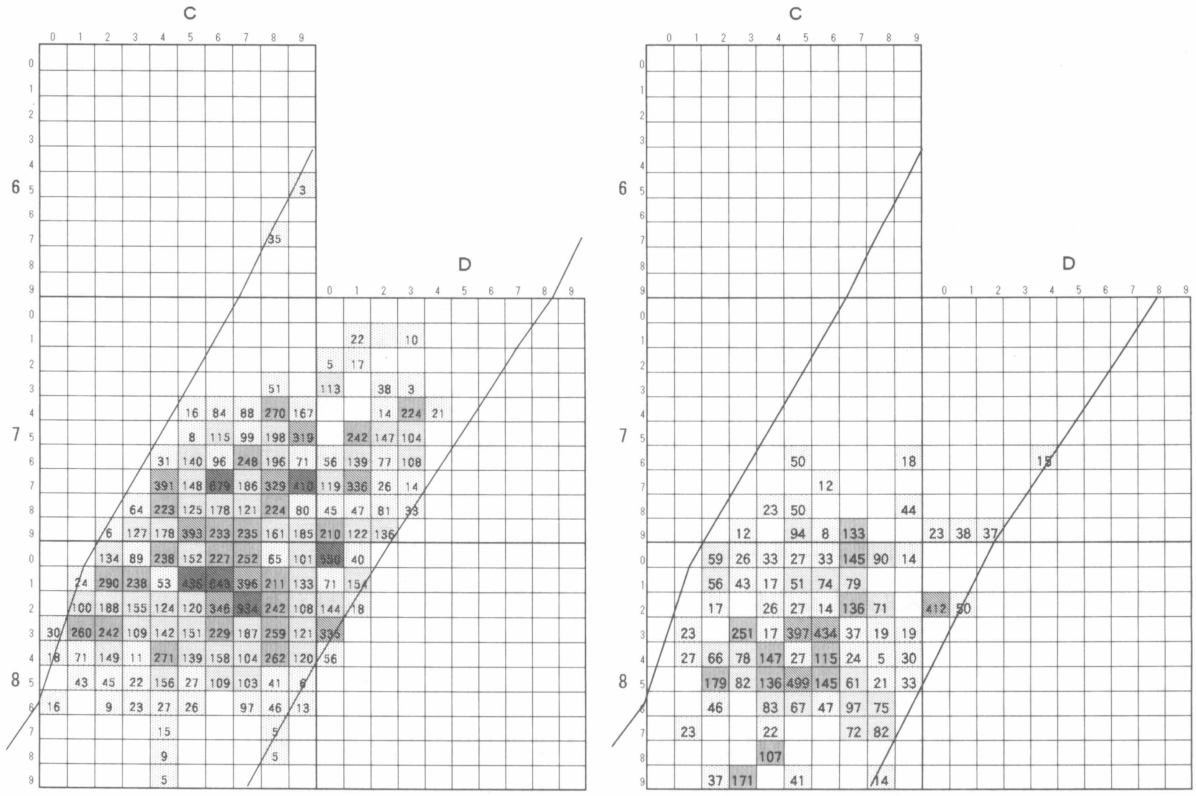
82は無文の土器で，撚糸文系土器に属すると推測されるものである。口唇部断面は丸みを帯び，外面は横方向の調整が施されている。色調は赤褐色で，黒斑が所々見られる。胎土には砂が含まれる。

83～85は，尖底部の破片である。83外面には横方向の削りが見られる。胎土は緻密で，白色粒子を少し含み，焼成は良好である。色調は明灰褐色である。84は薄手の破片で，外面に縦方向の調整が見られる。やや明るい赤褐色で，焼成は良好である。85は，外面の風化が見られ，調整は明瞭ではない。胎土に砂を多く含み，色調は赤味を帯びた褐色である。焼成はやや悪い。

82～85は撚糸文系土器の破片としてここに報告したが，沈線文系土器前葉から中葉に属する可能性もある。



第26図　縄文時代早期の土器（3）



撚糸文　　沈線文　前・中

第27図　撚糸文系土器と沈線文系前・中葉土器の分布（単位はｇ）

第２群　沈線文系土器（第27図～第31図，図版10～12）

①沈線文系土器前葉の三戸式に属する土器（第28図，図版10）

１～13，20～23は沈線文系土器前葉に位置付けられる破片である。１～６は口縁部破片である。１，２，４，５は横方向の沈線により形成された区画に斜の集合沈線が施されている例で，２段以上存在する区画には，右傾，左傾の集合沈線が交互に施されている。口唇部上端の断面はやや丸みを帯びており，内面は丁寧なミガキが施されている。１，２は黒褐色で，胎土に砂を多く含み，焼成は良好である。４，５は胎土が緻密で，砂を多くは含まない。色調は明褐色で，焼成はやや甘い。

３は斜の集合沈線を充填した平行な直線により幾何学的な文様が構成され，さらに点列を隙間に充填している資料である。縦方向の区画文が見られるのが特徴である。内外面とも灰褐色で，胎土に砂を含み，焼成は良好である。

７～10は胴部破片であるが，１，２，４，５と同じような文様が施されている例である。外面は，７，10は明褐色，８，９はやや暗い褐色で，内面はいずれも黒褐色である。胎土に砂を少し含むが，緻密で，焼成は良好である。

11は鍵状集合沈線文が施されている口縁部破片である。鍵状集合沈線文は，並行する数条の斜の細沈線が，右傾，左傾交互に施されている文様である。口唇部上端は平坦で，内面ともに丁寧にミガキが施されている。胎土は緻密で焼成は良好である。

12，13は，口縁部付近に横方向の集合沈線が施されており，その上から貝殻腹縁文が施されている例で

ある。集合沈線の下位には，沈線や貝殻腹縁文の組み合わせにより文様が構成されているようだが，詳細は不明である。口唇部断面は内削ぎ状となり，色調はやや暗い褐色である。

20，21は鍵状集合沈線文が施されている例である。外面は褐色，内面は黒褐色で，白色粒子を多く含み，焼成は良好である。

22，23は横方向の細沈線と斜格子状文が施されている例である。色調は外面が明褐色で，内面はやや暗い褐色である。胎土には白色粒子を含み，焼成は良好である。

24～27も上記とほぼ同じ時期に属する破片の可能性がある。24，25は細い沈線と点列により文様が構成されている例である。24は色調が灰色を帯びた褐色で，胎土が緻密である。25は色調は褐色で，胎土に白色の砂を多く含む。焼成は良好である。26，27は縦方向の細い沈線と貝殻腹縁文により施文した後，横方向の細い沈線を施している。外面は明褐色，内面はやや暗い褐色で，焼成は良好である。

②沈線文系土器中葉の田戸下層式に属する土器（第28・29図，図版10・11）

14～19，28～60は，沈線文系土器中葉の田戸下層式に位置付けられる資料である。

a．明瞭な文様が施されている資料（第28図，図版10）

14～19，28～39は，沈線文や貝殻腹縁文により明瞭な文様が施されている例である。

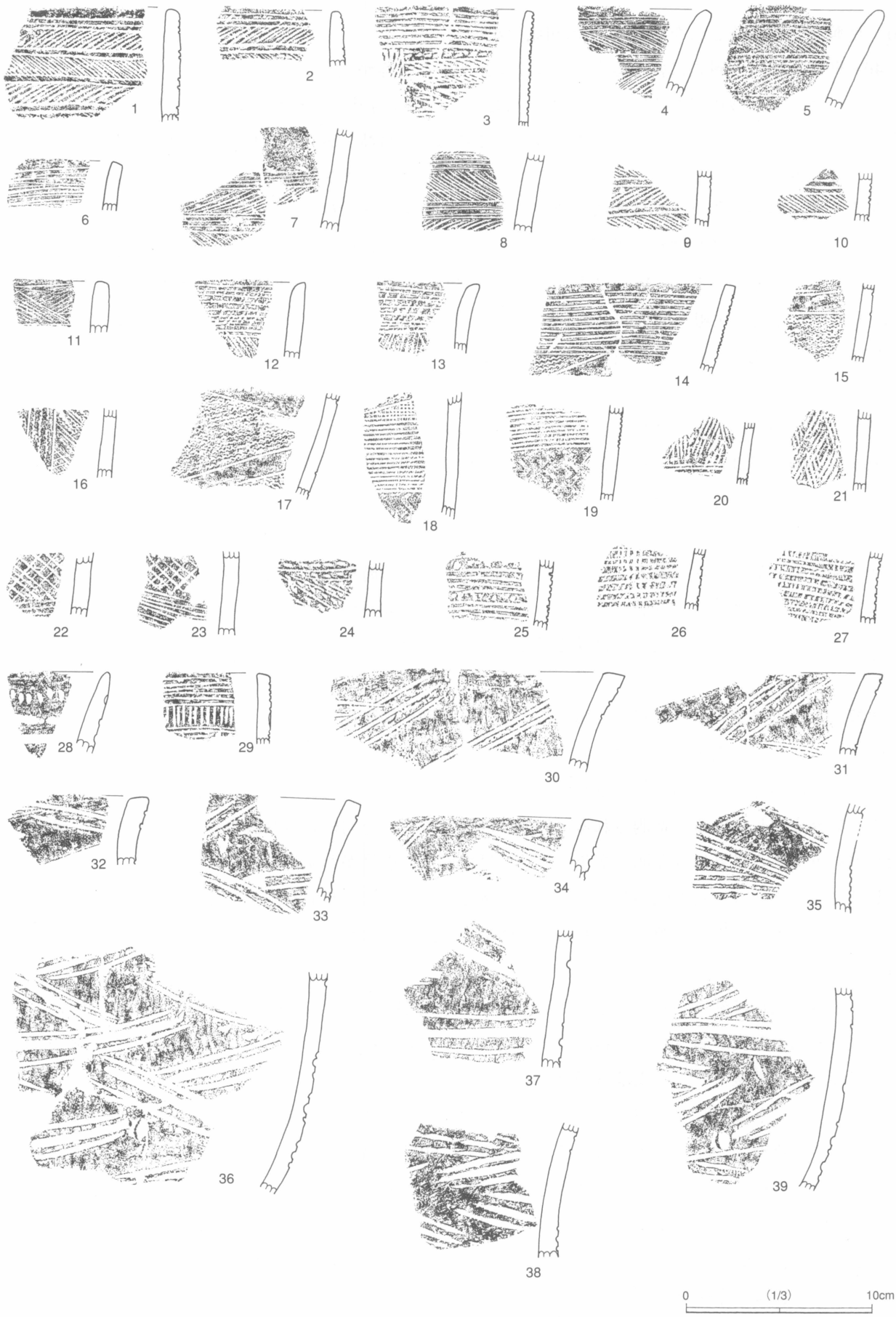
14は口縁部破片である。横方向の細い沈線と貝殻腹縁文により文様が構成されている。内外面とも丁寧にミガキが施されており，色調は明灰褐色である。15～17は口縁部付近の胴部破片で，細い沈線と貝殻腹縁文により文様が構成されている。15は暗褐色だが，16，17は灰褐色である。内外面とも丁寧にミガキが施され，焼成は良好である。

18，19は沈線文系土器の文様と押型文土器の文様がひとつの破片に施されている例である。18は外面最上部に貝殻腹縁文，その下に格子状文，さらにその下に横方向の並行する細い集合沈線文が見られる。それらの文様の下に山形押型文が縦方向に施されている。19は破片上半分に横方向の細い沈線文が，下半分に山形押型文が縦方向に施されている。ともにやや暗い灰褐色で，胎土は緻密で，焼成も良好である。押型文はごく弱く施文されており，肉眼での認識は困難である。

28は，口縁部破片で，口唇部直下に横方向の点列が見られ，その下に横方向の太い沈線が施されている。色調は灰褐色で，焼成は良好である。29は横方向の細い沈線と縦方向の短い沈線により文様が構成されている。胎土に砂を多く含み，焼成は良好である。

30～34は口縁部破片で，斜め方向の並行する２～３本の細い沈線により文様が構成されている。口唇部上端は擦り切り状もしくはやや内削ぎ状である。色調は灰褐色もしくは明褐色で，胎土は緻密で焼成は良好である。

35～39は胴部破片である。35，38は口縁部破片と同様に細い沈線により文様が構成されている破片である。両者とも外反している。36，37，39は，斜め方向の太い沈線と細い沈線の組み合わせにより文様が構成されている破片で，太い沈線の施文具と同様のもので所々に刺突文が施されている。35～39は，胎土，焼成とも口縁部破片と同様の特徴を持つ。



第28図　縄文時代早期の土器（4）

b．明瞭な文様が施されない資料（第29図，図版11）

40～60は，田戸下層式に属するもののなかで，明瞭な文様が施されない例である。

40～47は口縁部破片である。40～43，45～47は太く浅い沈線状の調整が横方向に施されている例である。明確な文様は構成せず，沈線の端部の処理も雑である。43は特に軟らかい段階で調整が行われたことわかるような状況がよく残っている。その一方で，内面は丁寧にミガキが施されている。色調は，45以外は暗褐色からやや暗い褐色で，45は明灰褐色である。いずれも胎土に砂を多く含み，焼成は良好である。

44は，横方向のケズリ調整が外面に施されている。胎土には砂を多く含んでいる。

48～57は胴部破片である。48～52は，40～43の口縁部破片と同様の器面調整が行われている資料である。48，49は，太く浅い沈線が横方向に施され，50は，先端が尖った工具による横方向の沈線が見られる。48，49は色調が明褐色で，胎土が緻密で，焼成も良好である。50～52は胎土に砂を多く含み，色調は褐色である。

53～55は，横方向の太く浅い沈線が施されている例である。いずれも胎土に砂を少し含む。色調は，53は明褐色，54，55は外面が赤味を帯びた褐色で，内面は黒褐色である。焼成はいずれも良好である。

56～58は，外面を横方向のケズリで調整されている。胎土に砂を含み，色調はやや赤味を帯びた褐色で，56の内面は黒褐色である。

59，60は尖底部の破片である。胎土や器面調整から，この時期の底部と判断した。59は外面が横方向のケズリ，内面がミガキにより調整されている。60も同様の調整が行われている。色調はともに褐色だが，60の内面は黒褐色である。胎土には砂を多く含み，焼成は良好である。

③沈線文系土器後葉の田戸上層式に属する土器（第30図，図版12）

61～80は，沈線文系土器後葉に位置づけられる，田戸上層式に比定される資料である。

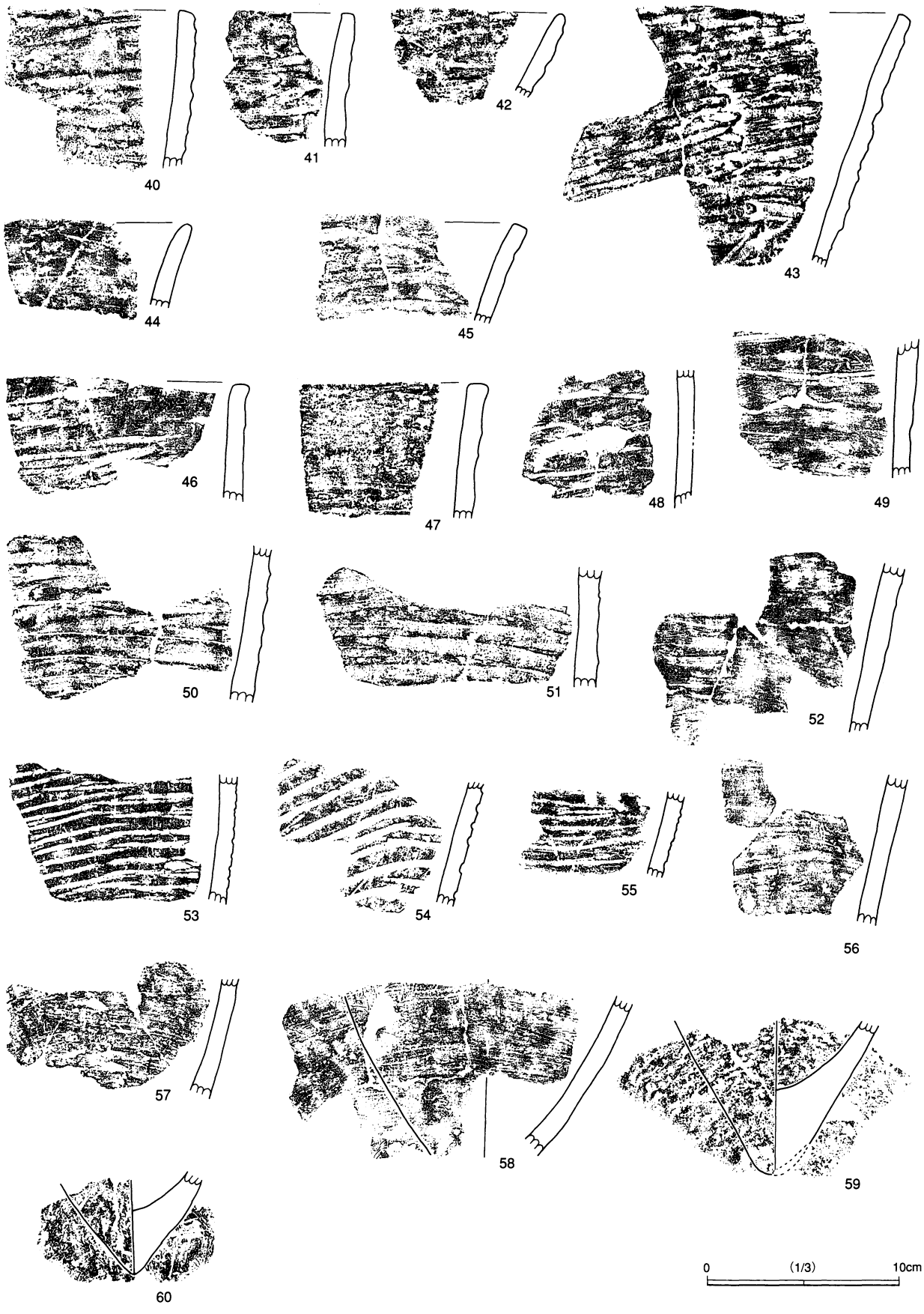
61～65は口唇部上端に刻みが施されている例で，器壁に対して直行する方向で，断面が円形の棒状工具により刻みを施していると推測される。外面，内面ともに横方向のケズリ調整が施されている。色調は，62が黒褐色である以外はみな明灰褐色で，胎土は緻密で，繊維がわずかに含まれる。

66は，口唇部上端に斜方向の刻みが施される例である。やはり断面が円形の棒状工具を用いている。口唇部直下に横方向の細い沈線が見られる。明灰褐色で，胎土は緻密で繊維をわずかに含み，焼成は良好である。

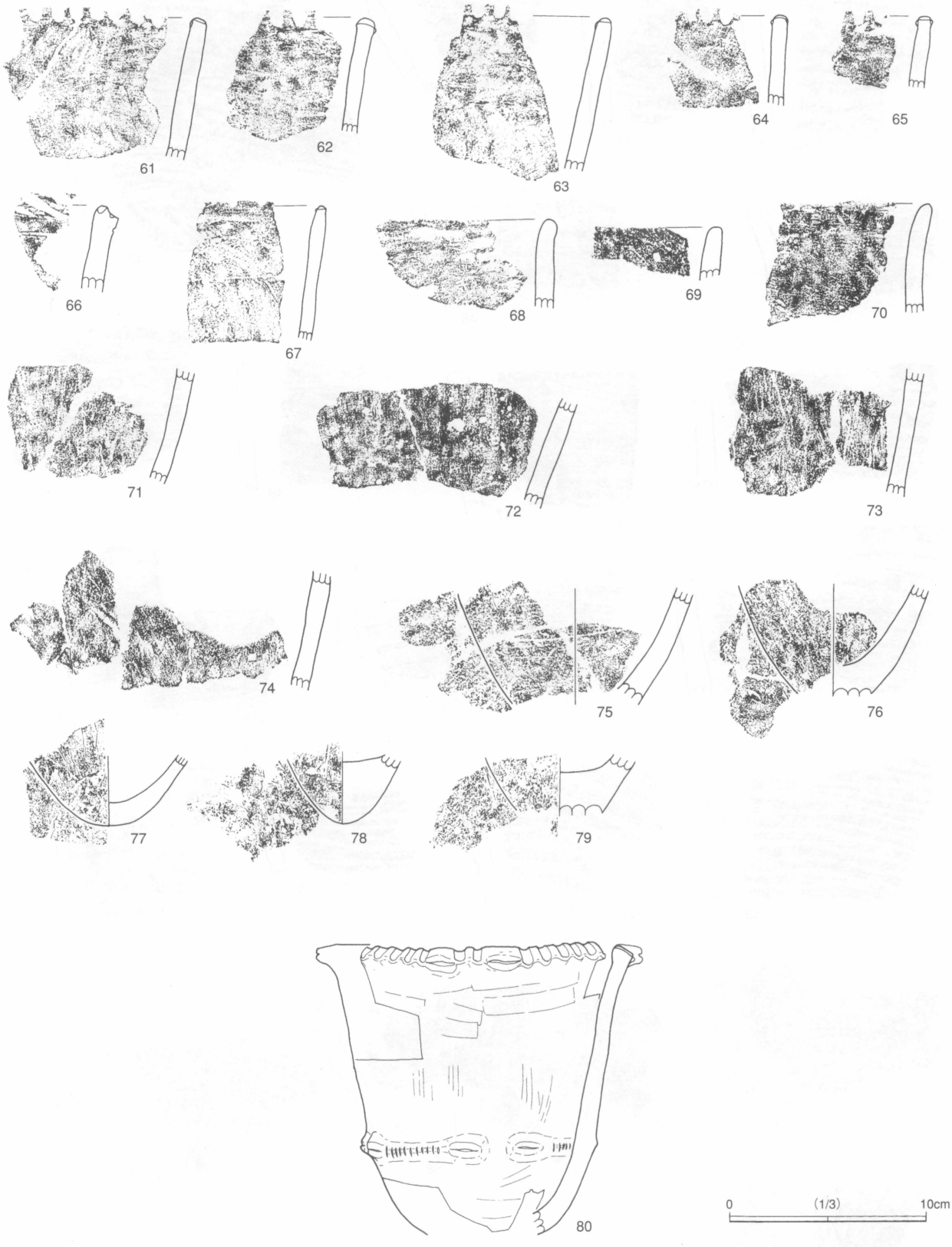
67も口唇部上端に刻みが施される例だが，12㎜程度の間隔を空けて，細い工具を用いて施文されている。外面は斜方向の擦痕が施され，口唇部は横方向のナデが施されている。内面は横方向のナデである。色調は暗褐色，胎土は緻密で，焼成は良好である。

68～70は文様が施されない口縁部破片である。外面の調整は，横方向のケズリである。内面は丁寧に磨かれている。色調は，68，70が赤味を帯びた褐色で，69は灰褐色である。胎土は，68，69は繊維をわずかに，70が黒色の粒子を含む。これらは，外面に擦痕状のケズリがあることから，本型式に分類したが，他の型式に属する可能性もある。

71～74は，胴部破片である。外面には縦方向のケズリによる擦痕が見られる。内面は丁寧なミガキが施されている。色調は赤味を帯びた明褐色で，胎土には繊維をほとんど含まず，砂を含み，焼成も良好である。



第29図　縄文時代早期の土器（5）



第30図　縄文時代早期の土器（6）

75は底部付近の破片である。外面は横方向のケズリ調整が，内面は丁寧なミガキが施されている。色調，胎土，焼成とも71～74に似る。

76～79は尖底部の破片である。77以外の破片は，底部に厚味があり，先端が比較的鋭角になると考えられる。先端はやや丸みを帯びる。色調は赤褐色で，胎土に砂を含み，焼成は良好である。77は，底部が薄く，丸底となる。胎土に砂を多く含み，外面は明灰褐色，内面は灰黒色である。

80は，小型の深鉢である。口唇部上端に，断面が円形の棒状工具による刻みが施されており，2個一組となる瘤状の突起が4単位存在する。胴部下方には隆帯がめぐり，鋭い工具による刻みが施されており，口唇部に見られるような瘤状の突起がやはり4単位付属する。外面の調整は，口唇部直下は横方向のケズリ，その下から隆帯の上までは縦方向のミガキが，隆帯の下は横方向のケズリが施されている。色調は赤味を帯びた灰褐色で，胎土には繊維をわずかに含み，緻密で，焼成は良好である。

第3群　条痕文系土器（第31図～第34図，図版13・14）

第32図～第34図，2から58は条痕文系土器である。これらは文様や器形の特徴から，条痕文系土器後葉の茅山上層式に位置付けられる資料であると考えられる。器形は，1段もしくは2段の括れを持つが，括れは顕著ではなく，変化に乏しい個体が多い。内外面に粗く深い条痕が施されているが，資料全体における条痕以外の文様が施されているものは少ない。いずれも胎土に繊維を多く含み，色調は橙褐色から暗褐色である。

図示遺物は，検出された条痕文系土器の破片の中で，条痕以外の文様が施されている資料を中心に抽出したので，ほとんどの条痕のみの土器は図示しなかった。

2～11は口唇部上端に刻みが施される例である。2，3は比較的整った斜方向の条痕が外面に施されている。2は格子状に，3は斜方向の細い刻みが口唇部に見られる。5～7は口唇部上端と口唇部内面にハイガイなどを用いた貝殻圧痕が施されている。10は，口唇部上端に，外側向きと上方向きに2列の刻みが施されている。上方からの刻みは施文具は不明だが，外側からのものは半截竹管の凹部を押圧しているようである。4，8も同様の施文具を用いているものと考えられる。11は，口唇部の刻みにハイガイなどの貝殻の殻頂を用いている点に特徴がある。

12，13は角棒状の工具を用いて押引き文が施文される例である。口唇部上端の刻みも同様の工具による刺突によって施されている。12は内外面に押引き文が見られる。

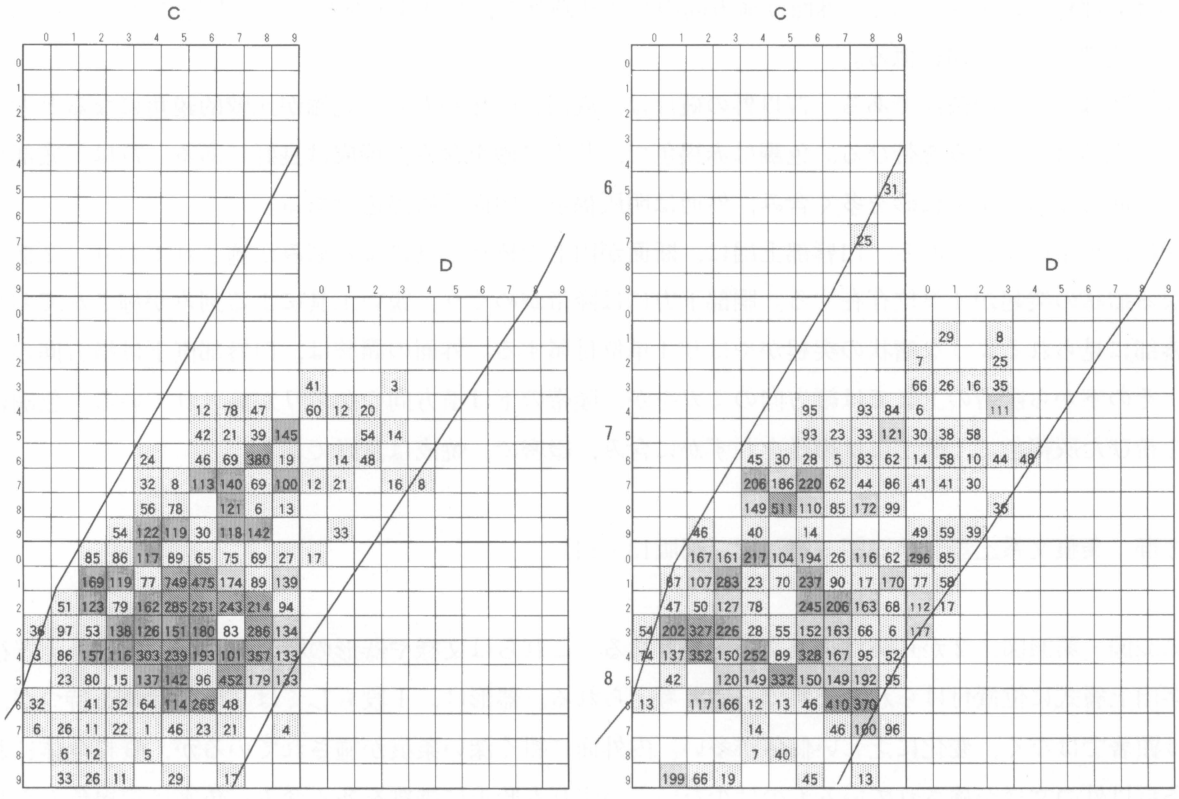
14～18は，口縁部に断面が円形の貫通した円孔が見られる例である。孔は焼成前に断面が円形の工具により開けられており，17を除いては外面側から工具を突き刺している。

19～24は，口縁部破片で，口唇部の刻みや外面の文様などが見られない例である。22，23は段状の括れ部を含む破片で，23は括れから縦方向の隆帯が口唇部に向かって伸びるのが確認される。

25～52は胴部破片である。

25，26，29～31は角棒状工具により押引き文が施されている例である。25は押引き文により縦方向の区画が形成されるものと推測される。27は幅広の浅い沈線により格子状文が施されている。

32～50は，胴部の括れ部隆帯に刻みが施される例である。32～37は，ハイガイなどの貝殻の殻頂部を横



沈線文　後　　条痕文

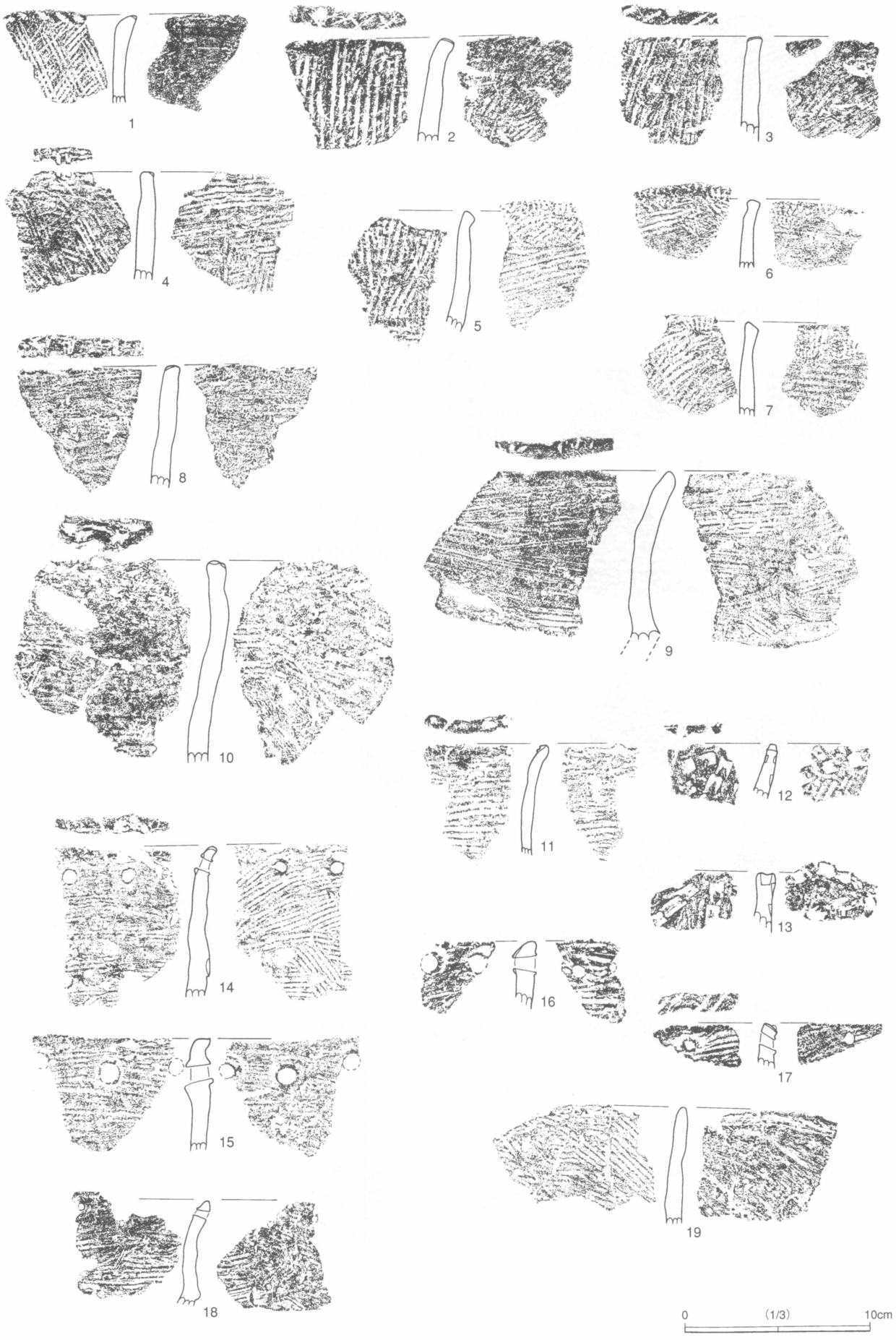
第31図　沈線文系後葉土器と条痕文系土器の分布（単位はｇ）

方向の隆帯に施している。38，39は先端の鈍い棒状工具もしくは小円礫で刺突している。40は半截竹管状の工具の腹部で刻みを施している。41～43，45～50は細い棒状の工具で施したものと考えられる。破片により刻みの規模や間隔が異なっている。44は，断面が円形の棒状工具によって沈線が施されている。器形は，40，48のような括れがほとんど消失して，隆帯のみとなる傾向にあり，44，46のように括れが顕著なものは少ない。

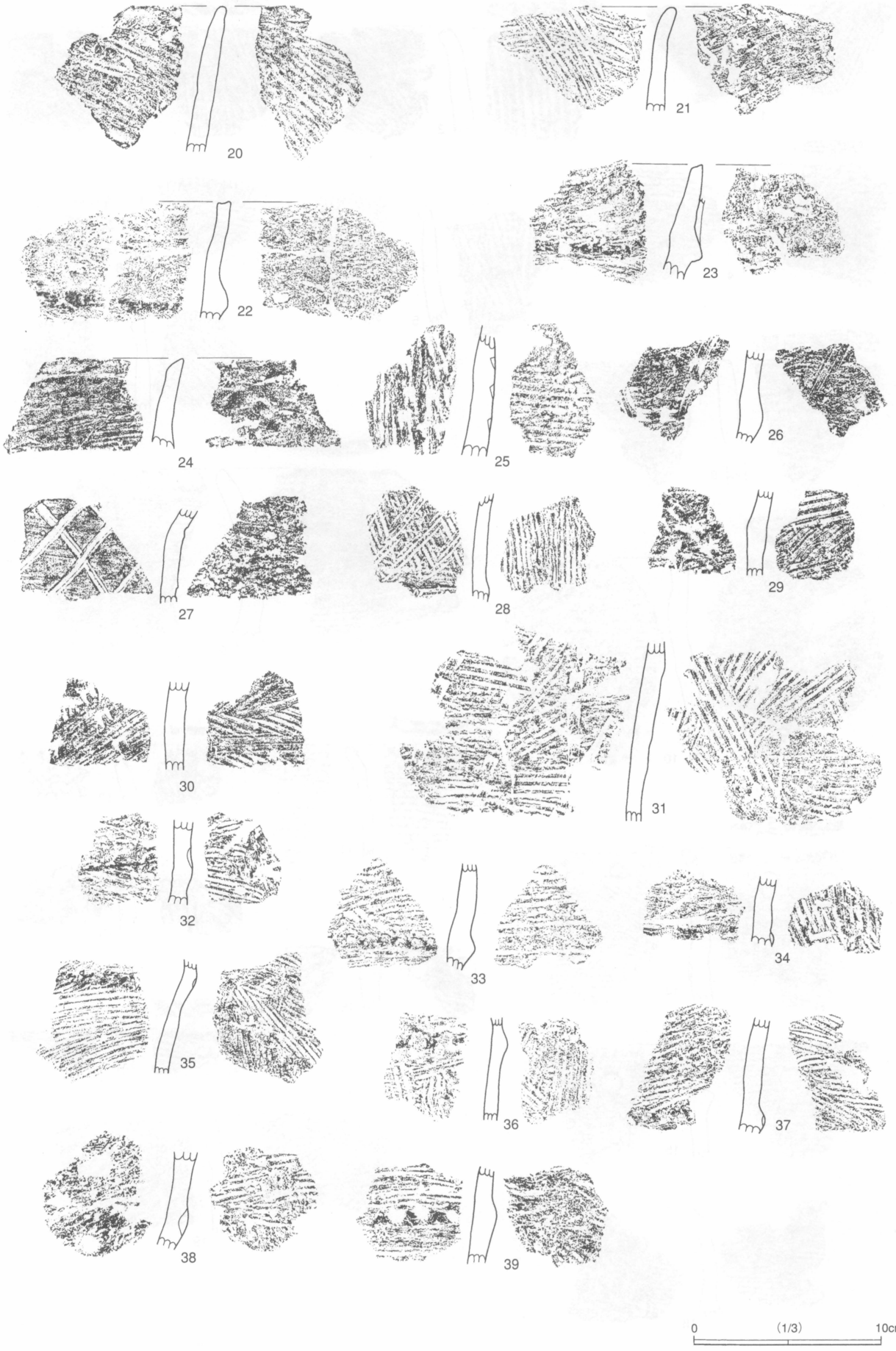
51～54は括れ部隆帯に刻みなどの装飾が施されない例である。

55は，条痕のみの胴部破片である。

56～58は底部破片である。56，57は平底となり，底部角の断面が丸みを帯びる。熱を受けており，内外面の剥落が目立つ。非常にもろい。58は底面が小さく，角が張り出し，底面中央が上げ底状となる破片である。やはり熱を受けており，表面の剥落が目立つ。



第32図　縄文時代早期の土器（7）



第33図　縄文時代早期の土器（8）

第34図　縄文時代早期の土器（9）

第４群　縄文時代前期中葉の土器（第35図，図版15）

第35図は，縄文時代前期中葉の黒浜式土器に属する資料である。胎土には繊維を多く含み，焼成は比較的良好である。色調は，１～３，５が灰褐色で，４，６～９がやや赤味を帯びた褐色である。

１，２は口縁部破片である。ともに羽状の粗い撚糸文が施されているものと考えられる。１には補修孔が見られる。３～５は胴部破片で，ともに撚糸文によって文様が構成されている。２と５は，色調，胎土ともによく似ていることから，同一個体の可能性が高い。

６は単節の羽状縄文が施されている。７は斜向する無節の縄文が施されている。８，９は底部破片である。丸底状となり，８は撚糸文が，９は単節の縄文が施されている。底面の施文はまばらになる傾向がある。

第５群　縄文時代前期後葉に属する土器（第36図～第38図，図版15・16）

第36図，第37図の19～29は前期後葉の諸磯式，浮島式に属する土器である。１～３は口縁部破片である。波状口縁となり，口唇部直下に，口唇部に並行する爪形文が施されている。７も胴部破片だが，同様の資料であると考えられる。胴部の器形変換点に横方向の爪形文が施されており，胴部上半分は，半截竹管による横方向の波状の沈線文が充填されている。胴部下半分は，斜行する単節縄文である。内面は丁寧にミガキが施されているが，剥落している。胎土は緻密で，焼成はやや甘く，表面の風化が見られる。これらは，諸磯ｂ式の古い段階に位置付けられる。

４～５も，１～３と類似するが，口唇部直下の文様が，細い半截竹管による押引文となっている。押引文の下には縄文が施される。６も，破片上端に押引文が見られることから，同様の破片である可能性が高い。斜行する単節の縄文が施され，横方向の結節文が見られる。胎土には繊維を含み，焼成は良好である。

８～11は，同一個体の可能性が高い胴部破片で，斜行する無節の縄文が施されている。10には，乱雑ではあるが，爪形文が縄文の上に施されている。胎土は緻密で，焼成は良好であるが，10，11は，被熱のための剥落が内外面に見られる。諸磯ｂ式古段階のものであろう。

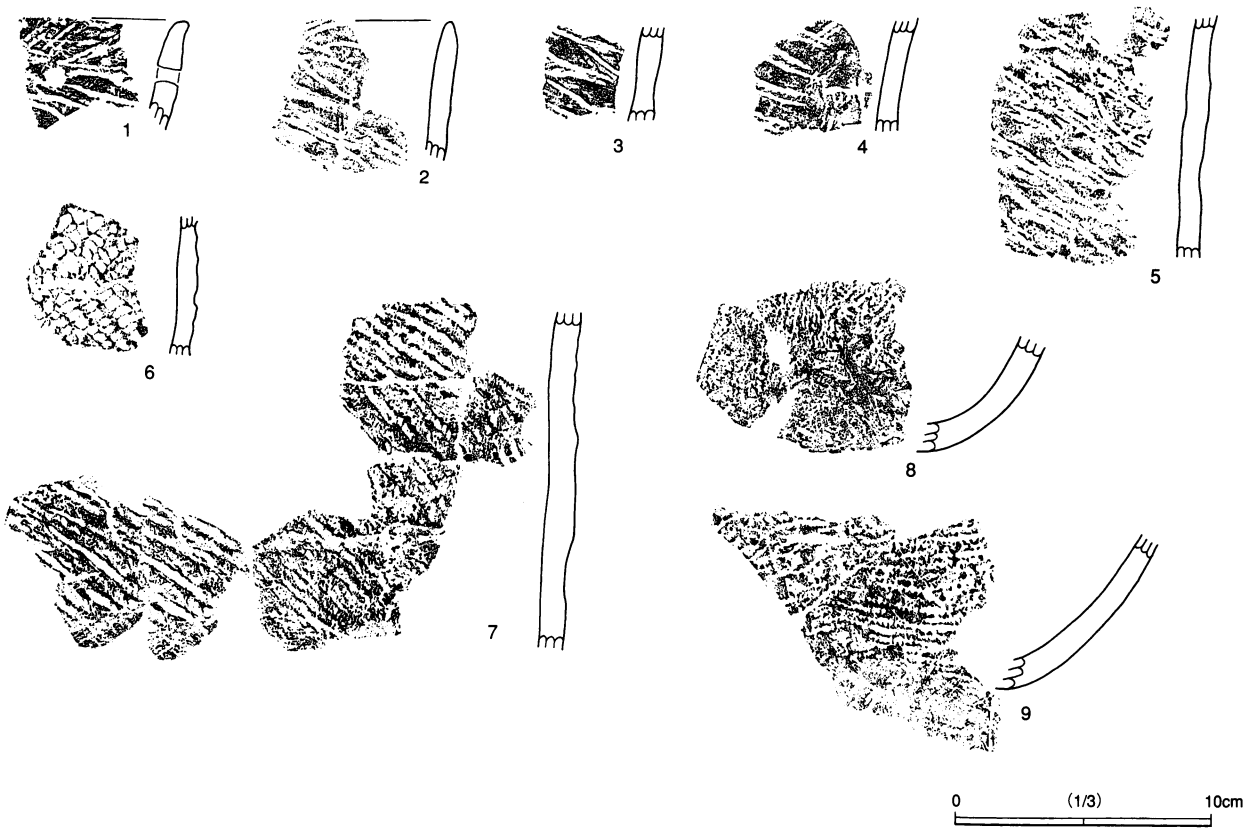
12～17は集合細密沈線によって文様が施されている例である。12～14は同一個体の可能性があり，縄文を地文とし，雑な細密沈線が施されている。外面に暗灰色の斑紋が見られるが，内面は明褐色で，胎土は緻密で，焼成は良好である。

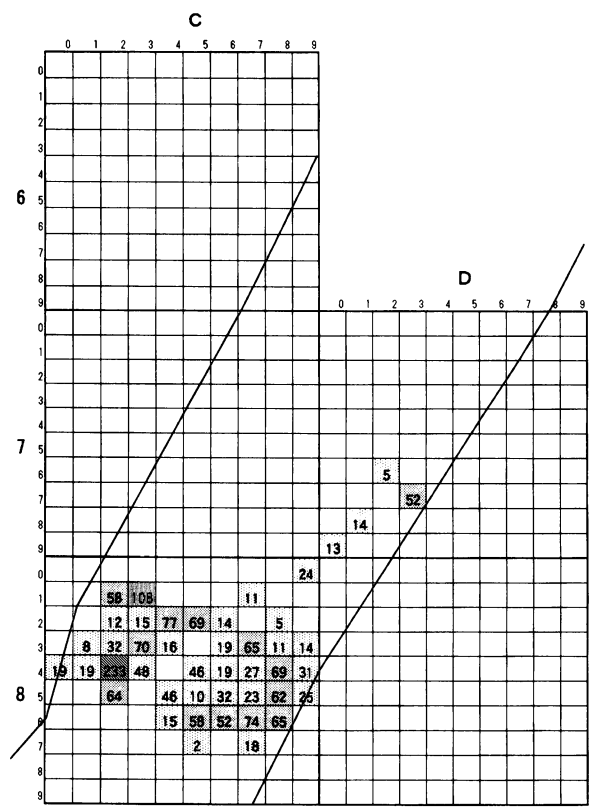
15～17は，同一個体の可能性がある。やはり縄文を地文とした上に細密沈線が施文されている例だが，12～15と比較して丁寧に施されている。胎土に砂粒を含み，緻密で，焼成は良好だが，内面に剥落が見られる。12～17は，諸磯ｂ式の中ごろの段階に比定される。

18は，縄文を地文とした上に竹管による沈線が施され，円形刺突文が配されている破片である。胎土は緻密で，焼成は良好である。

19は，縄文を地文とし，浮線文が施される例である。浮線文には斜方向の刻みが施されており，浮線文に沿って工具によるなぞりの痕跡が確認でき，地文がナデ消されている。諸磯ｂ式の中段階に位置するものであろう。

20～28は，半截竹管の腹部による沈線により文様が構成される資料である。外反する口縁部およびその





第35図　縄文時代前期中葉の土器と分布（単位はｇ）

附近の破片が主である。内面は丁寧なミガキが施されている。色調は明褐色に暗褐色の斑紋が見られ，胎土は緻密で，焼成は良好である。

29は，大型のサルボウのような貝によって貝殻文が施されている破片である。破片の下位には横方向の沈線が見られる。色調は明褐色，胎土は緻密で，焼成はよい。内面は丁寧なミガキが施されている。

第6群　縄文時代前期末葉から中期初頭の土器（第37図～第39図，図版17）

①前期末葉の土器（第37図，図版17）

30～32は口縁部破片である。平縁で，外面に無節の縄文が施されている。30，31は断面が丸みを帯びており，32はやや尖り気味で，外反し，口唇部に刻みが施されている。粘土紐の輪積み痕で割れている。30，31は，この時期の資料と決定する要因に欠け，諸磯式の可能性もある。

33～35，37，38は，横方向の結節文が見られる破片である。33，34は，無節の羽状縄文が施されており，35は単節の細かい羽状縄文が見られる。37，38は乱雑な結節文が見られる破片である。33，34は色調が赤褐色で，胎土に白色の粒子を含み，焼成は良好である。35，37，38は色調が灰褐色で，胎土は緻密で焼成は良好である。

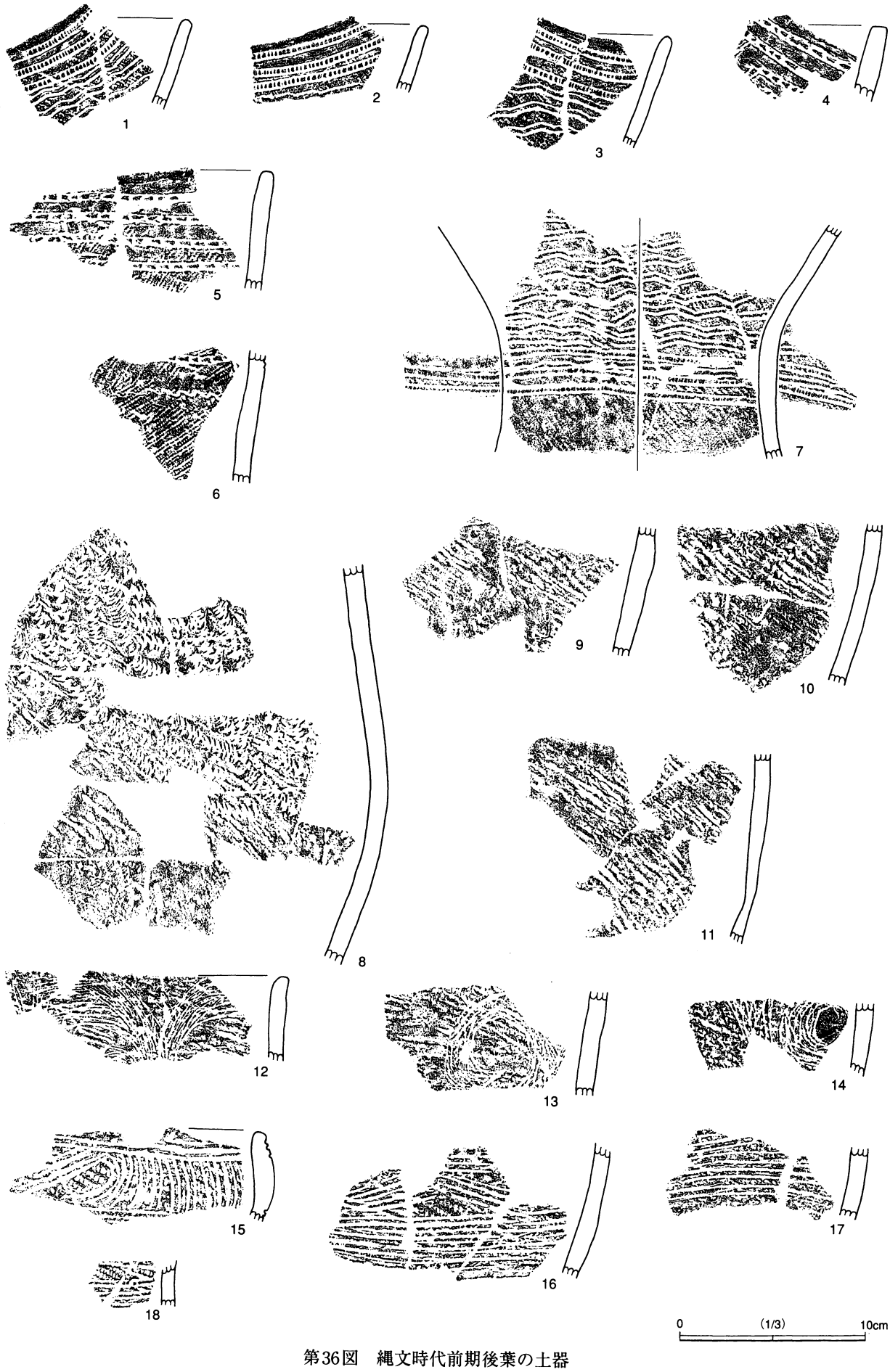
36は，斜行する無節の縄文が施されている破片である。内面はミガキが施され，色調は明るい赤褐色で，焼成は良好である。

30～38は粘土の輪積み痕で割れている傾向がある。

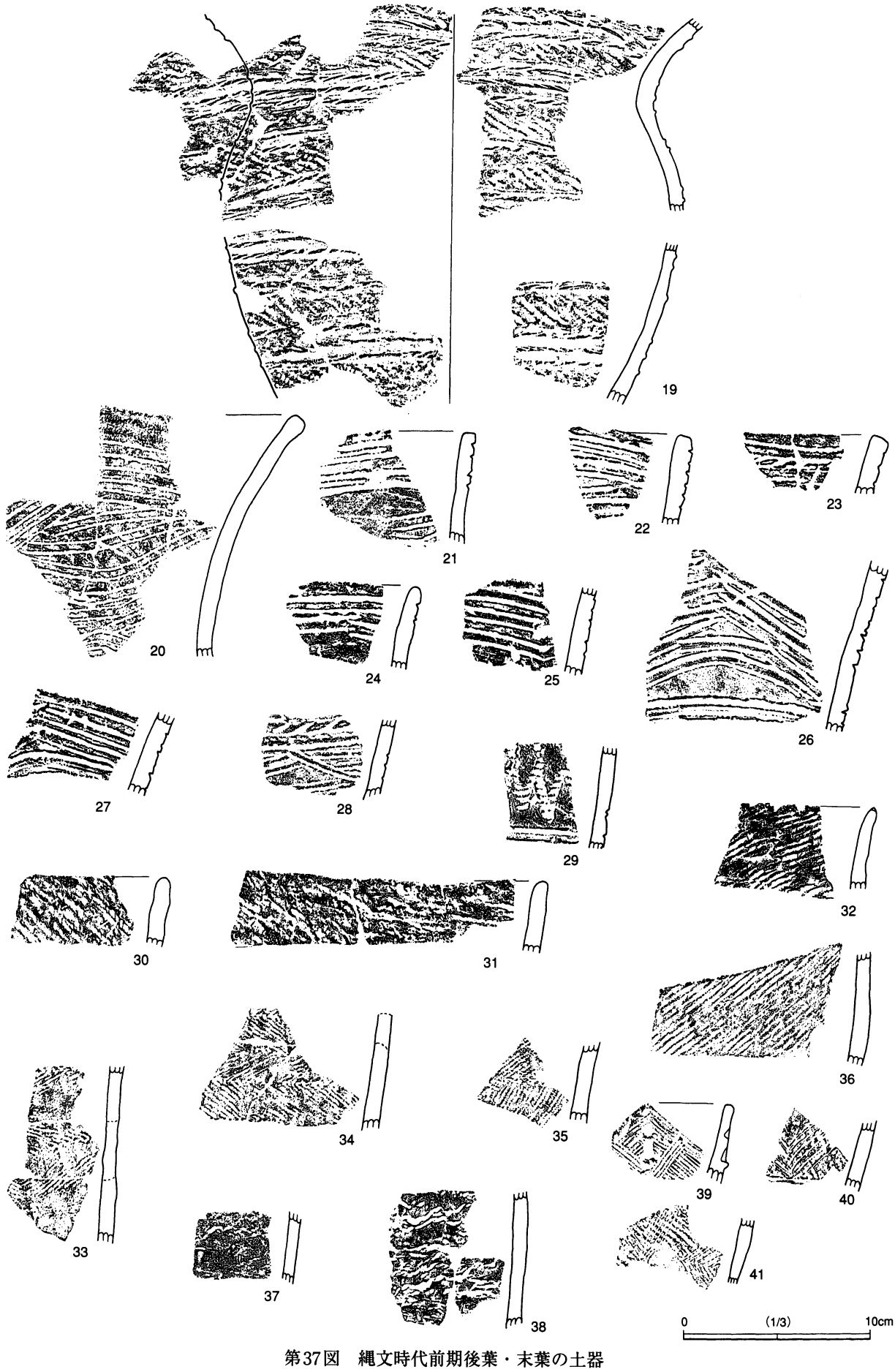
39は口縁部破片で，4本1単位の櫛目状文によって幾何学的な地文が施された後，角棒状の工具によって刺突文が施されている。色調は，明褐色に黒斑が見られ，焼成は良好である。40，41は同一個体であると考えられる。縄文を地文として，細密沈線により幾何学的な文様が施されているようである。これらの破片は，小破片なので，明確な全体の状況は不明だが，前期末葉から中期初頭に属する資料の可能性が高い。

②中期初頭の土器（第39図，図版17）

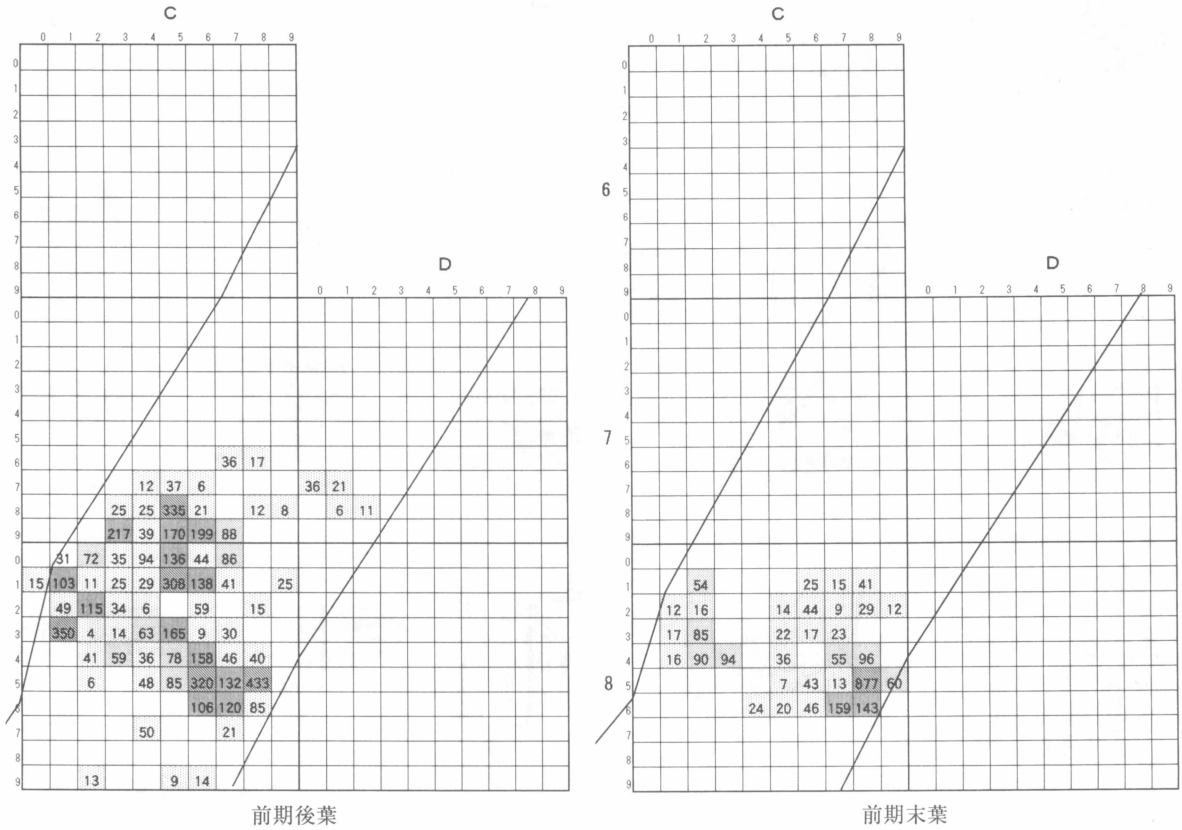
42，43は，細い沈線に三角形の刺突文が配される破片である。43には，櫛目状の点列が見られる。やや風化が見られるが，胎土は緻密で焼成は良好である。これらは，五領ヶ台式に比定される。



第36図　縄文時代前期後葉の土器



第37図　縄文時代前期後葉・末葉の土器



第38図　縄文時代前期後葉・末葉土器の分布（単位はｇ）

第７群　縄文時代中期前葉の土器（第39・40図，図版17）

44～62は，阿玉台式土器に比定される資料である。色調は赤味を帯びた褐色から明褐色で，胎土の雲母は少ないが，白色粒子を含み，焼成は良好である。

44は口縁部の把手破片である。45～47は口縁部破片である，口唇部は外削ぎ状の断面で，上端に刻みが施される。47～55は口縁部付近の破片で，隆帯による楕円形区画状文が施されている部分である。粘土紐を貼り付けた隆帯の両脇もしくは片側に，棒状工具による刺突文列が施されている。

56～61は，胴部破片で，隆帯による懸垂文が見られる例である。懸垂文の両側には刺突文列が施される。また横方向には，微隆起線と，粘土輪積み痕を装飾的に残したものが見られる。44～61は，阿玉台・式に比定される資料であろう。

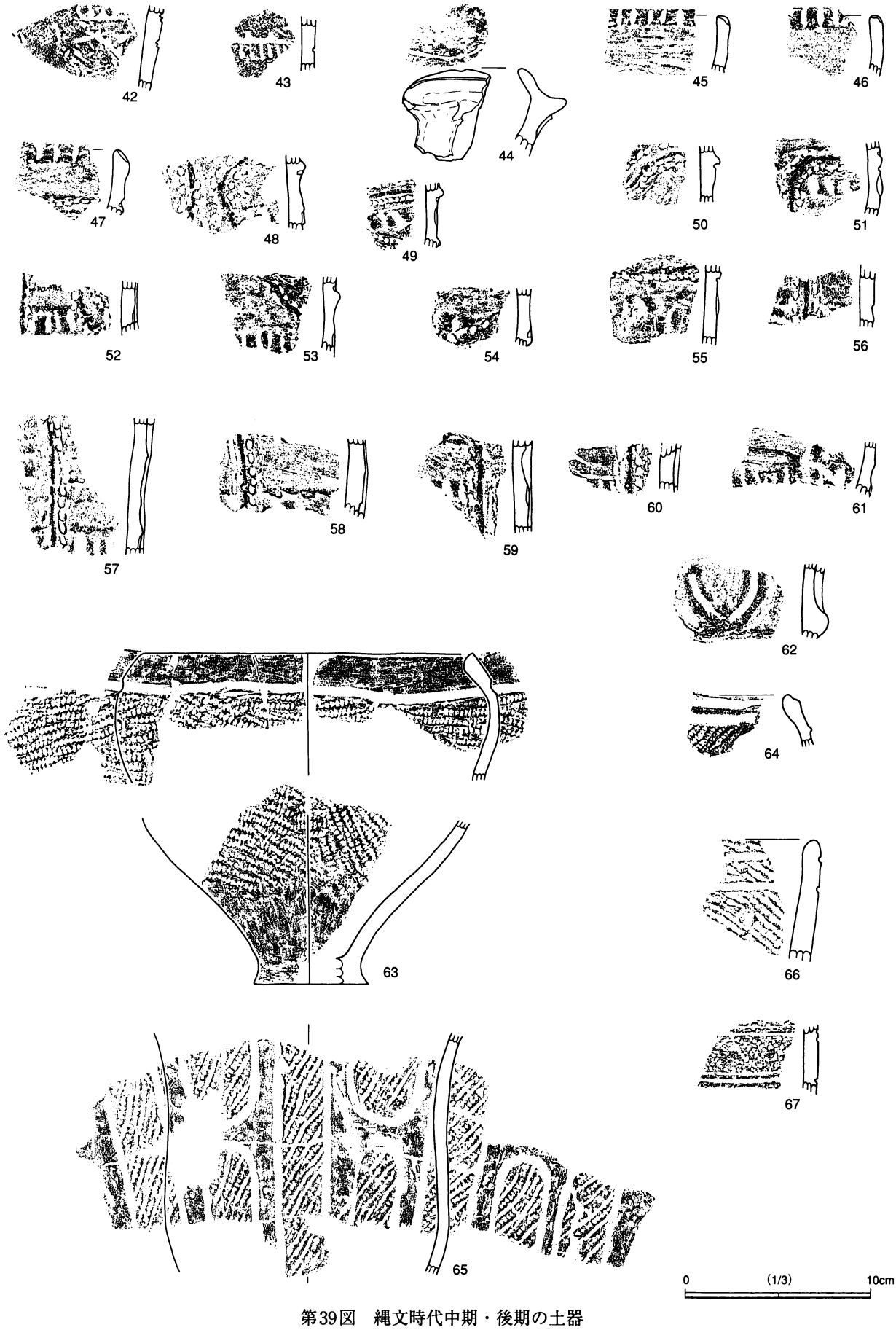
62は，隆帯によって楕円形の文様を描き，なぞるように沈線が施されている。胎土には雲母などは含まれず，焼成は良好である。

第８群　縄文時代中期後葉以降の土器（第39・40図，図版17）

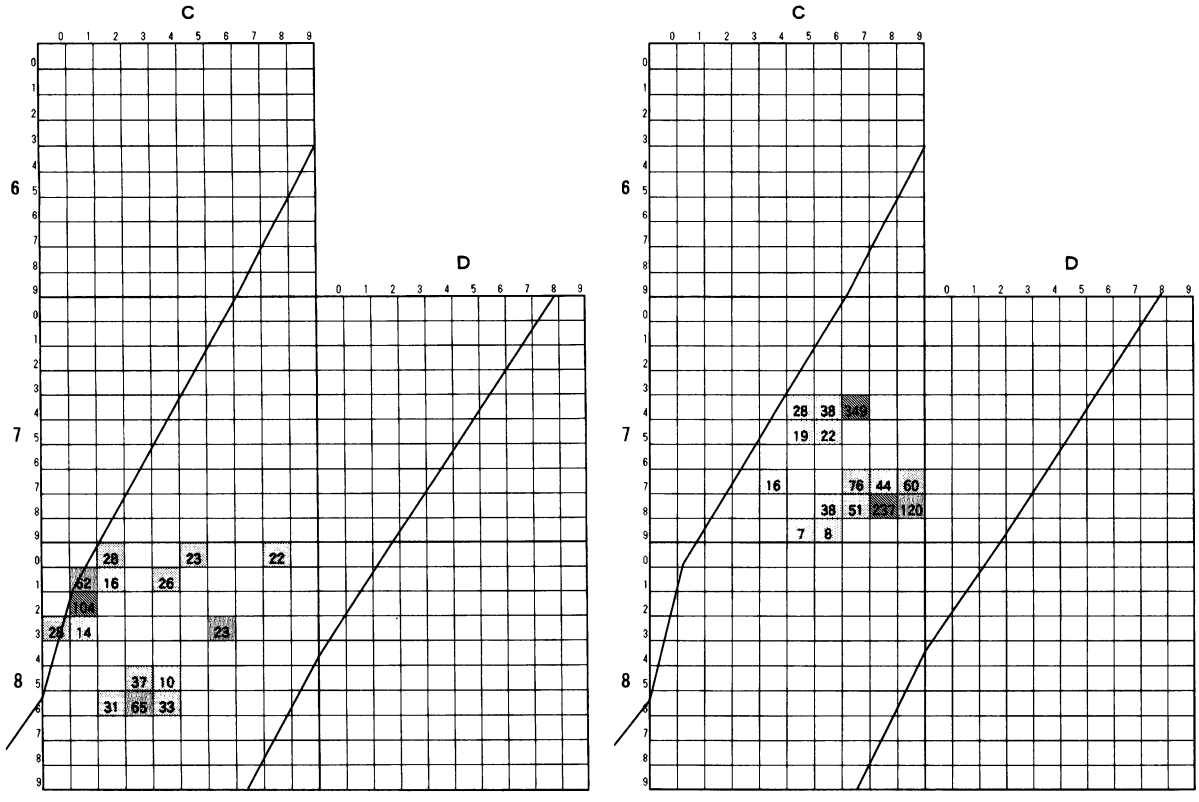
①加曽利Ｅ式土器（第39図，図版17）

63～65は，加曽利Ｅ式に比定される資料である。

63は，胴部は一部欠けるが，器形が復元できる個体である。口唇部直下に横方向の沈線が施され，胴部



第39図　縄文時代中期・後期の土器



阿玉台式　　加曽利E式

第40図　縄文時代中期土器の分布（単位はｇ）

には，単節縄文が見られる。焼成は良好である。

64は，口縁部破片で，緩い波状口縁となり，口唇部下には横方向の微隆起線文が見られる。また胴部にも弧状の微隆起線文が施される。

65は，胴部破片である。単節の縄文を地文とし，沈線により文様を区画し，無文部分をつくり出している。

これらの資料は，加曽利ＥⅢ式の新しい段階から加曽利ＥⅣ式に属する資料であると考えられる。

②堀之内式土器（第39図，図版17）

66，67は堀之内式土器に比定される資料である。66は口縁部破片で，口唇部下に２本の横方向の沈線が見られる。67は胴部破片であるが，同じく横方向の沈線が確認できる。色調は褐色で，焼成は良好である。

（2）石器・礫（第41図～第47図，第11～13表）

今回の調査において，縄文時代に属する石器・礫は257点出土した。この中で，石鏃，石斧，敲石，磨石，石皿などの定型的な器種，剥片，石核などを石器として取り扱い，自然の状況に近い円礫，焼けた礫，割れた礫などは礫群を構成する礫として取り扱った。

剥片・石核と割れた礫との境界は，明瞭ではなく，一度割っただけのチャート礫や，薄く剥離した砂岩礫なども存在するが，チャートの礫については，明確に剥片を採取する目的とみられる剥離がなく，節理などで割れているものは礫として扱い，砂岩は使用痕などが見られるもの以外は礫として扱うことにした。また，敲石，磨石といった器種についても，円礫との境界は不明瞭であったが，使用痕が顕著に見られないものは礫として扱った。以上のように，石器と礫の境界はあくまで便宜的なものであることを最初に断っておきたい。

1）図示した石器

今回石器として取り上げた資料は97点，総重量は3,769ｇである。内訳は石鏃が6点，楔形石器が7点，スクレイパーが1点，調整のある剥片が3点，石核が5点，剥片が63点，礫石斧が1点，磨製石斧が1点磨石・敲石が4点，石皿が1点であった。これらの中から28点を図示した。

それれの個体の器種，石材，サイズなどについては表で示したので詳しくは述べない。図示したものの中で特徴的な事柄については，以下に簡単に述べることにする。

①石鏃（第41図，図版18）

チャート，珪質頁岩，安山岩，黒曜石製のものが見られる。1～4は，基部に抉りが入り，両側縁がわずかに内湾する形態である。5，6は幅に対し長さが短く，基部の抉りが浅いタイプである。1，3，6がチャート製，2が珪質頁岩製，4が安山岩製，5が黒曜石製である。

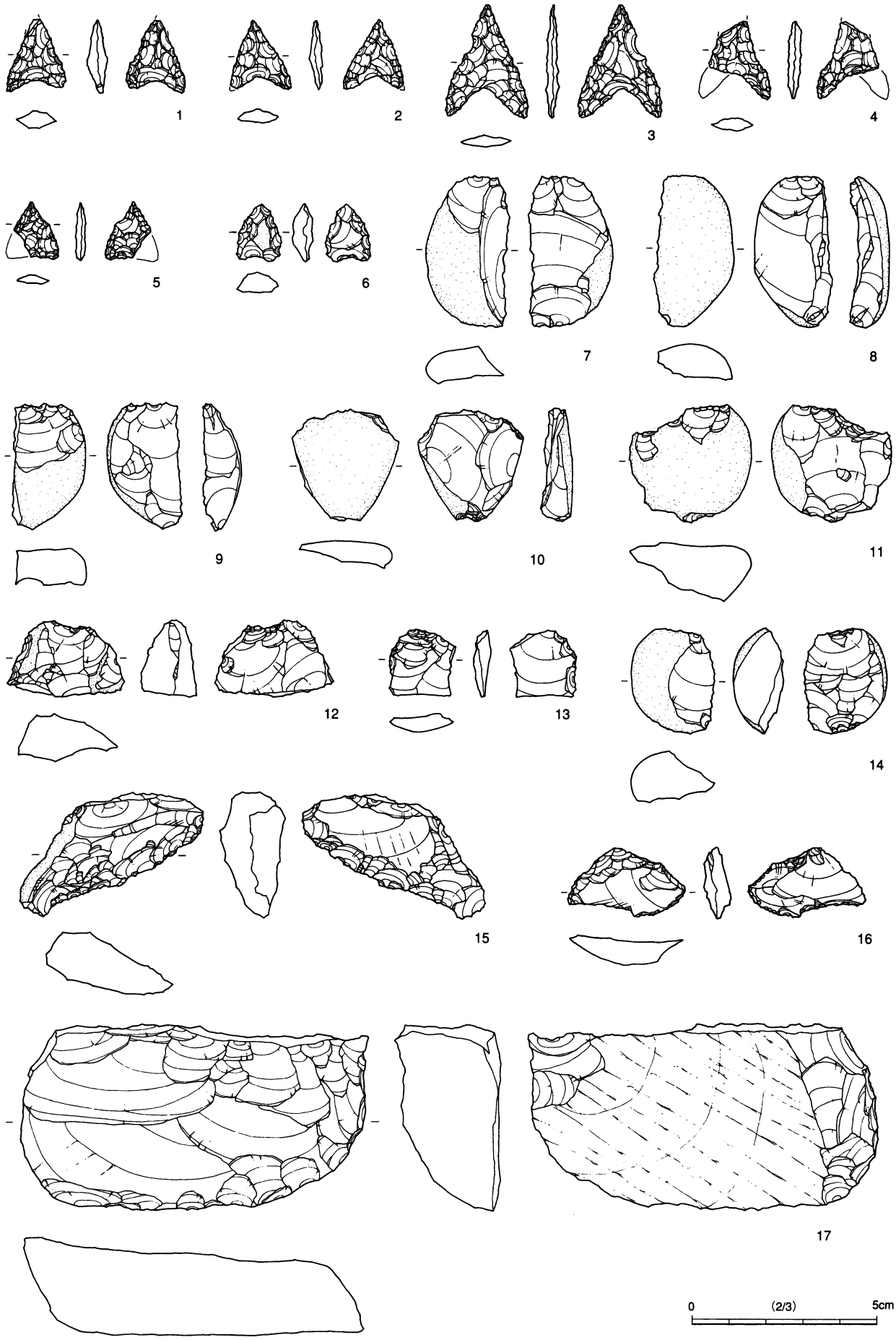
②楔形石器（第41図，図版18）

これらは，楔形石器としたが，いずれも楔の用途で用いられた可能性は低い。小さな円礫から両極打法によって小さな剥片を採取した結果に生じた「両極石核」であると考えられる。いずれもチャート製で，12以外は，径約40㎜の円礫を素材としている。

7～9，14は，打撃を加える位置を動かさずに，両極打法による打撃を加えているものと見られる。7，8は，細かい節理が入り組んだ礫を素材としているため，複雑な剥離面を形成している。10はレイアウトした軸と直行する方向にも両極打法による剥離が見られることから，打つ位置を変えながら，打撃を加えていたものと考えられる。11は，同一方向ではあるが，打点をずらしながら打撃を加えている。12も，打点位置を変えながら両極打法により剥片が採取された石核であると考えられる資料で，図下端が節理に沿って折れている。

③調整の加えられた剥片，使用痕のある剥片（第41図，図版18）

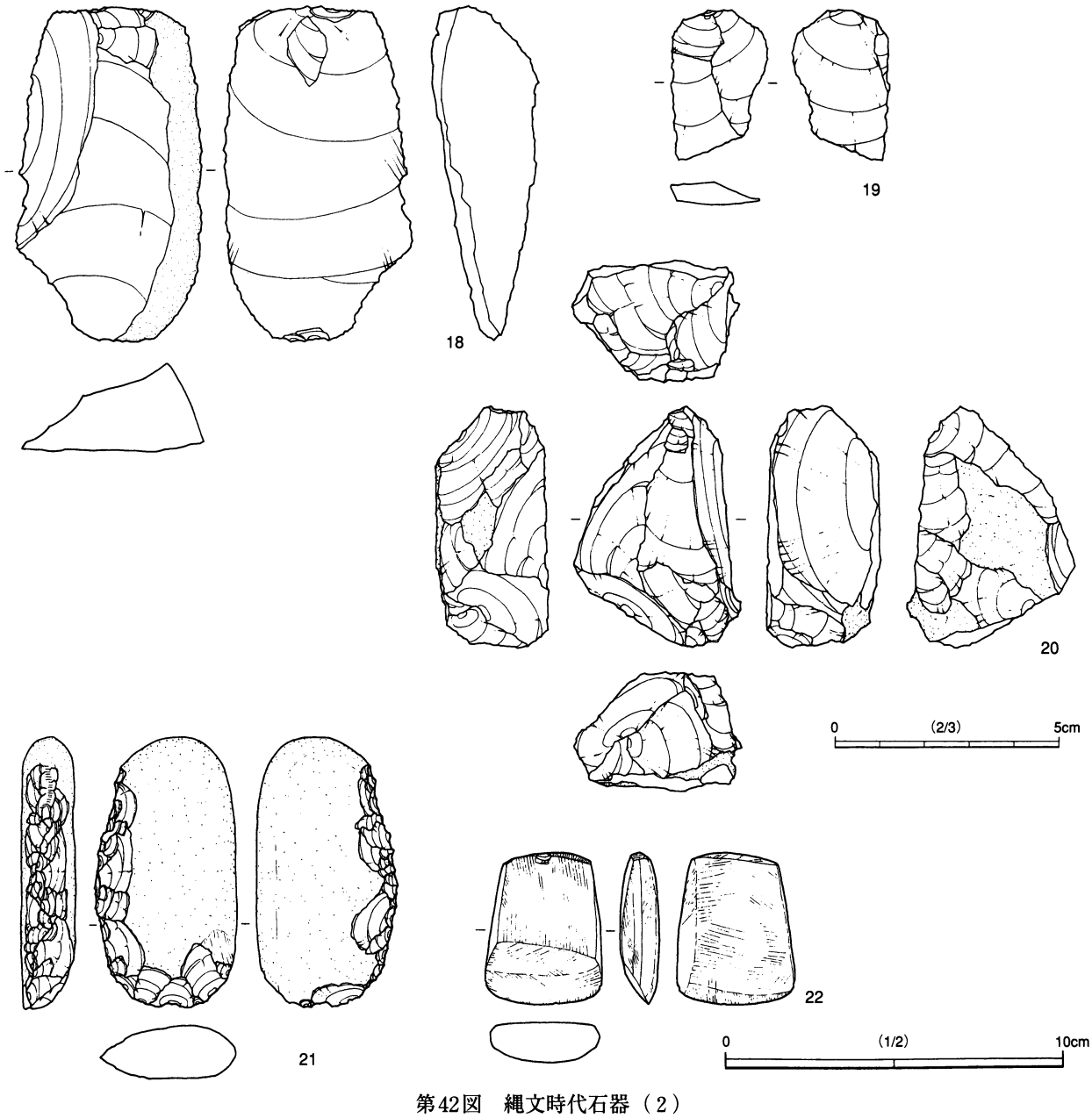
13，15が調整の加えられた剥片，16が使用痕とみられる微細剥離のある剥片である。13は黄褐色の珪質頁岩製で，15，16が黒曜石製である。



第41図　縄文時代石器（1）

13は小型の剥片で，背面からみて左側縁に微細な剥離が，背面，腹面の両面に見られる。下部が切断もしくは折れにより欠損している。

15は，厚みのある幅広の剥片を利用しており，図下部に示した部分に直線的な刃部を作り出している。刃部の右半分は表裏交互に剥離を施しているのに対し，左半分は裏面からのみ打撃によって調整されている。刃部の右端付近は潰れており，使用痕跡の可能性がある。



第42図　縄文時代石器（2）

16もやはり，幅広の剥片を利用したもので，裏面の左側上部から下部右側にかけて刃こぼれ状の微細な剥離が確認できる。

④スクレイパー（第41図，図版18）

17は，比較的大型の石器で，泥岩の分厚い素材を成形したもので，スクレイパーとした。図上面と図裏面は節理に沿って剥落した痕跡である。図表面の，下部から右側縁，裏面の右側縁には押圧剥離により厚い刃部を作り出している。表面は風化が激しく，剥離の稜線は不明瞭な部分も多い。

⑤石核・剥片（第42図，図版18）

20は石核である。石材は安山岩で，原礫面はわずかに残すのみである。石材を回転させながら一回ごとに打面を変えて小型の剥片を採取している。

18，19は剥片である。18は大型のチャート製の剥片で，背面には下方向や左方向からの剥離が見られ，20に見られたように打面を変えながら剥片を採取したことが伺える。当遺跡出土のチャート製剥片は小型のものがほとんどで，この資料はその中で，とびぬけて大きなものである。

19は凝灰岩製で，背面の剥離の方向は腹面の剥離の方向と同一である。

⑥礫石斧・磨製石斧（第42図，図版18）

21は礫石斧である。図下部から左側縁にかけて剥離が見られ，刃部が形成されている。下部は表面のみの調整であるのに対し，左面は表裏両面からの剥離が見られる。左側の剥離部の上端は刃部が潰れている。硬質砂岩製である。

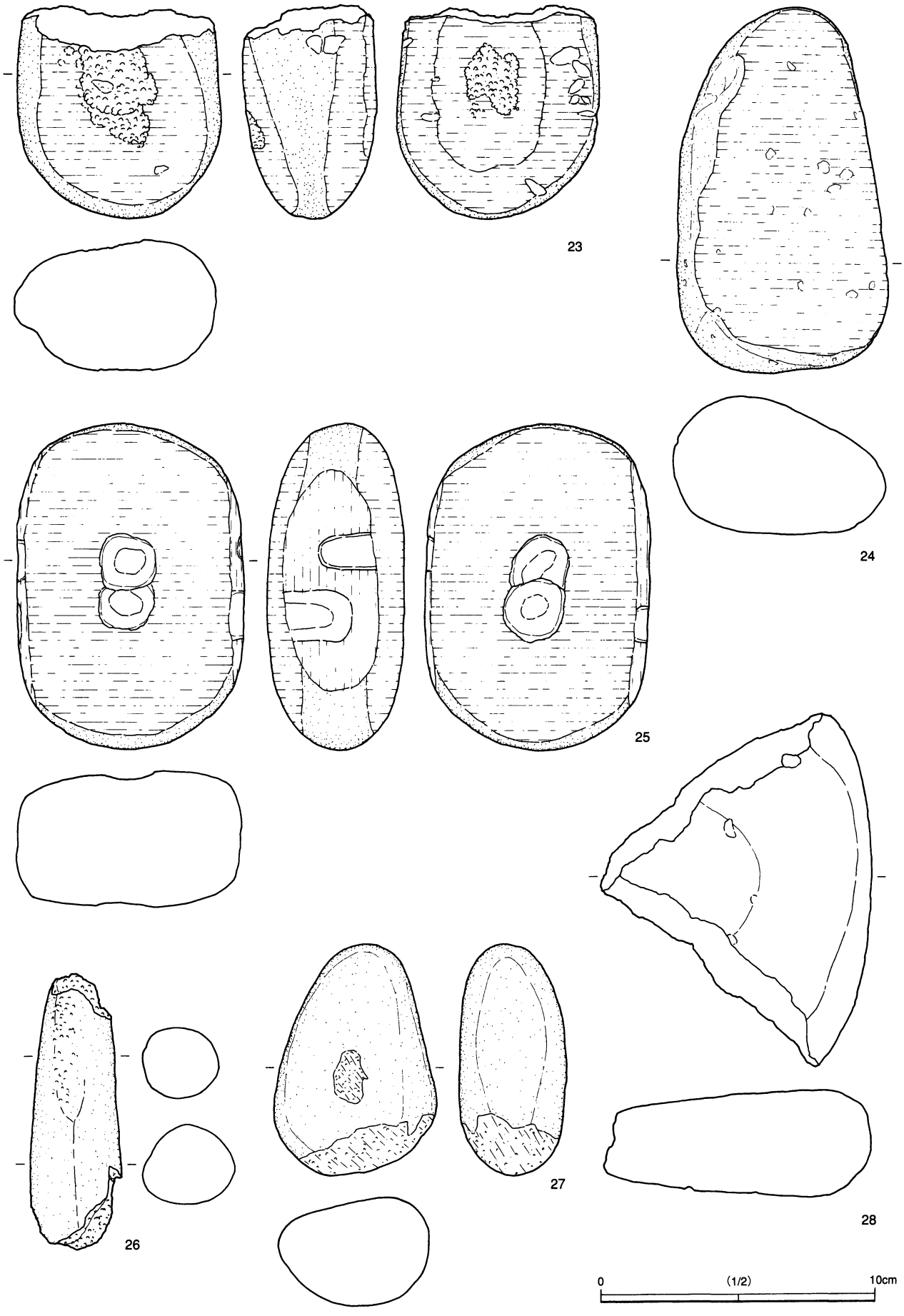
22は磨製石斧である。比較的薄く扁平で，幅と比較して短い片刃の石斧である。上端に小さな剥離が見られる他は，欠損などが見られない。

⑦敲石・磨石・石皿（第43図，図版19）

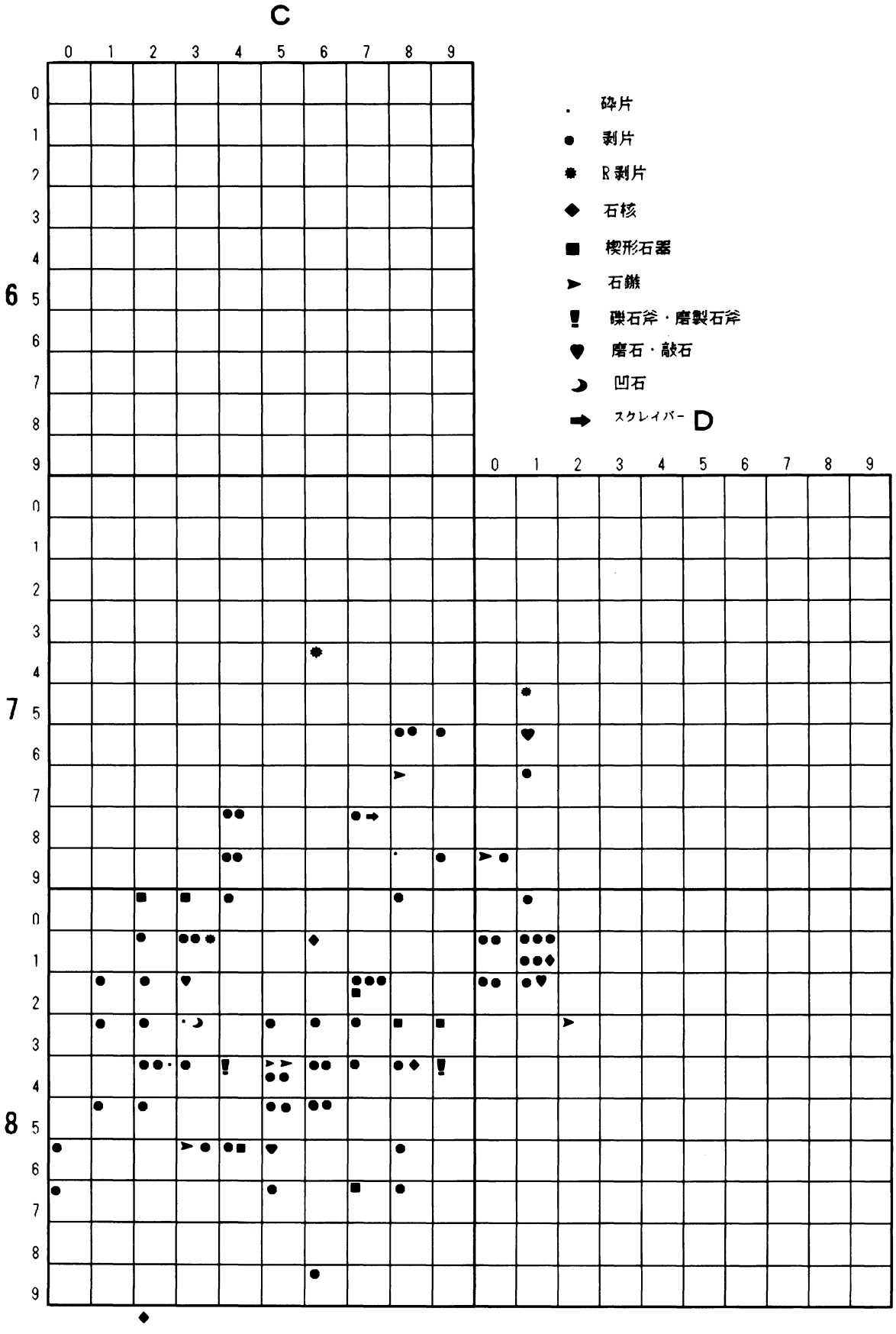
23はやや扁平な礫の中央部を敲打部とする敲石で，図表面，裏面ともに磨石としても利用されており，よく磨かれている。25は礫の比較的平坦な面を磨り面とした磨石である。25は23と同様の構造であるが，両側縁も良く磨られ，平坦になっている。図の表裏面および側面に見られる窪みは，敲石に見られる敲打痕のような凹凸は見られず，形が整っている。

26，27は敲石である。26は被熱しており，上端部，下端部の敲打部が風化している。27はチャートの円礫で，図下端および平坦部中央に敲打痕が見られる。

28は石皿の1／4ほどの破片である。多孔質の安山岩を使用しており，表面の窪みは浅く，不明瞭である。



第43図　縄文時代石器（3）



第44図　縄文時代石器の分布

2）石器の分布と組成（第44図・第45図，第11表）

①石器の分布（第44図）

石器は，遺物包含層調査を行った範囲に散漫に分布し，最も密に分布するＤ８－11グリッドでも６点に止まっている。器種ごとに見ても，著しい偏りや特定器種の集中は確認できず，石器製作跡のような石核，剥片，砕片が集中するようなエリアも確認できない。

②石器の組成（第45図，第11表）

剥片石器における器種ごと，石材ごとの組成を見ると，器種ごとの組成では，剥片が最も多く，点数では約80％，重量でも約60％に達し，そして楔形石器，石核がそれに続く。石材の組成では，チャートが最も多く，点数・重量ともに約40％に達する。それに次ぐのが黒曜石で，点数においては約15％程度，重量では10％弱程度である。点数で見ると珪質頁岩がこれらに次ぐ地位を占めているが，小型のものが多いため，重量は小さい。

第11表　新井堀Ⅱ遺跡　縄文時代石器組成表

石器組成表（点数）

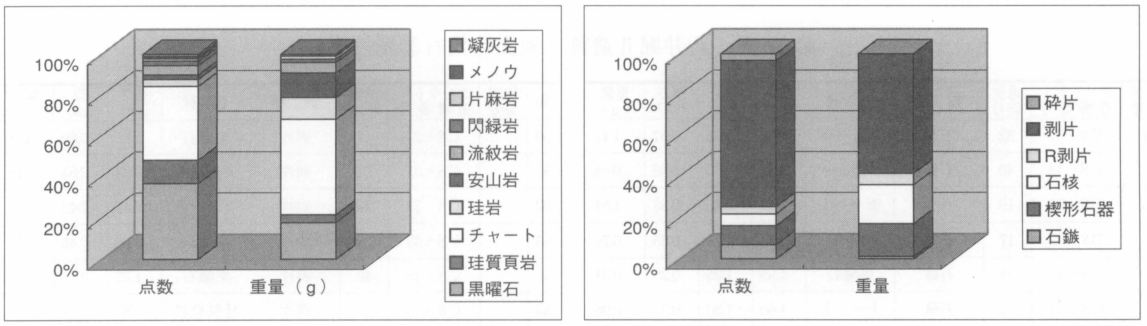
器　　種	黒曜石	珪質頁岩	チャート	珪岩	ホルンフェルス	安山岩	流紋岩	閃緑岩	砂岩	片麻岩	メノウ	凝灰岩	石英斑岩	泥岩	緑色凝灰岩	合計
石鏃	1		5													6
スクレイパー														1		1
楔形石器		1	7													8
石核	3		1			1										5
R剥片	3															3
剥片	23	8	19	3		1	4	2		1	1	1				63
砕片	2	1														3
磨製石斧															1	1
礫石斧									1							1
敲石・磨石・凹石			1		1				2				1			5
石皿						1										1
	32	10	33	3	1	3	4	2	3	1	1	1	1	1	1	97

石器組成表（重量ｇ）

器　　種	黒曜石	珪質頁岩	チャート	珪岩	ホルンフェルス	安山岩	流紋岩	閃緑岩	砂岩	片麻岩	メノウ	凝灰岩	石英斑岩	泥岩	緑色凝灰岩	合計
石鏃	0.31		5.07													5.38
スクレイパー														180.91		180.91
楔形石器		1.49	75.15													76.64
石核	20.6		15.53			55.04										91.17
R剥片	27.45															27.45
剥片	37.17	16.1	131.03	52.06		3.47	25.5	7.87		8.26	0.52	3.85				285.83
砕片	0.11	0.31														0.42
磨製石斧															30.28	30.28
礫石斧									83.36							83.36
敲石・磨石・凹石			270.09		860				896.15				415.41			2441.65
石皿						545.61										545.61
	85.64	17.9	496.87	52.06	860	604.12	25.5	7.87	979.51	8.26	0.52	3.85	415.41	180.91	30.28	3768.7

第12表　新井堀Ⅱ遺跡　縄文時代石器属性表

No.	挿図番号	グリット・遺構番号	遺物番号	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
1	1	C7－77	32	石鏃	チャート	2.05	1.66	0.57	1.11
2	2	C8－45	40	石鏃	チャート	1.92	1.65	0.38	0.68
3	3	D7－90	19	石鏃	チャート	3.15	2.30	0.35	1.51
4	4	D8－32	17	石鏃	チャート	2.15	1.70	0.35	0.79
5	5	C8－45	24	石鏃	黒曜石	1.55	1.25	0.28	0.31
6	6	C8－63	4	石鏃	チャート	1.60	1.20	0.53	0.98
7	7	C8－02	37	楔形石器	チャート	4.10	2.30	1.30	10.43
8	8	C8－03	19	楔形石器	チャート	4.10	2.15	1.08	12.13
9	9	C8－56	19	楔形石器	チャート	3.40	2.05	1.05	9.93
10	10	C8－38	6	楔形石器	チャート	3.05	2.90	0.90	7.46
11	11	C8－27	13	楔形石器	チャート	3.22	3.30	1.60	16.21
12	12	C8－39	19	楔形石器	チャート	2.15	3.40	1.50	8.93
13	13	C8－65	8	楔形石器	珪質頁岩	1.80	2.00	0.45	1.49
14	14	C8－77	13	楔形石器	チャート	2.84	2.25	1.37	10.06
15	15	C8－13	31	R剥片	黒曜石	3.40	5.00	1.75	18.36
16	16	D7－51	12	R剥片	黒曜石	1.90	3.20	0.75	3.57
17	17	C7－87	14	スクレイパ	ホルンフェルス	5.40	9.46	2.90	180.91
18	18	C8－75	4	剥片	チャート	7.40	4.20	2.45	63.96
19	19	D8－10	24	剥片	凝灰岩	3.31	2.18	5.90	3.85
20	20	D8－11	19	石核	安山岩	5.37	2.55	3.76	55.04
21	21	C8－44	22	礫石斧	硬質砂岩	7.92	4.21	1.60	83.36
22	22	C8－49	21	磨製石斧	緑色凝灰岩	4.50	3.50	1.20	30.28
23	23	D7－61	3	磨石	石英斑岩	7.95	7.55	4.93	415.41
24	24	C8－23	15	磨石	砂岩	13.58	7.80	5.07	760.00
25	25	C8－33	21	凹石	ホルンフェルス	11.90	8.40	5.00	860.00
26	26	C8－66	22	敲石	砂岩	10.05	3.40	2.97	136.15
27	27	D8－21	9	磨石・敲石	チャート	8.50	6.00	4.00	270.09
28	28	表採	1	石皿	安山岩	12.85	9.90	4.55	545.61
29		C7－47	25	R剥片	黒曜石	2.20	2.10	0.61	5.52
30		C7－68	52	剥片	黒曜石	1.12	0.64	0.24	0.21
31		C7－68	47	剥片	黒曜石	2.64	2.53	0.92	5.01
32		C7－69	3	剥片	黒曜石	2.32	1.35	0.35	1.11
33		C7－84	24	剥片	チャート	3.82	2.08	0.84	6.37
34		C7－84	23	剥片	流紋岩	3.97	2.89	0.81	12.48
35		C7－87	11	剥片	チャート	1.90	1.11	0.33	1.00
36		C7－94	13	剥片	黒曜石	1.03	0.66	0.38	0.29
37		C7－94	34	剥片	黒曜石	1.60	0.79	0.56	0.79
38		C7－98	7	砕片	黒曜石	0.98	0.46	0.16	0.07
39		C7－99	7	剥片	黒曜石	3.00	1.81	0.86	4.25
40		C8－04	35	剥片	チャート	2.32	1.49	0.63	2.81
41		C8－08	20	剥片	流紋岩	1.57	0.77	0.42	0.78
42		C8－12	35	剥片	閃緑岩	1.86	1.24	0.70	1.36
43		C8－13	14	剥片	チャート	2.50	1.77	0.40	2.17
44		C8－13	51	剥片	チャート	1.96	1.38	0.15	0.84
45		C8－16	78	石核	黒曜石	2.96	1.97	1.28	9.28
46		C8－21	13	剥片	チャート	1.92	1.31	1.01	2.62
47		C8－22	34	剥片	黒曜石	2.19	0.85	0.52	1.43
48		C8－27	1	剥片	チャート	2.33	1.47	0.39	2.66
49		C8－27	18	剥片	黒曜石	1.21	1.09	0.13	0.23
50		C8－27	7	剥片	黒曜石	1.15	0.80	0.26	0.20
51		C8－31	31	剥片	チャート	3.03	2.63	0.78	8.33
52		C8－32	28	剥片	チャート	2.47	1.42	0.40	1.51
53		C8－33	6	砕片	黒曜石	0.66	0.46	0.16	0.04
54		C8－35	47	剥片	黒曜石	1.73	0.93	0.26	0.37
55		C8－36	7	剥片	珪質頁岩	1.83	1.44	0.22	0.85
56		C8－37	3	剥片	チャート	2.52	2.04	0.24	1.15
57		C8－42	11	砕片	珪質頁岩	0.99	0.78	0.22	0.31
58		C8－42	64	剥片	珪質頁岩	1.12	1.03	0.17	0.40
59		C8－42	5	石核	黒曜石	1.76	1.53	1.05	4.45
60		C8－42	50	剥片	閃緑岩	2.57	2.08	1.08	6.51
61		C8－43	13	剥片	流紋岩	3.24	3.20	1.09	10.57
62		C8－45	14	剥片	珪質頁岩	2.96	2.26	0.64	5.30
63		C8－45	21	剥片	黒曜石	1.34	0.97	0.32	0.46
64		C8－46	32	剥片	珪質頁岩	2.85	2.07	0.38	4.76
65		C8－46	20	剥片	珪質頁岩	1.87	1.14	0.15	0.48
66		C8－47	42	剥片	黒曜石	1.18	0.53	0.30	0.19
67		C8－48	12	剥片	チャート	2.21	1.19	0.53	1.76
68		C8－48	2	石核	チャート	3.09	2.13	1.58	15.53
69		C8－51	12	剥片	黒曜石	3.58	1.42	0.66	2.49
70		C8－52	14	剥片	黒曜石	2.88	1.15	1.05	4.01
71		C8－55	31	剥片	チャート	2.50	2.07	0.43	3.92
72		C8－55	40	剥片	珪質頁岩	2.01	1.67	0.72	3.01
73		C8－56	9	剥片	珪質頁岩	2.04	1.41	0.27	0.96
74		C8－56	34	剥片	黒曜石	2.74	1.45	1.14	3.43
75		C8－59	22	剥片	チャート	1.76	1.34	0.30	0.96
76		C8－60	5	剥片	片麻岩	3.81	2.23	0.79	8.26
77		C8－63	8	剥片	チャート	2.40	0.98	0.51	1.64
78		C8－64	20	剥片	黒曜石	2.84	1.72	0.66	4.14
79		C8－65	16	剥片	チャート	1.67	1.13	0.23	0.51
80		C8－68	5	剥片	黒曜石	1.44	1.02	0.32	0.47
81		C8－70	5	剥片	メノウ	1.74	0.92	0.30	0.52
82		C8－78	4	剥片	黒曜石	2.94	1.67	0.85	4.52
83		C8－96	8	剥片	安山岩	2.91	0.45	0.60	3.47
84		C9－02	4	石核	黒曜石	2.87	1.90	1.37	6.87
85		D7－71	16	剥片	黒曜石	1.53	1.43	0.53	1.14
86		D7－90	25	剥片	黒曜石	1.83	1.21	0.64	1.04
87		D8－01	6	剥片	黒曜石	1.49	1.22	0.47	0.83
88		D8－10	7	剥片	黒曜石	1.11	0.58	0.22	0.10
89		D8－11	7	剥片	珪質頁岩	1.45	0.71	0.20	0.34
90		D8－11	25	剥片	珪岩	2.95	1.58	1.33	6.57
91		D8－11	13	剥片	チャート	5.85	4.57	0.66	19.51
92		D8－11	21	剥片	珪岩	2.21	1.87	0.57	2.68
93		D8－11	27	剥片	流紋岩	3.23	1.09	0.30	1.67
94		D8－20	15	剥片	珪岩	8.76	3.64	1.10	42.81
95		D8－20	28	剥片	チャート	2.14	1.77	0.30	1.62
96		D8－21	5	剥片	黒曜石	1.44	1.47	0.22	0.46
97		SD－001	1	剥片	チャート	3.77	1.65	0.99	7.69



第45図　縄文時代剥片石器の組成

3）礫群（第46図・第47図）

調査区南側の遺物包含層を調査した範囲から礫群が検出されている。出土した礫の総量は160点，重量8,537ｇに上った。礫は，完形のもの，割れたもの（破損したもの）があり，さらにこれらの中で焼けたものと焼けていないものが存在する。

礫群を構成する石材は，第13表で示した９種類が確認できた。

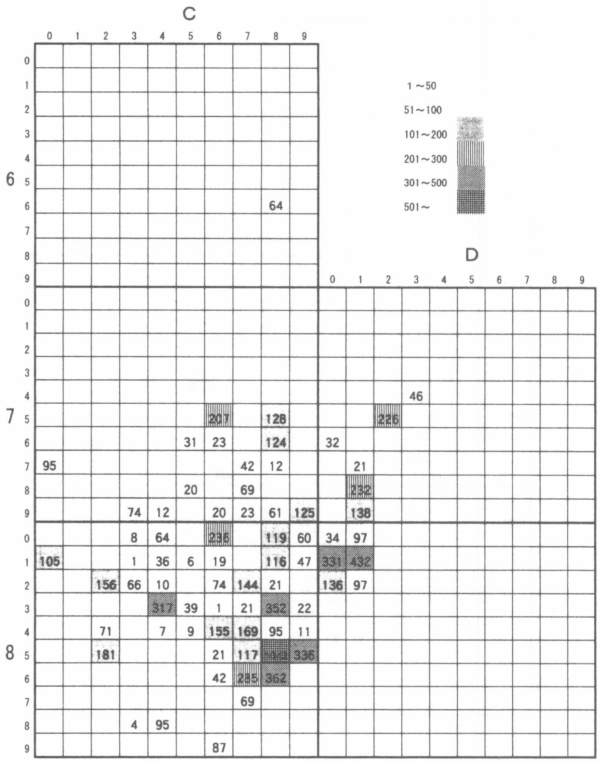
①礫の組成（第13表）

礫群の礫の石材による組成は，重量で見ると，流紋岩が最も多く約40％にのぼり，砂岩がそれに次ぎ，約30％である。やや少なくなってホルンフェルス，安山岩チャートが10％前後含まれる。破損状況，焼けた状況を見ると，約75％が破損しており，完形のものより多い。焼けた礫の割合は，全体の約20％程度で，そのなかでも完形のものは少なく，破損しているものが多い。しかし破損した礫の中でも焼けたものの割合は約30％程度で，決して多くはない。

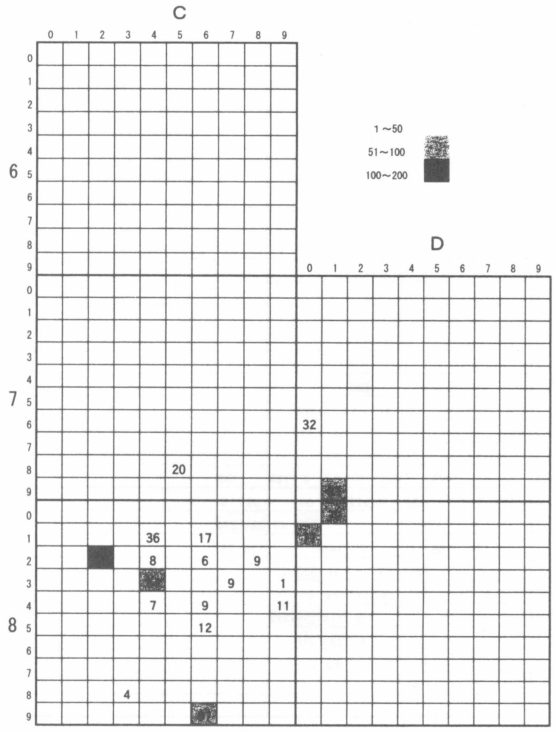
石材ごとの破損状況や焼け方を見た場合，砂岩，流紋岩においては破損礫が多く，完形礫が少ないことと，完形礫で焼けているものがほとんど見られないという点で似た傾向にあるのに対し，チャート，ホルンフェルスにおいては，焼け礫の割合が小さく，かつ完形礫の比率が大きい。

②礫の分布（第46図・第47図）

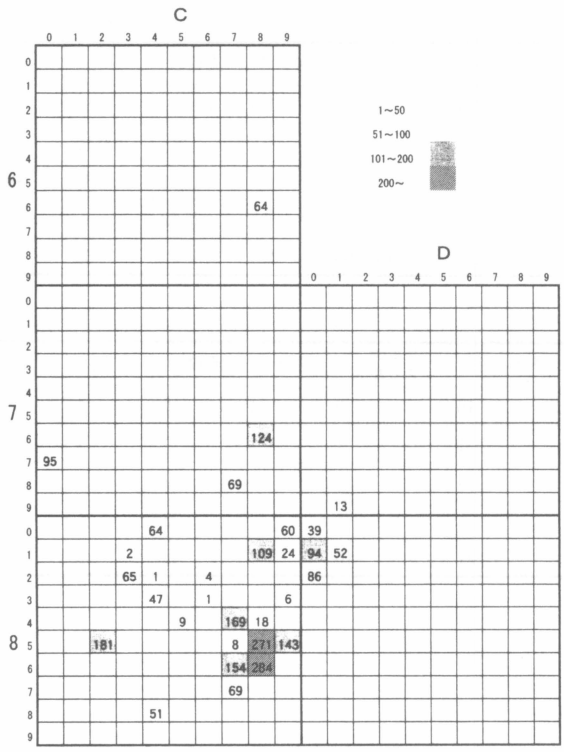
全体的な礫の分布をみると，調査区南側に比較的集中する傾向がある。石材ごとの傾向としては，砂岩と流紋岩において類似した分布傾向があるのに対し，チャートは，やや中央よりに分布し，異なった傾向を示す。



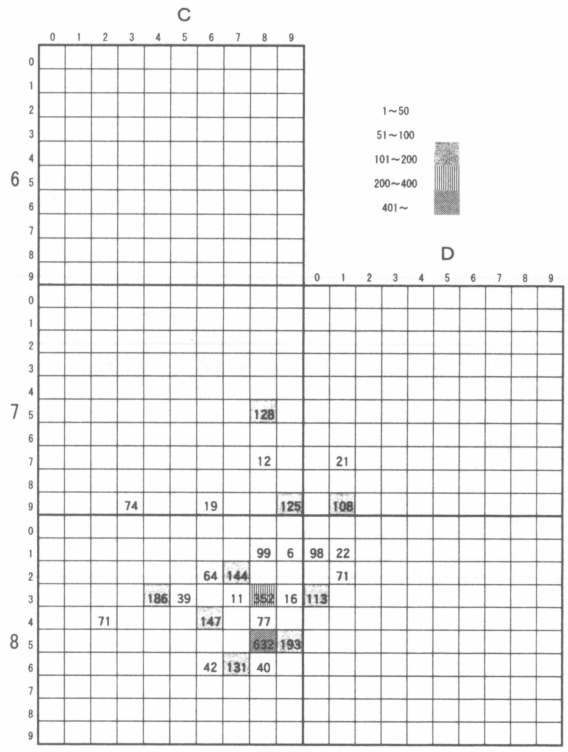
全　体



チャート

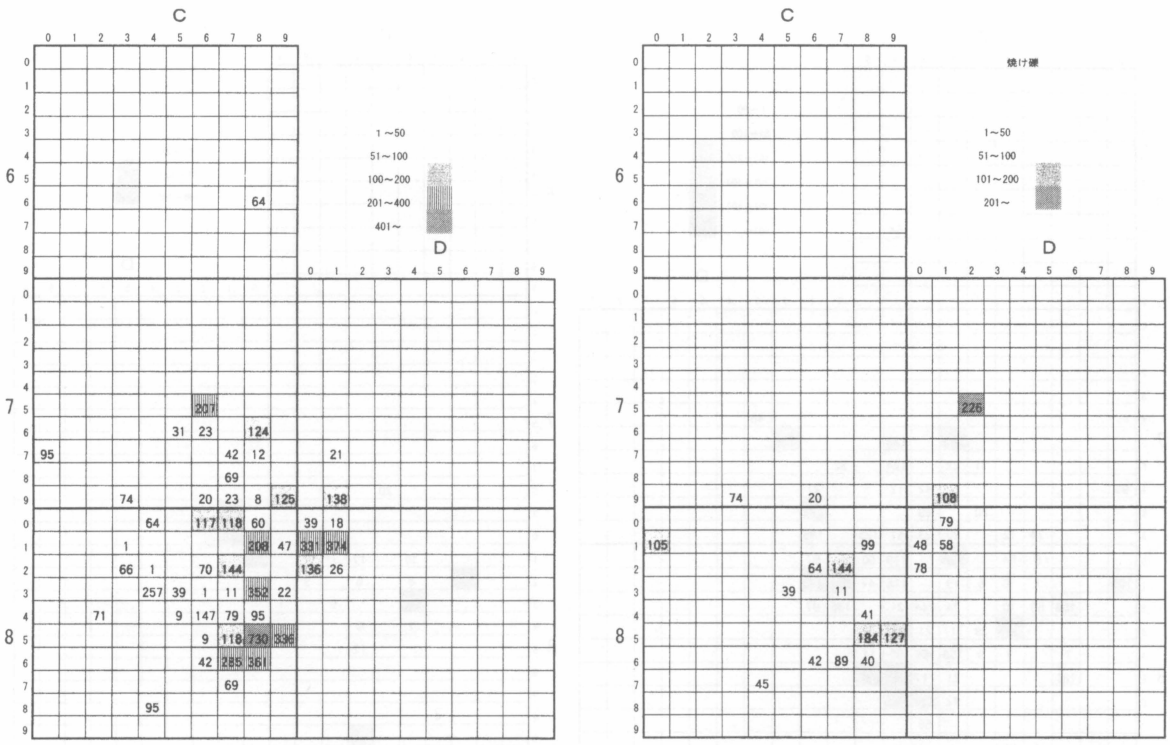


砂　岩



流紋岩

第46図　石材別にみた縄文時代の礫の分布（単位はｇ）



割れ礫　　焼け礫

第47図　縄文時代礫群における破損礫・焼け礫の分布（単位はｇ）

第13表　新井堀Ⅱ遺跡　縄文時代礫群組成表

重量（g）

	石材	安山岩	花崗岩	凝灰岩	黒色軽石	砂岩	チャート	ホルンフェルス	メノウ	流紋岩	不明	小計
完形						322.52	432.4	473.77	2.21	586.59	7.82	1825.31
	被熱						78.55	57.69			105.16	241.4
破損		569.17	10.25	251.89	22.82	1752.32	170.29	478.79		1641.11	44.67	4941.31
	被熱	207.09				351.63		25.68		925.42		1509.82
小計		776.26	10.25	251.89	22.82	2426.47	681.24	1035.93	2.21	3153.12	157.65	8517.84

点数

	石材	安山岩	花崗岩	凝灰岩	黒色軽石	砂岩	チャート	ホルンフェルス	メノウ	流紋岩	不明	小計
完形						4	16	6	1	5	1	33
	被熱						1	1			1	3
破損		1	1	3	1	49	4	7		21	3	90
	被熱	5				5		1		23		34
小計		6	1	3	1	58	21	15	1	49	5	160

第3節　まとめ

1　旧石器時代

文化層の概要については，第1表の文化層対応表のとおりである。文化層は，第Ⅰ文化層～第Ⅳ文化層の4文化層に分離できた。特に，第Ⅰ文化層は黒曜石やチャートを主体とした小型石器群であり，注目される石器群といえよう。

（1）第Ⅰ文化層の石器群

Ⅹ層上面に生活面を持つと推定される。第1ブロックが相当する。器種組成の特徴は，台形様石器4点，楔形石器6点，楔形石器調整剥片3点で，これらの製品の占める割合（35.13%）がきわめて高い。石器のサイズは，最大長が2㎝以下のもので占められ，非常に小型の石器群である。石核は出土していない。石材組成の特徴は，黒曜石が15点（40.54%），チャートが18点（48.65%）で，黒曜石とチャートで大半を占める（89.19%）。石器製作技術は，黒曜石001やチャート001・002の母岩においては，一つの母岩から，台形様石器と楔形石器が生産されていることがうかがえる。特に，両極剥離を示す楔形石器や楔形石器調整剥片の占める割合が高いことから，両極剥離が多用されたことが推察される。台形様石器は，貝殻状の小型の剥片を素材として，素材の末端部と頭部に細かい調整加工や折断剥離が行われている。

類似する石器群として，下総台地においては，八千代市坊山遺跡第6文化層（大野1993）や佐倉市向山谷津遺跡下層（田村ほか1987）や佐倉市大林遺跡第7文化層（田村1989）の石器群があげられる。これらの石器群のなかで，坊山遺跡第6文化層は，黒曜石を主体とし，小型の台形様石器が量産されている点で最も類似する。向山谷津遺跡下層と大林遺跡第7文化層は，台形様石器・楔形石器・石錐などの小型の石器群と大型の礫器が伴う石器群であり，本文化層の石器群と多少異なる。他の台地においては，武蔵野台地では，武蔵台遺跡Ⅹａ文化層（横山・川口ほか1984）の石器群があげられる。黒曜石を主体として，折断剥離を多用している点で共通する。相模野台地においては，吉岡遺跡群D区B4下部（白石ほか1996）の石器群があげられる。黒曜石を素材とした台形様石器が出土している。

これらの石器群は，出土層位が，Ⅹ層上部から出土しており，黒曜石とチャートを主体としており，比較的小型の台形様石器を製作している。両極剥離が多用され，楔形石器の占める割合が高い。また，折断剥離も多くみられる。次の段階にみられる環状ブロックを形成する石器群と内容が異なる。

編年的位置づけは，下総台地田村・橋本編年（田村・橋本1987）の第Ⅰ期，相模野台地諏訪間編年（諏訪間1989・2001）の段階Ⅱに位置づけられる。

（2）第Ⅱ文化層の石器群

Ⅸｃ層上部に生活面を持つと推定される。第2ブロックと第3ブロックの2箇所のブロックが相当する。第2ブロックと第3ブロックにおいて接合関係はみられず，共有する母岩もみられないことから，同時期に形成された可能性は低い。

器種組成の特徴は，ナイフ形石器を主体とする。基部加工のナイフ形石器として捉えられるものが2点出土している。縦長の剥片を素材として，打面部を基部に設置して，基部に粗い平坦な調整加工が施され

ている。局部磨製石斧再生剥片が1点出土している。石材組成の特徴は，第2ブロックはチャートを主体（62.5%）とし，第3ブロックは多種の石材で構成される。なかでも，第2ブロックから出土したナイフ形石器は，下総台地ではあまりみられない石材で，石質は緑色を基調として，部分的に黒色鉱物が帯状に入りこんでいる。肉眼観察ではあるが，相模野台地や武蔵野台地においてX層・Ⅸ層から出土するチャートの石材に類似する。

類似する石器群として，下総台地においては類似する石器群が少なく，佐倉市大林遺跡第6文化層第41ブロック（田村1989）や荒久遺跡下層石器群第3ブロック（田村1989）があげられる。相模野台地においては，吉岡遺跡群A区B4上部（砂田ほか1996）があげられる。類似する石器群は，他の台地においても少なく，石器群の位置づけを明確に行うことが困難な石器群といえる。編年的位置づけは，下総台地田村・橋本編年のⅡa期新段階に位置づけておく。

（3）第Ⅲ文化層の石器群

Ⅶ層に生活面を持つと推定される。第4ブロックが相当し，7点の出土である。器種組成は楔形石器の占める割合が非常に高い。石材組成は，頁岩・黒曜石・チャートが用いられている。出土点数が少ないが，類似する石器群としては，黒曜石が用いられ，楔形石器が多く生産されていることから，多古町千田台遺跡遺跡（矢本1996）があげられる。編年的位置づけは，下総台地田村・橋本編年のⅡa期新段階に位置づけられる。

（4）第Ⅳ文化層の石器群

Ⅴ層に生活面を持つと推定される。第5ブロックが相当する。器種組成は製品が少なく，折断剥片の占める割合が極めて高い（84.62%）。石材組成はすべてガラス質黒色安山岩で構成される。編年的位置づけは，下総台地田村・橋本編年のⅡb期に位置づけられる。

2　縄文時代

新井堀Ⅱ遺跡からは，縄文時代の遺構として炉穴1基，炉跡1基，陥穴2基，土坑4基，古代以降の遺構として溝跡2条，道路跡1条が確認できた。またこれらの遺構以外に，縄文時代の遺物包含層が確認され，縄文時代早期前葉から中期にかけてのまとまった土器，礫群，石器が出土し，それらを報告することができた。以下に，これらの中で遺跡を特徴づける縄文時代の遺構，遺物について若干述べることにする。

（1）縄文土器

縄文時代早期前葉の撚糸文系土器は，夏島式，稲荷台式，花輪台式に属する資料が検出された。この中でも稲荷台式に属する資料が最も多く，他の資料は少量である。これらの分布状況は，比較的散漫であり，明確な集中地点を見いだすことが困難であった。早期から後期にわたり遺物包含層が形成されており，長い年月にわたる度重なる土地利用の結果，撹乱されている可能性もある。

沈線文系土器は，前葉の三戸式，中葉の田戸下層式，後葉の田戸上層式に属する資料が検出された。

これらの中で，特に注意する必要がある資料は，田戸下層式に属する沈線文系土器に押型文が施されている破片である。これまで千葉県内でも押型文土器と沈線文系土器が共伴する例は，木更津市久野遺跡な

ど，いくつか発見されているが，一つの土器片に両者が同居する例は知られてはいない。

田戸上層式に属する資料は，田戸上層式後葉の段階に位置づけられる資料であると考えられる。口唇部外面に沈線状の張り出しが見られ，上面に刻目が施される例がいくつか見られる。田戸上層式から子母口式にかけての時期は，実態があまり知られていなかったが，近年大作頭遺跡やヤジ山遺跡といった炉穴などを伴う遺物包含層が検出され，まとまった遺物量が出土している（加納1999，豊田2000）。これまで，当時期の土器は，文様が地味であるため報告されないケースが少なからずあったと考えられるが，まとまった資料の提示により，今後の認知度が高まることを期待したい。

条痕文系土器に属する資料は，条痕文系後葉の茅山上層式に比定されるものである。遺物量が多く，調査区内における分布に傾向を見いだすことは難しい。炉穴が1基検出されているが，調査区際であることから，調査区の西側に炉穴群が分布する可能性があろう。

縄文時代前期に属する資料としては，前期中葉の黒浜式，前期後葉の諸磯式，浮島式，そして前期末葉の土器が出土している。これらの中で注目すべきは前期末葉の土器群の存在であろう。この時期についても，田戸上層式期と同様に，資料が少ないために実態が明らかにされていないといってよい。この時期の土器も装飾性が弱く，地味なことから見過ごされていることが予想される。同様に注意が必要である。

（2）石器・礫群

1）石器

縄文時代の石器は，剥片を主体とする石器群で，定型的な石器としては，石鏃，磨製石斧，石皿などが検出されている。剥片石器の石材は黒曜石，チャートを主体とし，珪質頁岩，安山岩，メノウなどを含む。

石器の中には，石核が5点，楔形石器が8点含まれている。石核の石材は黒曜石が多く，チャート，安山岩が1点ずつ含まれる。いずれも1回打撃を加えるごとに打面を変えながら剥片を採取しており，縄文時代における一般的な剥片採取法を見ることができる。

一方，楔形石器については，ほとんどがチャートで，珪質頁岩を1点含む。これらの母岩は長径約5㎝の円礫であると考えられ，小円礫から剥片を採取するために両極打法が採用されたものと考えられる。これらのことから，新井堀Ⅱ遺跡では，剥片を採取するにあたり，石材や母岩の形態により二つの剥片採取技法が使い分けられた傾向が見られる。

これらの石器の時期は，各時期の遺物包含層が重複していることから，明確な時期を把握することは困難であった。当然，複数の時期の石器が混ざっている可能性も高く，今回の調査成果に見られる石器器種や石材の組成が，ある時期における石器の状況を直接示しているとは単純には言えない。

他の石器を見ると，石鏃は，基部に抉りが入る例で，前期以降に属するものと推測され，礫石斧は，早期のものの可能性が高い。

2）礫群

礫群も石器と同様に，その時期が特定しがたい。石材ごとに違った分布の傾向が見られることから，石材ごとに異なった時期のものである可能性も高い。石材は，斑岩，砂岩が主で，チャートがそれに次ぐ。チャートは楔形石器と類似した石材を用いているものも存在することから，これらの礫が剥片を採取するための母岩となった可能性もある。

礫群は，旧石器時代から縄文時代前期にかけて見ることができるが，特に縄文時代の資料については十分な研究が行われているとはいえず，今後も検討を続けてゆく必要がある。

［文献］

大野康男　1993『八千代市坊山遺跡』（財）千葉県文化財センター

加納　実　1999『東関東自動車道（千葉・富津線）埋蔵文化財調査報告書　―市原市大作頭遺跡―』（財）千葉県文化財センター

豊田秀治　2000　『東関東自動車道（千葉・富津線）埋蔵文化財調査報告書　―市原市中伊沢遺跡・百目木遺跡・下椎木遺跡・志保知遺跡・ヤジ山遺跡・細山（1）（2）遺跡―』（財）千葉県文化財センター

白石浩之ほか　1996『吉岡遺跡群Ⅱ』　かながわ考古学財団調査報告7

砂田佳弘ほか　1996『吉岡遺跡群Ⅰ』　かながわ考古学財団調査報告6

田村　隆・橋本勝雄　1987『房総考古学ライブラリー1　先土器時代』　（財）千葉県文化財センター

田村　隆ほか　1987『佐倉市向山谷津・明代台・木戸場・古内遺跡』　（財）千葉県文化財センター

田村　隆　1989「佐倉市大林遺跡」『佐倉市南志津地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』　（財）千葉県文化財センター

田村　隆　1989『千葉市荒久遺跡（1）』　（財）千葉県文化財センター

諏訪間　順　1989「相模野台地における石器群の変遷について」『神奈川考古』第24号

諏訪間　順　2001『相模野旧石器編年の到達点』　神奈川県考古学会

矢本節朗　1996『多古町千田台遺跡』　（財）千葉県文化財センター

横山祐平・川口　潤ほか　1984『武蔵台遺跡Ⅰ』　都立府中病院内遺跡調査会

第３章　前戸遺跡

第１節　遺構と遺物

１　遺構と遺構出土の遺物

（１）竪穴住居跡（第50～59図，図版21～26・30・32・33，第15表）

竪穴住居跡は，調査区全体にわたり散漫に分布している。重複しているものはSI-009とSI-012のみで，その他は重複が見られない。カマドの位置は北北西を向くものと，西北西を向くものが存在する。時期は古墳時代後期から奈良・平安時代に属するものである。

竪穴住居跡については，主軸の方角と規模，覆土の状況，遺物の出土状況などについて述べる。ここでは，主軸とはカマドを上にして住居跡を縦に二分するラインとし，主軸の傾きは，真北からの角度を示した。住居跡の規模は主軸方向の長さ×主軸に直行する方向の長さで示し，深さは遺構確認面から床面までを記した。ピットの記述をする場合は，主柱穴から番号を付け，左上の柱穴をＰ１とし，時計回りにＰ１～Ｐ４，入り口ピットをＰ５とし，以下は必要に応じて付けることとした。

遺物については表にデータを示し，必要に応じて文章で補足することにする。

SI-001（第50図，図版21・32，第15表）

調査区の西端付近，主にＢ２－14，24に位置している。規模は4.8m×4.7m，深さは約40cmである。壁際に壁溝をもつ。覆土は上層が黒褐色土，下層が暗褐色土でローム粒子を含み，粘性があり，所々にロームブロックを多く含む層が見られる。

カマドは天井が崩落しており，底面が良く焼けていた。

遺物は全体から散漫に出土しているが，カマドの右側と右下コーナー付近から大型の破片が出土している。８がカマド右側から出土している。

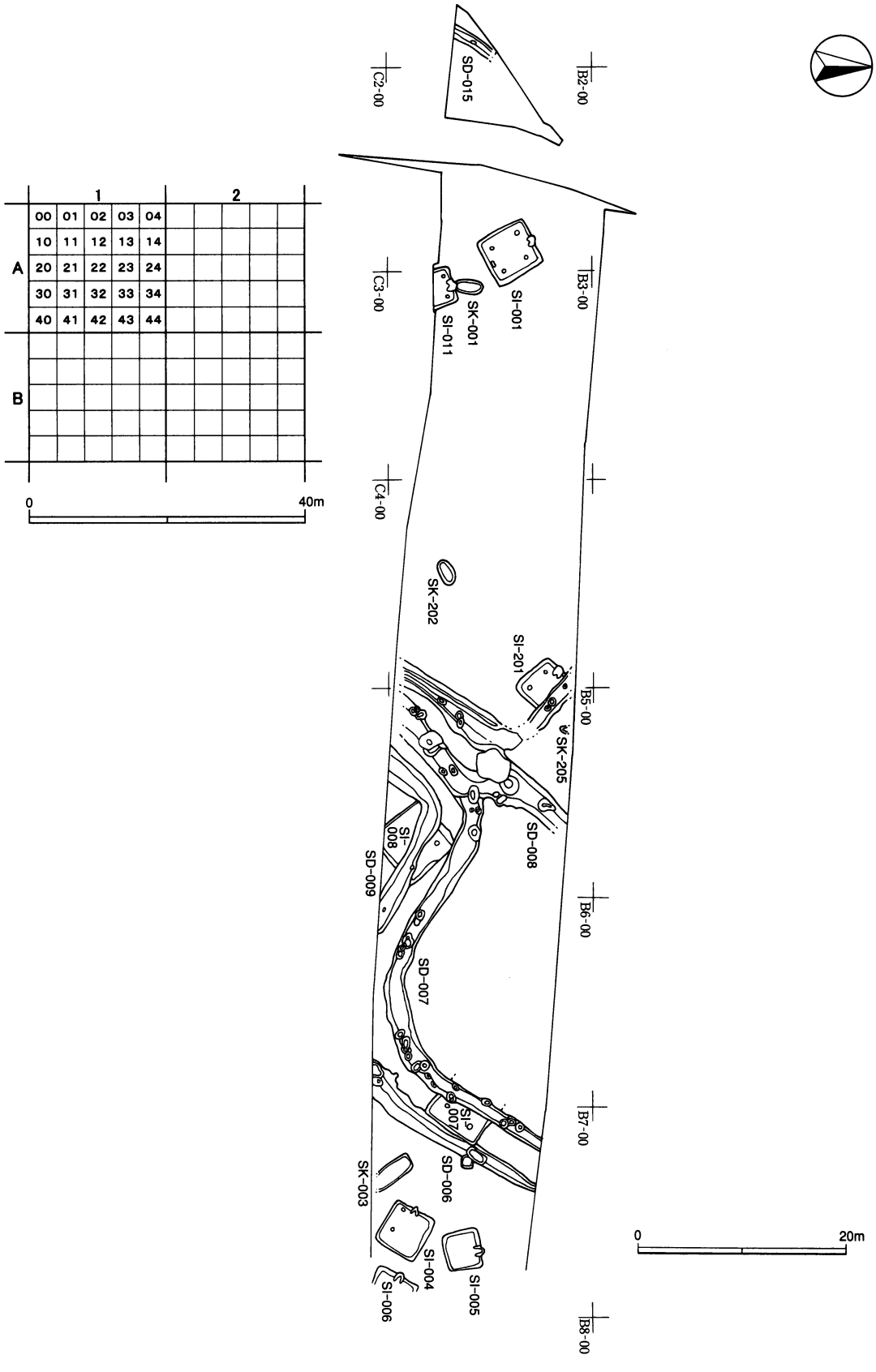
８世紀第１四半期に属する住居跡であると考えられる。

SI-002（第51図，図版22・32，第15表）

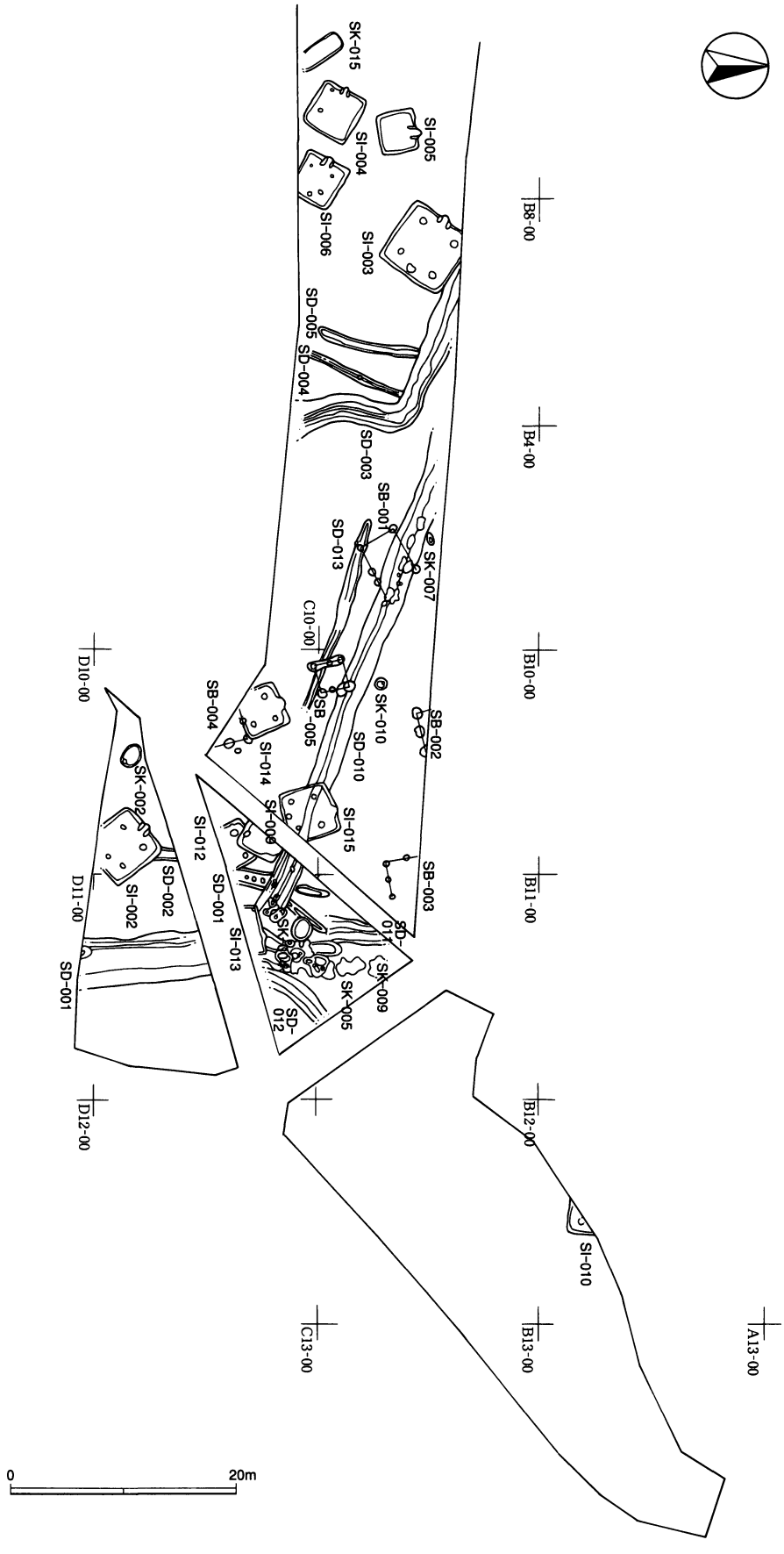
調査区の東側，主にＣ10－44に位置している。規模は5.2m×5.1m，深さは68cmである。SD-002溝跡と重複しており，住居の方が古い。セクションの壁際に壁溝をもつ。覆土は上層が黒色土下層が暗褐色度で，ローム粒子を含む。床面直上の薄い土層は黄褐色土で，貼り床の可能性がある。セクション最上層の落ち込みはSD-002の覆土である。

遺物は全体から散漫に出土している。カマド周辺から４の破片が，カマド右側から６が出土している。カマドは天井が崩落し，潰れた状態で検出された。

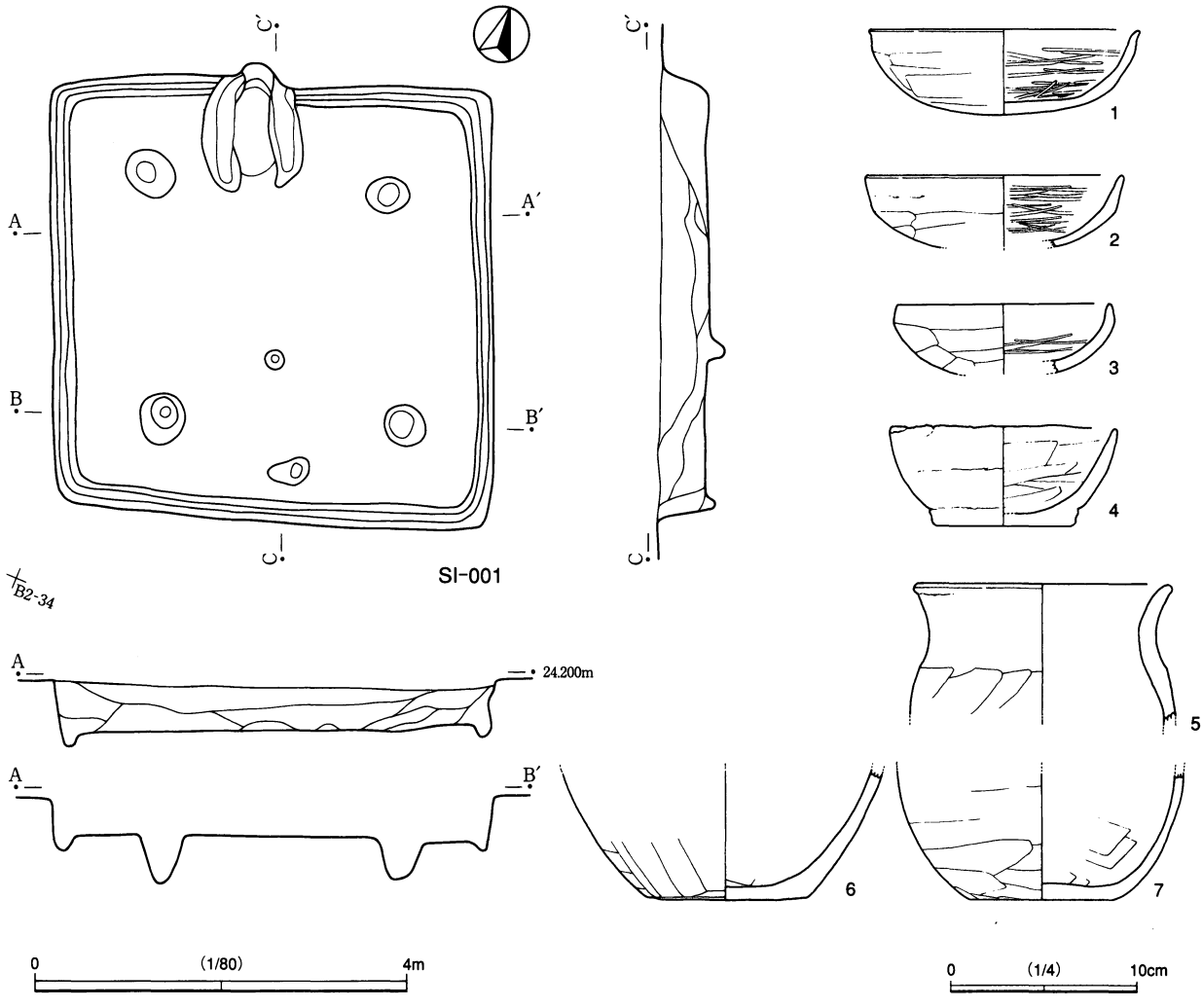
古墳時代後期，７世紀後半に属している。



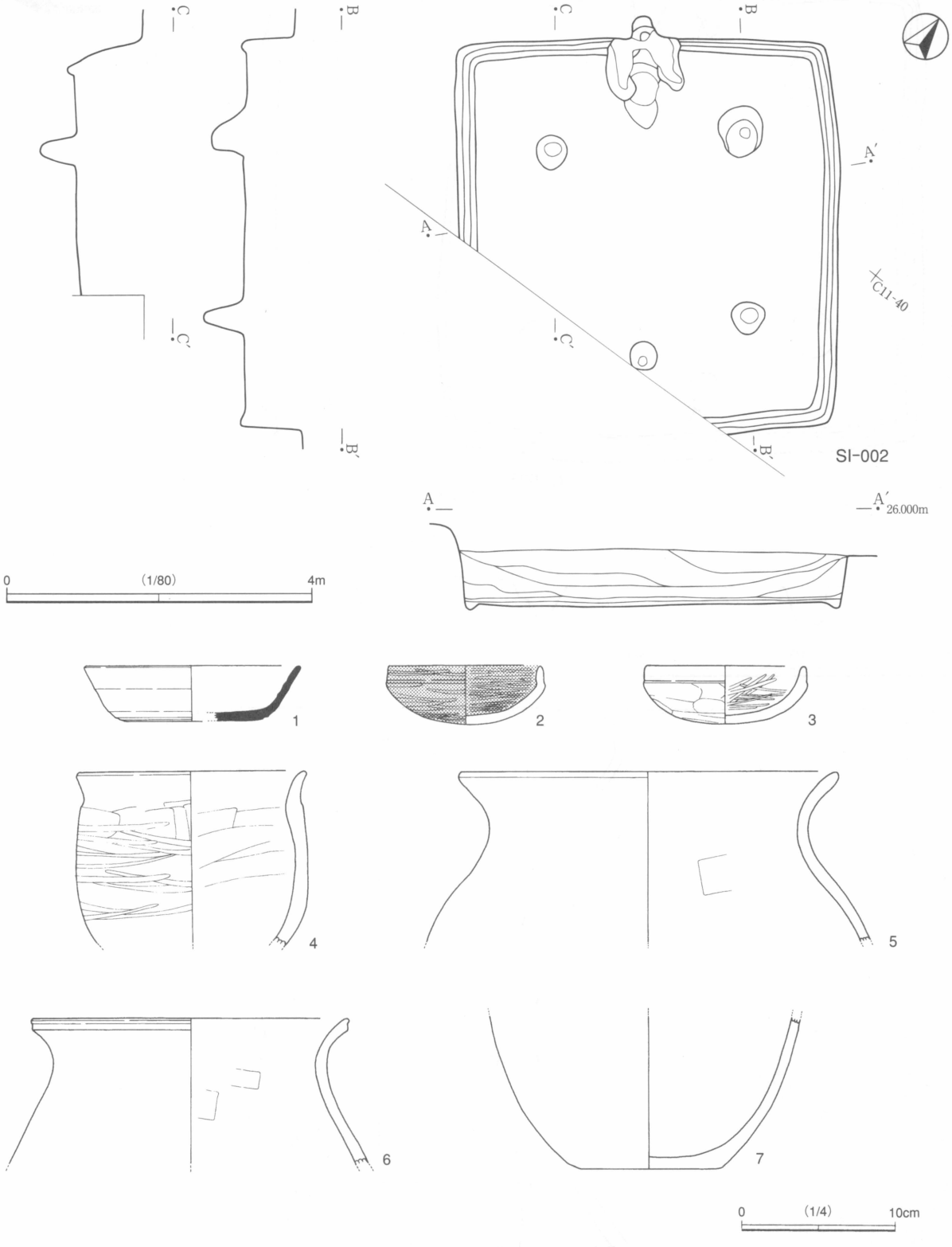
第48図　前戸遺跡の遺構分布（西側）とグリッド配置



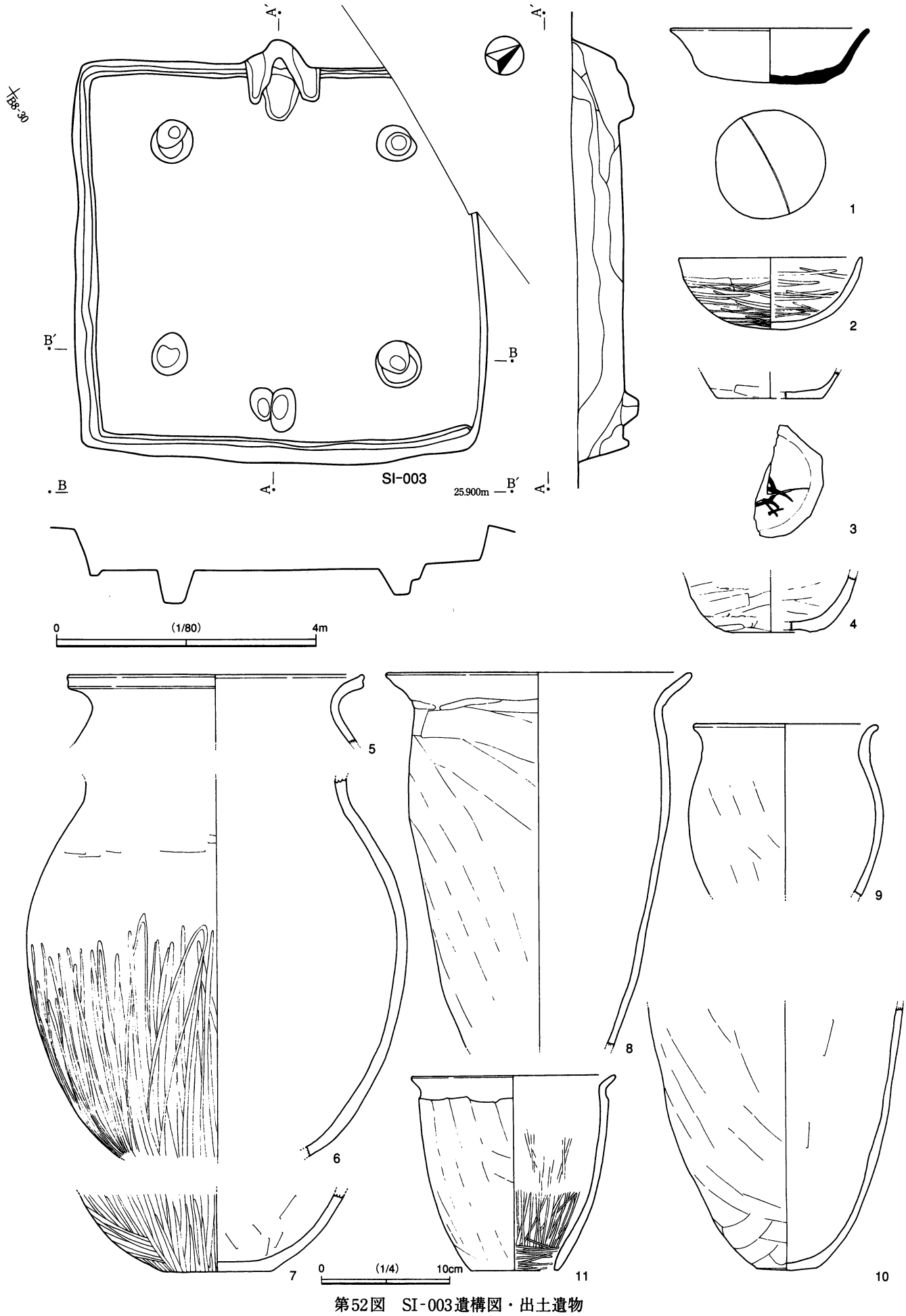
第49図　前戸遺跡の遺構分布（東側）



第50図　SI-001遺構図・出土遺物



第51図　SI-002遺構図・出土遺物



第52図　SI-003遺構図・出土遺物

SI-003（第52図，図版22・32，第15表）

調査区のほぼ中央，Ｂ７－44に位置している。規模は6.2m×6.4m，深さは約90cmである。SD-014溝跡と重複しており，住居の方が古い。壁溝をもつが全周せず，右側の辺からは検出されていない。入り口ピットが隣接して２つ検出されている。覆土は，上層は褐色土で，黒色土ブロックを所々に含み，下層は明褐色土でハードロームブロックを含む。ともに焼土粒子を含んでいる。遺物は住居跡全体から出土しており，４が入り口付近から，２，６，８がカマド周辺から，７がカマド煙道内，11が左側ソデ部から出土している。カマドは遺存状況が悪く，ソデは床面から約20cmの高さまでしか遺っていなかった。古墳時代後期，７世紀に属する住居であると考えられる。

SI-004（第53図，図版22・32，第15表）

調査区のほぼ中央のＢ７－42，43に位置している。規模は4.5m×4.5mで，深さは約45cmである。壁溝をもつ。柱穴はＰ１，Ｐ４のみが検出され，右側の柱穴を欠いている。焼失住居で，左側から入り口側にかけて焼土が分布し，炭化材が入り口側に比較的多く分布している。

覆土の様子は，上層から中層にかけて焼土粒子，ハードローム粒子を含む黒褐色土が堆積している。床面近くにはロームブロックを多く含む暗黄褐色土が堆積している。カマドの遺存状況は悪く，煙道部に覆土が若干遺る程度である。遺物は住居左側に比較的多く分布しており，カマド右側から３が出土している。

古墳時代後期，７世紀後半に属する。

SI-005（第53図，図版23・32，第15表）

調査区のほぼ中央，SI-004の北側のＢ７－23，33に位置している。規模は3.4m×3.7mで，深さは約58cmである。壁溝は全周し，柱穴は全く検出されなかった。床面に焼土が分布している。覆土は中層に暗黄褐色土が見られる他はほとんど褐色土で，ハードロームブロックや山砂粒子の混ざり方の違いにより分層される。

遺物は左手前のコーナー付近からは出土せず，右側に比較的多く出土する傾向がある。入り口部付近から１，２が出土している。カマドは煙道部が一部撹乱を受けているが遺存状況は比較的良好である。ソデの山砂には混入物が多く，貧弱な印象を受けるが火床面は比較的深く掘り込まれている。

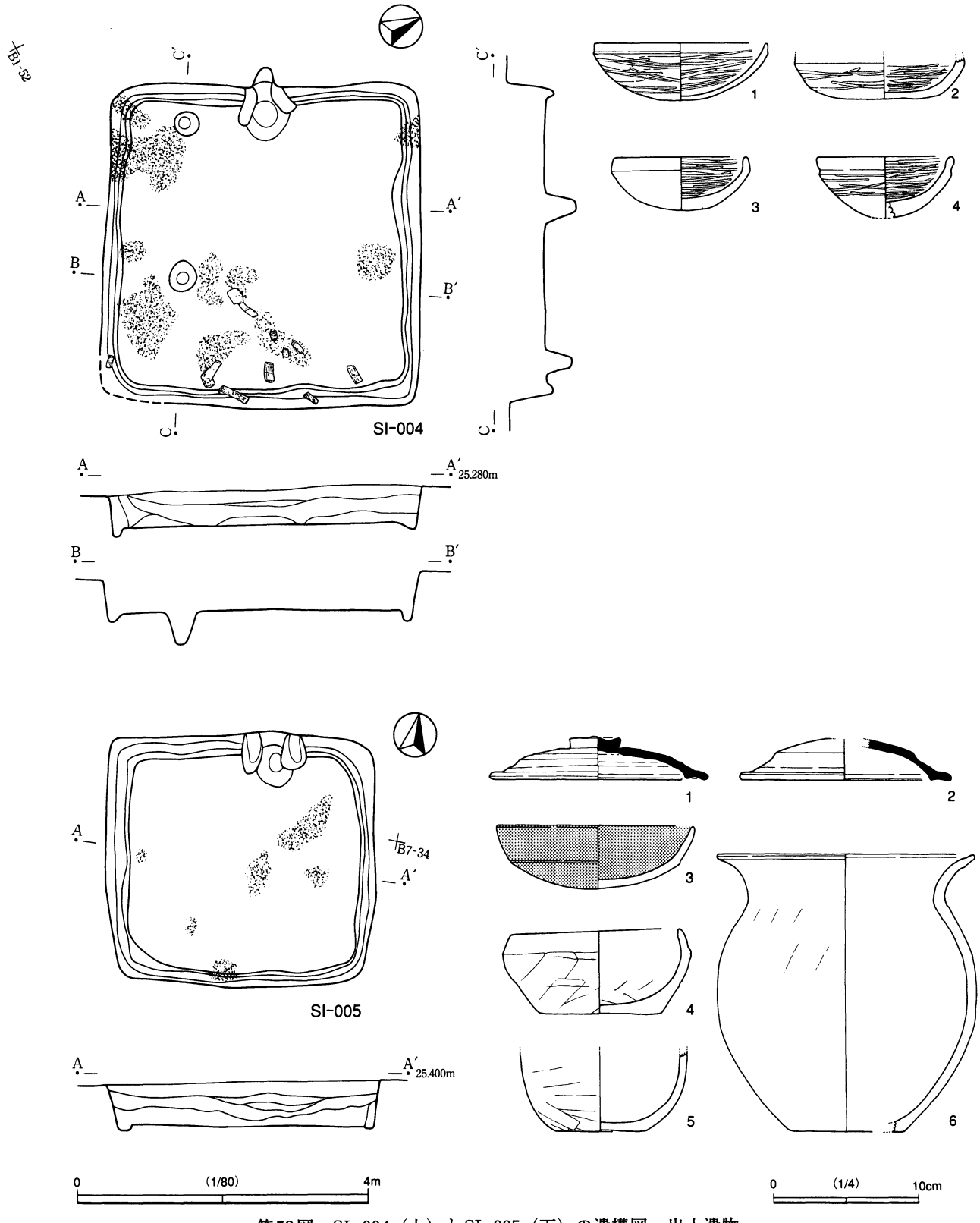
８世紀第１四半期に位置付けられる。

SI-006（第54図，図版23・32・33，第15表）

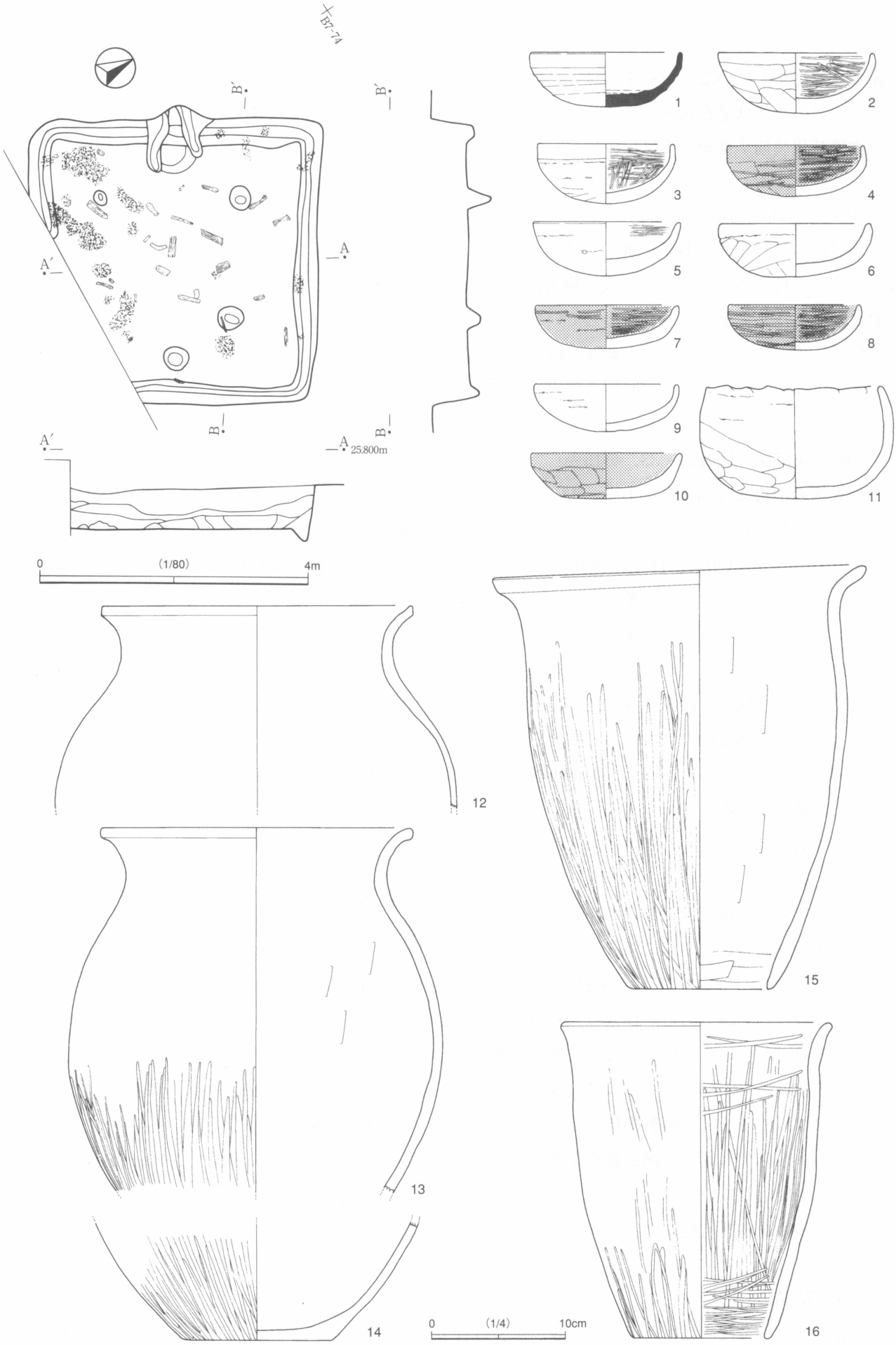
調査区のほぼ中央，SI-004の東側のＢ７－44，54に位置する。規模は4.3m×4.3mで，深さは約55cmである。左手前コーナーが調査区外にかかっており，柱穴Ｐ４の存在は確認できていない。焼失住居で，焼土や炭化材が検出されている。焼土は左側に比較的多く，炭化材は全体にまばらに分布している。

覆土は，上層にハードロームブロックを多く含む褐色土が堆積し，中層にはやはりハードロームブロックを含む黒褐色土，下層にはロームブロックの少ない褐色土が堆積している。床面直上には焼土や炭化物を多く含む土が堆積している。

遺物は右側に比較的多く分布する傾向があり，カマドの右側からコーナーにかけた範囲に特にまとまって出土している。右側ソデのすぐ右側から13が，その右側には７と８，そして６，２，11，９がそれぞれ



第53図　SI-004（上）とSI-005（下）の遺構図・出土遺物



第54図　SI-006遺構図・出土遺物

重なって出土している。コーナー付近には15，16，そして1，4，5がセットで各々出土している。

カマドの状態は遺存状況が良く，左側ソデが右側よりも長いのが特徴である。

古墳時代後期7世紀後半に位置付けられる。

SI-007（第55図，図版23・30）

調査区のほぼ中央，B7－30に位置している。住居跡のカマド側のおよそ半分がSD-007と重複しており，完全に破壊されている。規模は横方向が5.8mである。柱穴はP1が溝跡で破壊されて確認できず，P2がかろうじて痕跡のみを検出している。P5入り口ピットは存在しない。確認されたピットもいずれも掘り込みが浅い。確認された範囲では壁溝が確認されている。

遺物は検出されておらず，時期の確定はできない。

SI-008（第55図，図版30・33，第15表）

調査区の中央より西よりのB5－43に位置する。SD-009と重複しており，住居跡中央からカマドにかけて破壊されている。溝跡による破壊以外にも，撹乱が多く見られ，覆土で遺されている部分は少ない。規模は5.75m×5.6mで，深さは撹乱の及んでいない部分で見ると約30cm程度と推測される。覆土は上層が褐色土で，ハードロームを多く含み，下層は黒褐色土でハードロームを少量含んでいる。

ピットはP2，P3のみが確認されており，P1は溝跡の撹乱により消滅した可能性があり，P4は，位置的に見ると存在しなかった可能性がある。壁溝はカマド側と入り口側，そして右側の一部にのみ確認されており，左側からは確認されていない。

遺物は住居右側に散漫に検出されているが，著しく撹乱を受けていることから，これが本来の姿ではないと考えるべきであろう。2はSD-009溝跡に伴う遺物の可能性があることから，住居跡に伴う遺物は1であると推測される。

この住居跡は8世紀第4四半期のものと考えられる。

SI-009（第56図，図版24・33，第15表）

調査区の東側のC10－14に位置している。SI-012と重複しており，SI-009の方が新しい。また，住居の左半分は現道にかかっており，調査区外であった。規模は主軸方向が3.6mで，横方向の長さは確認できない。深さは約50cmである。柱穴は入り口部のP5だけが確認されており，カマド手前と入り口付近に硬化面が検出されている。壁溝は入り口側と右側約60％だけ見られ，カマド側には存在しない。

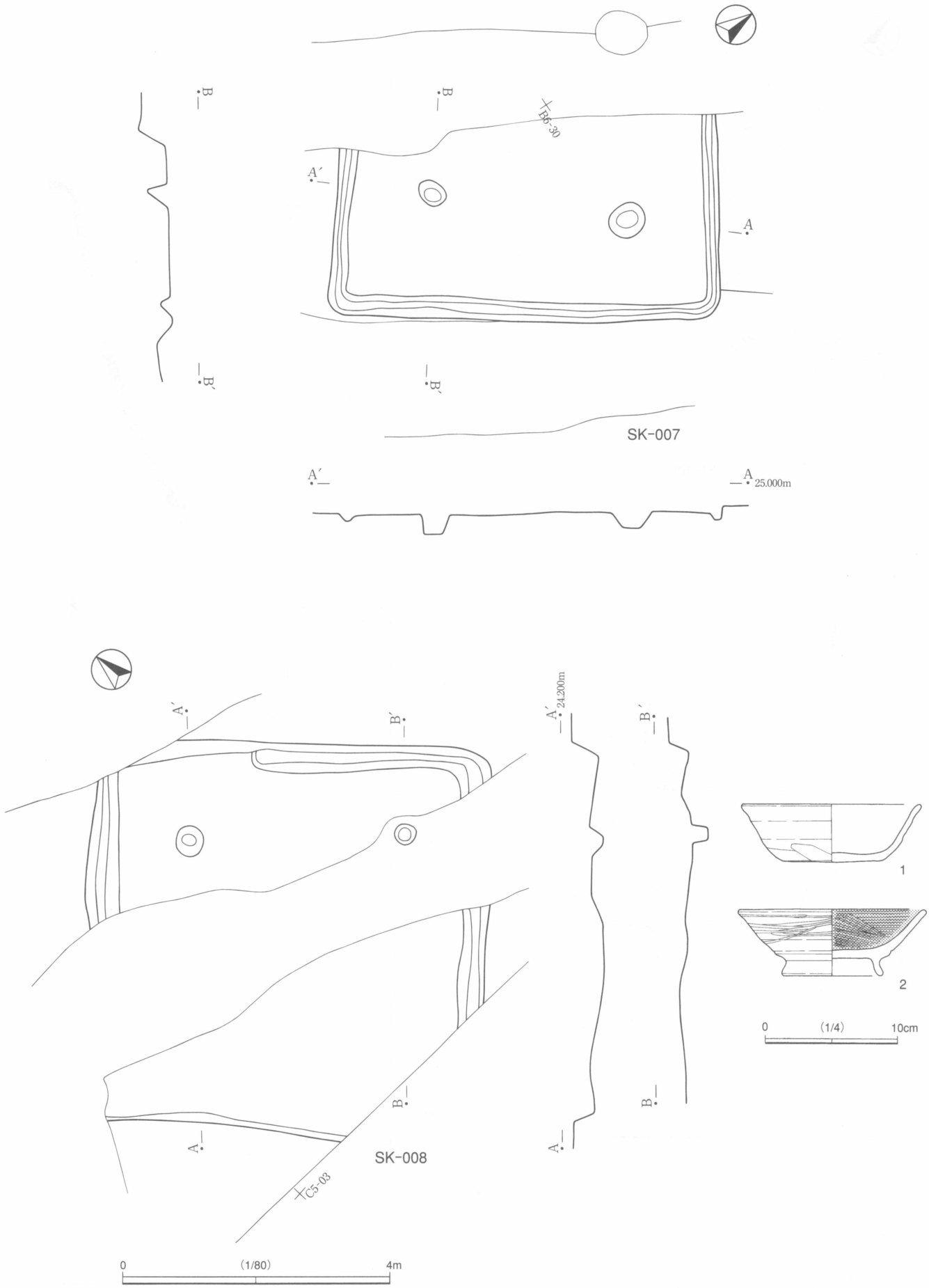
覆土の状況は，上部にローム粒子，焼土粒子，ロームブロックを少し含む暗褐色土が堆積しており，床面直上には固く締まった暗黄褐色土と黒色土が混じった土が薄く堆積している。

カマドは，あまり遺存状況が良くなく，特にソデの痕跡が断面から明瞭に確認できなかった。カマド内からは2が出土している。

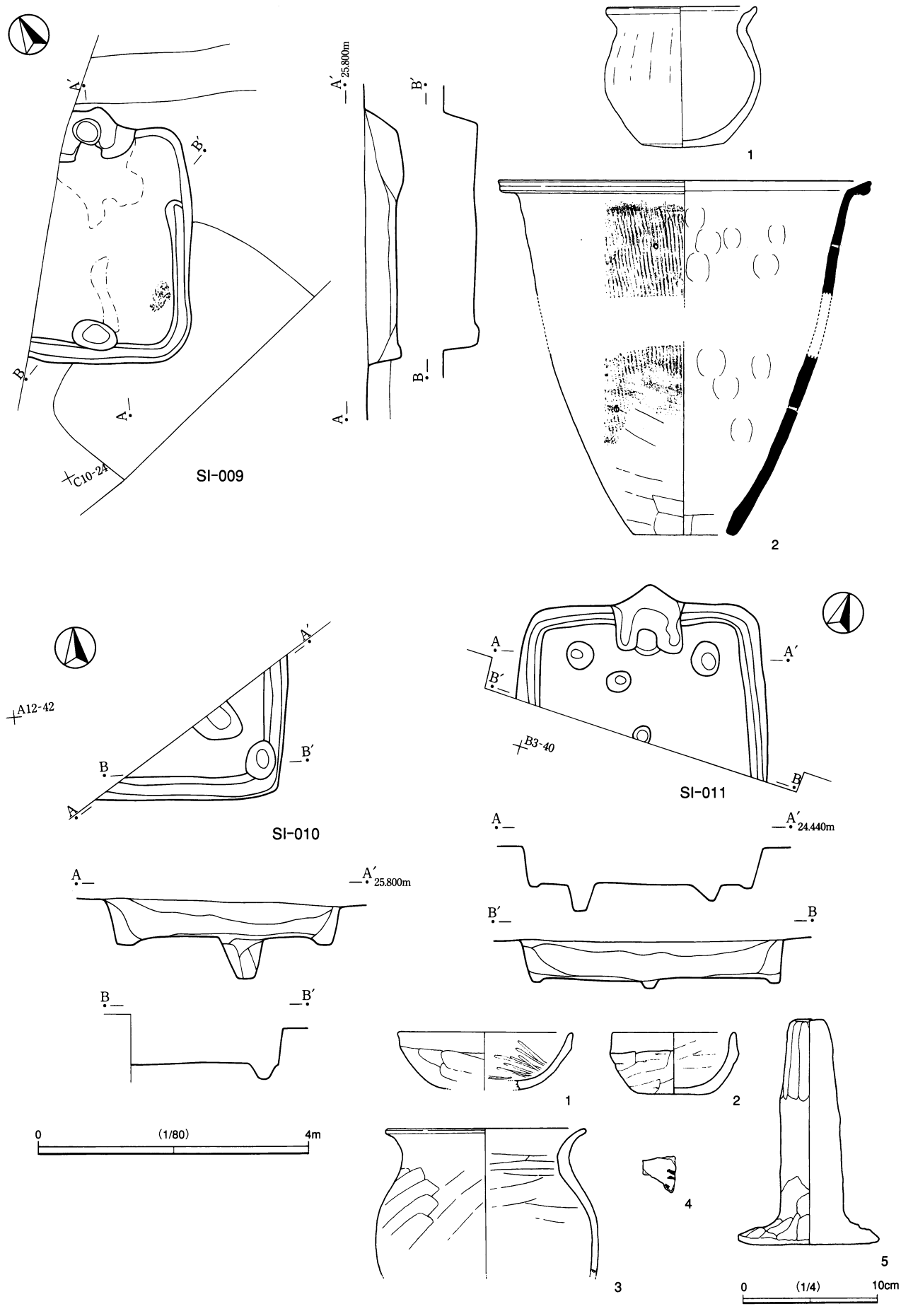
8世紀後半から9世紀初頭に位置付けられる。

SI-010（第56図）

調査区東端，A12－42に位置している。住居の右手前コーナーのみが調査区内にかかっている。よって



第55図　SI-007（上）とSI-008（下）の遺構図・出土遺物



第56図　SI-009，SI-010，SI-011遺構図・出土遺物

規模は不明で，深さは約60cmである。主柱穴はＰ３と推定されるものが１基のみ検出された他，コーナーの所にピット状のものが検出されている。

覆土は主に３層に分層され，上層，中層はローム粒子を含む黒褐色土で，中層はローム粒子が多く，ロームブロックを少し含んでいる。床面には黒褐色土と暗黄褐色土が斑に混じる土が薄く堆積している。

正確な時期は不明である。

SI-011（第56図，図版24・33，第15表）

調査区の西端近く，SI-001の南側，Ｂ３－30に位置する。住居跡の入り口側約半分が調査区外にかかっているので，カマド側半分のみを発掘調査した。主柱穴はＰ１，Ｐ２のみが検出され，その他にピットが２基検出されている。規模は横方向が3.6m，深さは約55cmである。

覆土はおよそ２層に分層され，上層はローム粒子を少量含む黒褐色土，下層はローム粒子をやや多く含む暗褐色土である。また，床面には暗褐色土にソフトロームが混入した土がごく薄く堆積している。

遺物は，全体から散漫に出土しているが，カマドの手前に比較的集中する傾向が見られる。図示遺物は，４がカマド手前に山砂などとともに破片が散乱して出土し，５の支脚はカマド左前のエリアから出土している。

カマドは比較的遺りがよく，山砂を主体とする灰褐色のソデが両側に見られ，天井も左側の一部が残存していたようである。

図示遺物の１，４から，８世紀代の住居跡であると考えられる。

SI-012（第57図，図版24）

SI-009と重複した住居跡で，Ｃ10－14に位置している。入り口側半分は調査区外に含まれ，カマドがあったと推測される北側の辺はSI-009によって破壊されている。規模は横幅のみが確認でき，3.9mで，深さは36cmである。主柱穴はＰ１，Ｐ２のみが検出されており，壁溝は，左側に切れ目が見られる。

覆土は，黒色土と暗黄褐色土が混ざった土で，ローム粒子やハードロームブロックが含まれ，壁際にはローム粒子を多く含む暗褐色度が堆積している。

カマドは遺存しないが，SI-009のコーナー付近からは山砂が多く検出されており，カマドが存在していたことを推測させる。遺物量は少なく，住居の左側に比較的多く分布している。

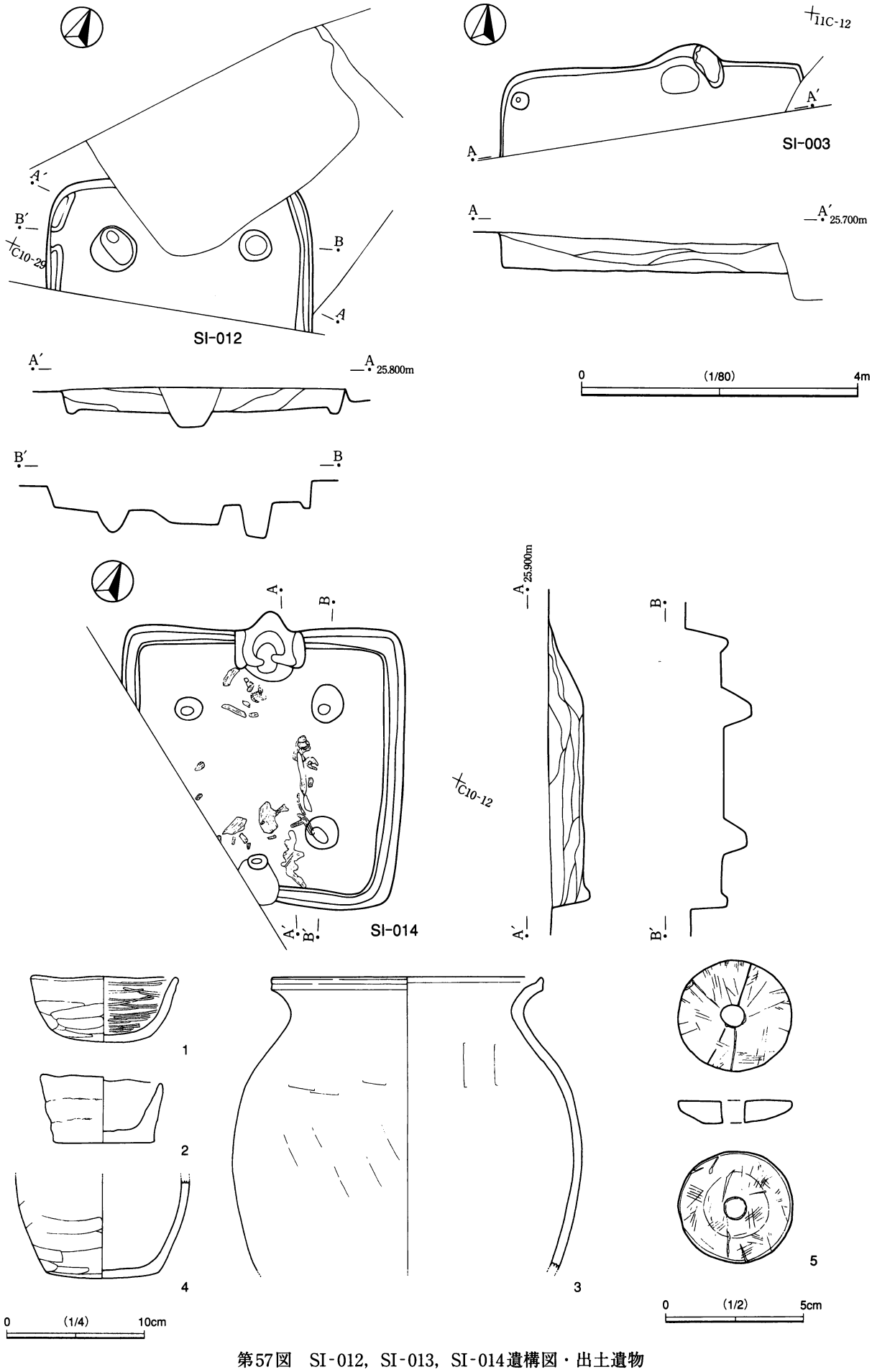
時期を決定できる遺物が出土していないので，正確な時期は不明だが，SI-009との関連から奈良時代以前の住居跡である可能性が高い。

SI-013（第57図，図版24）

SI-012の東隣，Ｃ11－11に位置する。住居跡の南側の大部分が調査区外に含まれるため，カマドとその周辺のみを調査するに留まった。規模は，横幅のみを計測し，4.4m，深さは約50cmである。主柱穴は確認されなかったが，壁際からピットが１基検出されている。また調査範囲内では壁溝は確認されなかった。

覆土は山砂，焼土粒子を含む暗褐色土が主体で，上層にはローム粒子を多く含み，床面付近の土はハードロームブロックを少し含んでいる。

カマドは，遺存状況が悪く，左側のソデの痕跡は全く確認できなかった。遺物はカマド内と周辺から数



第57図　SI-012，SI-013，SI-014遺構図・出土遺物

点検出されているが，図示できるようなものは存在しない。

SI-014（第57図，図版25・33，第15表）

調査区中央よりも東側，SI-015の西側，C10－11に位置している。入口側左コーナーは調査区外にかかっている。規模は，4.0m×3.9m，深さは50cmである。柱穴はＰ３が調査区外にある他は，入り口ピットも検出されている。入り口ピット付近はSB-004掘立柱建物の柱穴と重複しており，SI-014の方が古い。壁溝はほぼ全周すると推測される。

覆土は，遺構確認面から約20cmまでは暗茶褐色土から茶褐色土で，焼土粒子，ローム粒子，ロームブロックなどを含んでおり，45cmまではロームブロックを少し含む黒褐色土，床面直上には炭化材を多く含む暗褐色土が堆積している。床面からは炭化材が検出されており，特に右側に片寄って分布する傾向がある。床面は熱を受けているがそれほど強く被熱した状態ではなかった。

カマドは天井が手前にずれ落ちたような状況で検出された。天井の奥部は遺存してオーバーハングしている様子が確認されている。遺存状況は良好で，ソデは白色粘土を含みしっかりしており，内側は熱を受け褐色になっている。

遺物は入り口附近よりもカマド周辺に多く分布している。１はカマド前面，２はカマド内，４はカマド周辺に破片が散らばっていた。また，土器以外の遺物として石製紡錘車が出土している。

７世紀後半の住居跡であると考えられる。

SI-015（第58図，図版25・26・33，第15表）

調査区の中央よりも東側，SI-009の北側，B10－43に位置している。入り口側右コーナーが調査区外にかかっている。SD-010と重複しており，カマド側左コーナーから入り口側右コーナーにかけて床面まで破壊を受けている。柱穴は主柱穴と入り口ピットが確認されている。規模は4.6m×4.7m，深さは約55cmである。壁溝はほぼ全周すると推測される。

覆土はほぼ３層に分層され，上層は黒褐色土，中層，下層は暗褐色土で，いずれもローム粒子，ロームブロックを少し含んでいる。

カマドは遺存状況がよく，ソデ，天井奥が良好な状態で検出された。奥壁や天井奥は被熱して硬化していた。ソデ内面も良好に被熱硬化している。

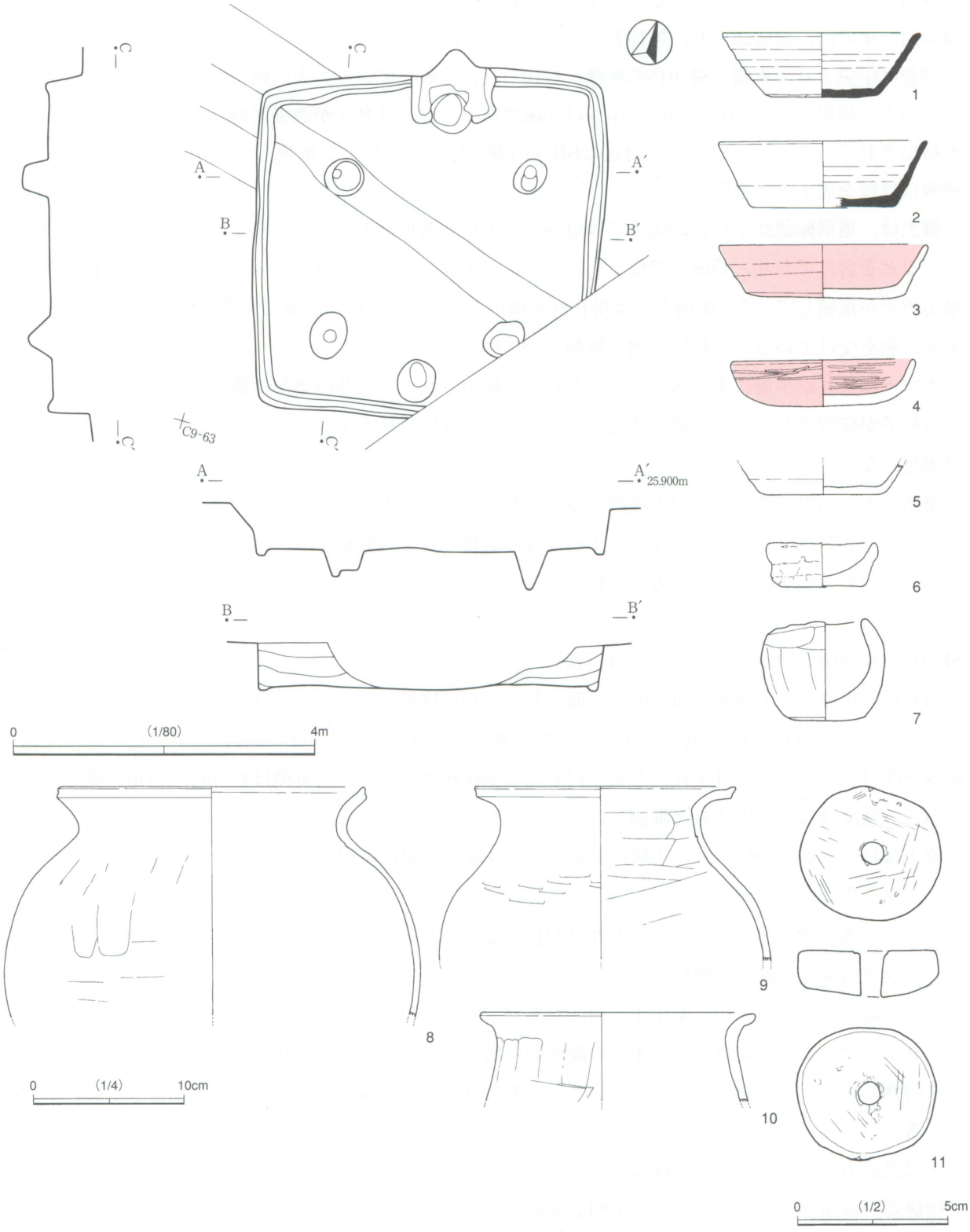
カマド周辺と入り口周辺に集中する傾向があり，カマド周辺は右側に特に多く分布している。１，２，３，９がカマドから右奥コーナーまでの範囲から出土しており，８が入り口付近から，２，４，７，10が入り口側左コーナー周辺から出土している。なお２はカマド右脇と左側壁近くから出土した破片が接合している。

土器以外の遺物として石製紡錘車が出土している。

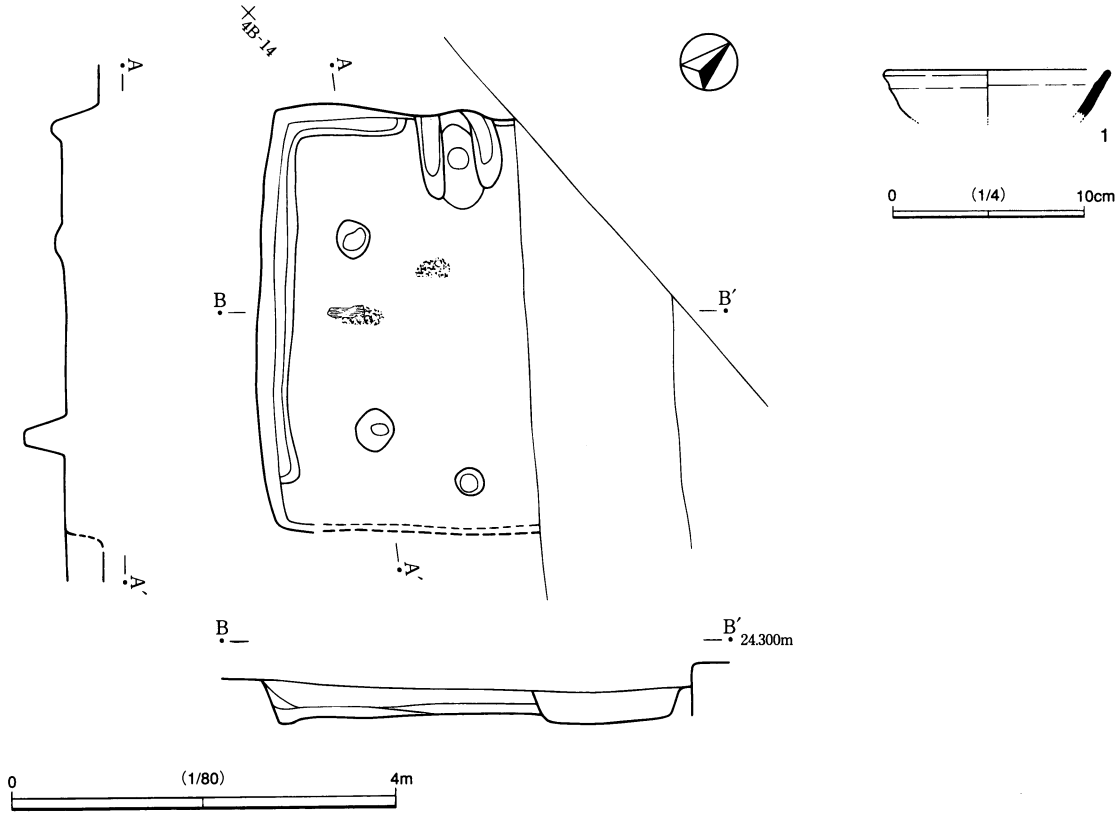
住居跡の時期は，８世紀の第２四半期であると考えられる。

SI-201（第59図，図版26，第15表）

調査区中央より西側，Ｂ４－14に位置している。SD-203溝跡と重複しており，右側のかなりの部分が破壊されている。規模は4.8m×4.6m（一部復元），深さは約50cmである。柱穴はＰ２，Ｐ３が撹乱のため欠損しているが，Ｐ１，Ｐ４，Ｐ５は検出された。壁溝はカマド側から左サイドで検出され入り口部に



第58図　SI-015遺構図・出土遺物



第59図　SI-201遺構図・出土遺物

は存在しないようである。

覆土は上下2層に分層され，上層は粒子の粗い黒色土，下層は粒子の細かい暗褐色土である。床面には炭化材，焼土が少量分布している。カマドの遺存状況は極めて良好で，天井もかなり遺存しており，煙出し穴も断面で確認できた。ソデの遺存状況も良好で，山砂を含む固くしまった土で形成されている。

遺物の分布は散漫だが，左側には少なく，右側に比較的多く分布している。1は9世紀代の土器であると考えられる。また，土器の他に，鉄製品，銅製品，鉄滓が出土している。鉄製品は，刀子片と考えられるものが1点，釘片と考えられるものが1点出土している。いずれも小片であるため図示しなかった。銅製品は，全長約2cmの鈎状のもので，基部に穴がある。鉄滓は，2点出土しており合計70.71gである。金属探知機で計測したところ，メタル度は計測されなかった。碗型滓であると考えられる。

第14表　前戸遺跡土器観察表

遺構番号	挿図番号	実測番号	遺物番号	器質	器形	遺存度	法量(cm)		調整		色調	胎土	備考
SI-001	第50図1	4	10,60	土師器	杯	25%	口径	(14.4)	内面	ナデ・ヘラミガキ	黄褐色	密	底部に若干木葉痕残る
							底径	—	外面	ナデ・ヘラナデ			
							器高	4.7					
	第50図2	6	46	土師器	杯	5%	口径	(12.4)	内面	ナデ・ヘラミガキ	赤褐色	密	
							底径	—	外面	ナデ・ヘラナデ			
							器高	〔3.9〕					
	第50図3	2	4,61	土師器	杯	15%	口径	(11.4)	内面	ナデ・ヘラミガキ	橙褐色	密	内面黒斑
							底径	—	外面	ナデ・ヘラナデ	赤褐色		
							器高	〔4.8〕					
	第50図4	3	8,34,60	土師器	手捏	30%	口径	(12.2)	内面	ナデ	黒褐色	密	
							底径	5.3	外面	ナデ・ヘラナデ			
							器高	7.2					
	第50図5	8	19,50,59	土師器	甕	5%	口径	(13.8)	内面	ナデ・ヘラナデ	褐色	密	
							底径	—	外面	ナデ・ヘラナデ			
							器高	〔7.5〕					
	第50図6	7	37	土師器	甕	10%	口径	—	内面	ナデ	黒褐色	密	外面ススの付着 二次焼成あり
							底径	9.0	外面	ヘラケズリ			
							器高	〔6.8〕					
	第50図7	1	1,2,3	土師器	甕	30%	口径	—	内面	ヘラナデ	黄褐色	密	外面黒斑
							底径	3.8	外面	ナデ・ヘラナデ			
							器高	〔4.9〕					
SI-002	第51図1	18	9	須恵器	杯	10%	口径	(13.2)	内面	ナデ	白色灰	密	切り離し不明 手持ちヘラケズリのちナデ
							底径	〔5.6〕	外面	ナデ			
							器高	2.7					
	第51図2	11	107	土師器	杯	70%	口径	10.0	内面	ナデ・ヘラミガキ	黒褐色	密	内外面黒色処理
							底径	—	外面	ナデ・ヘラケズリ・ヘラミガキ			
							器高	3.9					
	第51図3	10	48,79,2区,4区	土師器	杯	30%	口径	(10.2)	内面	ナデ・ヘラミガキ	黒褐色	密	内外面黒色処理
							底径	—	外面	ナデ・ヘラケズリ・ヘラミガキ			
							器高	3.9					
	第51図4	5	62,68,117,125	土師器	甕	20%	口径	(14.8)	内面	ナデ・ヘラナデ・ヘラミガキ	黒褐色	密	外面にススの付着 二次焼成あり
							底径	—	外面	ナデ・ヘラナデ			
							器高	〔11.1〕					
	第51図5	3		土師器	甕	10%	口径	(24.6)	内面	ナデ・ヘラナデ	褐色	密	外面にススの付着 二次焼成あり
							底径	—	外面	ナデ・ヘラナデ			
							器高	〔9.2〕					
	第51図6	2	5,8,14,19,20 4区	土師器	甕	10%	口径	(20.8)	内面	ナデ・ヘラナデ	褐色	密	外面にススの付着 二次焼成あり
							底径	—	外面	ナデ・ヘラナデ			
							器高	〔9.5〕					
	第51図7	1	37,43,61,108, 110,1区,2区	土師器	甕	10%	口径	—	内面	ヘラナデ	橙褐色	密	
							底径	9.0	外面	ヘラナデ			
							器高	〔8.0〕					
SI-003	第52図1	15	不明	須恵器	杯	70%	口径	15.3	内面	ナデ	白色灰	白色灰	回転ヘラ切り後 回転ヘラ削り 底外ヘラ書き
							底径	—	外面	ナデ			
							器高	〔6.3〕					
	第52図2	1	004,214	土師器	杯	90%	口径	14.2	内面	ナデ・ヘラミガキ	橙褐色	密	
							底径	—	外面	ナデ・ヘラナデ・ヘラミガキ			
							器高	5.6					
	第52図3	11	070,184	土師器	杯	70%	口径	—	内面	ナデ	赤褐色	白色灰	回転糸切り 手持ちヘラケズリ 底外墨書
							底径	(8.0)	外面	ナデ・ヘラケズリ			
							器高	〔2.0〕					
	第52図4	8	001,004,059	土師器	手捏	20%	口径	—	内面	ヘラナデ	黒褐色	密	
							底径	(6.0)	外面	ヘラナデ			
							器高	〔4.2〕					
	第52図5	6	198	土師器	甕	5%	口径	(23.0)	内面	ナデ	黄褐色	粗	混入物多・石英，雲母 長石等
							底径	—	外面	ヘラナデ			
							器高	(5.2)					
	第52図6	17	001,002,073, 207,224	土師器	甕		口径		内面	ヘラナデ	黄褐色	密	
							底径		外面	ヘラナデ・ヘラミガキ			
							器高						
	第52図7	3	090,257	土師器	甕	20%	口径	—	内面	ヘラナデ	黄褐色	密	外面に黒斑
							底径	8.4	外面	ヘラミガキ			
							器高	(6.0)					
	第52図8	16	001,002,127, 161,235,241, 242,245,246	土師器	甕	50%	口径	23.8	内面	ナデ・ヘラケズリ	黒褐色	密	
							底径	—	外面	ナデ・ヘラナデ	橙褐色		
							器高	〔29.8〕					
	第52図9	4	002,114,142, 143,163	土師器	甕	15%	口径	(14.4)	内面	ナデ	黒褐色	密	
							底径	—	外面	ナデ・ヘラケズリ			
							器高	〔13.2〕					

遺構番号	挿図番号	実測番号	遺物番号	器質	器形	遺存度	法量(cm)		調整		色調	胎土	備考
SI-003	第52図10	18	001,004,211,213,218,219,223,232,237,238,253,254,255,256,258	土師器	甕	50%	口径	—	内面	ヘラナデ	橙褐色	密	
							底径	4.8	外面	ヘラケズリ			
							器高	(20.2)					
	第52図11	2	002,003,164	土師器	甑	20%	口径	(16.0)	内面	ナデ・ヘラナデ・ヘラミガキ	赤褐色	密	外面に黒斑
							底径	(6.8)	外面	ナデ・ヘラナデ	黒褐色		
							器高	15.0					
SI-004	第53図1	4	004,084,085,087	土師器	杯	90%	口径	12.0	内面	ナデ・ヘラミガキ	橙褐色	密	外面低部に黒斑
							底径	—					
							器高	4.1	外面	ヘラナデ			
	第53図2	2	001,004,018	土師器	杯	30%	口径	—	内面	ナデ・ヘラミガキ	褐色	密	
							底径	—	外面	ナデ・ヘラナデ・ヘラミガキ			
							器高	〔2.9〕					
	第53図3	5	77	土師器	杯	80%	口径	9.0	内面	ナデ・ヘラミガキ	黄褐色	密	
							底径	—	外面	ナテ			
							器高	3.7					
	第53図4	3	80	土師器	杯	40%	口径	9.4	内面	ナデ・ヘラミガキ	橙褐色	密	
							底径	—	外面	ナデ・ヘラナデ・ヘラミガキ			
							器高	〔4.3〕					
SI-005	第53図1	4	34	須恵器	蓋	90%	口径	15.2	内面	ナデ	黒褐色	密	
							底径	—	外面	ナデ・ヘラケズリ			
							器高	3.0					
	第53図2	5	22	須恵器	蓋	5%	口径	(18.8)	内面	ナデ	白色灰	密	
							底径	—	外面	ナデ・ヘラケズリ			
							器高	〔2.9〕					
	第53図3	3	002,020	土師器	杯	10%	口径	(15.0)	内面	ナデ	黒褐色	密	内外面黒色処理
							底径	—	外面	ナデ			
							器高	4.7					
	第53図4	1	36	土師器	鉢	90%	口径	11.7	内面	ナデ・ヘラナデ	黒褐色	密	底部に木葉痕残る
							底径	8.4	外面	ナデ・ヘラナデ			
							器高	5.8					
	第53図5	2	013,002,	土師器	甕	20%	口径	—	内面	ナデ	赤褐色	密	
							底径	6.0	外面	ナデ・ヘラナデ			
							器高	〔5.5〕					
	第53図6	7	00,002,007,004,005,035	土師器	甕	20%	口径	(17.8)	内面	ナデ・ヘラナデ	橙褐色	密	外面にススの付着 二次焼成あり 外面に黒斑
							底径	18.0	外面	ナデ			
							器高	〔8.0〕					
SI-006	第54図1	15	87	須恵器	杯	90%	口径	11.2	内面	ナデ	灰色	密	
							底径	—	外面	ナデ			
							器高	4.2					
	第54図2	10	91	土師器	杯	95%	口径	11.2	内面	ナデ・ヘラミガキ	黒褐色	密	
							底径	—	外面	ナデ・ヘラケズリ	褐色		
							器高	4.5					
	第54図3	6	89	土師器	杯	80%	口径	10.0	内面	ナデ・ヘラミガキ	黒褐色	密	内外面黒色処理の可能性あり
							底径	—	外面	ナデ・ヘラケズリ			
							器高	6.5					
	第54図4	9	88	土師器	杯	80%	口径	(10.0)	内面	ナデ・ヘラミガキ	黒褐色	密	内外面黒色処理
							底径	—	外面	ナデ・ヘラミガキ			
							器高	3.9					
	第54図5	12	92	土師器	杯	80%	口径	(10.6)	内面	ナデ・ヘラミガキ	黒褐色	密	内外面黒色処理の可能性あり
							底径	—	外面	ナデ			
							器高	4.0					
	第54図6	14	90	土師器	杯	95%	口径	11.0	内面	ナデ	黒褐色	密	内外面黒色処理
							底径	—	外面	ナデ・ヘラケズリ・ヘラナデ			
							器高	4.0					
	第54図7	7	109	土師器	杯	90%	口径	(10.6)	内面	ナデ・ヘラミガキ	黒色	密	内外面黒色処理
							底径	—	外面	ナデ・ヘラミガキ	黒褐色		
							器高	5.3					
	第54図8	11	110	土師器	杯	70%	口径	(9.8)	内面	ナデ・ヘラミガキ	黒褐色	密	内外面黒色処理
							底径	—	外面	ナデ・ヘラケズリ・ヘラミガキ			
							器高	3.4					
	第54図9	13	97	土師器	杯	95%	口径	10.4	内面	不明	褐色	密	外面に黒斑
							底径	—	外面	不明			
							器高	4.5					
	第54図10	8	102	土師器	杯	90%	口径	(11.0)	内面	ナデ・ヘラナデ	黒褐色	密	内外面黒色処理
							底径	—	外面	ナデ・ヘラケズリ			
							器高	4.4					
	第54図11	5	93	土師器	鉢	95%	口径	12.9	内面	ナデ	黒褐色	密	
							底径	—	外面	ナデ・ヘラナデ			
							器高	8.3					

遺構番号	挿図番号	実測番号	遺物番号	器質	器形	遺存度	法量(cm)		調整		色調	胎土	備考
SI-006	第54図12	2	010,035,038,043,048,058,068,075	土師器	甕	10%	口径	23.0	内面	ナデ・ヘラナデ	黒褐色	密	
							底径	—	外面	ナデ			
							器高	15.0					
	第54図13	1	114	土師器	甕	20%	口径	(23.0)	内面	ヘラナデ	褐色	粗	混入物多・石英，雲母長石等
							底径	—	外面	ナデ・ヘラナデ・ヘラミガキ			
							器高	〔27.0〕					
	第54図14	3	021,025,027,037	土師器	甕	10%	口径	—	内面	ヘラナデ	黄褐色	粗	混入物多・石英，雲母長石等
							底径	(11.0)	外面	ヘラミガキ	黒褐色		二次焼成あり　ス
							器高	〔6.6〕					
	第54図15	17	053,100,101,103	土師器	甑	95%	口径	27.8	内面	ナデ・ヘラナデ	橙褐色	密	外面にスの付着
							底径	31.5	外面	ナデ・ヘラケズリ・ヘラナデ			二次焼成あり
							器高	10.0					外面に黒斑
	第54図16	18	067,102	土師器	甑	90%	口径	(20.0)	内面	ナデ・ヘラナデ・ヘラミガキ	橙褐色	密	外面に黒斑
							底径	23.0	外面	ナデ・ヘラケズリ・ヘラミガキ	黄褐色		
							器高	〔10.2〕					
SI-008	第55図1	2		土師器	杯	20%	口径	13.6	内面	ナデ	黒褐色	密	
							底径	7.4	外面	ナデ・ヘラケズリ			
							器高	4.3					
	第55図2	1	020,028,SD-022	土師器	椀	40%	口径	14.0	内面	ナデ・ヘラミガキ	橙褐色	密	内面黒色処理
							底径	7.6	外面	ナデ・ヘラミガキ	黄褐色		
							器高	5.0					
SI-009	第56図1	4		土師器	甕	50%	口径	(11.0)	内面	ナデ・ヘラナデ	橙褐色	密	内外面にスス
							底径	6.0	外面	ナデ・ヘラナデ	黒褐色		二次焼成あり
							器高	10.5					
	第56図2	2,3	001,022,023,041,042,043	須恵器	甑	5%	口径	(28.0)	内面	ナデ・ヘラナデ・タタキ	橙褐色	密	底部5孔
							底径	(10.4)	外面	ヘラケズリ・ヘラナデ・タタキ			胴部下位に焼成前の小孔2ヶ所あり
							器高	〔33.0〕					
SI-011	第56図1	3	031,071	土師器	杯	10%	口径	13.0	内面	ナデ・ヘラミガキ	橙褐色	密	
							底径	—	外面	ナデ・ヘラケズリ			
							器高	〔4.3〕					
	第56図2	2	001,071,072	土師器	鉢	70%	口径	(9.1)	内面	ヘラナデ	褐色	密	底部外面から体部の一部に黒斑あり
							底径	5.6	外面	ヘラケズリ			
							器高	4.5					
	第56図3	9	71	土師器	杯	10%	口径	—	内面		橙褐色	密	底部外面に墨痕あり
							底径	—	外面				
							器高	—					
	第56図4	1	004,044,054,055,058,060,066,071,072	土師器	甕	40%	口径	15.3	内面	ナデ・ヘラナデ	赤褐色	密	外面にスス
							底径	—	外面	ナデ・ヘラケズリ			二次焼成あり
							器高	〔10.8〕					
	第56図5	8	028,059	土師器	土製品	90%	口径	—	内面	ナデ	褐色	密	
							底径	10.6	外面	ナデ			
							器高	〔16.5〕					
SI-014	第57図1	1	53	土師器	杯	70%	口径	10.6	内面	ナデ・ヘラナデ・ヘラミガキ	赤褐色	密	
							底径	—	外面	ナデ・ヘラナデ			
							器高	4.8					
	第57図2	2	66	土師器	手捏	80%	口径	11.0	内面	ナデ	黒褐色	密	
							底径	13.4	外面	ナデ			
							器高	5.2					
	第57図3	3	029,034,035,047,051	土師器	甕	10%	口径	—	内面	ナデ	黒褐色	密	外面にスス
							底径	(8.2)	外面	ヘラケズリ・ヘラナデ			二次焼成あり
							器高	〔7.1〕					
SI-015	第58図1	14	86	須恵器	杯	20%	口径	(13.4)	内面	ナデ	灰色	密	切り離し不明
							底径	4.4	外面	ナデ			多方向手持ちヘラ削り
							器高	〔7.6〕					
	第58図2	16	001,004,006,068,069,125	須恵器	杯	20%	口径	(14.0)	内面	ナデ	灰色	密	切り離し不明
							底径	(9.2)	外面	ナデ			多方向手持ちヘラ削り
							器高	4.5					
	第58図3	4	117	土師器	杯	70%	口径	(15.9)	内面	ナデ	赤褐色	密	内外面赤彩
							底径	10.5	外面	ナデ・ヘラケズリ			
							器高	3.5					
	第58図4	8	81	土師器	杯	20%	口径	(12.4)	内面	ナデ・ヘラミガキ	赤褐色	密	内外面赤彩
							底径	—	外面	ナデ・ヘラナデ・ヘラミガキ			
							器高	3.0					
	第58図5	13		土師器	杯	30%	口径	—	内面	ナデ	灰色	密	回転ヘラ切り？の後手持ちヘラ削り
							底径	8.6	外面	ナデ			摩滅により不明瞭
							器高	〔1.9〕					
	第58図6	6	001,004,048,120	土師器	手捏	40%	口径	(7.0)	内面	ナデ	橙褐色	密	
							底径	5.4	外面	ナデ			
							器高	3.9					

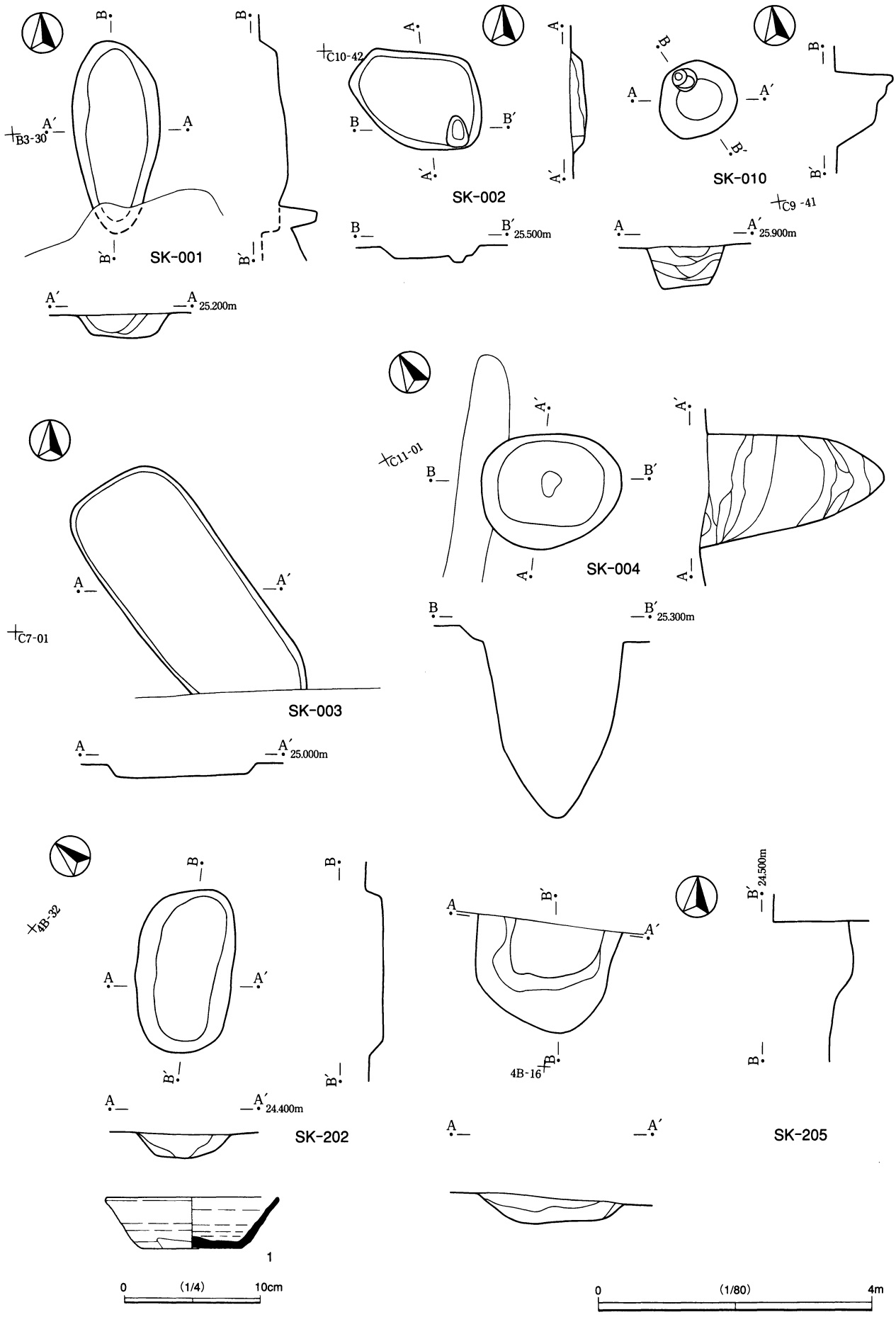
遺構番号	挿図番号	実測番号	遺物番号	器質	器形	遺存度	法量(cm)		調整		色調	胎土	備考
SI-015	第58図7	5	80	土師器	鉢	95%	口径	6.1	内面	ナデ	黒褐色	密	
							底径	5.2	外面	ナデ・ヘラナデ			
							器高	6.3					
	第58図8	1	100,116	土師器	甕	20%	口径	20.6	内面	ナデ・ヘラナデ	橙褐色	密	
							底径	—	外面	ナデ・ヘラケズリ・ヘラナデ			
							器高	〔15.2〕					
	第58図9	3	062,113	土師器	甕	5%	口径	(17.5)	内面	ナデ・ヘラナデ	褐色	粗	混入物多・石英，雲母長石　二次焼成あり
							底径	—	外面	ナデ・ヘラナデ			
							器高	〔11.5〕					
	第58図10	2	037,101,115	土師器	甕	10%	口径	18.6	内面	ナデ・ヘラナデ	黒褐色	密	外面にスス 二次焼成あり
							底径	—	外面	ナデ・ヘラケズリ・ヘラナデ			
							器高	〔5.9〕					
SI-201	第59図1	1		須恵器	杯	5%	口径	(12.0)	内面	ナデ	灰色	密	
							底径	—	外面	ナデ			
							器高	〔2.5〕					
SB-005	第62図1	1	2	土師器	皿	10%	口径	—	内面	ナデ	白灰色	密	回転糸切り 内面底部に朱が残る
							底径	(4.4)	外面	ナデ			
							器高	〔1.7〕					
SK-202	第60図1	1		須恵器	杯	30%	口径	(12.8)	内面	ナデ	黒灰色	密	回転ヘラ切りのち手持ちヘラケズリ
							底径	9.4	外面	ナデ・ヘラケズリ			
							器高	3.8					

（2）土坑（第60図，図版28・29，第15・16表）

土坑は12基検出されたが，時期や性格が特定できるものは少ない。遺構の説明は第16表に示したので，詳しくは述べない。SK-005，006，008，009は列状の土坑群であるが，SD-001，SD-011と並行して位置することから，これらの区画溝に伴うものと考えられる。底面に不定形の小さなピット状のものが存在することから，土地区画に伴う樹木列の痕跡であろうと推測されるため，詳細な図は掲載していない。

第15表　前戸遺跡　土坑属性表

遺構名	グリッド	長径（m）	短径（m）	深さ（m）	出土遺物	覆　　土	重複と新旧	特記事項
SK-001	B3-20, B3-30	2.8	1.28	0.38		ローム粒子を含む暗褐色土。	SI-001と重複。SK-001の方が古い。	
SK-002	C10-42	1.8	1.5	0.2				
SK-003	B7-41, C7-02				縄文時代中期土器片			
SK-004	C11-01	2.05	1.7	2.6		上層は黄褐色土，中層は黒褐色土，下層は黄褐色土，ローム粒子，ブロックを含む。		
SK-005	B11-42, C11-02	2.55	1.95	0.6			SK-006,008と重複。新旧は不明。	小さなピット状の掘込みが集中している。
SK-006	B11-41	3	1.1	0.2			SK-005,008と重複。新旧は不明。	溝状の浅い掘込み
SK-008	C11-02	3.3	2.01	1.5		暗褐色土。底面附近に黒色土が堆積している。ローム粒子，ロームブロックの量によって分層している。	SK-005,006と重複。新旧は不明。	土坑状の掘込みと小さなピットが集中している。
SK-009	B11-32					上層は暗褐色土，下層は黒褐色土。下層にはロームブロックを多く含む。底面附近にはロームブロックの層。		長径約1.8m～1.0mの土坑列。
SK-010	B10-30	0.91	0.82	0.43		黒色土を主体とし，ローム粒子，ブロックを少し含む。		
SK-202	B4-32	2.4	1.2	0.29	須恵器，鉄滓	締まりのある黒褐色土を主体とする。		8世紀第3四半期
SK-205	B5-00, B5-01	－	1.05	0.2		黒褐色。土ローム粒子を含む。		


SK-001
B3-30
25.200m
SK-002
C10-42
25.500m
SK-010
C9-41
25.900m
SK-003
C7-01
25.000m
SK-004
C11-01
25.300m
SK-202
4B-32
24.400m
SK-205
4B-16
24.500m
1
0 (1/4) 10cm
0 (1/80) 4m

第60図　土坑

（3）掘立柱建物跡（第61・62図，図版26・27，第15表）

掘立柱建物跡と考えられる柱穴群が5棟検出された。いずれも調査区中央東よりに位置している。全ての柱穴が検出されているものはSB-005の1棟のみで，他は溝跡によって破壊されたり，調査区外にかかっている。よって柱穴番号はそれぞれ任意に与え，記述を行うことにする。また同様の理由から建物の規模や主軸が不明瞭であるため，あくまでも推測の域を出ないことをここで断わっておく。

SB-001（第61図，図版26）

B9－32，33に位置している。1間×2間の建物で，桁行きは3.52m×4.0mであると推測される。検出された柱穴は浅く，深いものでも約30cmである。SD-010，SD-013溝跡とそれぞれ重複しており，破壊を受けている。SD-010と柱穴よりも深いことから，P4とP5の間にあったと想定される柱穴が消失してしまっている可能性が高い。また，P1の位置がP2に近すぎることから，この建物に伴うものではなく，本来の柱穴はやはりSD-010による撹乱のため消失している可能性がある。

柱穴の覆土は，上層に黒色土，底面や側面に黄褐色土が堆積していた。柱痕は，どの柱穴からも確認できなかった。

SB-002（第61図，図版27）

B10－22，23に位置している。2間×1間以上の規模の建物であると推測される。建物の北側と東側が調査区外にかかっており，全容は不明である。P1とP2の柱間は1.7m，P2とP3の柱間は1.74mである。柱の形状は円形もしくはやや楕円形で，確認面からの深さが50cm～60cmである。

柱穴の覆土には，柱痕跡が検出されており，それぞれ以下のような状況であった。

P1：柱痕跡にはローム粒子を少し含む褐色土が，その両側には，上層にローム粒子，ロームブロックをわずかに含む暗褐色土が，中・下層には黒褐色土が堆積していた。

P2：柱痕跡には，ロームブロックを少し含んだ粒子が粗い黒褐色土が堆積しており，その両側には，上層に暗褐色土，中層に黒褐色土，下層には暗褐色土が堆積しており，それぞれロームブロックを含んでいた。

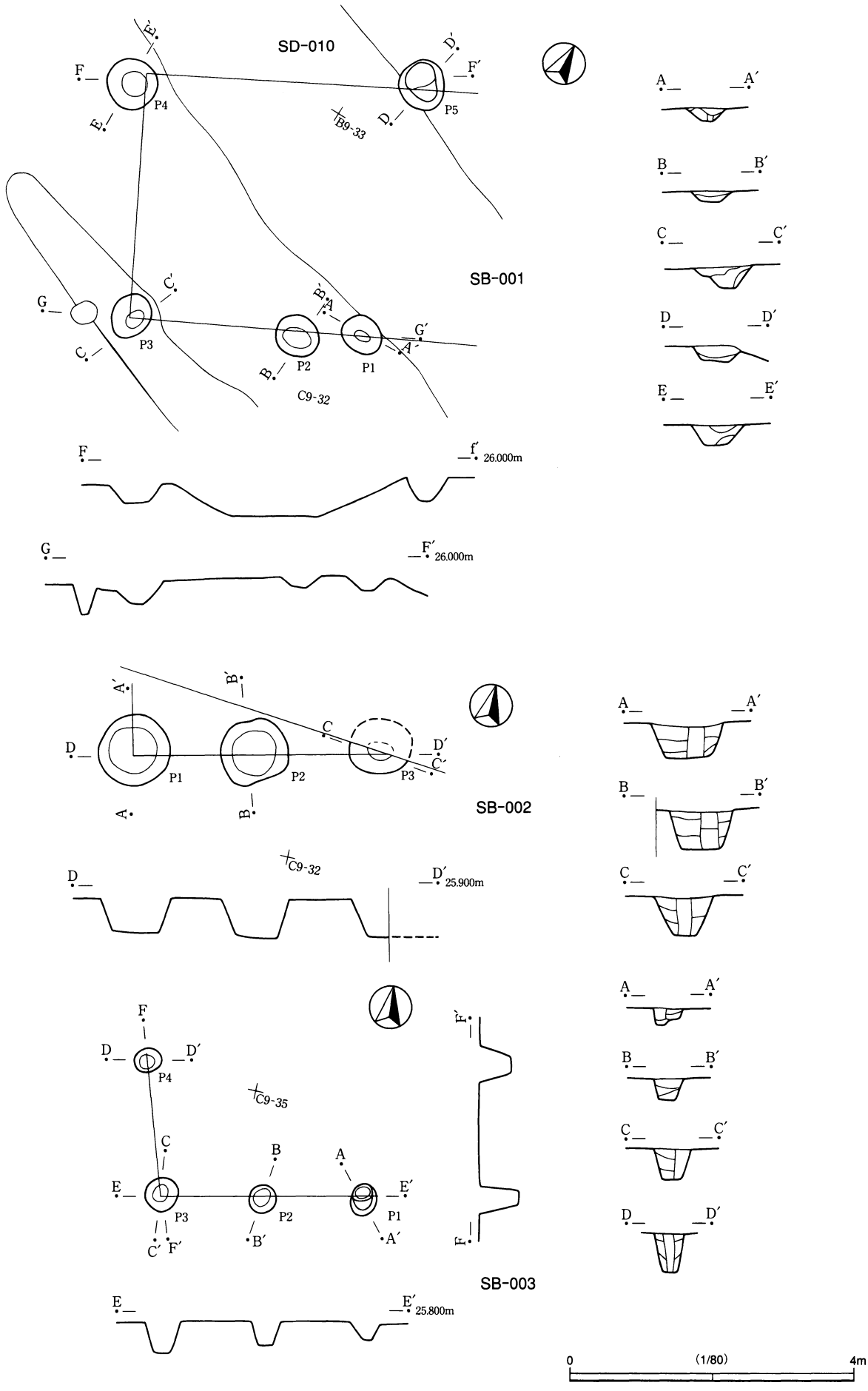
P3：柱痕には，ローム粒子を多く含む粒子の粗い茶褐色土が堆積しており，その両側にはローム粒子やロームブロックが混じる割合の異なる黒褐色土が堆積していた。上層は密に堆積していた。

SB-003（第61図，図版27）

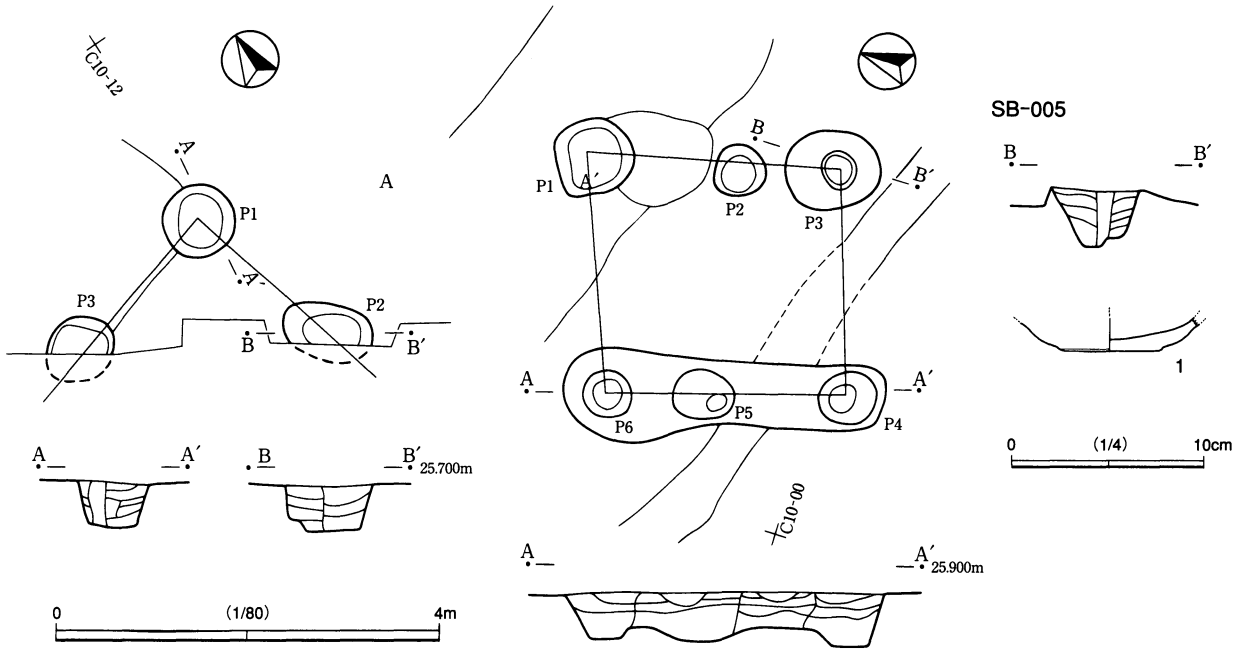
B10－34，B11－30に位置している。1間×2間以上の規模の建物である。建物の北東側が調査区外にかかっているため，全容を明らかにすることはできない。東西方向の桁行きは2.9m，P3とP4の柱間は1.92mである。柱の深さは30cm～50cmほどで，P2以外からは柱痕が確認されているが，必ずしも平面的に中央ではない。

柱穴の覆土の状況は以下のとおりである。

P1：セクション左側の土層は黒褐色土で堆積がやや粗く，柱痕跡である可能性が高い。柱痕跡の右側は上層がローム粒子を含む黒褐色土，下層がロームブロックを多く含む暗褐色土である。柱痕跡の下の土層はロームブロックを含む暗褐色土で，やや密に堆積している。



第61図　SB-001，SB-002，SB-003



第62図　SB-004，SB-005

Ｐ２：上・中・下層にはともに黒褐色土が堆積しており，上・中層にはローム粒子を少し含み，下層は固くしまっている。

Ｐ３：セクション左側壁に柱痕跡が寄っている。柱痕はローム粒子，褐色土ブロックを含む黒褐色土が堆積し，その右側には上層に黒褐色土，中・下層には暗褐色土が堆積している。

Ｐ４：中央に柱痕跡が見られ，ローム粒子をわずかに含む黒褐色土が堆積している。その両側は上層にはロームブロックを少し含む黒褐色土が，中・下層にはローム粒子を含む暗褐色土が堆積している。

SB-004（第62図）

Ｃ10－11，12に位置している。建物の南西側のほとんどが調査区外に位置するため，建物の規模は明らかではない。柱間は約２ｍである。柱穴の深さは約50cmである。

柱穴の覆土の状況は以下のとおりである。

Ｐ１：柱痕跡はローム粒子を少し含む暗褐色土が堆積している。その両側は，暗褐色土が堆積しており，ローム粒子，ロームブロック，黒色土などの混ざる割合により分層された。

Ｐ２：セクションのほぼ中央で左右に分かれ，ともに水平堆積が見られる。右側の堆積が粗く，底面がより深くなっていることから，右側が柱痕跡であると推測される。ともに暗褐色土が堆積しており，ローム粒子，ロームブロック，褐色土ブロックなどの混じり具合により分層される。右側最下層には黒色土が堆積しており，堆積が粗い。

SB-005（第62図，図版27，第15表）

Ｃ10－40に位置している。１間×２間の規模で，桁行きは2.4m×2.6mである。SD-010とSD-013と重複しており，Ｐ１と，Ｐ５，Ｐ６間が破壊を受けている。Ｐ４からＰ６の間は布堀状の溝でつながっている。柱穴の深さは50cm～60cm程度で，Ｐ３からは柱痕跡が確認できたが，Ｐ４～Ｐ６は，版築状の堆積は

確認できるが，柱痕は断面からは確認できなかった。

柱穴の覆土は以下のような状況である。

Ｐ３：柱痕跡，その両側ともに暗褐色土が主体で堆積している。柱痕跡はローム粒子を含み，堆積がやや粗くい。柱痕跡の両側の土層は，ローム粒子，ロームブロックが含まれる割合により分層される。最下層は堆積がやや粗い。

Ｐ４：上層はローム粒子を少し含む黒褐色土，中層にはローム粒子を含む暗褐色土，下層にはロームブロックに黒色土が混入する明褐色土が堆積している。

Ｐ４とＰ５の間は，上・中層にはローム粒子を含む黒褐色土，下層にはロームブロックを非常に多く含む明褐色土が堆積している。

Ｐ５：上・中層は黒褐色土が堆積し，上層にはローム粒子，中層にはロームブロックをわずかに含んでいる。下層はロームブロックを多く含み固くしまる暗黄褐色土が堆積している。

Ｐ６：上・中層にはやや固くしまる黒褐色土が，下層にはロームブロックを非常に多く含む黄褐色土が堆積している。

（４）溝跡（第48図，第49図，図版30・31・33，第17表）

今回の調査で，15条の溝跡が検出されている。これらは，調査区が細長いために異なる溝跡として記録されているが，実際は同一の遺構であるものも少なくはない。それぞれの溝跡の詳細については，第17表に示したので，詳しくは述べない。ここでは，それぞれの溝跡の相関について触れることにする。

１）幅の広いクランク状に曲がる溝跡（図版30・33，第17表）

SD-007に代表される。SD-007はSD-008とほぼ直角に合流している。また，SD-006はSD-007と平行しており，同様の性格の溝跡であると考えられる。また，SD-003も同様にクランク状に曲がっており，調査区外でSD-006，007と交差するか，もしくは同じ遺構である可能性が高い。同じことはSD-010にも言える。

これらの溝跡は，幅が２ｍから５ｍと広く，覆土の締まりが弱く，硬化面が形成されないなど，共通の特徴を持つ。これらは同じ性格のものであると推測され，同時期か前後する時期のものであると考えられる。並行する溝跡については，同時期か，もしくはある時期に掘り直しをした痕跡であろう。

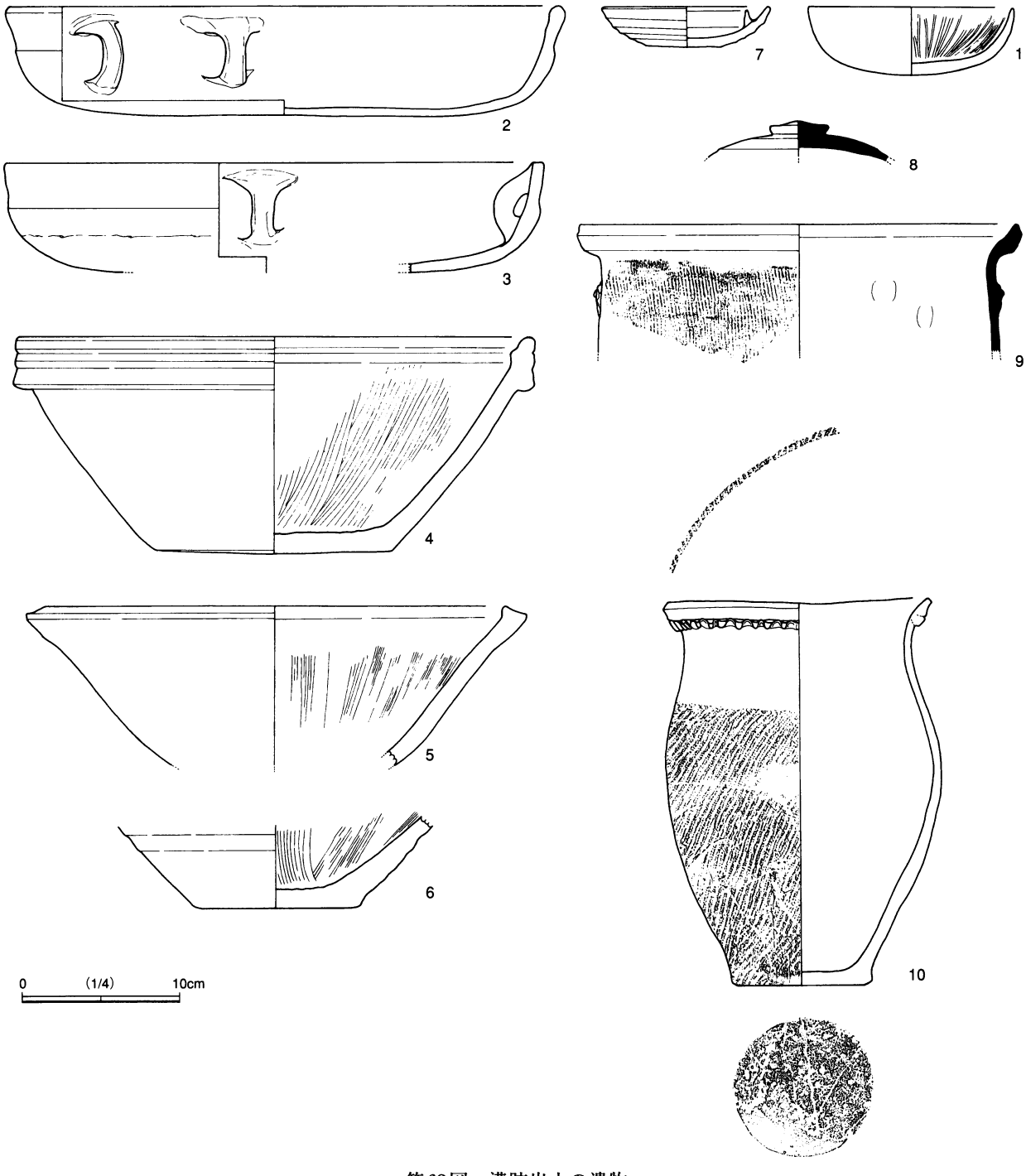
時期は，SD-007において，中世末の内耳鍋，灯明皿が出土していることから，中世から近世前葉に形成されたものと推測される。

第16表　前戸遺跡　溝跡属性表

	グリッド	幅	検出された長さ	深さ	覆　土	底面の様子	出土遺物	時期	特記事項
SD-001	C11-20～D11-01								
SD-002	C10-34, C11-10	1.3m	約7m	約25cm	黒色土を主体とし，底面近くには黄褐色土が混入する。硬化している。	一部，ピット状の凹みがある。硬化している。			道路跡である。
SD-003	B8-21, C8-01	2m	約24m	約35cm	黒褐色土を主体とする。	凹凸が激しい。			SD-004,SD-005と合流している。SD-003が最も古いものと推測される。
SD-004	B8-34～C8-03	50cm	9m	約15cm	上部は暗褐色土，下部は黄褐色土				SD-003と合流する。合流点に潅木が植えてあることから地境の溝である可能性が高い。
SD-005	B8-23～B8-42	80cm	約10m	約12cm	上部は暗褐色土，下部は暗黄褐色土。				SD-003と合流する。合流点に潅木が植えてあった痕跡が見られるので，地境の溝である可能性が高い。
SD-006, SD-009	B5-42～B7-11	約4m	約36m	約40cm				近世	SD-007と並行する溝
SD-007	B5-23～B7-10	2.4m	約51m	約40cm	ハードロームブロックを多く含む褐色土，暗褐色土。	径約1mのピットが多数検出されている。	内耳土鍋，擂り鉢，灯明皿	中世後葉～近世初頭	SD-008と合流する。B5-33から遺物が集中して出土。
SD-008	B5-12～B5-40	2.6m?5.2m	16.4m	40cm	ハードロームブロックを含む黒褐色土を主体に堆積している。何度も掘り直されている。	径80cm?2mのピットが多く確認された。	弥生土器，須恵器	奈良時代以降	SD-007と合流する
SD-010	B9-10～C11-10	2.2m	約50m	約45cm	ハードロームブロックを含む暗褐色土	場所によりピットが分布する。硬化せず凹凸ある。			SD-001,SD-011と合流するようである。
SD-011	B11-31, 41	2m	約5m	約30cm	暗褐色土。下部にローム粒子を多く含む。				
SD-012	C11-12, 13	1.5m	約6m	約40cm	上層は黒褐色土，下層はハードロームブロックを含む暗黄褐色土。	底面に，幅約60cmの一段低い部分がある。			
SD-013	B9-32～B10-41	60cm	約18m	約12cm	暗褐色土。炭化物，ハードローム粒子を含む。	硬化せず，凹凸ある。			
SD-014	C11-01	70cm	約4.4m	約20cm					
SD-015	B1-24,34	1.1m	4.5m	約10cm	ローム粒子を少量含む暗褐色土。全体的に軟らかい。				

2）道路跡（第17表）

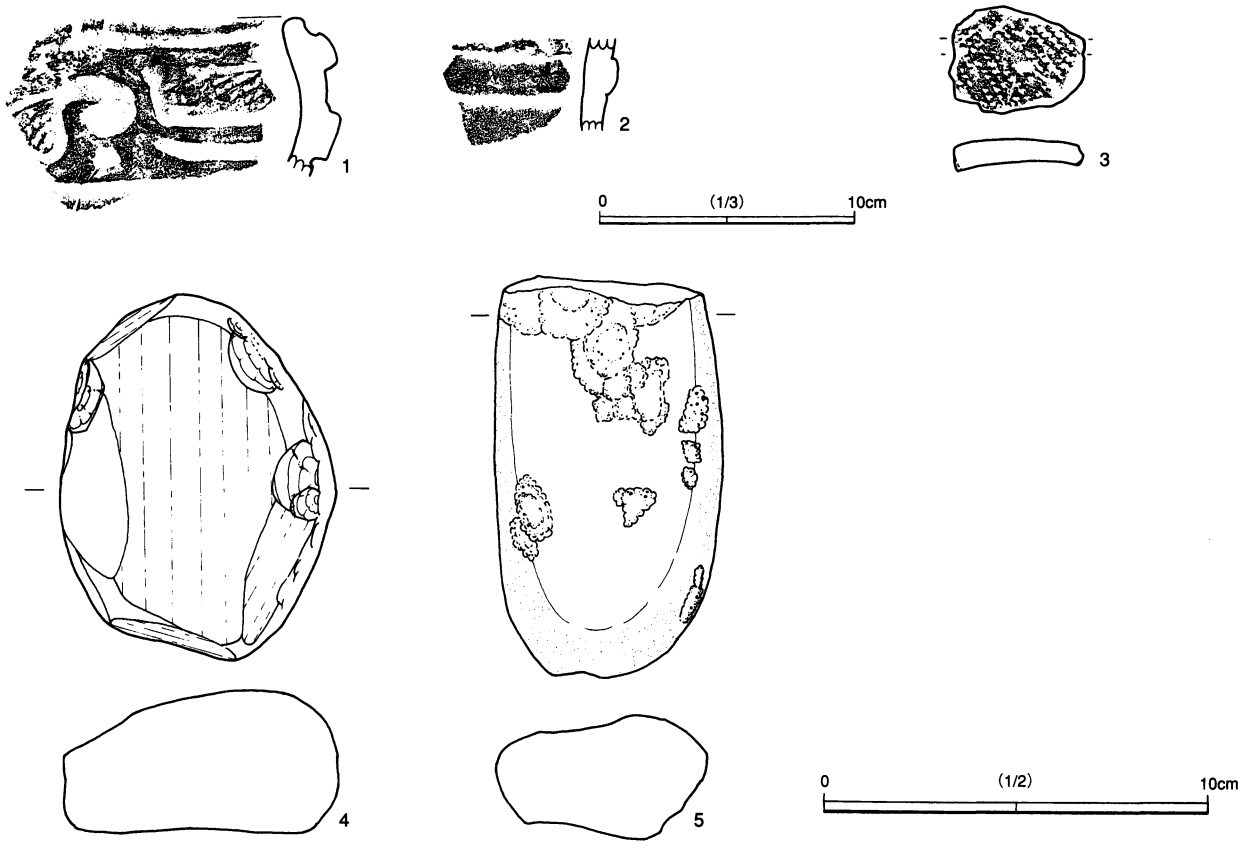
SD-002は，覆土中や底面に硬化面が確認されていることから，道路跡であると考えられる。明確な道路跡は，これ以外には確認されていない。



第63図　溝跡出土の遺物

3）細く浅い溝跡（図版31，第17表）

SD-004，SD-005，SD-013などがこれに属する。1）の幅の広い溝と同様の方向に伸びていたり，合流する部分に潅木が植えられていることから，同じ時期に掘られた土地区画溝であると考えられる。



第64図　グリッド出土遺物

2　グリッド出土の遺物

遺構外からは縄文土器，縄文時代の石器，土師器，須恵器，鉄滓が出土した。

1～5は縄文時代の遺物である。1，2は縄文時代中期加曽利E式に属する土器である。1は加曽利EⅡ式であろう。

3は土器片錘である。図の右側には明瞭な糸かけの刻みが見られるが，左側の糸かけ部は，調査器具により削られており確認できない。1，2と同様に加曽利E式に属する資料である。

4，5は縄文時代の石器である。4は砥石状の石器で，粒子の細かい軟質砂岩製である。図の上面，下面および側面の一部が平滑に磨られている。図右側面は，敲打痕が見られるが，石材の特性から風化して痕跡は明瞭ではない。5は敲石で，流紋岩製である。図の上部は敲いた衝撃で折れたものと推測される。図の上部に敲打痕が密集するが，それ以外の箇所にも見ることができる。

第2節　まとめ

1　はじめに

前戸遺跡の今回行われた発掘調査は，道路建設に伴うものであることから調査区が南北に狭く，遺跡の全容を明らかにするまでは至らなかった。しかし，ほぼ同じ時期に発掘調査が行われた東海道遺跡の成果とともに，遺跡が位置する台地上にトレンチを入れ，古代集落を東西に断ち割ったようなデータを得ることができた。このことは，遺跡が立地する印旛沼西奥部地域の古代の景観を復元するためには，きわめて有益な成果であったといえる。

今回の調査では，縄文時代中期から近世にかけての遺物が出土し，古墳時代後期から近世にかけての遺構が検出された。なかでも古墳時代後期から平安時代初頭にかけての竪穴住居跡，奈良・平安時代のものと考えられる掘立柱建物跡，中世から近世前葉にかけての溝跡が，この遺跡を特徴づける遺構であるといえる。

これらの遺構の中から，今回は竪穴住居跡について簡単に成果を述べることにする。

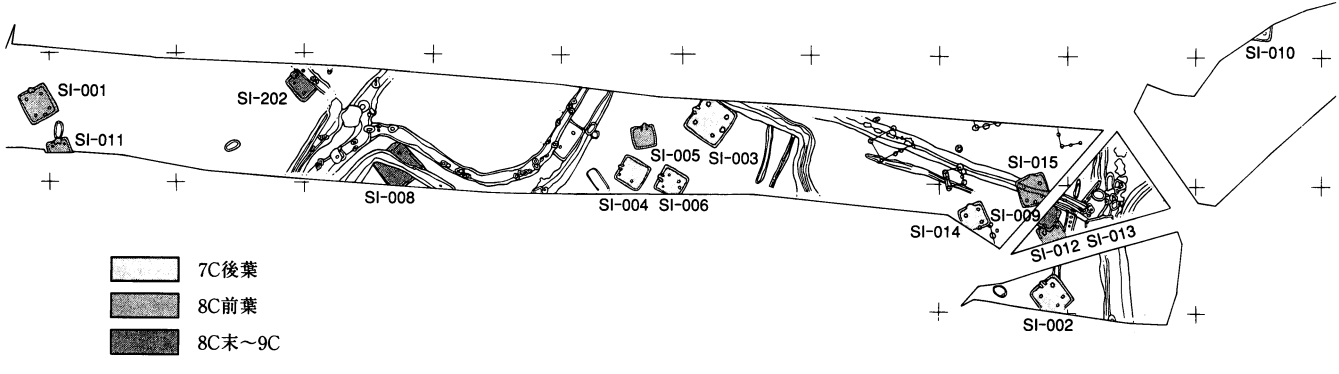
2　竪穴住居跡の主軸と面積

前戸遺跡からは，古墳時代後葉から平安時代初頭に属している竪穴住居跡が16軒検出された。時期別に見ると，7世紀後葉に属するものが5軒，8世紀代のものが5軒，8世紀末から9世紀代に属するものが3軒，時期の特定ができなかったものが3軒であった。

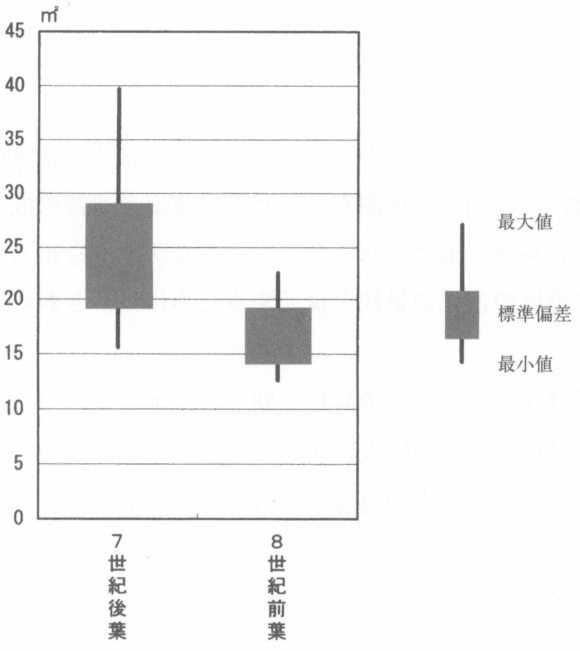
ここでは，これらの住居跡の中で，比較的多く検出されている7世紀後葉のものと8世紀前葉のものについて，主軸の方角と，面積を比較し，両者にどのような傾向について簡単に述べることにする。なお，8世紀末から9世紀初頭に位置づけられる住居跡については，軒数が3軒と少なく，不確定要素が多いため，今回は検討の対象から除外する。今後，東海道遺跡や松崎遺跡群などと合わせて検討する必要がある。

（1）住居跡の主軸（第65図）

カマドの位置が確認できた住居跡についてはいずれも，カマドが北北西から北西に向いており，他の方向を向くものは確認できなかった。カマドが破壊されている住居跡についても同様であると推測される。時期ごとに見た住居跡の主軸は，7世紀後葉のものに北西を向いたものが多く，8世紀前葉のものに北北西を向いたものが多い傾向にあるが，例外も存在する。



第65図　時期別にみた竪穴住居跡の分布



第66図　時期別にみた竪穴住居跡のサイズ

（2）住居跡の面積（第65図，66図）

住居跡の面積は，縦軸方向の長さ×横軸方向の長さで算出した。7世紀後葉の住居跡は，平均が24.1㎡であり，最大のものは39.7㎡，最小のものは15.6㎡であった。一方，8世紀前葉のものは平均が16.6㎡，最大が22.6㎡，最小が12.6㎡であった。両者を比較すると，平均値で約15㎡ほど7世紀後葉のものが大きく，最大のものを比較すると17㎡ほどの大きさの違いが見られる。7世紀後葉の住居跡の中でも小さなものは，8世紀前葉の住居跡と同程度の大きさではあるが，相対的に7世紀後半に属する住居跡の方が大きいという傾向が見られた。

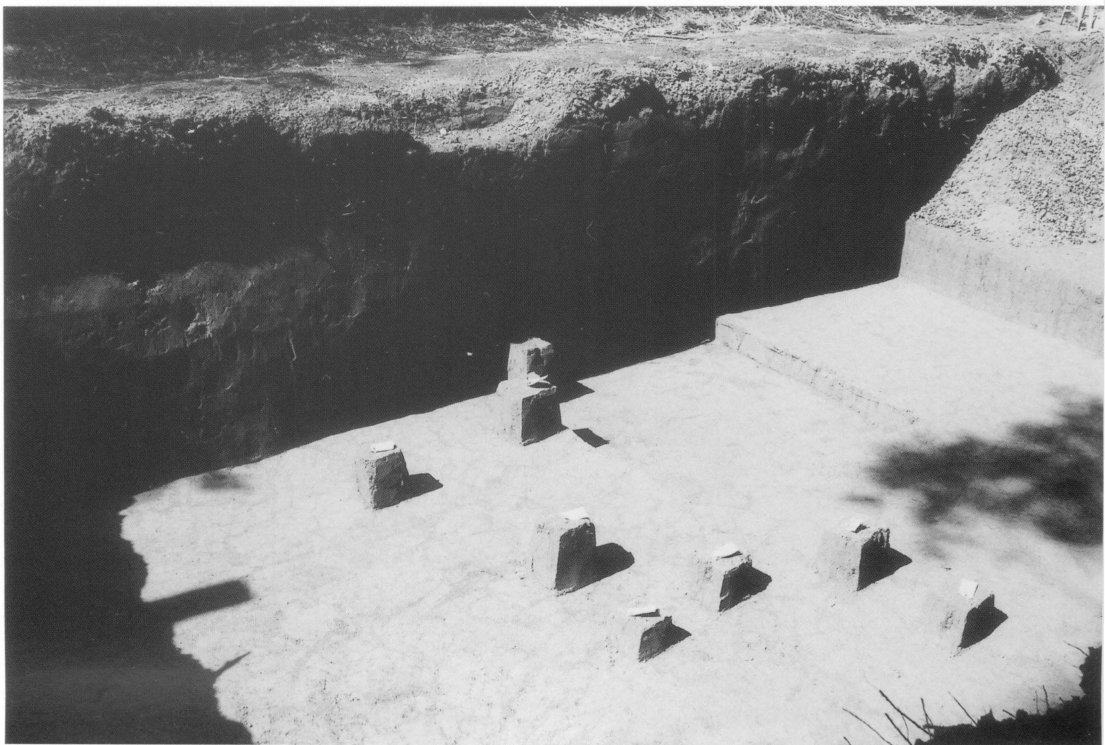
3　おわりに

先にも述べたように，今回の調査のデータは，前戸遺跡全体の中でも断片的なものであるだけでなく，周辺の遺跡群のデータとあわせて分析することにより，本来の価値を発揮するものであるといえる。今後刊行される東海道遺跡，松崎遺跡群の成果とあわせて，当地域における古代集落を考える必要がある。

写　真　図　版

第Ⅰ文化層　第1ブロック
（南から）

第Ⅰ文化層　第1ブロック
（南東から）



第Ⅱ文化層　第2ブロック
（南東から）

第Ⅲ文化層　第3ブロック
（西から）

第Ⅲ文化層　第4ブロック
（南から）

第Ⅳ文化層　第5ブロック
（南から）

発掘調査前風景

道路際での発掘調査

遺物包含層調査風景

図版4

SK-001　全景

SK-001　土層断面

SK-003（手前）とSK-004（奥）

SK-002　全景

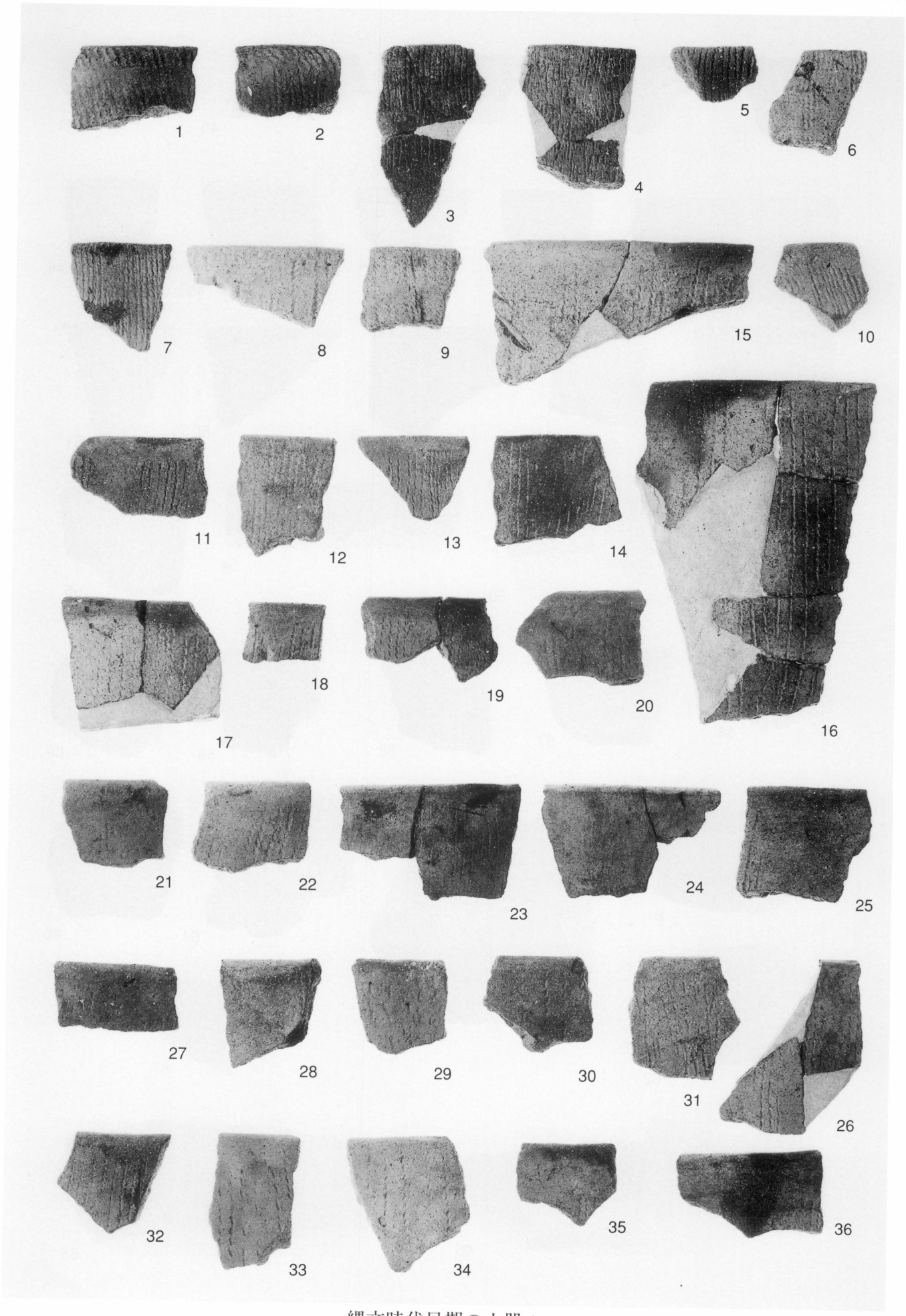
SK-002　土層断面

SK-005　全景

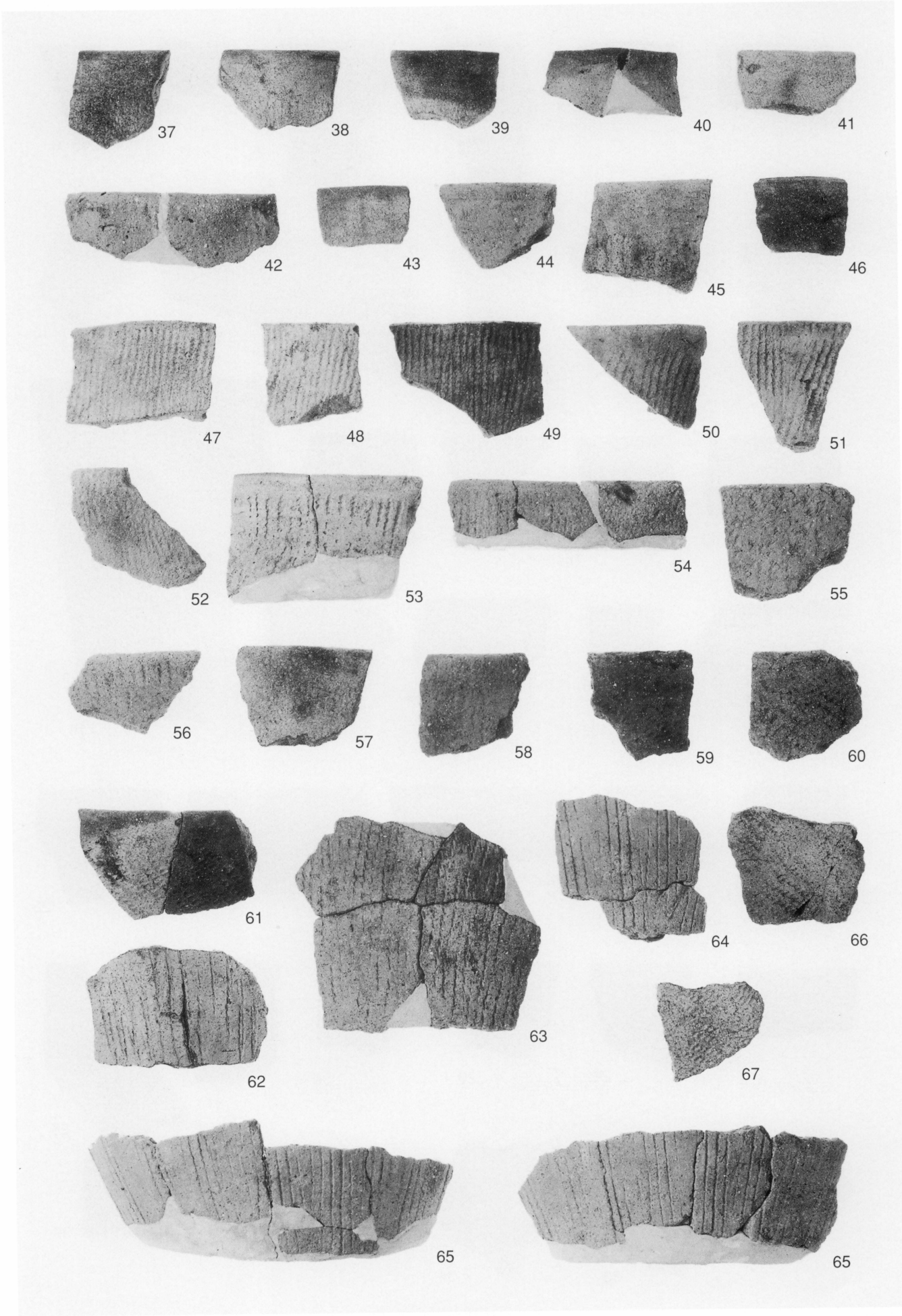
SD-001

SD-009

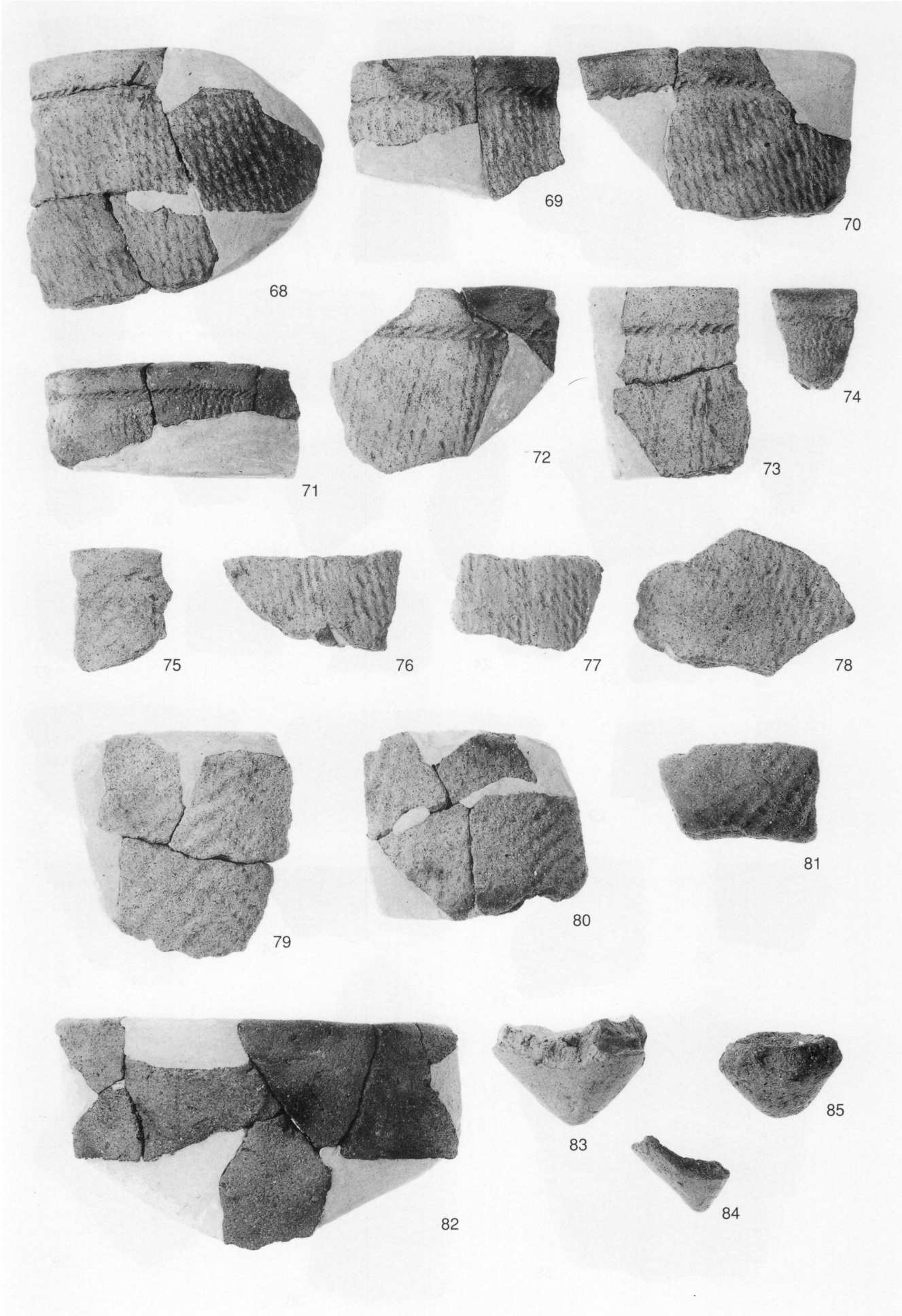
SD-010


1
2
3
4
5
6
7
8
9
15
10
11
12
13
14
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
27
28
29
30
31
26
32
33
34
35
36

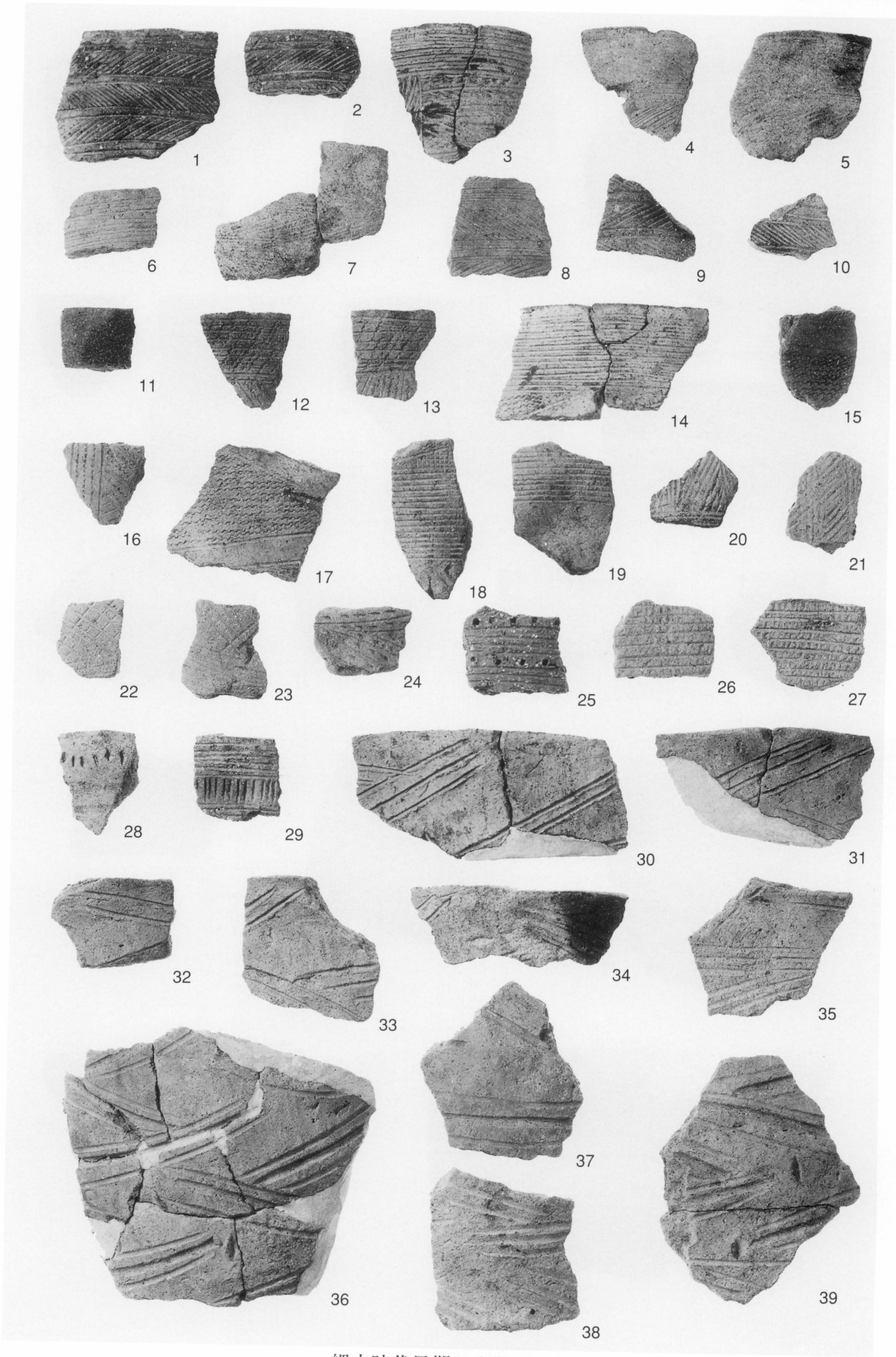
縄文時代早期の土器 1


37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
65

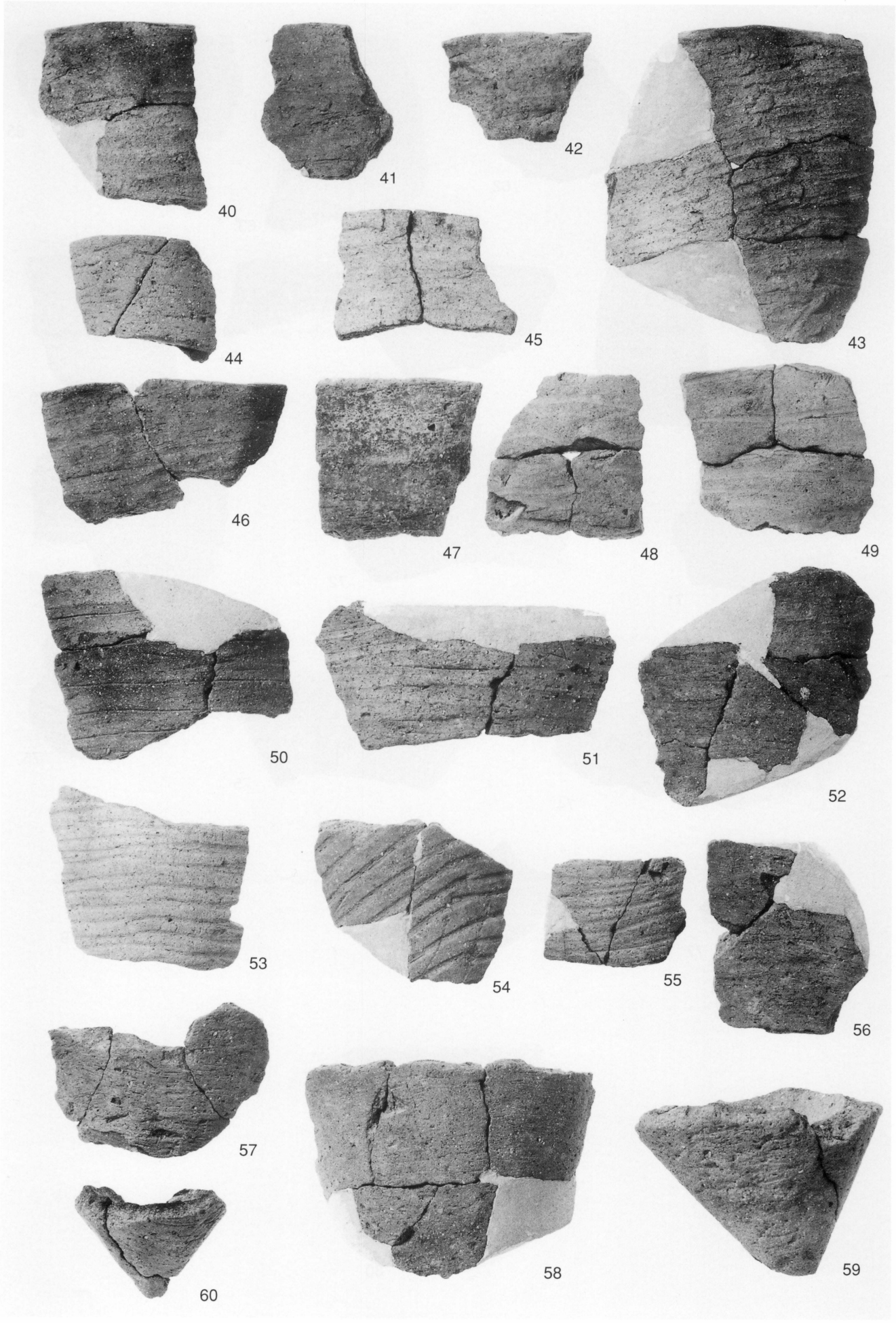
縄文時代早期の土器 2



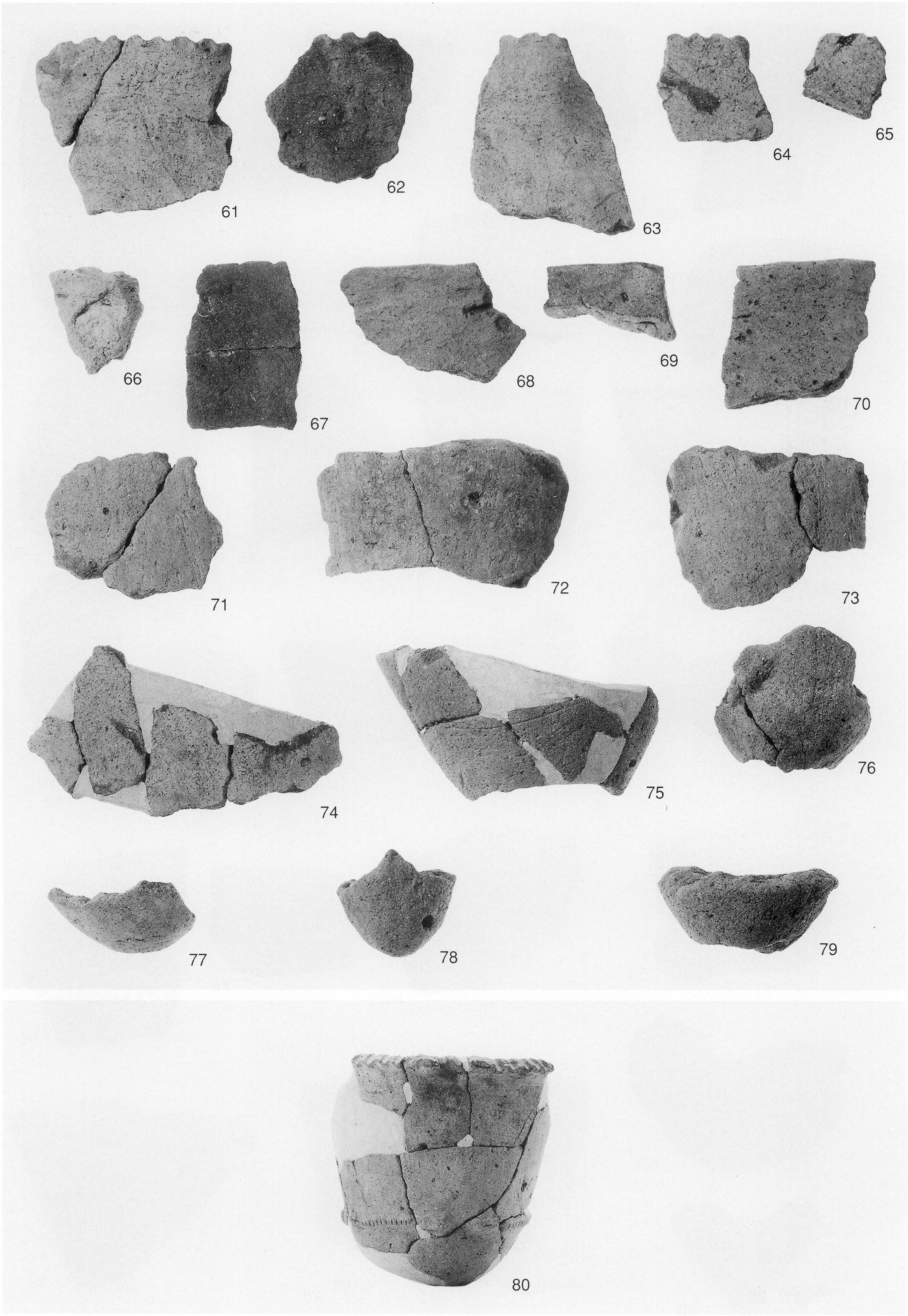
縄文時代早期の土器3


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39

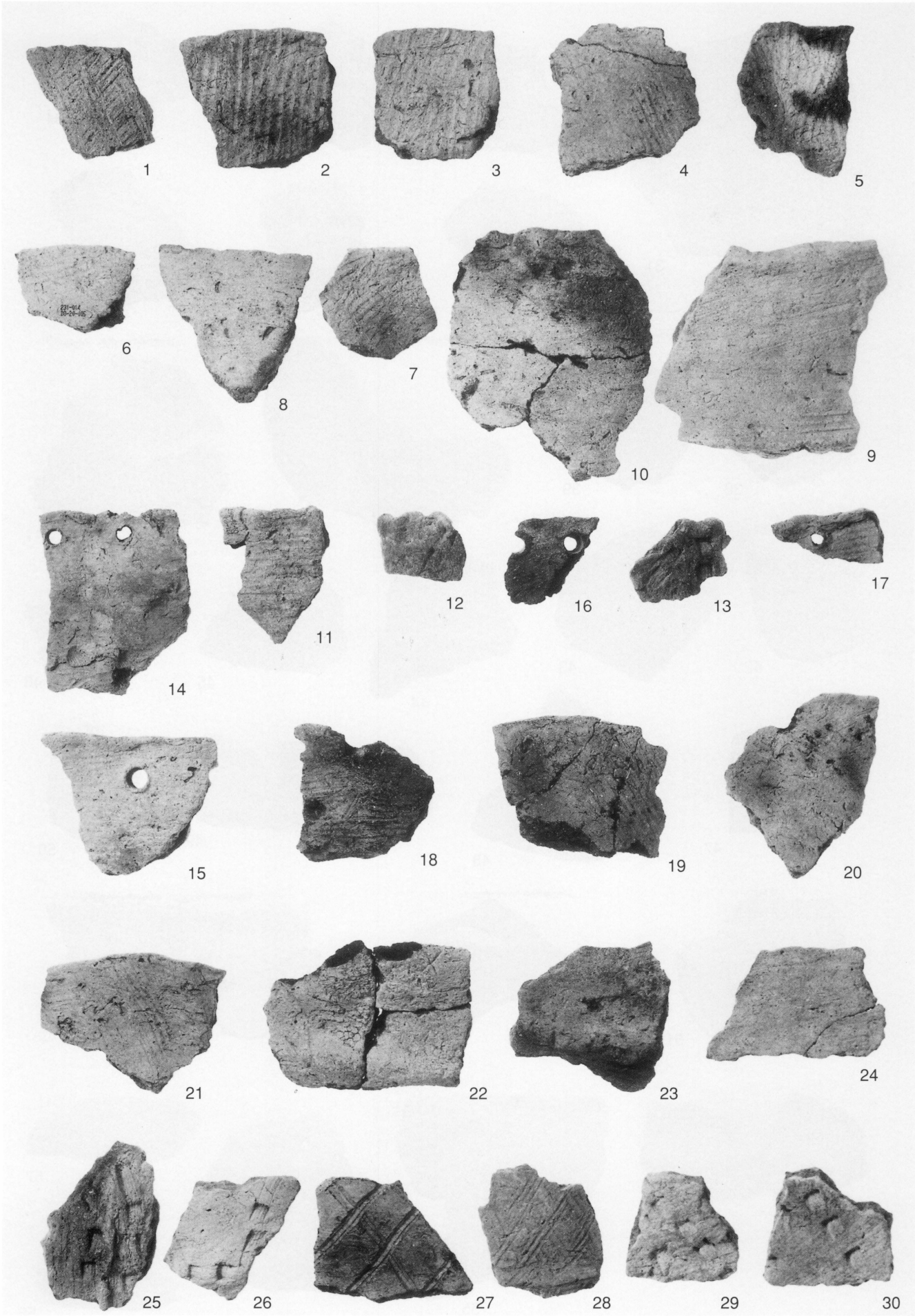
縄文時代早期の土器 4



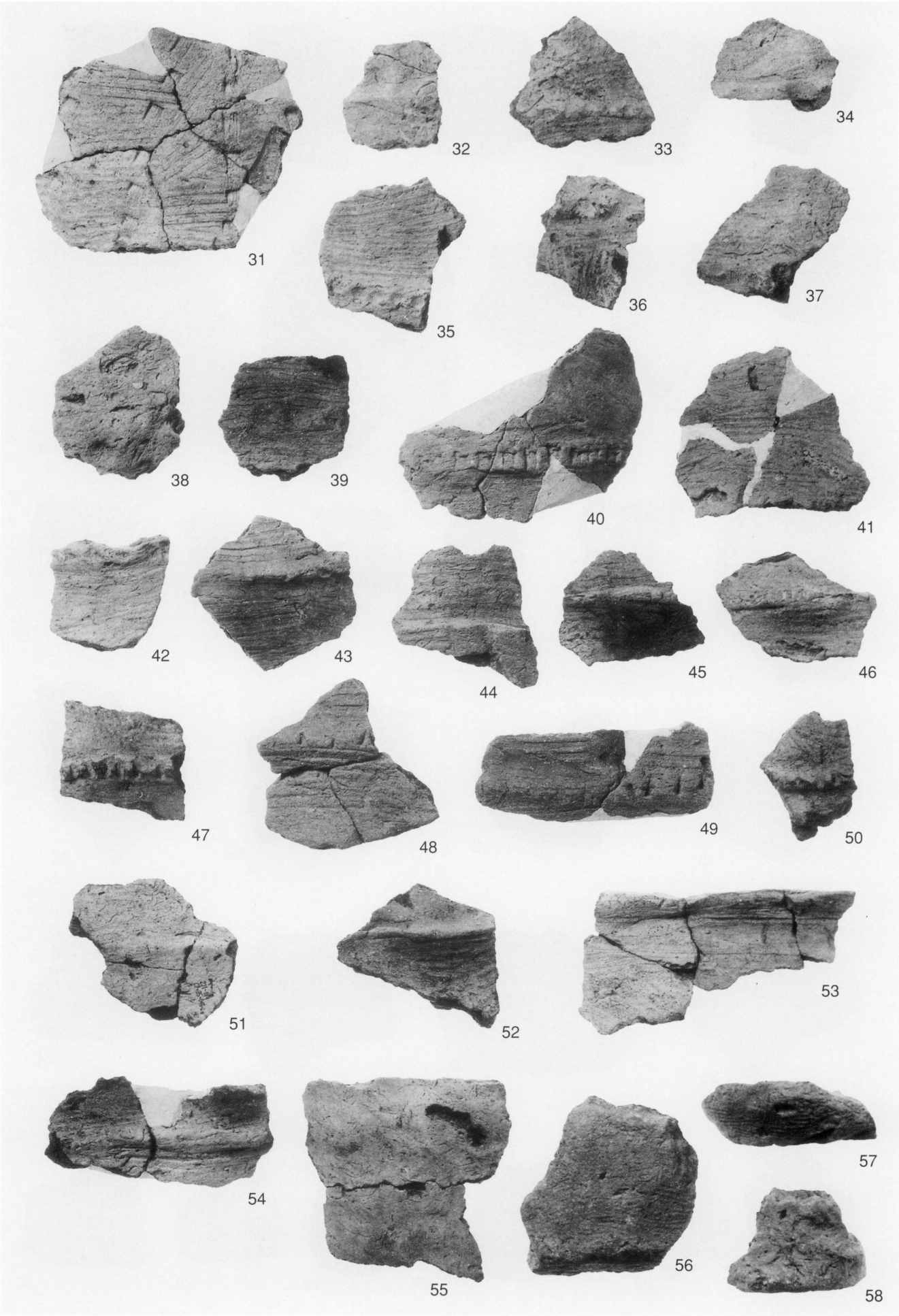
縄文時代早期の土器5



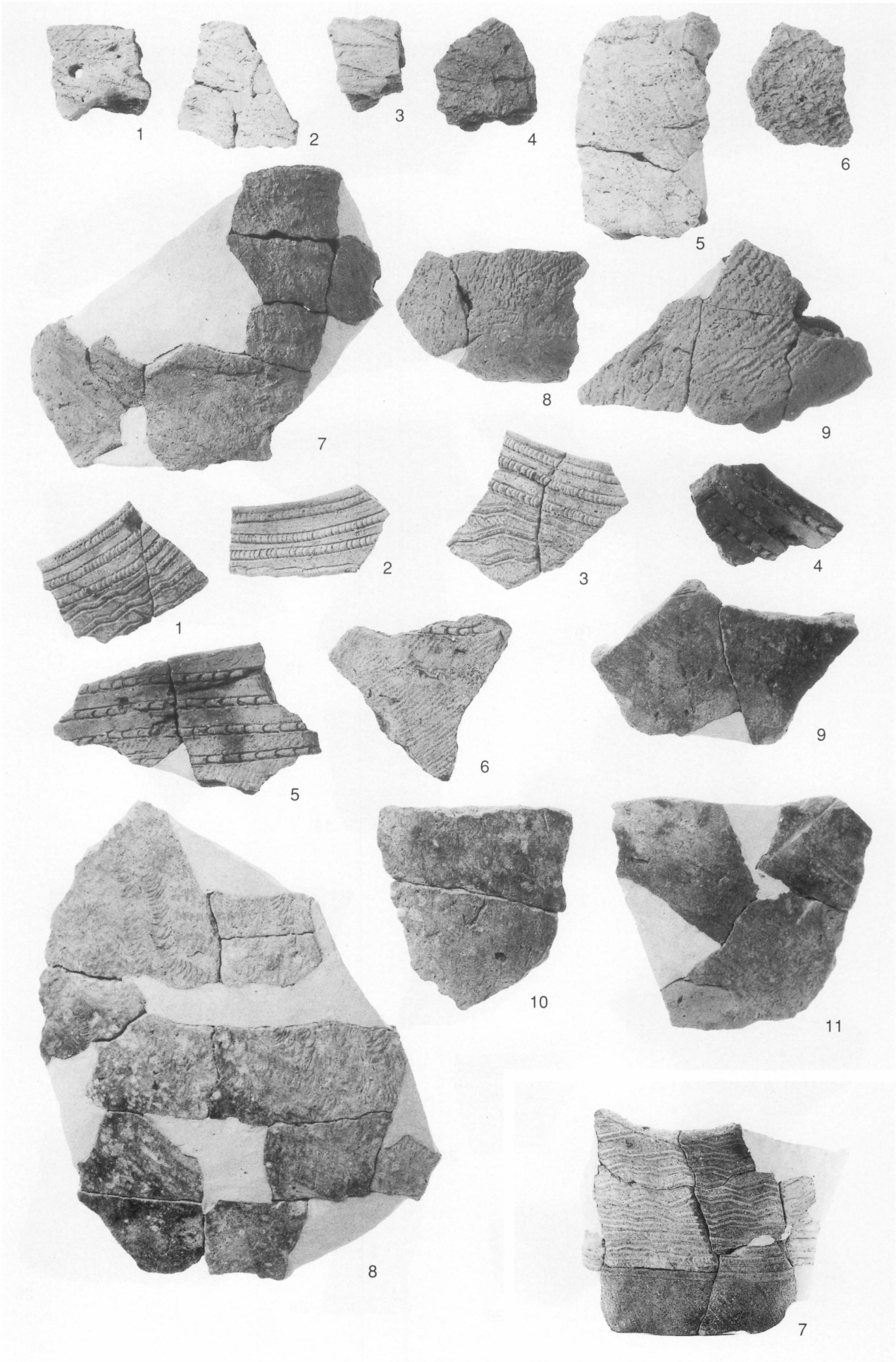
縄文時代早期の土器 6


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30

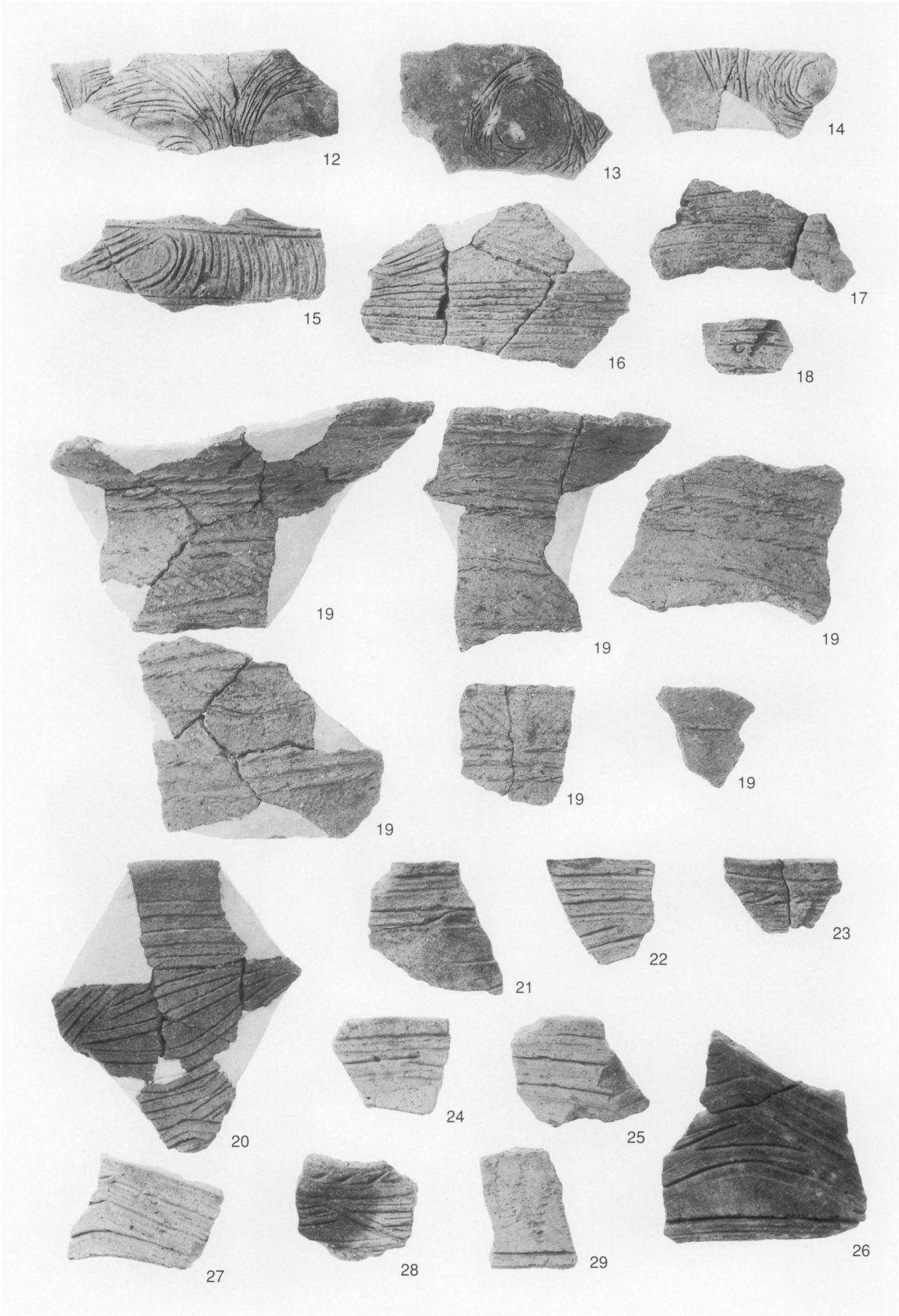
縄文時代早期の土器 7


31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58

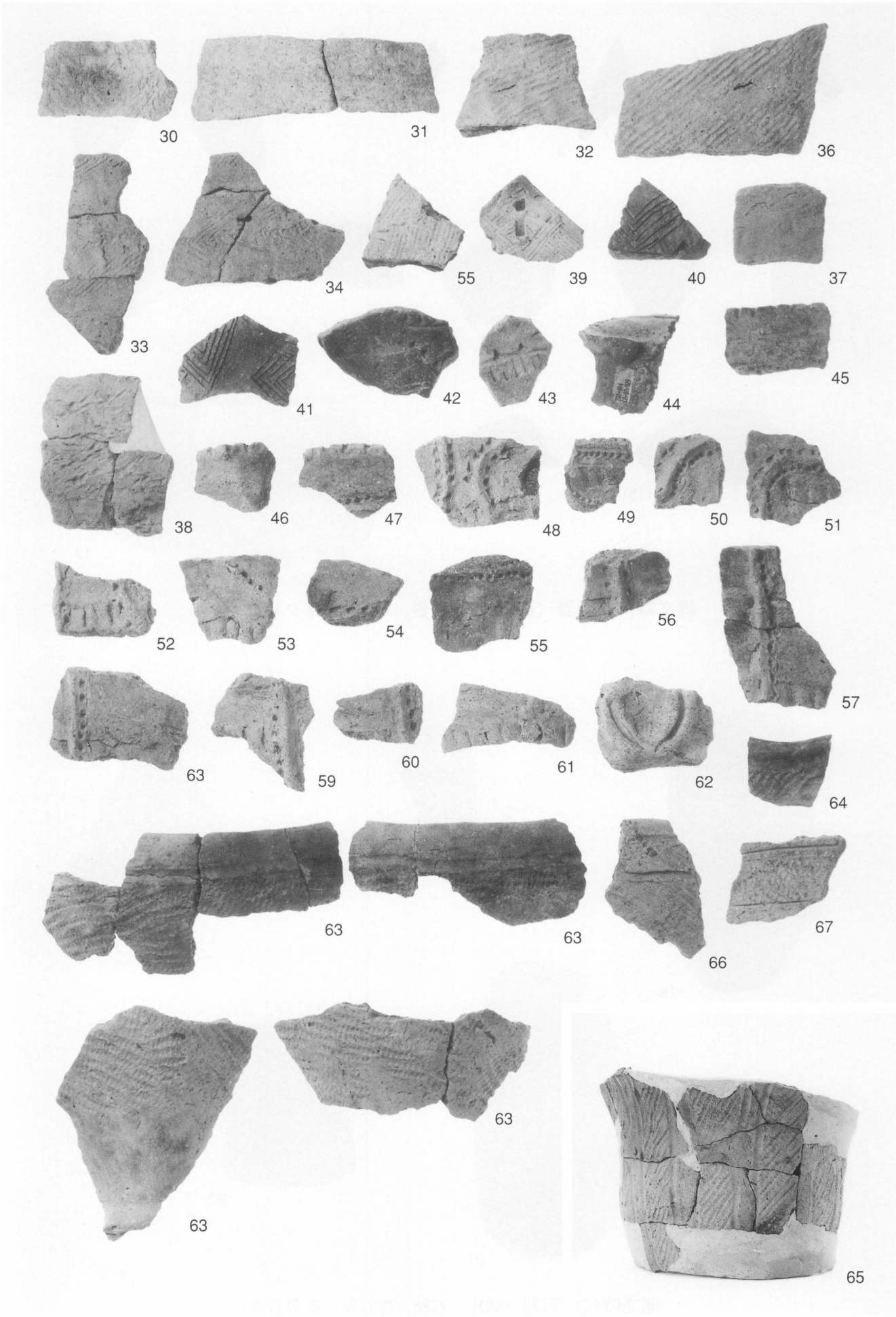
縄文時代早期の土器 8



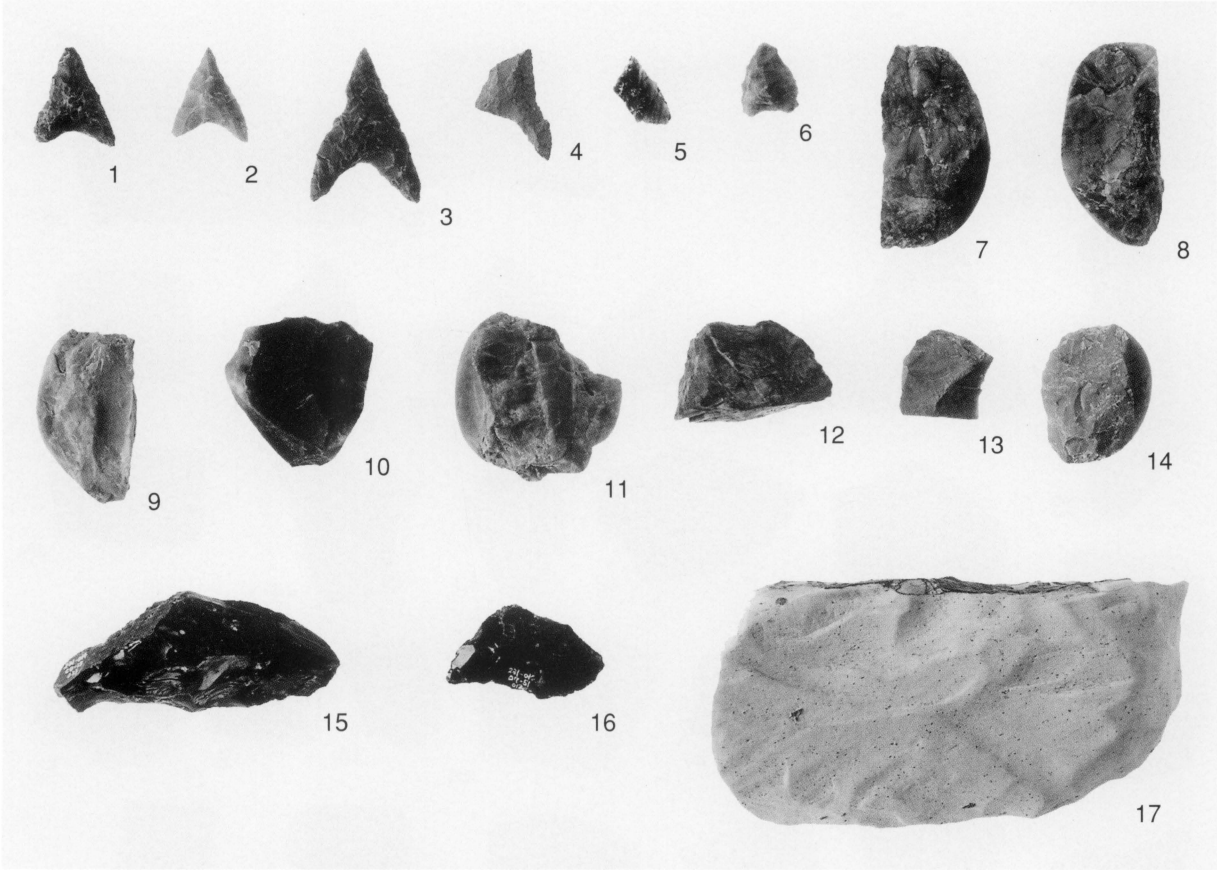
縄文時代前期の土器１



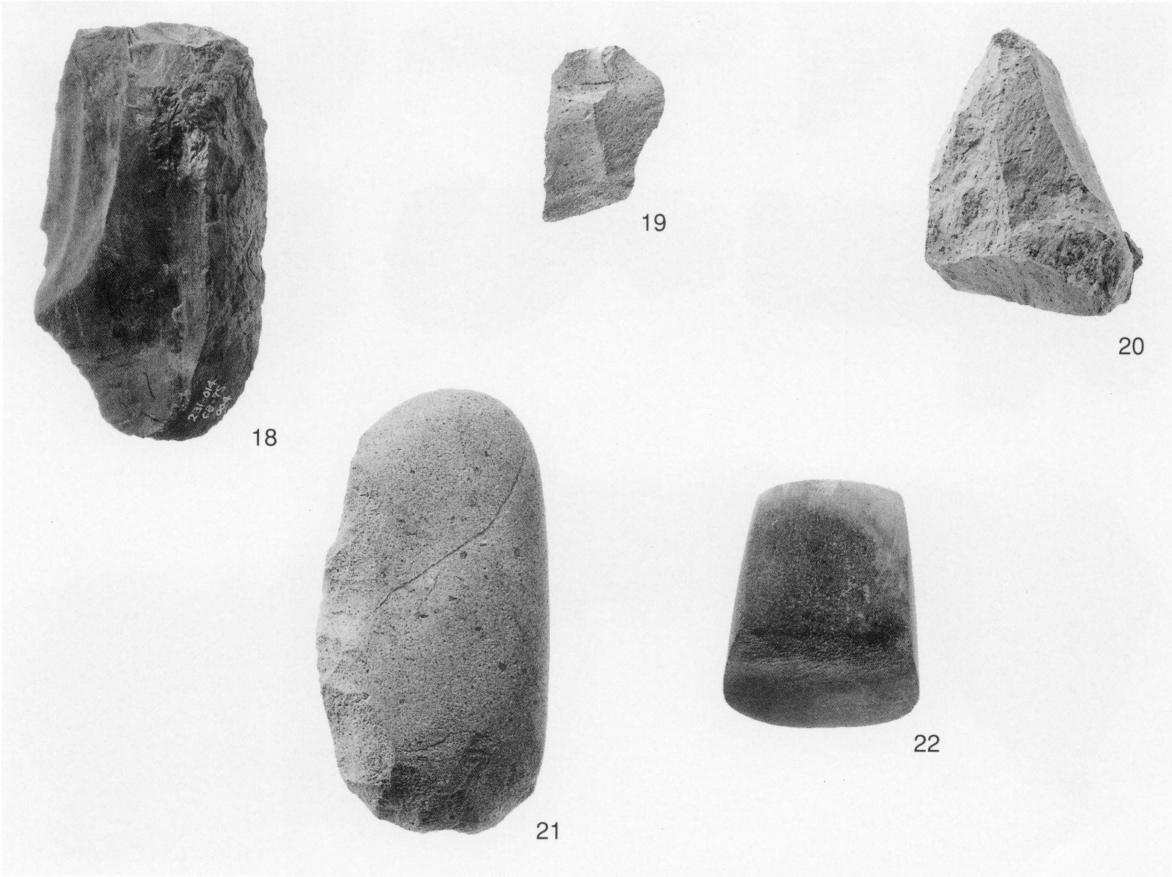
縄文時代前期の土器 2



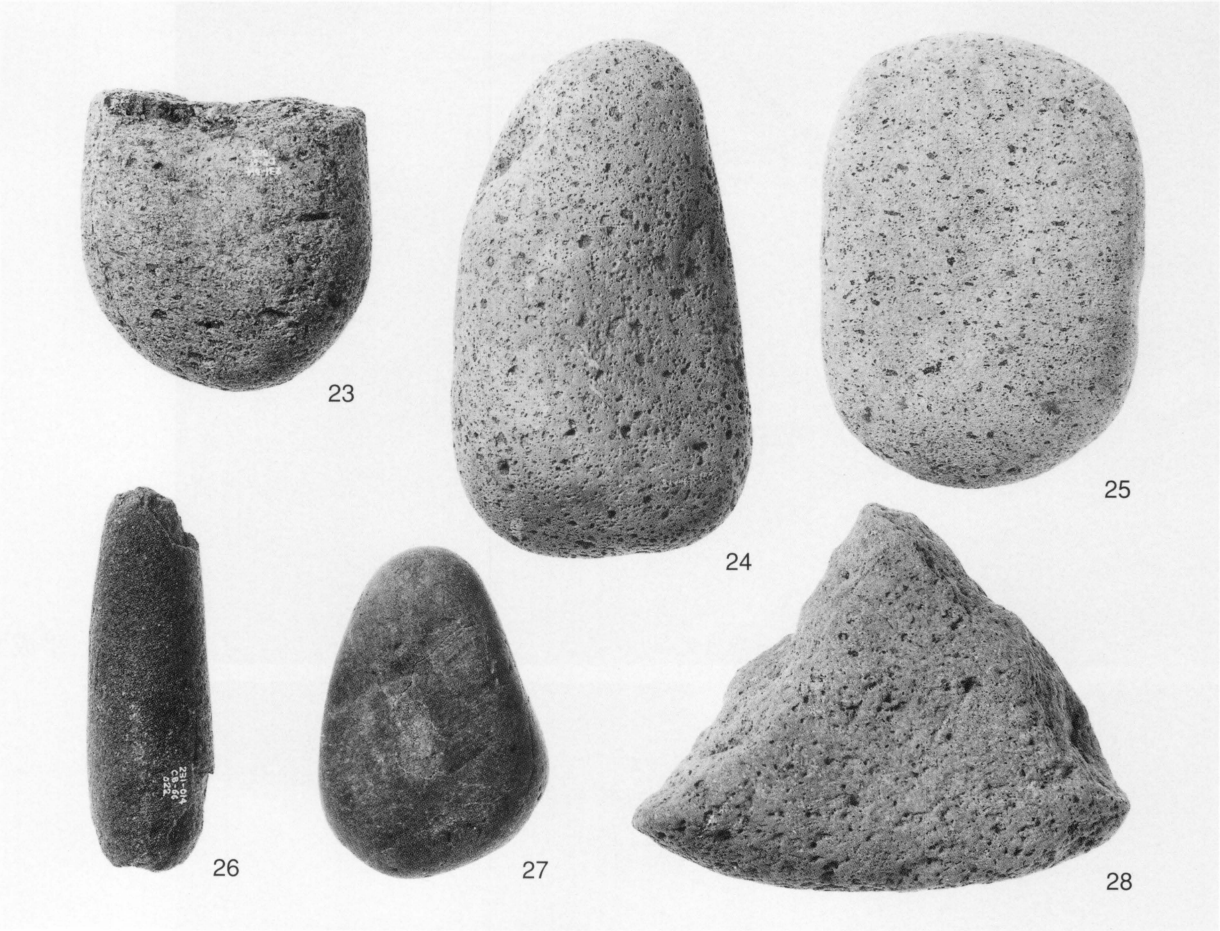
縄文時代前期末から中期の土器



縄文時代の石器（石鏃、楔形石器、R剥片、スクレイパー）



縄文時代の石器（剥片、石核、礫石斧、磨製石斧）

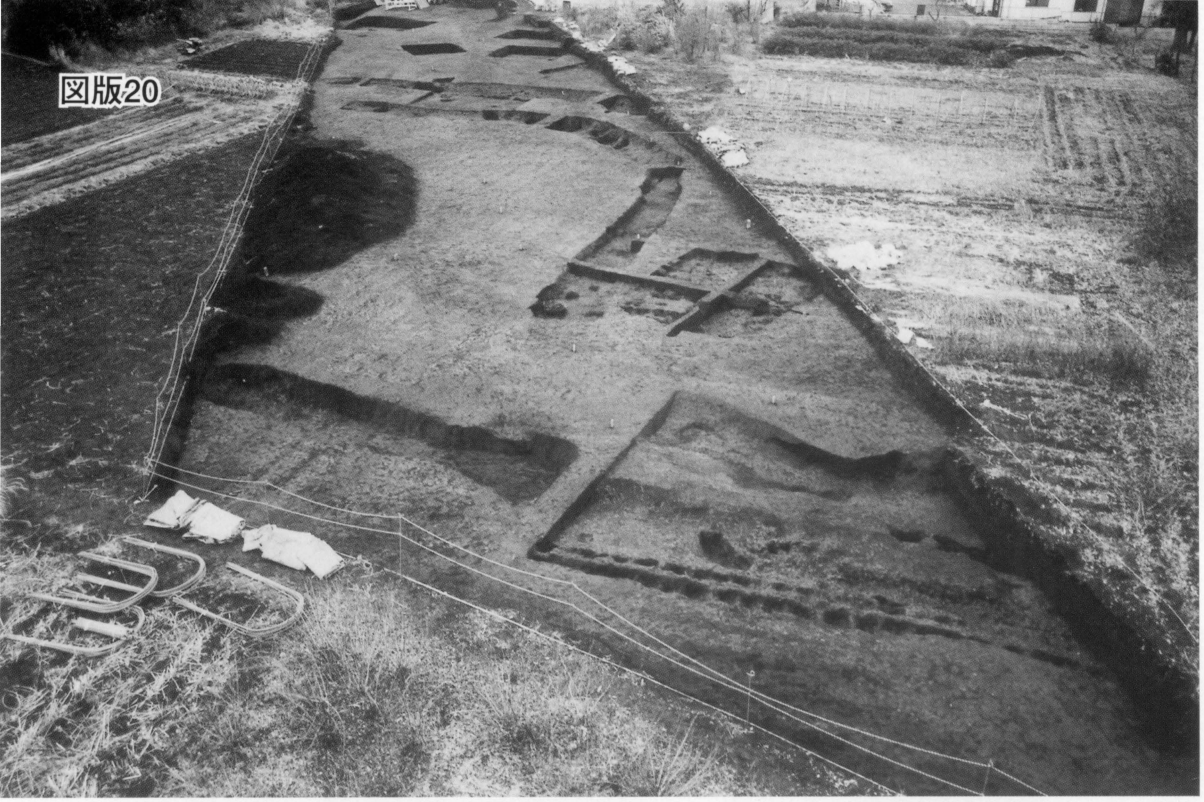


縄文時代の石器（敲石・磨石、凹石、石皿）

縄文時代の石器（黒曜石、珪質頁岩、チャートの剥片）

図版20

前戸遺跡



空撮　平成９年

空撮　平成10年（1）

空撮　平成10年（2）

空撮　平成10年（3）

空撮　平成12年

SI-001　全景

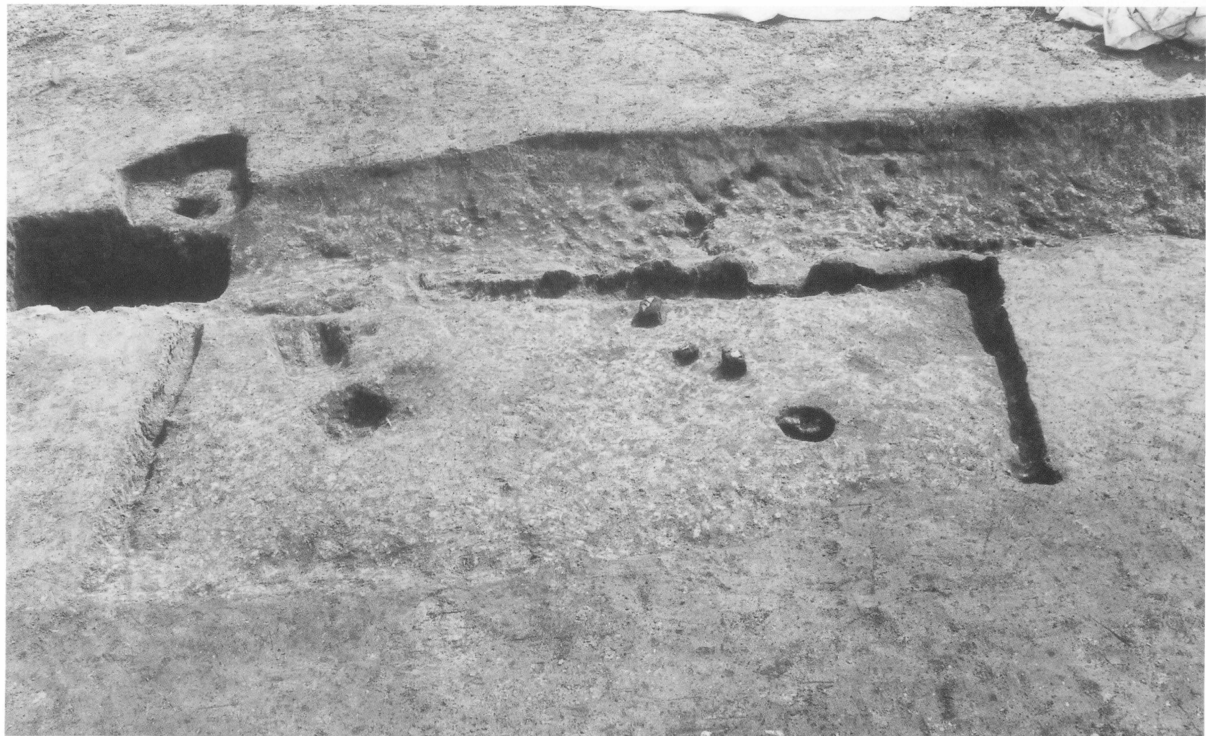
SI-002　全景

SI-003　全景

SI-004　全景

SI-005　全景

SI-006　全景



SI-007　全景

SI-009（左）と
SI-012（右）

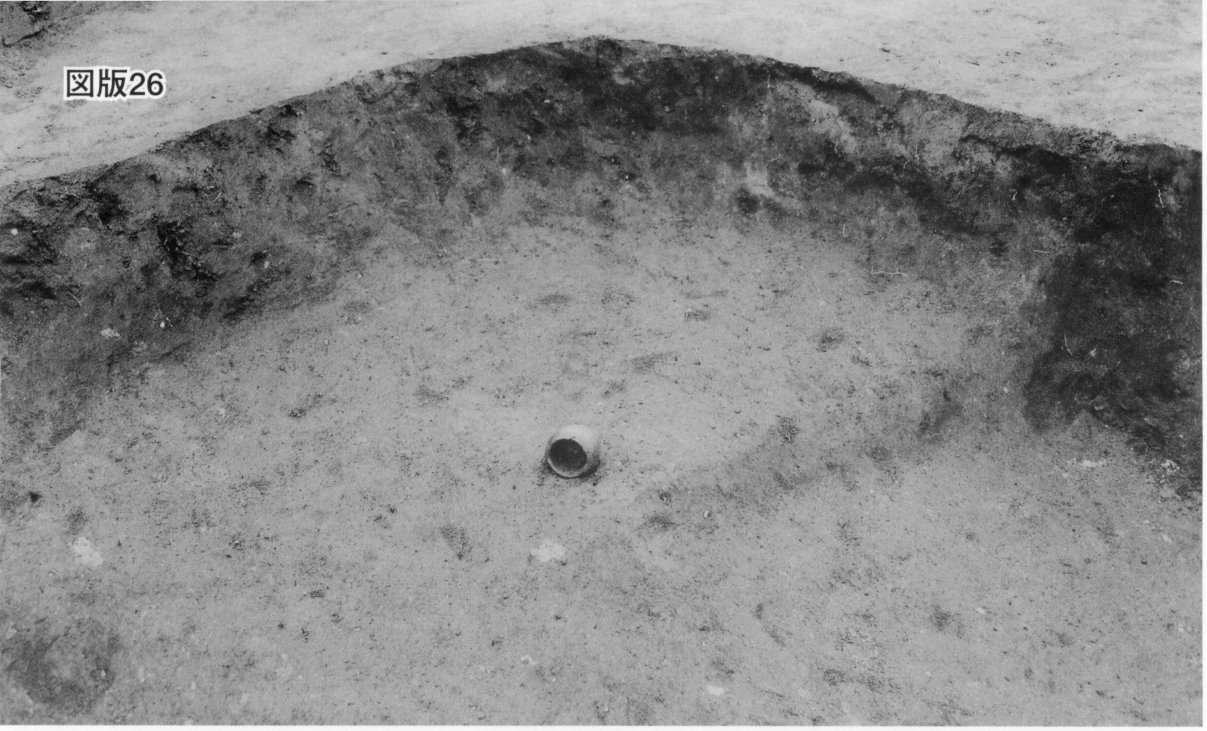
SI-011　全景

SI-013　全景

SI-014　全景

SI-015　全景

SI-015
遺物出土状況（1）



SI-015
遺物出土状態（2）

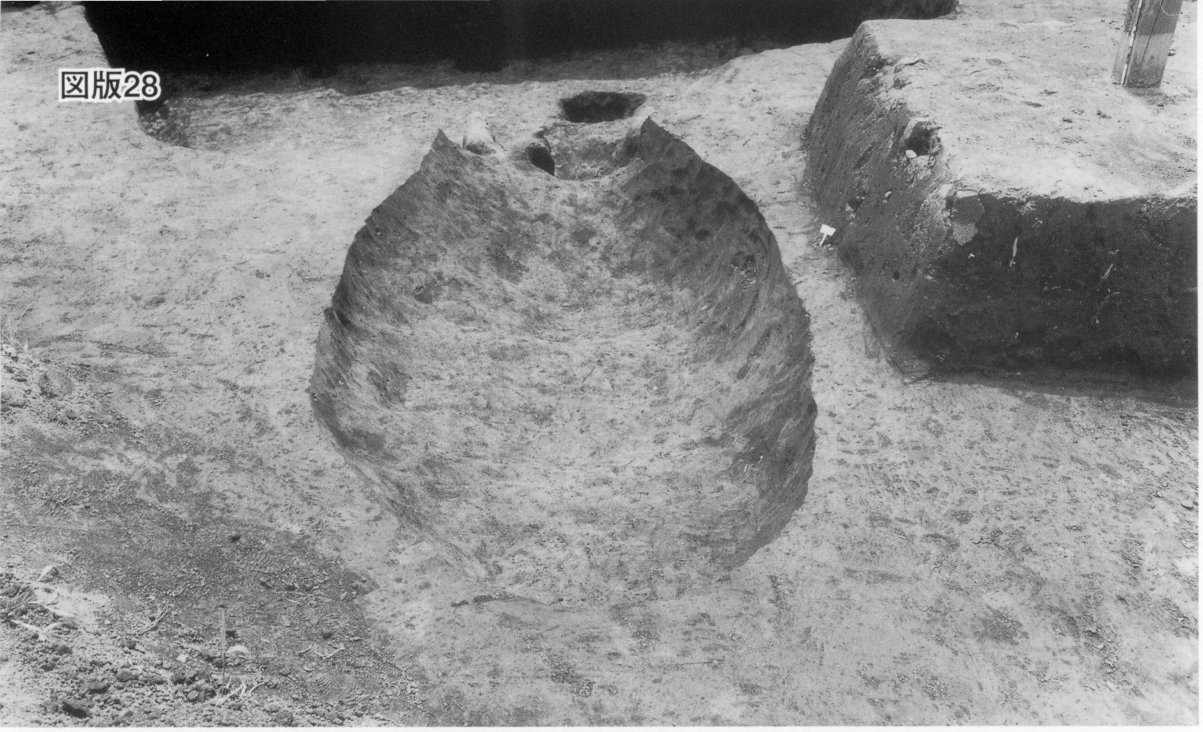
SI-201　全景

SB-001

SB-002

SB-003

SB-005



SK-001　全景

SK-002　全景

SK-004　全景

SK-010　全景

SK-202　全景

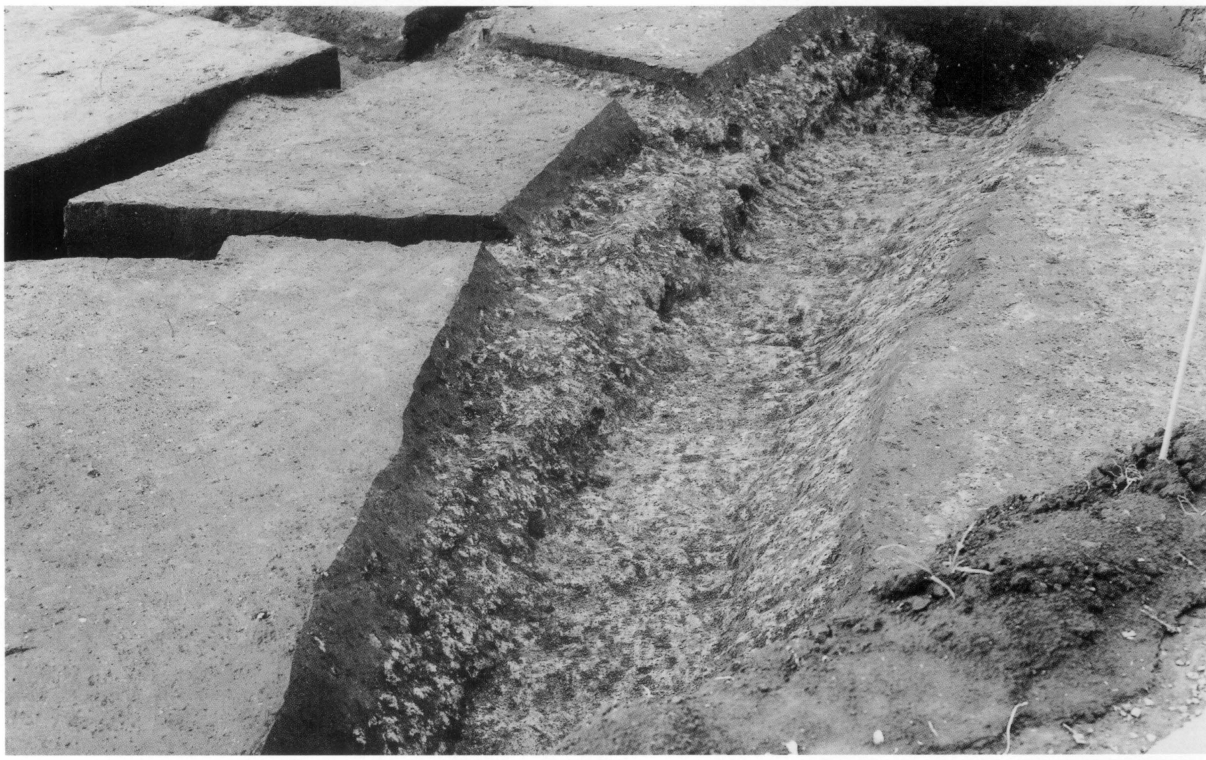
SD-001

SD-003

SI-007とSD-006，007

SI-008とSD-007，008

SD-010



SD-012

SD-010，013

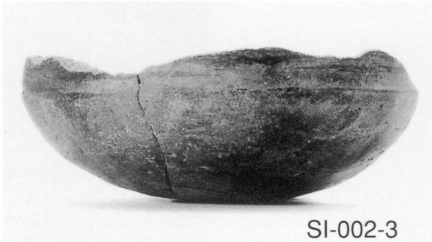
SI-001-1

SI-001-3

SI-001-4

SI-001-7

SI-002-2


SI-002-3

SI-003-1

SI-003-8

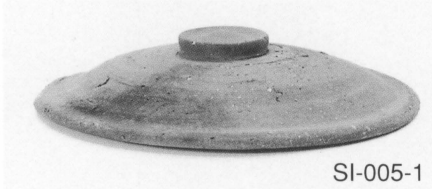
SI-003-10

SI-003-2

SI-004-1

SI-004-3

SI-003-3

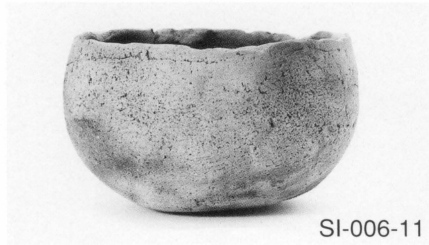

SI-005-1

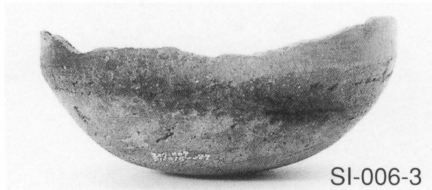
SI-005-4

SI-005-6

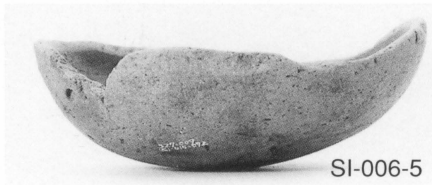
SI-006-1

SI-006-2


SI-006-11


SI-006-3

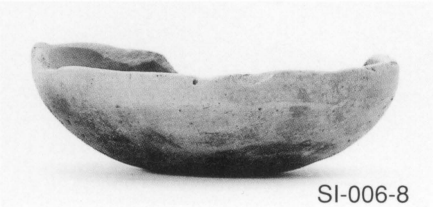
SI-006-4


SI-006-5

SI-006-6

前戸遺跡出土遺物（1）

SI-006-7

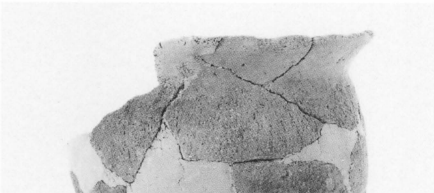

SI-006-8

SI-006-9

SI-006-10

SI-006-15

SI-006-16

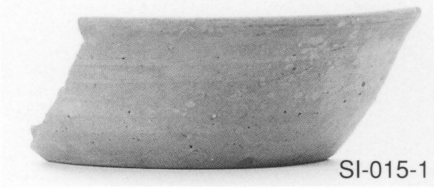

SI-009-1

SI-011-3

SI-008-1

SI-014-1

SI-014-2

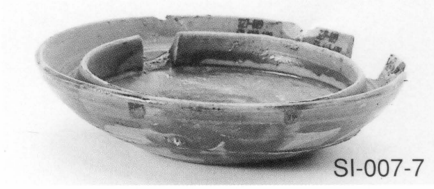

SI-015-1

SI-015-3

SI-015-7

SI-007-2

SI-015-6


SI-007-7

SD-008-10

SI-015-5

SI-0015-11

前戸遺跡出土遺物（2）

報告書抄録

ふりがな	いんざいしあらいぼりにいせき・まえどいせき
書名	印西市新井堀Ⅱ遺跡・前戸遺跡
副書名	印西市道00－026号線道路改良に伴う埋蔵文化財調査報告書
巻次	
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告
シリーズ番号	第481集
編著者名	内田龍哉・植草均・新田浩三・吉野健一
編集機関	財団法人千葉県文化財センター
所在地	〒284－0003　千葉県四街道市鹿渡809－2　TEL 043－422－8811
発行年月日	西暦2004年3月25日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
新井堀Ⅱ遺跡（あらいぼりにいせき）	千葉県印西市（ちばけんいんざいし）草深字新井堀（くさぶかあざあらいぼり）231－3　ほか	12231	014	35度47分7秒	140度8分46秒	19970303～19970326 19990801～19991130 20020116～20020131	610㎡ 2,000㎡ 552㎡	印西市道00－026号線道路改良に伴う事前調査
前戸遺跡（まえどいせき）	千葉県印西市（ちばけんいんざいし）松崎字前戸（まつざきあざまえど）885－3　ほか	12231	009	35度46分49秒	140度8分35秒	19971001～19980227 19980701～19980831 20001001～20001031 20030801～20030826	2,085㎡ 1,160㎡ 350㎡ 422㎡	印西市道00－026号線道路改良に伴う自事前査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
新井堀Ⅱ遺跡	包蔵地	旧石器時代 縄文時代 中世～近世	炉穴　1基 炉跡　1基 陥穴　2基 溝跡　2条 土坑　4基	旧石器時代石器 縄文土器 縄文時代石器	Ⅴ層からⅩ層に属する4文化層が検出された。 縄文時代早期～前期のまとまった遺物包含層が検出された。
前戸遺跡	包蔵地 集落跡	縄文時代 古墳時代 奈良・平安時代 中世～近世	竪穴住居跡　16軒 掘立柱建物跡　5棟 溝跡　15条 土坑　12基	土師器　須恵器 石製紡錘車 内耳鍋　灯明皿	隣接する東海道遺跡と連続する，古墳時代～奈良・平安時代に属する集落跡が検出された。 クランク状に曲がる溝跡が検出された。

千葉県文化財センター調査報告書第481集

印西市新井堀Ⅱ遺跡・前戸遺跡

—印西市道00－026号線道路改良に伴う埋蔵文化財調査報告書—

平成16年3月25日発行

編　　集　　財団法人　千葉県文化財センター
四街道市鹿渡809番地2

発　　行　　千　葉　県　企　業　庁
千葉市中央区長洲町1-9-1

財団法人　千葉県文化財センター
四街道市鹿渡809番地2

印　　刷　　有限会社　平　電　子　印　刷　所
福島県いわき市平北白土字西ノ内13